萱振遺跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告52

Ⅰ　萱振遺跡（第６次調査）
Ⅱ　萱振遺跡（第７次調査）
Ⅲ　萱振遺跡（第13次調査）
Ⅳ　萱振遺跡（第15次調査）
Ⅴ　萱振遺跡（第17次調査）

１９９６年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

萱振遺跡

財団法人八尾市文化財調査研究会報告52

Ⅰ　萱振遺跡（第6次調査）

Ⅱ　萱振遺跡（第7次調査）

Ⅲ　萱振遺跡（第13次調査）

Ⅳ　萱振遺跡（第15次調査）

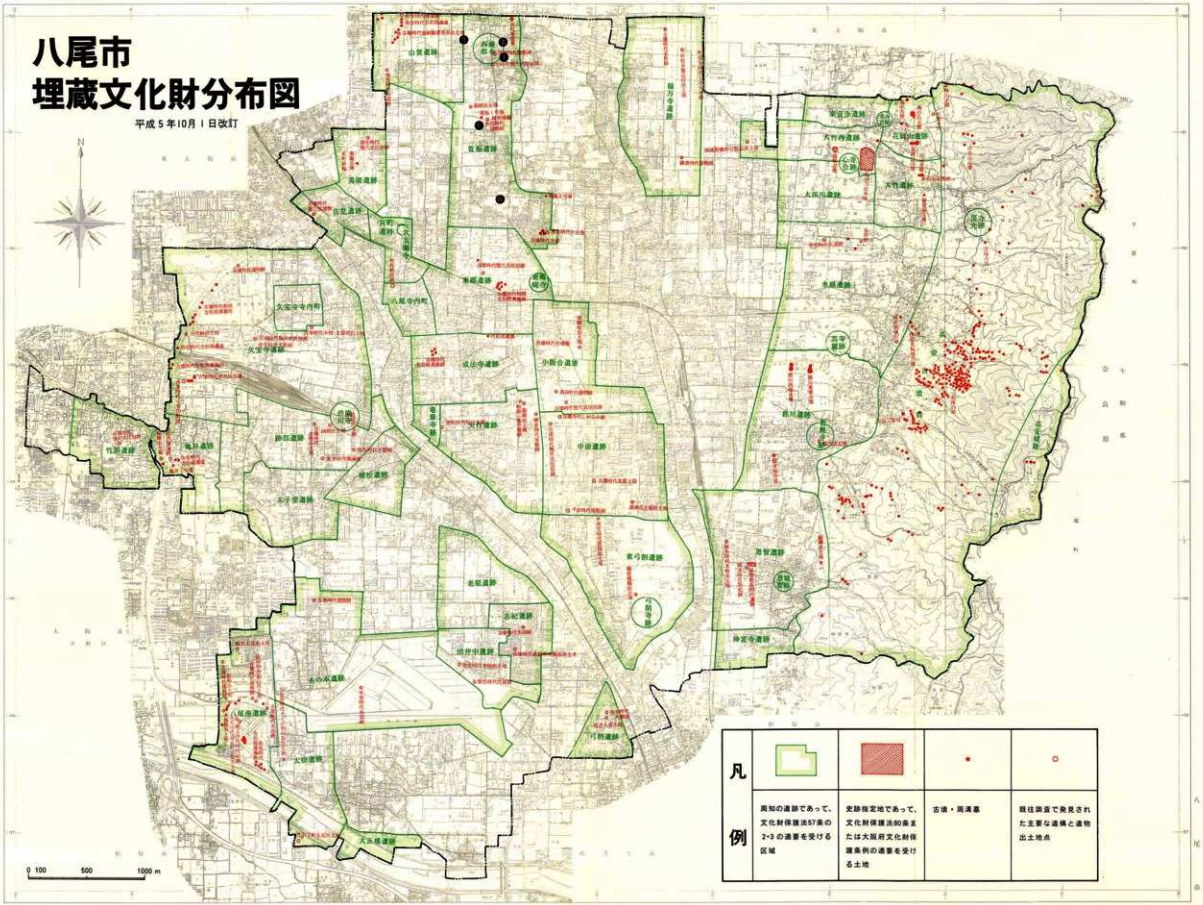
Ⅴ　萱振遺跡（第17次調査）

1996年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成５年10月１日改訂



はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、東部の生駒山地西麓から西部に広がる河内平野を占地しており、その豊かな自然環境のもとで、先人達が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

平野部では、古大和川水系のもたらした豊かな水量と肥沃な土壌を背景に、水稲耕作初期段階の弥生時代前期から活発な開発が行われています。生駒山地西麓部においても旧石器時代以降の数多くの文化財が残されており、特に古墳文化が昇華した古墳時代後期には、「高安古墳群」に代表される数多くの古墳が築造されています。さらに、陸路・水路を介して、難波と大和を結ぶ大陸文化の中継地としての役割を果たしてきたほか、これら交通至便な土地柄から奈良時代後期には、本市南部の弓削郷に「西の京」が設けられています。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。そこで私共では、破壊され消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を、後世に伝えるため事業者の御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に務めている次第であります。

今回、昭和63年度・平成４年度・平成６年度に実施しました萱振遺跡（第６次・第７次・第13次・第15次・第17次）の発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成８年７月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　木　山　丈　司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和63年度、平成４年度、平成６年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成８年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。

1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ～Ⅲが原田昌則、Ⅳが岡田清一、Ⅴが成海佳子で全体の構成・編集は原田昌則が行った。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（昭和61年８月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成５年10月１日改定）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。

1．本書で用いた方位は磁北（Ⅰ～Ⅲ）及び国土座標の真北（Ⅳ・Ⅴ）を示している。

1．遺構は下記の略号で示した。

竪穴住居－ＳＩ　掘立柱建物－ＳＢ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　小穴－ＳＰ
落ち込み－ＳＯ　土器集積－ＳＷ　自然河川－ＮＲ

1．遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪－白、須恵器・陶磁器－黒、石製品・木製品・瓦－斜線

1．各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序・目次
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　萱振遺跡　第６次調査（ＫＦ88－６）…… 1
Ⅱ　萱振遺跡　第７次調査（ＫＦ88－７）…… 63
Ⅲ　萱振遺跡　第13次調査（ＫＦ92－13）……113
Ⅳ　萱振遺跡　第15次調査（ＫＦ94－15）……147
Ⅴ　萱振遺跡　第17次調査（ＫＦ94　17）……159

Ⅰ　萱振遺跡第６次調査（ＫＦ88－６）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市幸町１丁目60－１で実施した住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する瓢箪山遺跡第６次調査（ＫＦ88－６）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第16号　昭和63年４月28日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は昭和63年６月22日から８月11日（実働44日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積320㎡を測る。調査においては麻田優・柏本幸寿・小林博司・田中秀行・中切孝彦・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・沢村妙子、図面トレース－北原、遺物観察表－北原・原田、遺物写真　原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．一部の土器胎土および岩石鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏に依頼した。

1．本書作成にあたっては、以下の方々から御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。
田中清美、高井健司（(財）大阪市文化財協会）

本 文 目 次

第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　地理・歴史的環境 …… 2
第３章　調査概要 …… 6
　第１節　調査の方法と経過 …… 6
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　検出遺構・出土遺物 …… 9
　　１）第１調査面（第８層上面） …… 9
　　２）第２調査面（第６層上面） …… 22
　　３）包含層出土遺物 …… 38
　第４節　出土遺物観察表 …… 48
第４章　まとめ …… 61

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺図 …… 4
第２図　調査区設定図 …… 6
第３図　検出遺構平断面図 …… 8
第４図　ＳＩ－１平断面図 …… 10
第５図　ＳＩ－１建築部材および遺物検出状況 …… 11
第６図　ＳＩ－１出土遺物実測図 …… 13
第７図　ＳＩ　２平断面図 …… 14
第８図　ＳＩ－２検出状況 …… 15
第９図　ＳＩ－２出土遺物実測図 …… 15
第10図　ＳＥ－１平断面図 …… 17
第11図　ＳＥ－１出土遺物実測図 …… 18
第12図　ＳＫ－２平断面図 …… 19
第13図　ＳＫ－１、ＳＫ－２出土遺物 …… 20
第14図　ＳＤ－１出土遺物実測図 …… 21

第15図　ＳＢ－１平断面図 …… 22
第16図　ＳＢ－２平断面図 …… 22
第17図　ＳＥ－２平断面図 …… 23
第18図　ＳＥ－２出土遺物実測図 …… 24
第19図　ＳＥ－３平断面図 …… 26
第20図　ＳＥ－３出土遺物実測図 …… 27
第21図　ＳＥ－４平断面図 …… 27
第22図　ＳＥ－４出土遺物実測図 …… 28
第23図　ＳＥ－５平断面図 …… 29
第24図　ＳＥ－５出土遺物実測図 …… 30
第25図　ＳＥ－７平断面図 …… 31
第26図　ＳＥ－８平断面図 …… 31
第27図　ＳＥ－９平断面図 …… 32
第28図　ＳＥ－８、ＳＥ－９出土遺物実測図 …… 32
第29図　ＳＥ－10出土遺物実測図 …… 34
第30図　第７層出土遺物実測図 …… 40
第31図　第６層出土遺物実測図－１ …… 41
第32図　第６層出土遺物実測図－２ …… 42
第33図　第５層出土遺物実測図－１ …… 43
第34図　第５層出土遺物実測図　２ …… 44
第35図　第５層出土器台形土器実測図 …… 47

表　目　次

第１表　周辺の発掘調査一覧表 …… 5
第２表　小穴一覧表 …… 36～37

写　真　目　次

写真１　調査風景 …… 1

図 版 目 次

図版 一　第1調査面全景
図版 二　第2調査面全景
図版 三　ＳＩ－1検出状況
　　ＳＩ　1柱穴検出状況
図版 四　ＳＩ－1北西部
　　ＳＩ－1南東部
　　ＳＩ－1南西部
図版 五　ＳＩ－1各柱根検出状況
図版 六　ＳＩ－2検出状況
　　ＳＩ－2柱穴検出状況
図版 七　ＳＩ－2焼粘土塊検出状況
　　ＳＩ－2遺物出土状況
　　ＳＩ－2柱根（Ｐ－1）検出状況
図版 八　ＳＥ－1断面および遺物出土状況
　　同　上　完掘
図版 九　ＳＥ－2検出状況
　　ＳＥ－3検出状況
図版一〇　ＳＥ－4断面
　　同　上　完掘
図版一一　ＳＥ－5検出状況
　　同　上　井戸側検出状況
図版一二　ＳＩ－1、ＳＩ－2出土遺物
図版一三　ＳＩ－2、ＳＥ－1出土遺物
図版一四　ＳＤ－1、ＳＥ－2出土遺物
図版一五　ＳＥ－2出土遺物
図版一六　ＳＥ　3、ＳＥ－4出土遺物
図版一七　ＳＥ－4、ＳＥ－5、ＳＥ－10
　　出土遺物
図版一八　第7層出土遺物
図版一九　第6層出土遺物
図版二〇　第6層出土遺物
図版二一　第5層出土遺物
図版二二　第5層出土遺物

第1章　調査に至る経過

萱振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市の中央部から北部に位置する緑ケ丘1～3丁目、旭ケ丘5丁目、萱振町1～7丁目、北本町3・4丁目、楠根町1・4丁目、泉町1～3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目一帯の東西0.5～0.9km、南北2kmがその範囲とされている。

今回、発掘調査を実施した萱振遺跡の北部では、泉町2丁目に鎮座する天神社を中心として、古代寺院である西郡廃寺跡が想定されている。昭和55年度以降、この周辺では、八尾市教育委員会による小規模な発掘調査が行われており、屋瓦類を中心とした遺物から西郡廃寺の一端が推定されるようになってきた。さらに、昭和58年度には、萱振町7丁目で大阪府教育委員会により府立八尾北高校の建設に伴う発掘調査が実施されたのを始めとして、昭和59年度には当調査研究会により天神社の東側の幸町1丁目76で第1次調査（KF84－1）が実施されてきた。これらの調査では、弥生時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が確認されたほか、西郡廃寺に関連した遺物が遺跡範囲北部の広範囲にわたって検出されており、寺域の推定や存続時期を推定するうえで貴重な資料を提供する結果となった。

このような情勢下、八尾市改良事業室から第1次調査地の東50m地点の八尾市幸町1丁目60－1において住宅建設をする旨の届出書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。昭和63年1月27日に申請地において八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された。その結果、弥生時代後期から鎌倉時代に至る遺物包含層の存在が確認された。これらの経緯を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査の業務は八尾市・八尾市教育委員会・㈱八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が八尾市から委託を受けて行った。現地調査の期間は昭和63年6月22日～8月11日までの44日間である。調査面積は320㎡を測る。報告書作成にかかわる業務は、現地発掘調査の終了後、平成8年3月31日まで随時実施した。

写真1　調査風景

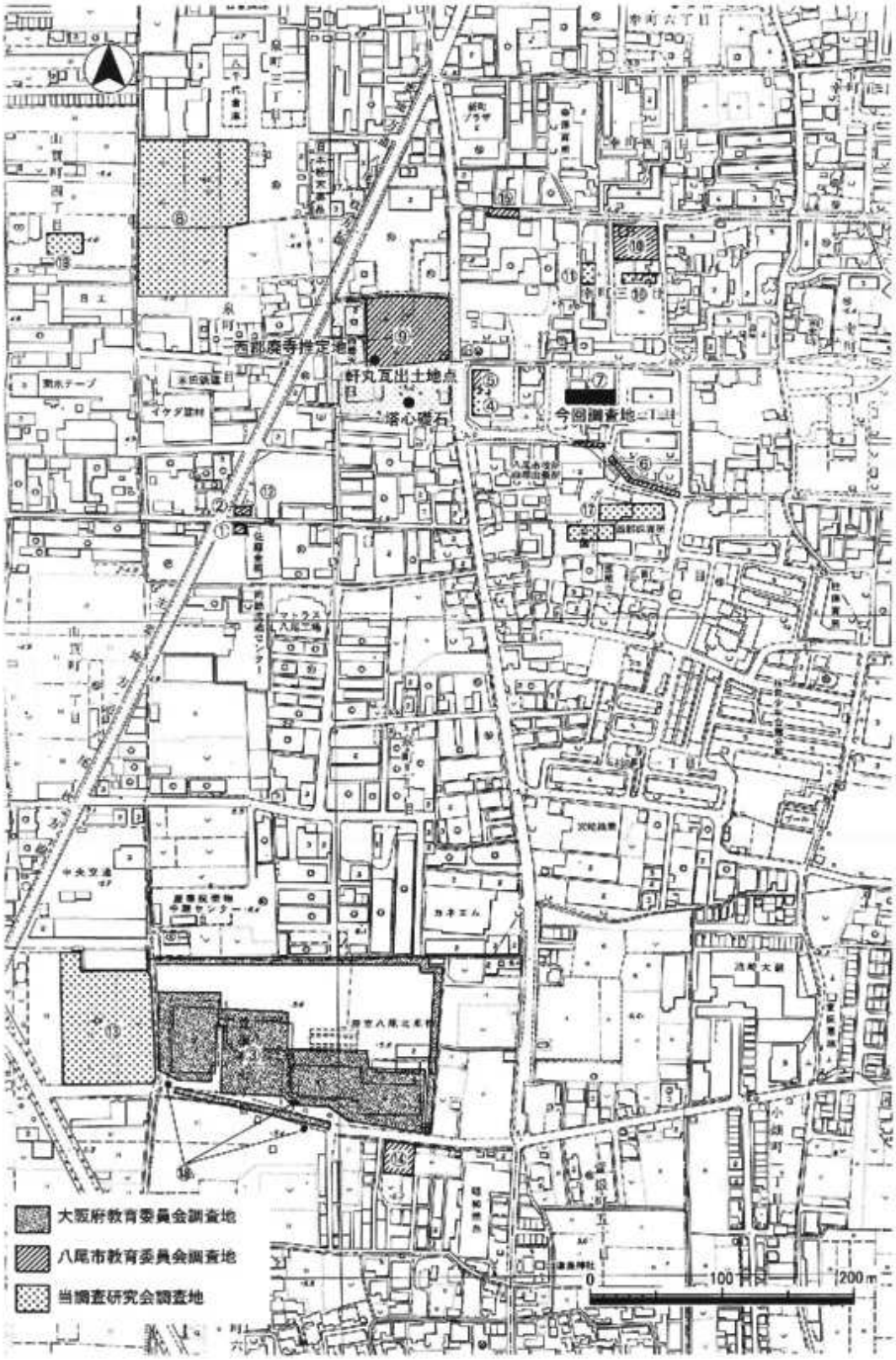
第2章　地理・歴史的環境

萱振遺跡は大阪府八尾市の中央部から北部に存在する緑ケ丘1～3丁目、旭ケ丘5丁目、萱振町1～7丁目、北木町3・4丁目、楠根町1・4丁目、泉町1～3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目一帯の東西0.5～0.9km、南北2kmに展開する弥生時代中期～室町時代に至る複合遺跡である。萱振遺跡の位置する大阪府八尾市の中・北部の地勢は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に画された河内平野のほぼ中央部にあたる。河内平野は、縄文海進以後の海水面の昇降による侵食作用と、平野部に流れ込む旧大和川水系および淀川水系の河川の沖積作用により形成された沖積平野である。萱振遺跡は、旧大和川水系の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれて南北方向にデルタ状に展開する低位沖積地上の海抜7～5mに位置している。萱振遺跡が位置するこの二大河川に挟まれた地域は、農耕社会を構築する基盤的要素である肥沃な土壌と豊富な水量を背景として水稲耕作の初期段階から数多くの集落が営まれており、考古学的資料の蓄積が豊富な地域として理解されている。同一沖積地上には、当遺跡より南に東郷遺跡（弥生中期末～鎌倉）、成法寺遺跡（弥生後期～室町）、小阪合遺跡（弥生中期～室町）、中田遺跡（弥生前期～室町）、東弓削遺跡（弥生中期～鎌倉）、西に山賀遺跡（弥生前期～鎌倉）、美園遺跡（弥生前期～鎌倉）、佐堂遺跡（弥生中期～室町）、宮町遺跡（古墳前期～室町）、さらに長瀬川を隔てて南西には久宝寺遺跡（縄文晩期～室町）、玉串川を隔てた東には福万寺遺跡（弥生前期～近世）が位置している。

ここでは、萱振遺跡の北部で実施された調査成果を中心に時期毎に概観してみる。

縄文時代のものとしては、平面的な広がりとしては捉えられなかったが③で検出された弥生時代前期の自然河川から縄文晩期の土器片が数点検出されており、周辺にこの時期の集落が想定される。弥生時代前期としては、萱振遺跡に西接する山賀遺跡⑲でこの時期の遺構・遺物が検出されており、これらの集落が萱振遺跡北部にまでおよんでいた可能性があるほか、③・⑲で検出された河川堆積土層中からもこの時期の遺物が少量出土している。弥生時代中期としては、③で水田が検出されており、この付近を中心とする当該期の集落が想定される。弥生時代後期においては、④・⑦・⑨・⑯を中心とした北部地域と③を中心とした南部地域において集落が形成されている。北部集落は⑦で検出された竪穴住居を中核とするもので、現時点では④・⑦・⑨・⑯の調査地を含めた東西200m、南北100mの範囲で集落の存在が確認されている。南部地域の③においては、井戸を取り囲むように配置された10棟以上の掘立柱建物が検出されているほか、多量の土器、青銅製武器形祭器が出土している。続く古墳時代初頭（庄内式期）から前期（布留式期）にかけても、弥生時代後期の集落周辺で営まれているが、前代からの居住

域とは重複するものはない。南部地域の③・⑬では庄内式古相～庄内式新相において、小範囲の中で集落位置を変えながらも連続した集落が形成されている。北部地域の⑤・⑥では庄内式新相～布留式古相の集落が検出されているほか、⑦からは庄内式古相の土器が出土しており、この時期に比定される集落が付近に存在したことが想定されている。布留式古相段階には、南部地域の③で方形周溝墓が4基検出されており、前代の居住域に重複して当該期の墓域が形成されている。さらに、前期後半にあたる布留式新相では、③で検出した布留式古相の墓域に隣接する位置で萱振1号墳が検出されている。萱振1号墳は、一辺約27m、周濠幅約5mを測る方墳である。墳丘は2段に築成されており、1段目のテラスには蓋付円筒埴輪・朝顔形埴輪が樹立されているほか、墳頂部からは形象埴輪（翳形・盾形・草摺形・家形）が出土している。なかでも、翳形埴輪については高さ1.8m、基部幅1.0mを測る最大級のもので、表面には装飾突起と精緻な直弧文・鰭手文のほか、赤色顔料による彩色が施されている。平野部において検出されたこの時期の古墳の中で、豊富な埴輪の保有や墳形が方墳である点で美園古墳と共通するもので、前期後半段階でヤマト政権から墳輪の使用が許された地域首長の動向を知る上で貴重である。古墳時代中期においては、南部地域の③・⑬および北部地域の④付近で集落が検出されている。古墳時代後期～飛鳥時代の集落は⑧を中心に居住域が検出されている。東方に位置する西郡廃寺の創建が飛鳥時代後期末に比定されており、西郡廃寺の創建に関わる檜隈氏族の錦織氏に関係した集落であった可能性が高い。一方、西郡廃寺については、泉町2丁目に鎮座する大神社の北方が寺域と推定されている。現在、大神社の境内に西郡廃寺の塔心柱礎石が置かれているが、『八尾市史』によれば現地点より北約100m地点にあったとされており、これが寺域を推定される根拠となっている。周辺の調査では、①・③・④・⑧・⑰で西郡廃寺に関連した屋瓦が出土しており、これらの調査結果から飛鳥時代後半の創建であることや、少なくとも14世紀までには寺としての機能が失われたことが判明している。奈良時代においては、南部の③ならび北部の④・⑰で集落が検出されている。③においては、8世紀中～末期の掘立柱建物が6棟検出されている。掘立柱建物は主軸をほぼ北に振るもので2×3間および2×4間の規模の建物のほか、倉庫と推定される3×4間の建物が検出されている。平安時代の集落は後期以降のものが多く④・⑤・⑦で検出されている。続く鎌倉時代の集落は北部の④・⑦・⑰、南部の③で検出されている。北部の集落については、平安時代後期から鎌倉時代末期にかけて集落が継続して営まれていることが指摘できる。北部地域で検出されている集落については、天神社の南東付近が河内街道と十三嶺道の分岐点になっている関係であることから街道に沿って成立した集落と考えられる。室町時代に比定されるものは③・⑰で検出しているが、前代に比して集落規模が縮小している。特に14世紀以降その傾向が顕著である。このことは、14世紀前半以降、中河内全域が南北朝の動乱さらには15世紀中葉以降においては畠山氏の争いによ


西郡廃寺推定地
軒丸瓦出土地点
塔心礎石
今回調査地
大阪府教育委員会調査地
八尾市教育委員会調査地
当調査研究会調査地
0
100
200m

第1図　調査地周辺図

第1表　周辺の発掘調査一覧表

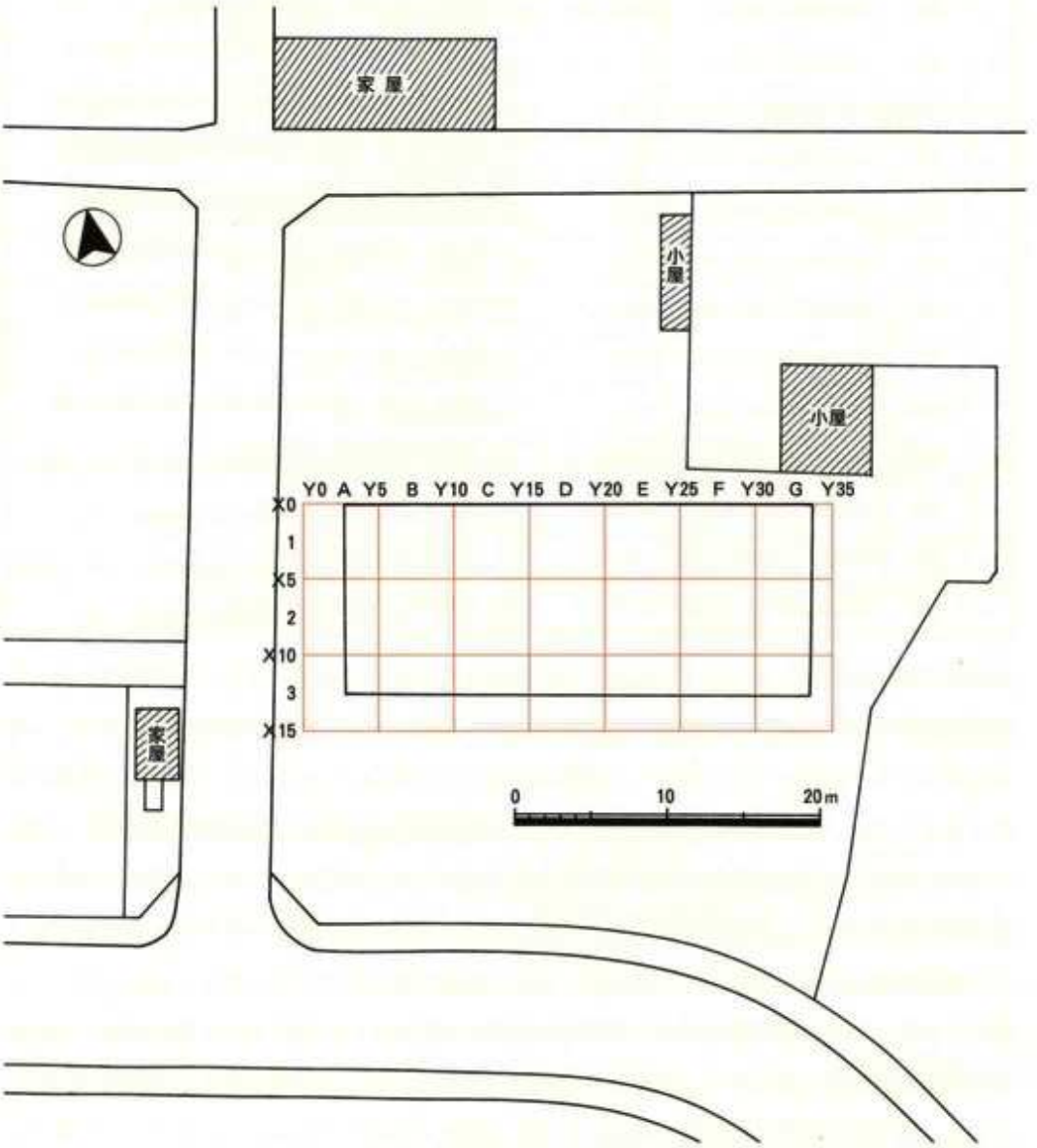
番号	遺跡名	調査主体	調査期間	文献
1	萱振	八尾市教育委員会	S55/2	「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」 (財)八尾市文化財調査研究会報告2　1983
2	萱振	八尾市教育委員会	S55/3	「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」 (財)八尾市文化財調査研究会報告2　1983
3	萱振	大阪府教育委員会	S58/6～59/11	応援発掘　「弥生遺跡を調査して」『八尾あれこれ　文化財調査報告集』 (財)八尾市文化財調査研究会報告21　1989
4	萱振	当調査研究会（KF84-1）	S59/11～59/12	「1 弥生遺跡A遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和59年』 (財)八尾市文化財調査研究会報告13　1987
5	萱振	八尾市教育委員会	S60/1	「幸町1丁目76埋蔵文化財調査概要」『八尾市文化財紀要1』1985
6	萱振	八尾市教育委員会	S61/9～61/10	「萱振遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II』 八尾市文化財調査報告15　1987
7	萱振	当調査研究会（KF88-6）	S63/6～63/8	「1　萱振遺跡（第6次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』 (財)八尾市文化財調査研究会報告35　1989　本書掲載
8	萱振	当調査研究会（KF88-7）	H1/2～1/3	「2　萱振遺跡（第7次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』 本書掲載
9	西郡廃寺	八尾市教育委員会（90-005）	H2/6	「6　若林遺跡（90-005）の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』 八尾市文化財調査報告22　1991
10	萱振	八尾市教育委員会（90-287）	H2/8	「5　萱振遺跡（90-287）の調査」『八尾市内平成2年度発掘調査報告書II』 八尾市文化財報告23　1993
11	萱振	当調査研究会（KF90-9）	H2/11	「II萱振遺跡（第9次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 (財)八尾市文化財調査研究会報告32　1991
12	萱振	当調査研究会（KF90-10）	H2/11	「IV萱振遺跡（第10次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 (財)八尾市文化財調査研究会報告32　1991
13	萱振	当調査研究会（KF91-11）	H3/8～3/9	「IX萱振遺跡（第11次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 (財)八尾市文化財調査研究会報告34　1992
14	萱振	八尾市教育委員会（92-006）	H4/4	「1　萱振遺跡（92-006）の調査」『八尾市内平成4年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告27　1993
15	西郡廃寺	八尾市教育委員会（92-414）	H5/1	「9　西郡廃寺（92-414）の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書II』 八尾市文化財報告30　1994
16	萱振	当調査研究会（KF92-15）	H5/2～5/3	「9　萱振遺跡第15次調査（KF92-15）」 『平成4年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』　1993　本書掲載
17	萱振	当調査研究会（KF94-16）	H6/5～6/8	「5　萱振遺跡第16次調査（KF94-16）」 『平成6年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』　1995
18	萱振	当調査研究会（KF94-17）	H7/3	「6　萱振遺跡第17次調査（KF94-17）」 『平成6年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』　1995　本書掲載
19	山賀	当調査研究会（YMG94-3）	H7/1～7/2	「3　山賀遺跡第3次調査（YMG94-3）」 『平成6年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』　1995

り絶えず戦乱の渦中にあったことに符合した結果と考えられている。また、当遺跡内には河内街道が縦断しているほか、天神社の南東部付近から分岐して十三嶺道が東に伸びており、一度戦乱が始まると街道を中心に成立した集落は廃棄せざるを得ない状況であったことは容易に推察される。なお、③調査地の南部一帯に存在した萱振城については、南北朝の延元三年（1338）に南朝方の高木遠盛が北朝方の萱振城を攻め焼き払ったことが記されており、既にこの時期には城構えがあったことが知られている。したがって、このような時勢のなかで、防御を目的とした環濠集落化を押し進めていく過程で、周辺の集落も集約されざるを得ない状況であったと推定される。なお、③で検出された室町時代初頭の瓦積み井戸に使用された屋瓦類は、西郡廃寺の屋瓦が転用されたもので、西郡廃寺の廃絶時期を知るうえで貴重である。室町時代以降のものは、⑰で江戸時代中期の溝が検出されている程度であることから、この付近一帯の集落は室町時代に確立した集落を踏襲する形で近世集落へと推移したものと推定される。

第３章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は、住宅建設に伴うもので建物の基礎工事で破壊される部分の東西幅29m、南北幅10mを調査対象とした。調査地の地区割りについては、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西35m、南北15mにわたって設定した。一区画の単位は５m四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｇ）、南北方向は算用数字（北から１～３）で示し、地区名の表



第２図　調査区設定図

示は1A地区～3G地区と呼称した。地点の表示には、東西線（X0～X15）・南北線（Y0～Y35）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、試掘結果に基づいて現地表下1mまでは機械により掘削した後、以下0.7mについては、層理に従って人力掘削を行ない遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地下1.2～1.4m（標高4.6～4.4m）付近に存在する第6層上面で平安時代後期・江戸時代に比定される井戸9基（SE－2～SE－10）、溝10条（SD－2～SD－11）・小穴82個（SP－2～SP－83）を検出した（第2調査面）。さらに0.5～0.7m掘り下げた結果、標高3.9m前後に存在する第8層上面で弥生時代後期後半に比定される竪穴住居2棟（SI－1・SI－2）、井戸1基（SE－1）、土坑2基（SK－1・SK－2）、溝1条（SD－1）、小穴1個（SP－1）を検出した（第1調査面）。遺物は遺構内および第5層～第7層からコンテナ55箱程度が出土している。なお、昭和63年8月6日に第1調査面を対象に現地説明会を開催し、220名の参加者に現地を公開した。

第2節　基本層序

上部においては、撹乱のため土層が不明瞭な部分があったが下部は比較的安定した層相であった。ここでは、普遍的に存在した9層を摘出して基本層序とした。

第0層　表土。層厚15～30cm。地表面の標高はT.P.＋5.4～5.3mを測る。

第1層　灰色砂質土。旧耕土。層厚10～20cm前後。調査区の南西部および南東部で検出した。

第2層　褐色砂質土。層厚30～40cm。

第3層　灰褐色砂質土。調査区の中央から東側一帯に堆積している。層厚10～50cmで東側へ行くにしたがって層厚を増している。

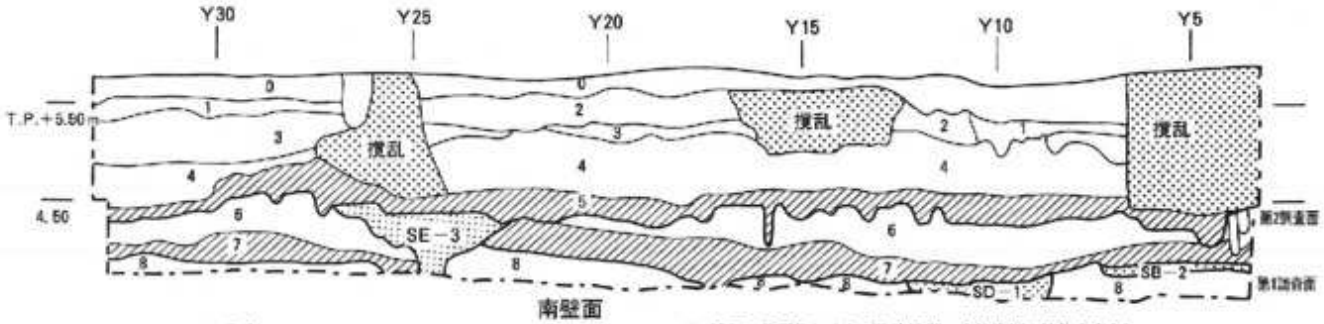
第4層　褐色～暗褐色の色調で、土質は砂質土である。層厚30～60cm。鎌倉時代以降の土器片を少量含む土層で東側に行くに従って層厚を減じている。土層の特徴から客土層と考えられる。

第5層　淡灰～灰色の色調で土質は砂質シルトである。層厚20～40cm。層中に弥生時代後期～鎌倉時代に至る遺物を含んでいる。

第6層　淡灰～黄灰色の色調で、土質はシルトである。層厚10～50cm。層中に酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着している。弥生時代後期～古墳時代後期の遺物を含む。上面で平安時代後期と江戸時代に比定される遺構を検出した（第2調査面）。

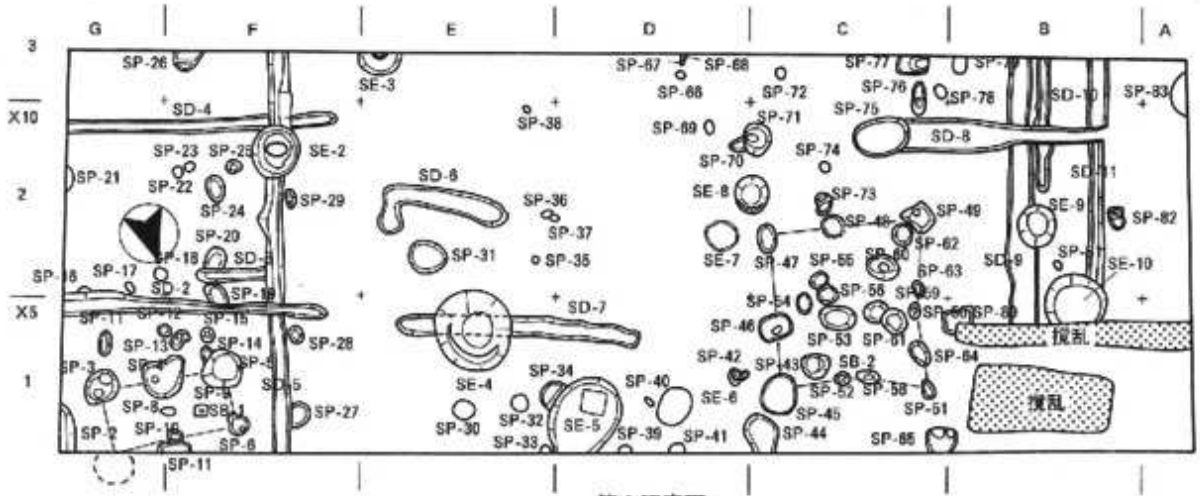
第7層　褐灰色の色調で、土質はシルト～極細粒砂である。層厚10～40cm。弥生時代後期に比定される土器類を含む。

第8層　灰黄色～褐灰の色調で、土質はシルト～極細粒砂である。層厚20cm以上。この土層上面で弥生時代に比定される遺構を検出した（第1調査面）。

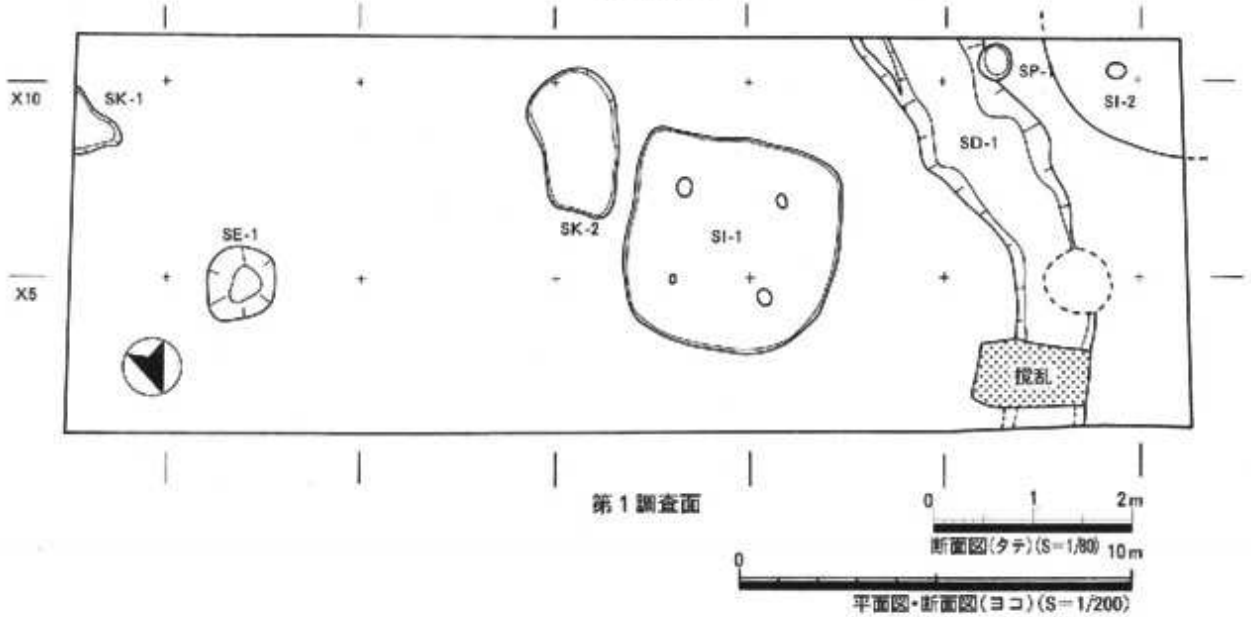


南壁面

0 表土
1 灰色砂質土（旧耕土）
2 褐色砂質土
3 灰褐色砂質土
4 褐色～暗褐色砂質土（客土）鎌倉時代以降の遺物を含む
5 淡灰～灰色砂質シルト（弥生後期～鎌倉時代の遺物を含む）
6 淡灰～黄灰色シルト（弥生後期～古墳後期の遺物を含む）（第2調査面）
7 褐灰色シルト～極細粒砂（弥生後期の遺物を含む）
8 灰黄色～黒灰色シルト～極細粒砂（第1調査面）



第2調査面



第1調査面

第3図　検出遺構平断面図

第3節　検出遺構・出土遺物

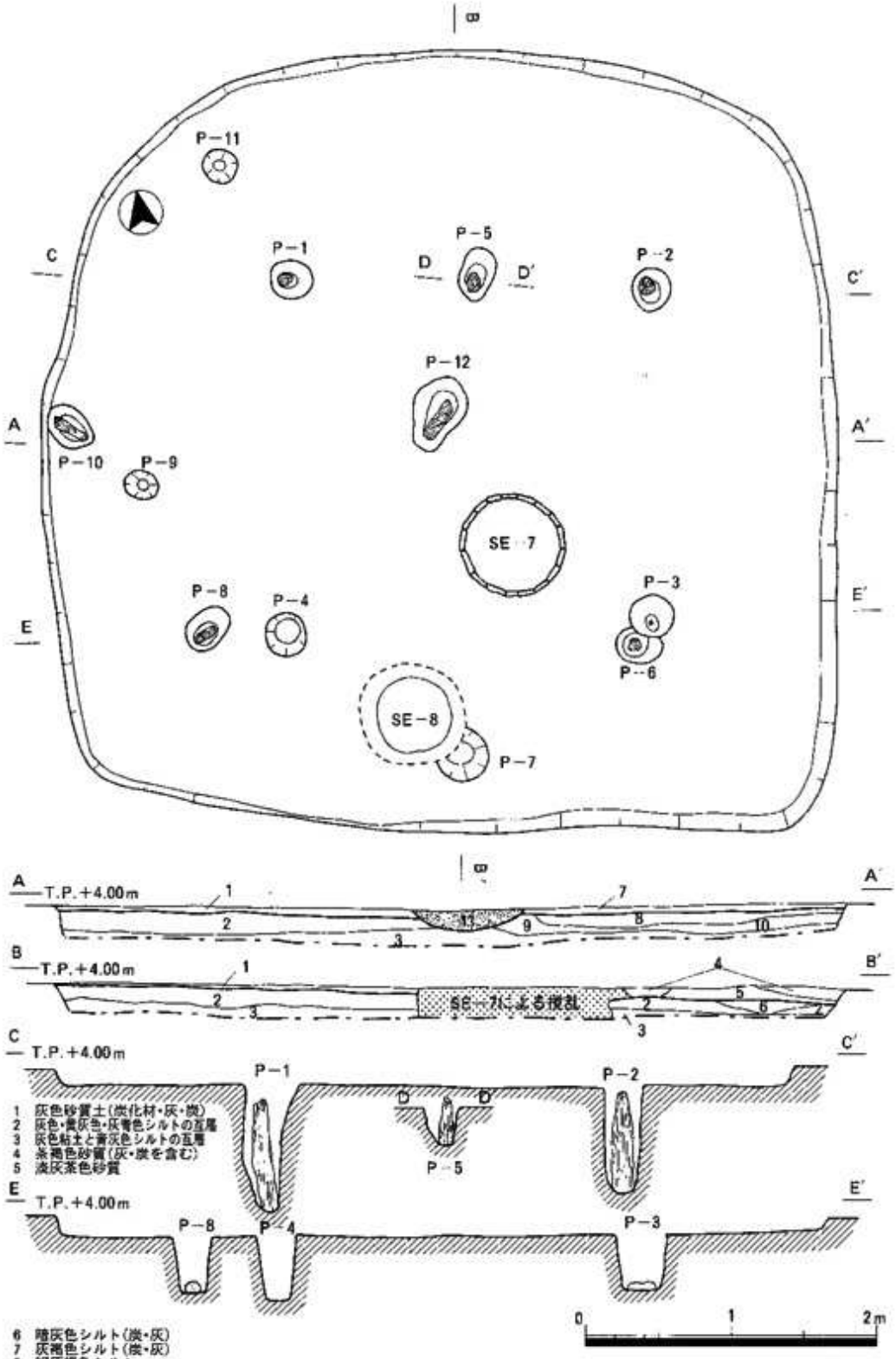
1）第1調査面（第8層上面）

検出した遺構は、竪穴住居2棟（SI－1・2）、井戸1基（SE－1）、土坑2基（SK－1・2）、溝1条（SD－1）、小穴1個（SP－1）で、全て弥生時代後期後半に比定できる。

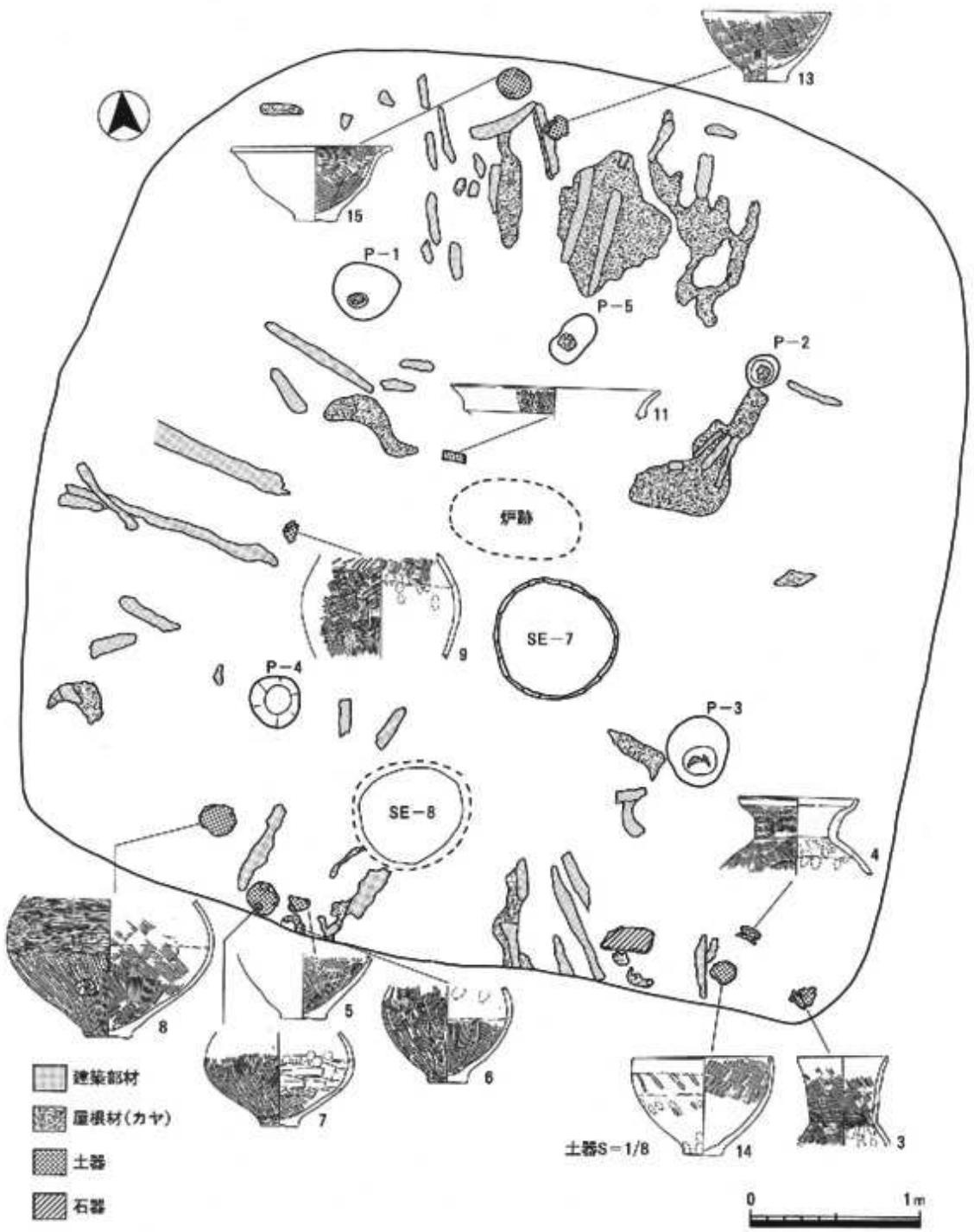
竪穴住居（SI）

SI－1

1・2CD地区で検出した。平面形は隅丸方形を呈するもので、規模は東西幅5.3m、南北幅5.4mで検出面から床面まで0.05～0.1mを測る。復元床面積は約26㎡を測る。住居内の上部で、炭化材・屋根材・炭・灰を検出した。炭化材は中央部から外側に放射状に広がっており、竪穴住居の上屋を構成した垂木材と考えられる。炭化材の分布は中央部から東辺にかけて疎らであることから、この部分の火勢が強かったことが推定される。炭化材はすべて丸材で径5～7cm程度を測る。また、屋根材の一部と考えられる茅の炭化物が北辺の一部で遺存していた。炭化材を取り除いたところで焼失時点の床面を検出した。床面は平坦であるが北から南に向かってわずかに傾斜しており、両端の高低差は10cmを測る。床面を構成する土質は、中央部を境として東側では明灰褐色シルト、西側は灰色粘土・青灰色シルト・灰青色シルトの5層に二分される。炉跡は、ほぼ中央部で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.75m、南北幅0.45m、深さ0.12mを測る。内部には炭・灰を多量に含んでいたが、周辺の土質は焼土化していなかった。主柱穴は4個（P－1～P－4）で構成されており、4個をつないだ形状は正方形を呈する。柱間は2.4m前後を測る。柱根はP－1（径14cm、長さ77cm）・P－2（径16cm、長さ70cm）・P－3（径19cm、深さ8cm）で遺存していた。床面よりさらに13～15cm程度掘り下げた位置で、新たに柱穴8個（P－5～P－12）を検出した（下部床面）。下部床面で検出した柱穴のうち柱根が遺存していたものはP－5・P－6である。P－5の柱根は端部を二股に切り欠き、そこに別材の丸材を組み込む構造である。P－8・P－10・P－12においても最下部に丸材が遺存していることから、P－5と同様、柱の沈下を防ぐための工夫がされたものであったと考えられる。なお、P－8・P－10の丸材については、建物の中央部に向かって傾斜するように置かれており、支柱の役割を果たした柱穴であると推定される。以上の結果から、幾度かの建て替えが実施された竪穴住居と推定されるが下部床面で検出した柱穴からはその規則性を復元するには至らなかった。遺物は、弥生時代後期後半（第V様式）に比定される土器類が、床面上および床面直下から下部床面までの上層中から出土している。床面上で検出した遺物は、一部を除いて北辺の中央部と南辺の壁面付近に集中しており、北辺の中央部では鉢2点（13・15）、南辺部では壺6点（3～8）・甕1点・鉢1点（14）・台石1点が出土している。図化したものは16点（1～16）である。内訳は広口長頸壺（1・2）・長頸壺（3）・


P−11
P−1
P−5
P−2
P−12
P−10
P−9
SE−7
P−8
P−4
P−3
P−6
SE−8
P−7
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
T.P.+4.00m
SE−1による撹乱
1 灰色砂質土(炭化材・灰・炭)
2 灰色・黄灰色・灰褐色シルトの互層
3 灰色粘土と黄灰色シルトの互層
4 茶褐色砂質(灰・炭を含む)
5 淡灰茶色砂質
6 暗灰色シルト(炭・灰)
7 灰褐色シルト(炭・灰)
8 明灰褐色シルト
9 灰黄色シルト
10 灰色シルト・黄灰色シルトの互層
11 暗灰茶色シルト(炭・灰を多量に含む)炉跡
0
1
2m

第4図　ＳＩ－１平断面図



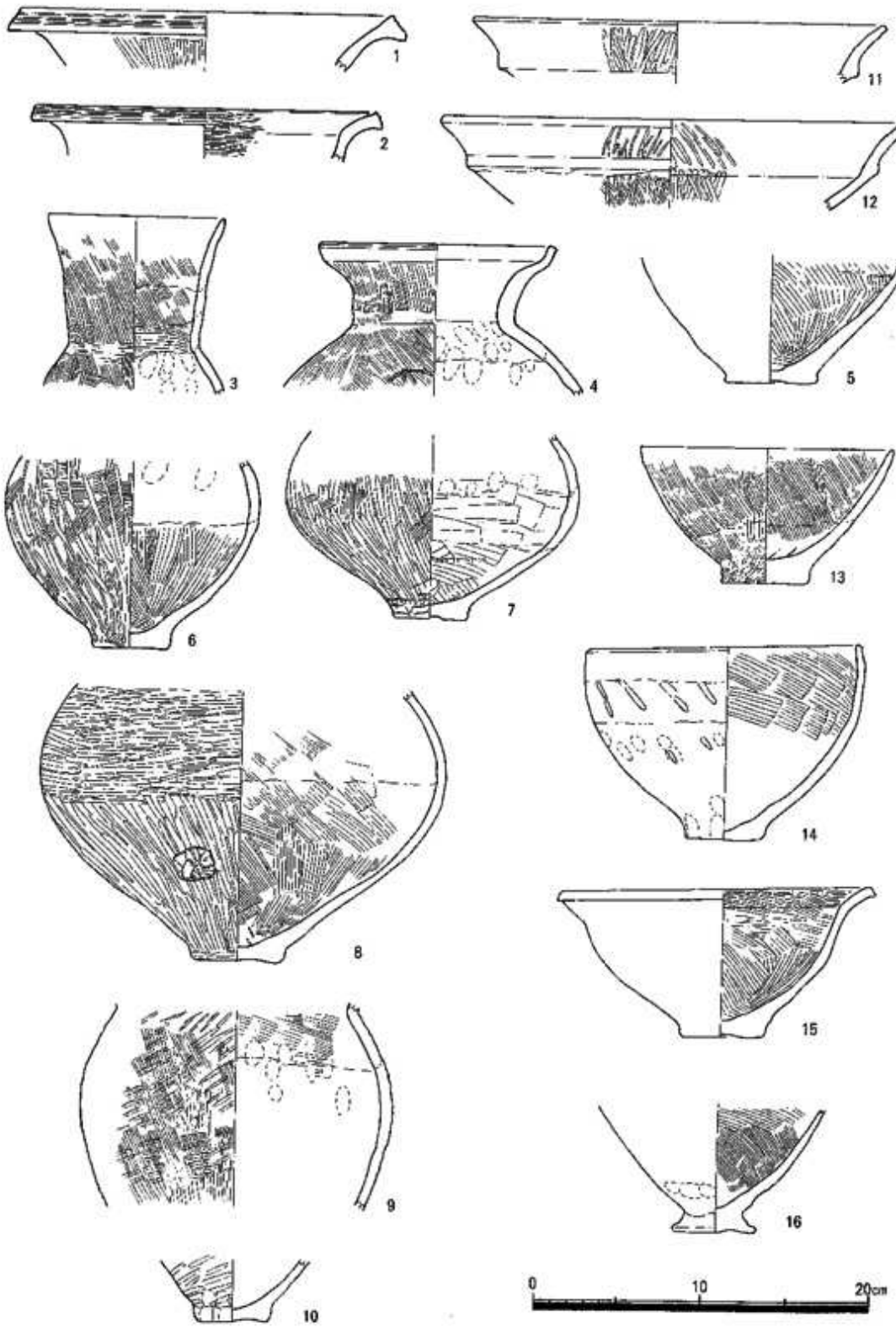
第5図　ＳＩ－１建築部材および遺物検出状況

広口壺（4）・壺底部（5～8）、甕（9・10）、高杯（11・12）、鉢（13～15）、台付き鉢（16）である。

（1・2）はともに口頸部の1/10程度が遺存する広口長頸壺である。口縁端部が上下に肥厚し、端面に凹線が施されている。ともに生駒西麓産である。形態からみて他の資料よりは古くに位置付けられる。（3）は中型の長頸壺で、体部上半から口縁部までの約1/2が遺存している。頸部高7.9cmを測る。頸部内外面には縦方向のハケナデ、口縁部内外面にはヨコナデが施されている。体部上位には直線文2本からなるヘラ記号がある。胎土には石英・長石・チャートが含まれている。（4）は受口状の口縁部を有する広口壺で、口径13.6cmを測る。外面頸部から体部にかけて縦方向のハケナデ調整が施されている。体部中位にヘラ記号がある。色調は淡褐色で、胎土には0.1～2mm大の角閃石が多量に含まれている。（5～8）は壺底部である。（8）の体部下半に粘土を雑に貼付けた部分が認められ、その部分に径2.1cmの孔が穿たれている。（9）は甕の体部片で、体部下半には単位幅の広い右上がりのタタキの後、縦方向のハケナデが施されている。（10）は突出した平底の底部を有する甕である。（9・10）ともに生駒西麓産である。（11・12）は高杯の口縁部で遺存率はともに1/10程度の小片である。（12）の口縁部内外面にはヨコナデの後ヘラミガキが施されているが、比較的丁寧で装飾を意識したものと推定される。ともに、生駒西麓産で淡褐色の色調である。（13）は突出する平底の底部から体部が斜上方にやや内湾気味に伸びる直口の鉢で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径15.0cm、器高8.2cm、底径4.8cmを測る。体部内外面は縦方向の密なハケナデにより器面調整が行われている。生駒西麓産で色調は暗褐色である。（14）は小さく突出する平底の底部から斜上方に体部が伸びた後、角度を直上に変え伸びる鉢で、口縁端部は外傾する面を有する。完形品で口径16.2cm、器高11.6cm、底径4.5cmを測る。色調は赤褐色で、胎土にはやや小粒の石英・長石・黒雲母が含まれている。（15）は平底の底部から内湾気味に伸びた後、口縁部が外反して端部が外傾する面を有する鉢である。完形品で口径18.4cm、器高9.0cm、底径5.1cmを測る。胎土および色調は（14）と似ている。（16）は「ハ」の字形に開く底部から体部が斜上方に伸びる台付きの鉢である。底径4.9cmを測る。黒灰色の色調で、胎土には砂粒をほとんど含まない精良な粘土が使用されている。

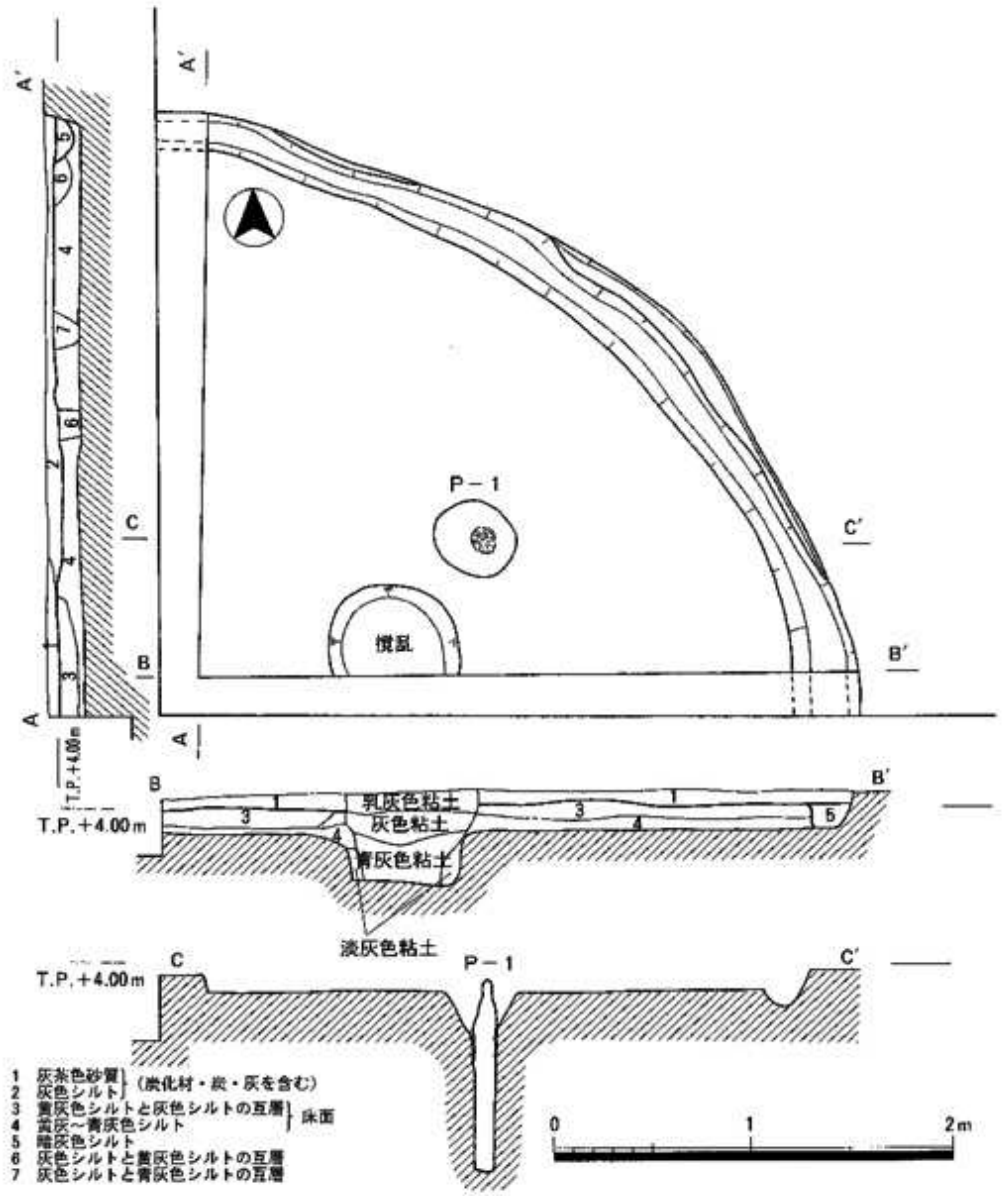
SI－2

調査区の南西隅で検出した。円形を呈する竪穴住居と推定されるが、南部および西部が調査区外のため全体の約四分の一程度を検出したに過ぎない。検出部分の数値は、東西幅3.25m、南北幅2.85mで、検出面から床面まで0.1m前後を測る。床面上部に堆積する第1層から、炭化材・屋根材・炭・灰・焼粘土塊を検出した。炭化材は中央部から放射状に広がっている。これらは、竪穴住居の上屋を構成した垂木材で、径5cm前後の丸材が大半を占めるが、北西部一

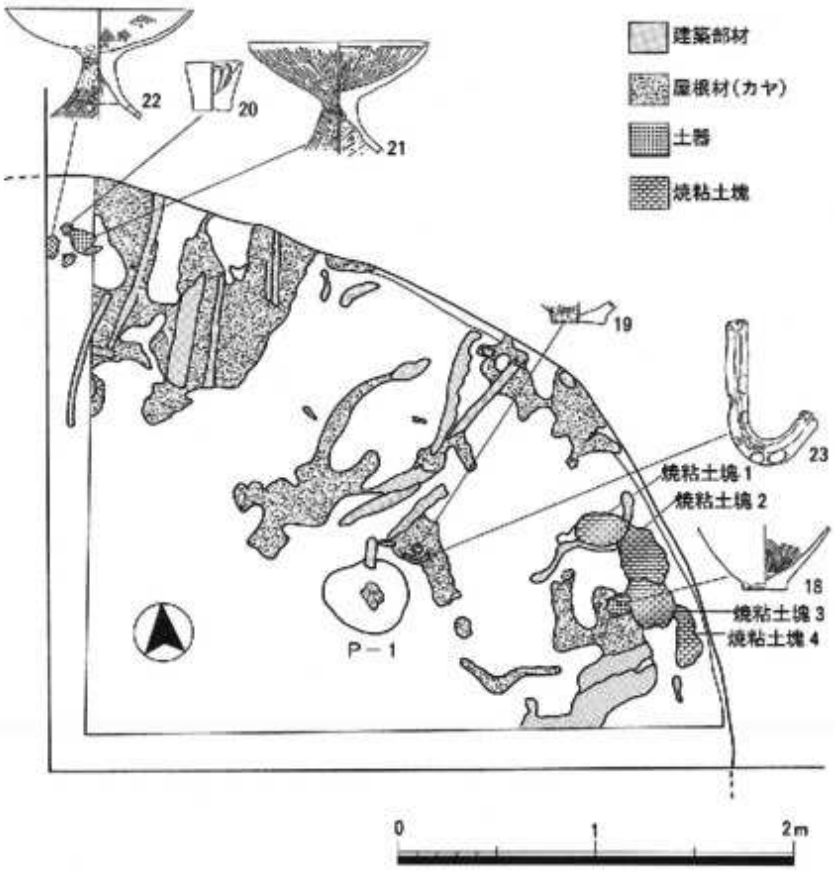


第6図　S I －1出土遺物実測図

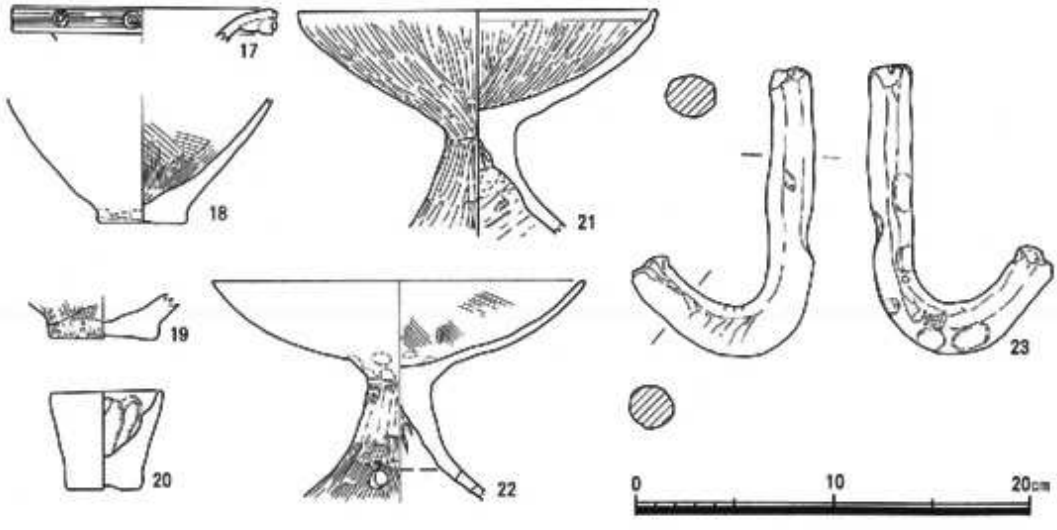
枚のみ板材（幅10cm・長さ60cm・厚さ１cm）が遺存していた。屋根材である茅の炭化物は南西隅で比較的良好な形で遺存していた。主柱穴は、炭化材を取り除いたところで柱穴１個（P－１）検出した。平面形が円形を呈し径40cmを測るもので、内部に径16.5～20cm、長さ96cmを測る柱根が遺存していた。周溝は、壁面に沿う形で検出された。床面から切り込まれており、幅20cm前後、深さ５～８cmの規模で、内部は暗灰色シルトで充填されている。なお、周溝内には炭・灰が堆積しておらず、焼失時点では完全に埋まっていた可能性が強い。したがって、周溝は排水溝のための溝ではなく、壁板を固定する際に掘られた溝と考えるのが妥当である。遺物



第７図　ＳＩ－２平断面図



第8図　ＳＩ－２検出状況



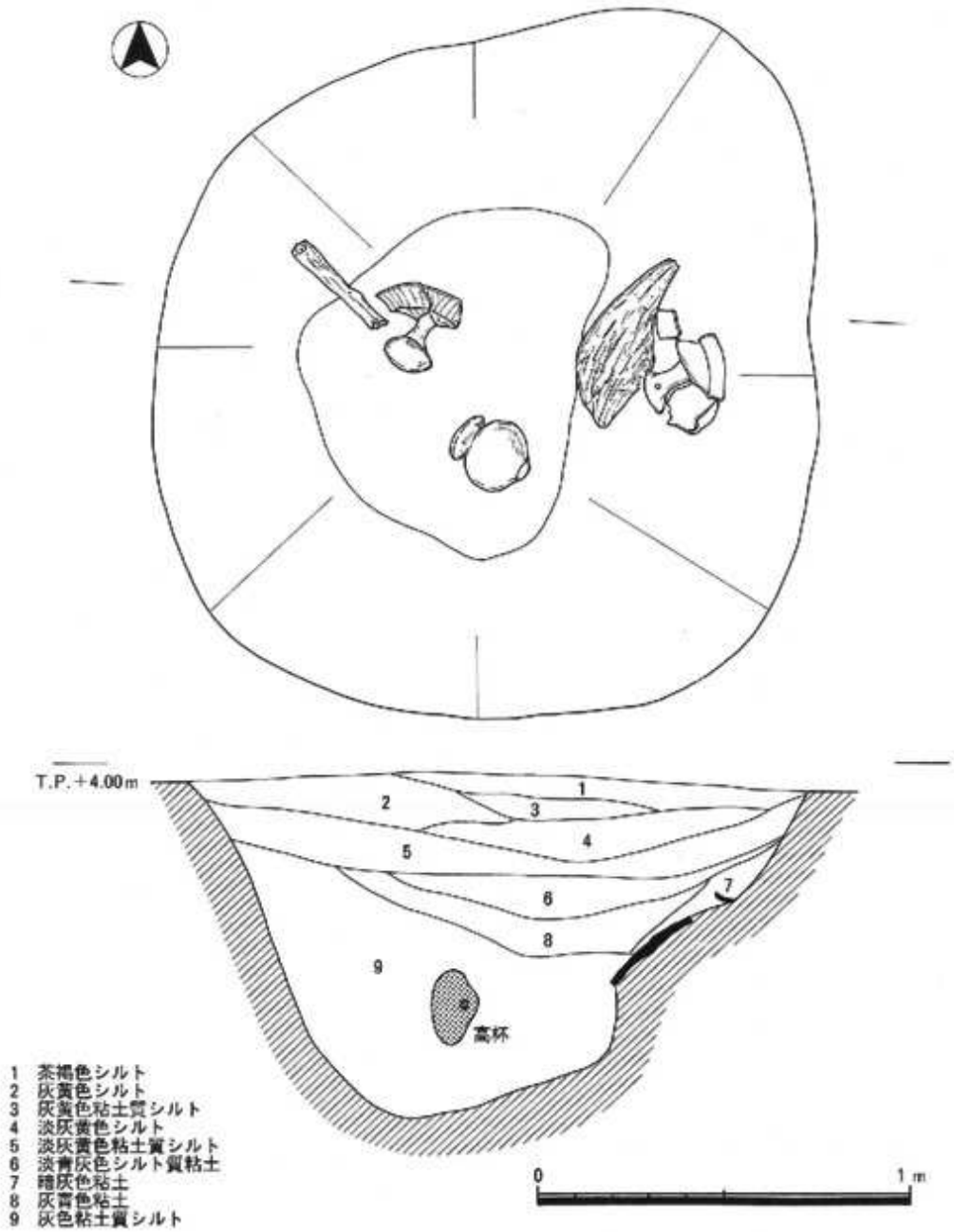
第9図　ＳＩ－２出土遺物実測図

は、床面上から出土した。一部の遺物を除いて大半が壁面付近から出土している。出土した遺物は弥生時代後期後半（第Ⅴ様式）に比定されるもので、内訳は壺３点・鉢１点・高杯２点・土製品１点であるが一部を除いて大半が小片であった。その他、南西隅で焼粘土塊４個を検出した。ほぼ、人頭大の大きさで４個が壁面のラインに沿って並んでいる。なお、住居内から焼粘土塊が出土した同時期の類例としては、大阪府東大阪市鬼塚遺跡がある。鬼塚遺跡では、壁面に接する位置で５個の焼粘土塊が検出されており、出土位置においては本例と共通した特徴を示している。鬼塚遺跡では、これらの性格として土器の胎土と酷似している点から、土器の素材であると推定されている。本例も同様、土質は比較的良好なものであるため、土器素材の粘土であった可能性が高い。出土した土器類のなかで、図化し得たものは壺３点（17～19）、鉢１点（20）、高杯２点（21・22）、土製品１点（23）の７点である。（17）は広口長頸壺と推定されるもので、遺存率は1/10程度である。口縁端部直下が拡張され外面に面を持つもので３条の凹線文と貼付け円形浮文からなる装飾が施されている。胎土中に長石・赤色酸化土粒が含まれており、色調はにぶい橙色を呈する。（18・19）は壺底部である。底径は（18）が4.2cm、（19）が5.3cmを測る。ともに生駒西麓産である。（20）は手づくねのミニチュア鉢である。口径5.7cm、器高5.0cm、底径3.8cmを測る。全体に雑な作りで口縁部の一部は波状口縁を呈している。体部内面は底部から上位に向かって指ナデの痕跡が顕著である。生駒西麓産である。（21・22）はいずれも椀形の杯部を有する高杯である。口径は（21）が18.4cm、（22）が19.0cmを測る。スカシ孔は（22）が３孔で（21）は不明である。ともに生駒西麓産である。（23）は径２cm前後の粘土紐を「し」の字状に曲げた土製品で完形である。長さ15.0cm、幅2.0～2.5cmを測る。両端は粘土紐を引き裂いた状態のままである。表面は凹凸が著しく、全体に雑な作りである。なお、明瞭な使用痕等は確認できないが出土位置が柱穴に隣接していることから、柱に設けられた鉤的な使用方法が推定される。生駒西麓産である。

井戸（ＳＥ）

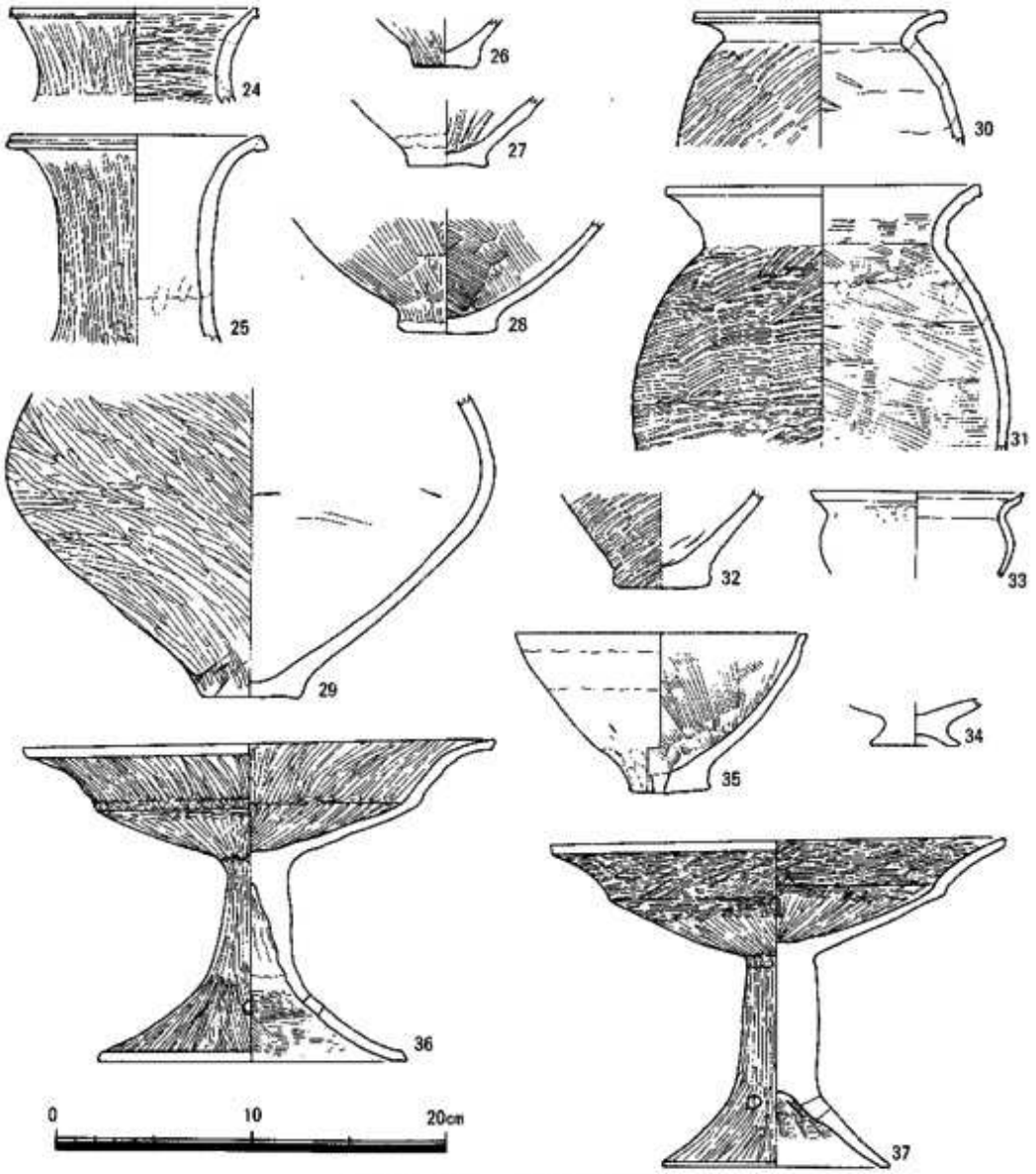
ＳＥ－１

１・２Ｆ地区で検出した。不整方形を呈する素掘り井戸で、幅1.8～1.9m、深さ0.92mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上層がシルト層、中層から下部層にかけては粘土層が優勢な９層から成る。遺物は第７層・第９層から弥生時代後期後半（第Ⅴ様式）に比定される壺・甕・有孔鉢・高杯、木製品（舟形容器）等がコンテナ１箱程度出土している。そのうち、図化し得たものは14点（24～37）でその内訳は、広口壺１点（24）・広口長頸壺１点（25）・壺底部４点（26～29）、甕３点（30～32）、鉢１点（33）・台付き鉢１点（34）・有孔鉢１点（35）、高杯２点（36・37）である。（24）は頸部が直上に伸びた後口縁部付近で小さく外反する広口壺で、口頸部の1/4程度が遺存している。口縁端部が外傾する面をもつもので、端部に１条の



第10図　ＳＥ－１平断面図

凹線を巡らしている。生駒西麓産で、色調は褐灰色を呈する。(25) は頸部が斜上方に直線的に伸びた後、外反して口縁部に至る広口長頸壺である。口縁端部は拡張され外面に外傾する面をもつ。白灰色の色調で、胎土には長石・石英・赤色酸化土粒が含まれている。搬入土器と考えられる。(26～29) は壺の底部である。(27) はやや突出したくぼみ底である。(26～28) が生駒西麓産である。(29) は砂粒をほとんど含まない精良な粘土が使用されている。



第11図　ＳＥ－１出土遺物実測図

（30・31）は甕で、口縁部が「く」の字に強く外反する（30）とゆるやかに外反する（31）がある。（31）の口縁部から体部内面に横方向のハケナデが施されている。（30）が生駒西麓産である。（33）は口径が体部径を凌ぐ小型鉢の小片で遺存率は1/8程度である。復元口径は11.0cmである。生駒西麓産である。（34）は台付き鉢で脚台部は「ハ」の字状を呈する上げ底である。底径4.6cm、器高1.0cmを測る。生駒西麓産である。（35）はほぼ完形の有孔鉢で、口径14.9cm、器高8.4cm、底径4.2cmを測る。底部には径0.8～１cmを測る焼成前の穿孔が内部から穿たれている。生駒西麓産である。（36・37）の高杯はともに一部を欠損するものの、ほぼ全容を知るこ

とができた。(36) は口径21.4cm、器高16.5cm、杯部高5.8cm、裾径15.8cmを測る。中空の柱状部から裾部が大きく開くもので、スカシ孔は4個穿たれている。杯部はやや深めで、口縁部は大きく外反し端部は外傾する面を有する。杯部内外面は中央部から外に向かって放射状にヘラミガキが丁寧に施されており、装飾性を意識したものと考えられる。生駒西麓産である。(37) は口径23.4cm、器高16.8cm、杯部高5.9cm、裾径11.8cmを測る。中実の柱状部に小さく開く裾部が付くもので、スカシ孔は4個穿たれている。杯部は深めで、口縁部は外反し外傾する面を持つ。杯部の調整は、体部内外面が放射状ヘラミガキであるが口縁部は内外面ともに横方向のヘラミガキである。灰白色の色調で、胎土には石英・長石・チャート粒が含まれている。

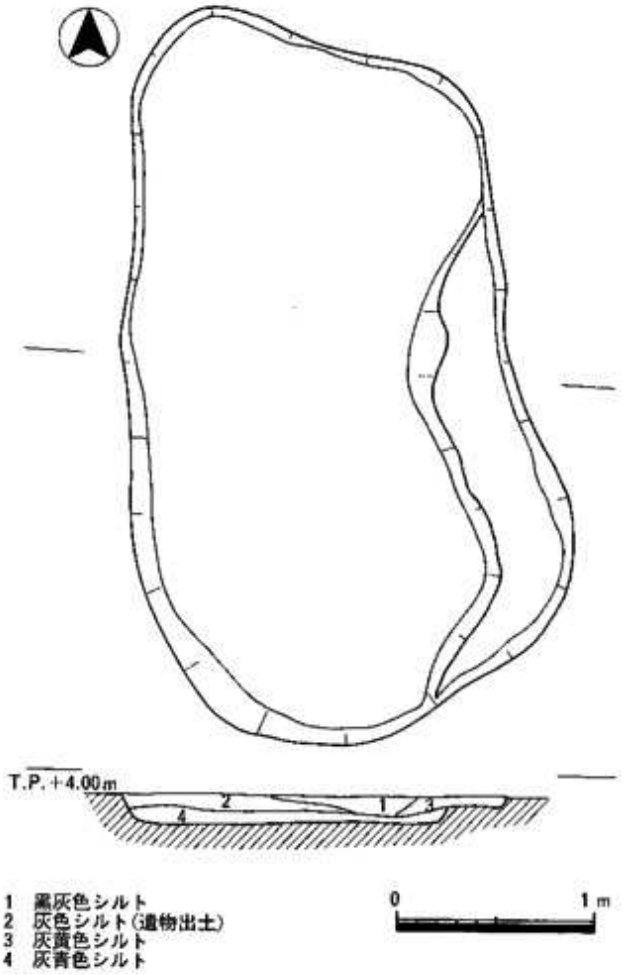
土坑（SK）

SK－1

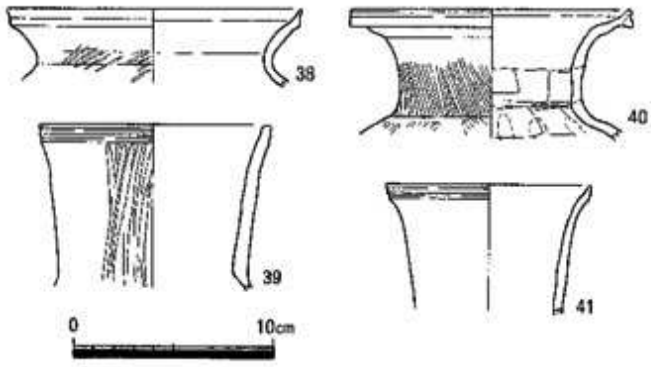
2G地区の東端で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部で東西幅1.15m、南北幅1.8mを測る。断面の形状は逆台形で深さ0.18mを測る。埋土は灰・炭を含む黒灰色シルトの単一層である。遺物は弥生時代後期後半（第V様式）に比定される壺・甕・高杯の小片が少量出土している。そのうち、図化し得たものは甕1点（38）、長頸壺1点（39）の2点である。甕（38）は強いヨコナデにより口縁端部が外反気味に伸びるもので、端部は尖り気味に終る。(39) は長頸壺で口縁端部直下に2条の凹線が巡らされている。(38・39) ともに生駒西麓産である。

SK－2

2・3DE地区で検出した。SI－1の南東部に近接している。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅2.0m、南北幅3.6m、深さ0.15mを測る。上面幅に比して深さが比較的浅いもので、東部にテラス状の



第12図　SK－2平断面図



第13図　SK－1（38・39）、SK－2（40・41）出土遺物実測図

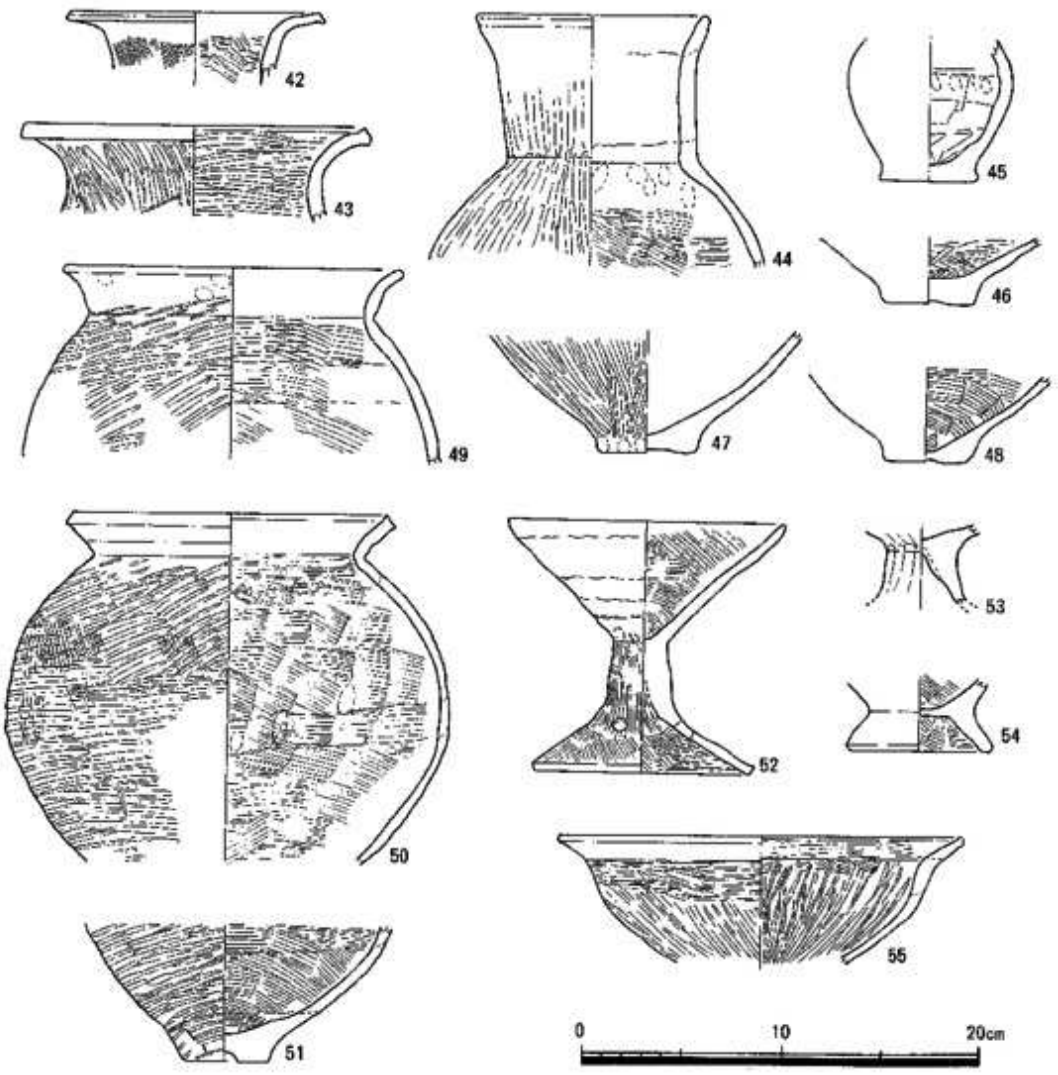
高まりを有するが、底部はほぼ水平で断面逆台形を呈する。埋土はシルト層を中心とする4層から成る。遺物は第2層から弥生時代後期後半（第V様式）に比定される壺の小片が少量出土した。そのうち、図化し得たものは広口壺1点（40）・長頸壺1点（41）の2点である。2点ともに小片で遺存率は1/6程度である。（40）は口縁端部が下方に拡張される広口壺で作りは全体に丁寧である。（41）は外反して開く口縁端部外面に2条の凹線が巡らされている。2点ともに生駒西麓産である。

溝（SD）

SD－1

調査区の西部で検出した。北－南東方向に伸びるもので、近世の攪乱・SE－9・SE－10・SP－1に切られている。幅1.95～3.3m、深さ0.09～0.5mで南に行くにしたがって深さが漸増している。埋土は、黒灰色シルトと青灰色シルトの互層で不均質である。遺物は弥生時代後期後半に比定される壺・甕・鉢・高杯の小片がコンテナ1箱程度出土している。そのうち、図化し得たものは14点（42～55）で、その内訳は広口壺2点（42・43）・長頸壺1点（44）・壺底部4点（45～48）、甕3点（49～51）、高杯2点（52・53）、鉢2点（54・55）である。

（42・43）は広口壺口縁部の小片で遺存率はともに1/4程度である。頸部が斜上方に伸びた後、口縁部が屈曲し端部が面を持つ（42）と口縁部がゆるやかに外反し端部に面を持つ（43）がある。ともに生駒西麓産で、色調は（42）が褐灰色、（43）が赤褐色を呈する。（44）は口縁部がほぼ完存する長頸壺で口径11.6cm、頸部高7.5cmを測る。生駒西麓産である。（45）は小型壺の底体部である。底部は突出する平底で体部に比してやや大きめの底部である。生駒西麓産である。（46～48）は壺底部でいずれも突出平底で底部中央部がわずかに窪んでいる。3点ともに生駒西麓産である。（49～51）は甕である。口縁部がゆるやかに外反し口縁端部が丸く終る（49）と「く」の字に屈曲し口縁部が内傾し幅広の面を持つ（50）がある。（51）はやや突出した底部でドーナツ底を呈している。3点ともに体部外面には幅広のタタキ調整が行われている。生駒西麓産である。（52）高杯で裾部が欠損している以外はほぼ完存している。口径14.0cm、器高13.1cm、裾径10.8cmを測る。脚部は中実で短い柱状部から「ハ」の字状に裾部が広がる。杯部は逆円錐形状を呈する。柱状部と裾部の境にスカシ孔が4孔穿たれている。杯部内面は丁寧なハケナデにより平滑にされているが、外面は粘土紐の痕跡が随所で認められた。



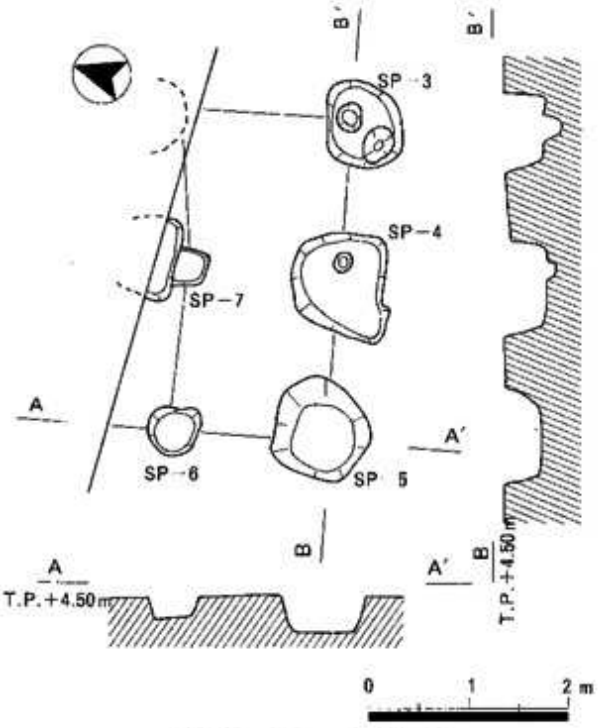
第14図　ＳＤ－１出土遺物実測図

胎土には長石・石英・角閃石・赤色酸化土粒が含まれており、色調は赤褐色である。(54) は台付きの鉢で脚台部分は完存している。脚台径5.3cm、脚台高2.0cmを測る。生駒西麓産である。(55) は内湾気味に立ち上がる深めの体部から口縁部が屈曲外反する鉢である。生駒西麓産である。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１

３Ｂ地区で検出した。ＳＤ－1の西肩を切っている。円形を呈するもので径0.45ｍ、深さ0.1前後を測る。埋土は、黒灰色シルト層の単一層で、内部から弥生時代後期後半に比定される土器の小片が少量出土している。



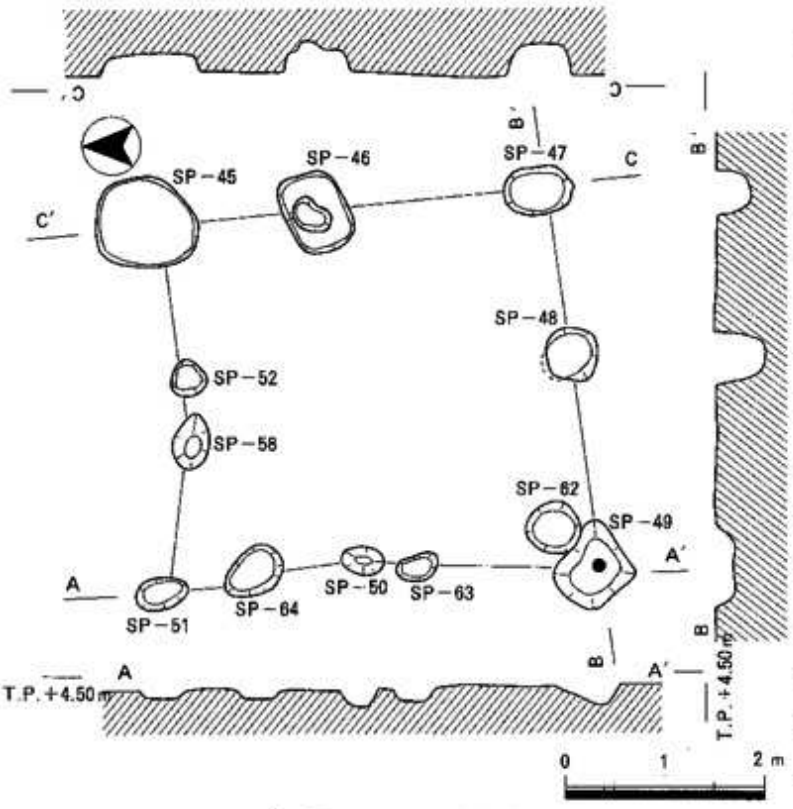
第15図　ＳＢ－１平断面図

2）第２調査面（第６層上面）

表土下1.2～1.4m（標高4.6～4.4m）付近に存在する第６層上面を第２調査面とした。検出した遺構は、掘立柱建物２棟（ＳＢ－１・２）、井戸９基（ＳＥ－２～ＳＥ－10）、溝10条（ＳＤ－２～ＳＤ－11）、小穴82個（ＳＰ－２～ＳＰ－83）である。これらの遺構は、平安時代中期・後期、鎌倉時代、江戸時代に比定される。なお、江戸時代の遺構については、第２層上面が遺構構築面であり、記述した形状や数値は本来のものではない。

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ－1



第16図　ＳＢ－２平断面図

１Ｆ・Ｇ地区で検出した。北側が調査区外のため全容は不明であるが北壁で確認した柱穴を含めて１間×２間分を確認した。ＳＰ－３～ＳＰ－７で構成されている。柱間は1.6mを測る。柱穴は、南側の柱列が規模が大きく径0.8～1.0m、深さ0.35～0.41mを測るのに対して、北側の柱列は径0.4～0.5m、深さ0.25m前後と規模が小さい。柱穴内から弥生時代後期から古墳時代

後期に比定される土器の小破片が少量出土している。

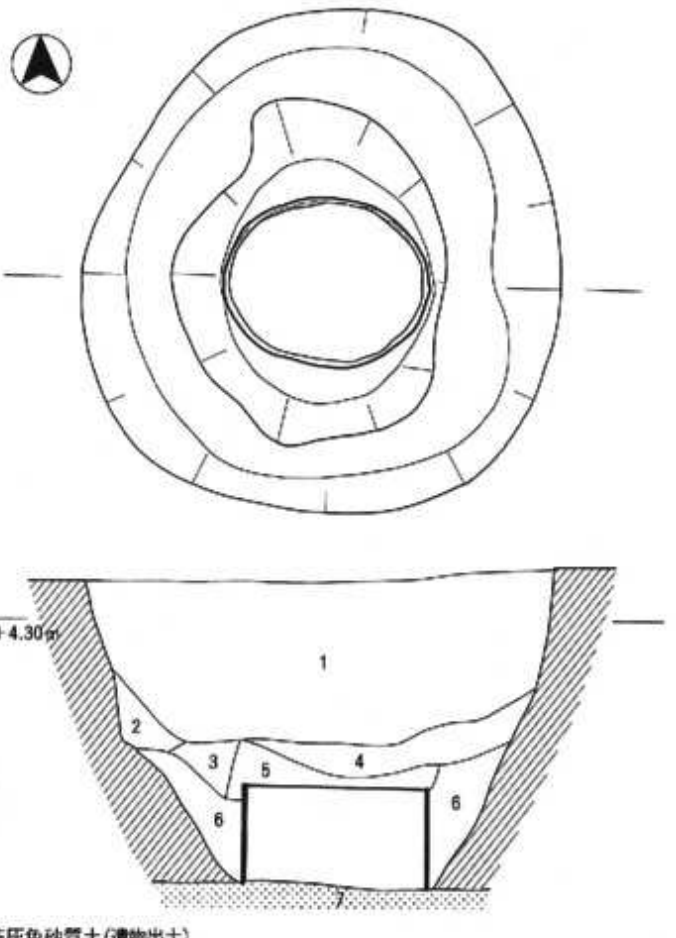
SB－2

1・2C地区で検出した。SP－45～SP－52で構成されている。東西2間（4.0m）×南北2間（4.2m）の規模で中央部に束柱を有する。主軸方向はほぼ磁北で、床面積は約17㎡を測る。柱穴の平面形状は、円形・楕円形・隅丸方形で規模は0.3～1.0m、深さ0.08～0.34mを測る。なお、SP－49には径0.1m、長さ0.23mを測る柱根が遺存していた。柱穴内から弥生時代後期後半～古墳時代後期に比定される土器の小破片が少量出土している。

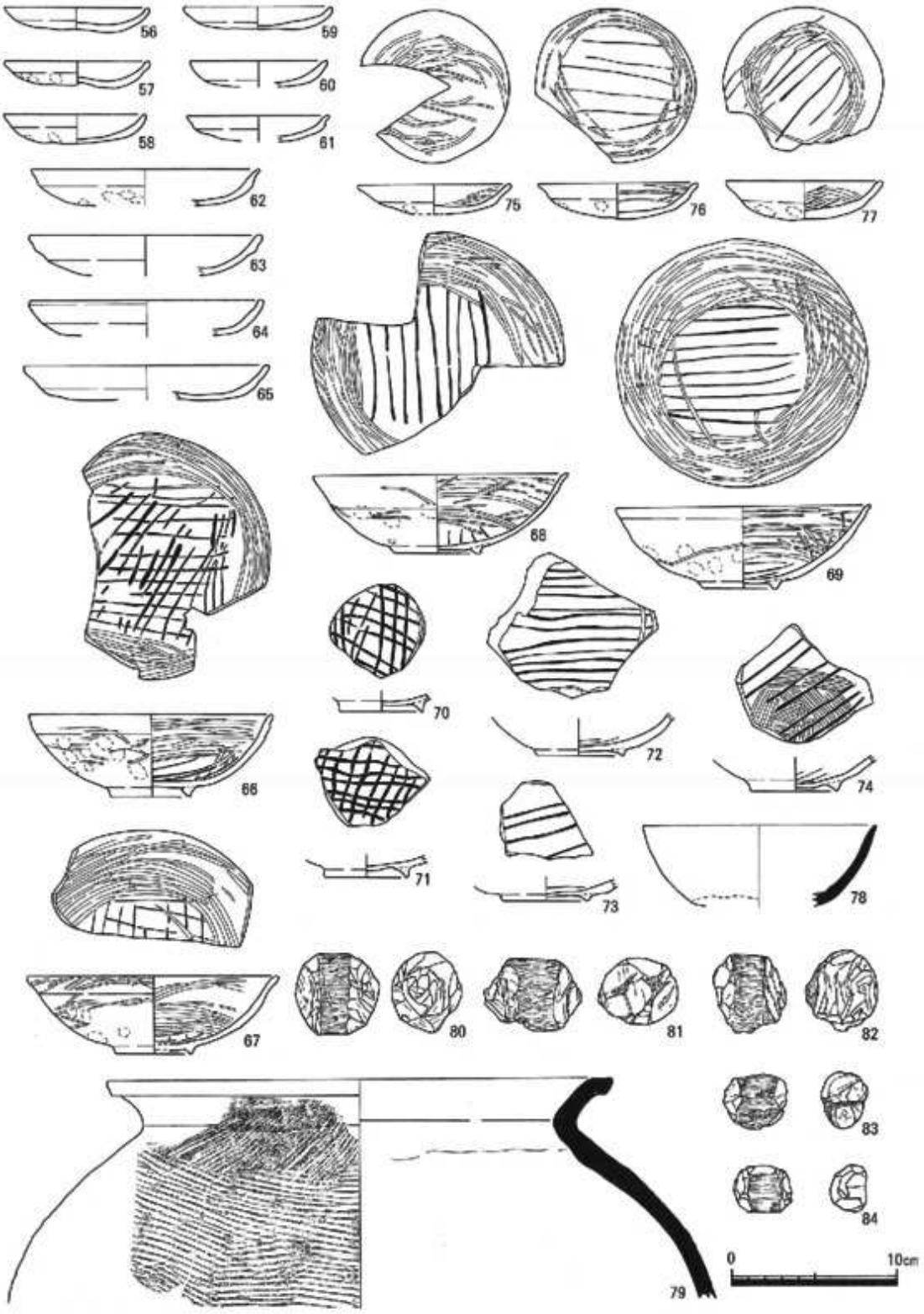
井戸（SE）

SE－2

2F地区で検出した。SD－5を切って構築されている。円形を呈する曲物積み上げ井戸で、径1.2m、深さ0.8mを測る。掘形のほぼ中央に曲物を置き井戸側とするもので、検出時点では径0.46m、高さ0.26mを測る最下段の曲物1個のみが遺存していた。埋土は掘形内および井戸側内を含めて7層から成るもので、最下層は湧水層である第7層灰色粗粒砂層に達している。遺物は第1層および井戸側内（第5層）から土師器小皿・中皿、瓦器椀・小皿、須恵器甕、白磁碗等の土器類の他、木製品では木球が出土している。遺物の特徴から井戸の廃絶時期は12世紀後半に比定できる。そのうち、図化し得たものは29点（56～84）である。その内訳は、土師器小皿6点（56～61）・中皿



第17図　SE－2平断面図

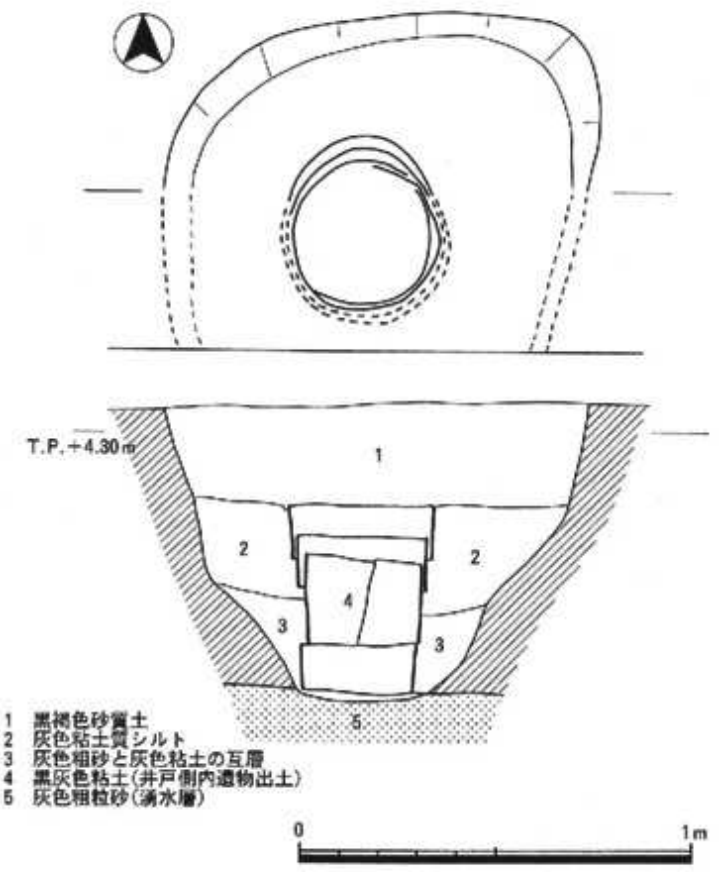


第18図　SE－2出土遺物実測図

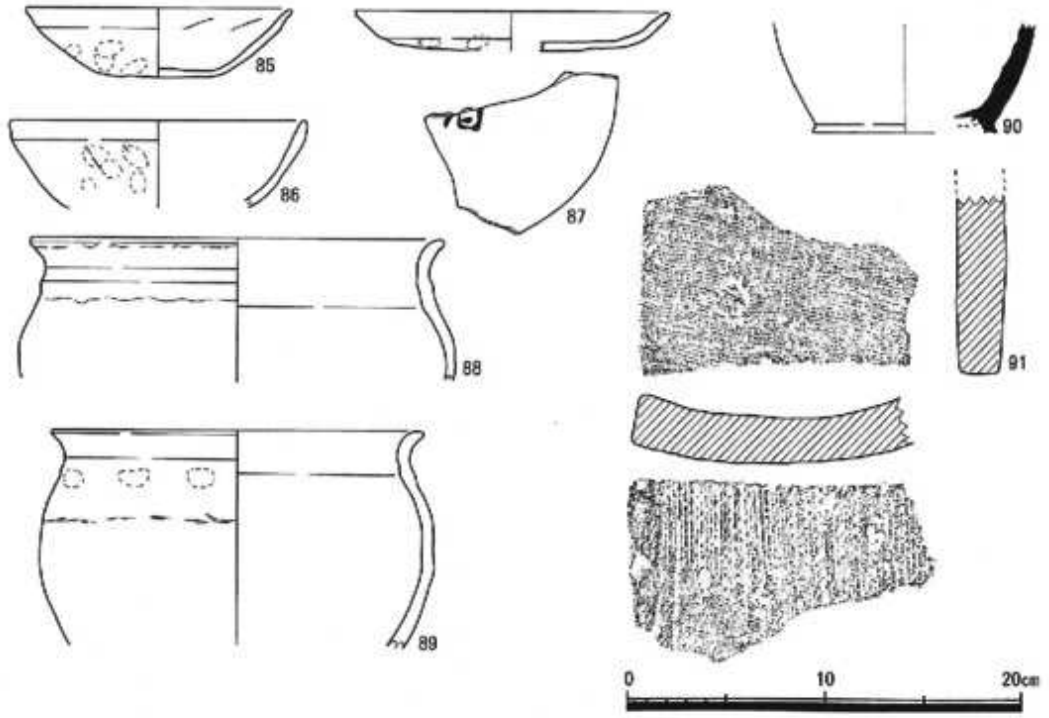
4点（62～65）、瓦器椀9点（66～74）・小皿3点（75～77）、白磁碗1点（78）、須恵器甕1点（79）、木球5点（80～84）である。（56～61）は土師器小皿で口径9.0～9.8cm、器高1.3～1.8cmを測る。（56・58）が完形で他は1/2程度が遺存している。口縁部が上方ににつまみ上げ気味で終るもの（56～60）と強いヨコナデにより口縁部がゆるやかに外反して終る（61）がある。胎土は概ね精良で、色調は（59）が浅黄橙色の他は灰白色～灰黄色を呈する。土師器中皿は4点（62～65）で、いずれも遺存率が1/4～1/6程度の小片である。復元口径13.7～14.8cm、器高2.1～2.4cmを測る。口縁部の形態には、外反して口縁部が尖り気味で終る（62）の他は、端部が上方につまみ上げ気味で終る。胎土は精良で、色調は（62）が灰白色、その他はにぶい黄橙色を呈する。瓦器椀は9点（66～74）図化したが、他の資料も含めて全て和泉型であった。全容が明らかな4点（66～69）については、やや深めで丸味のある体部に、断面形状が二角形を呈する貼付け高台が付くもので、口径14.8～15.5cm、器高4.8～5.1cm、高台高0.4～0.6cmを測る。体部外面は指頭圧成形の後、僅かにヘラミガキが施されている程度のもので、前段階にみられた分割性が完全に崩壊している。内面の調整も単位幅の太いヘラミガキが粗く施されている程度である。見込みのヘラミガキは格子状の（66・67）と平行線状の（68・69）がある。（66）は見込みのヘラミガキが体部中位におよぶ希な例である。（69）の体部内面に油煙が認められる。底部のみ遺存する資料も高台が低く、断面三角形を呈する高台が貼付けられており、高台径5.1cm、高台高0.4cmを測る。見込み部のヘラミガキは格子状のもの（70・71）、平行線状のもの（72～74）がある。（74）は見込み部分に細かいハケナデ調整が施されている。概ね精良な粘土が使用されており、（70）以外は全体に炭素付着が良好で、色調は淡灰色～黒灰色を呈する。八尾市域編年のⅡ－3期（12世紀後半）にあたる。瓦器小皿（75～77）は丸味をもつ底部から内湾気味に伸びるもので、口縁部は強いヨコナデにより外反し端部が丸味を持って終る。口径9.3～9.6cm、器高1.8～2.3cmを測る。見込みのヘラミガキは（75）が不定形、（76・77）が平行線状に施文されている。炭素付着は（77）がやや不良の他は良好である。（78）は白磁碗で遺存率は1/8程度の小片である。体部下半から丸味を持って立ち上がるもので、口縁端部は丸く終る。見込みに沈線を有している。体部下半に施釉が及ばないもので、釉色は灰白色で光沢がある。横田・森田氏分類の白磁碗Ⅴ類－1にあたり帰属時期は11世紀中葉から12世紀初頭とされている。（79）は東播系の須恵器甕である。復元口径30.8cmを測る。口縁部は「く」の字に屈曲した後さらに角度を水平方向に変えるもので、端部は外傾する面を有する。体部外面のタタキ方向は、上位が右上がり以下は水平方向である。木球は5点出土している。径4.0～5.0cm、幅4.0～5.5cmを測る（80～82）と径2.7～3.3cm、幅3.5～3.9cmを測るやや小型の（83・84）がある。いずれも丸材の両端を荒削りした雑な作りものである。八尾市域の他の類例としては、矢作遺跡第1次調査（YH86－1）のSE－7の出土例がある。

ＳＥ－３

３Ｅ・Ｆ地区で検出した。南部は調査区外のため全容は不明である。曲物積み上げ井戸で、検出部分で東西幅1.1m、深さ0.74mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。曲物井戸側は４段検出した。各井戸側の数値は、最下段が径29cm、高さ12cm・２段目が径29cm、高さ23cm・３段目が径33cm、高さ14cm・最上段が径37cm、高さ15cmを測る。埋土は、掘形内の３層と井戸側内の１層から成り、最下部は湧水層である第５層灰色粗粒砂に達している。遺物は、井戸側内に堆積する第４層黒灰色粘土層から平安時代中期（10世紀前半）に比定される土師器坏・小皿・甕、須恵器壺、平瓦片が少量出土している。そのうち、図化し得たものは土師器坏２点（85・86）・中皿１点（87）・甕２点（88・89）、須恵器壺１点（90）、平瓦１点（91）の７点である。（85・86）は平底の底部から体部が斜上方に直線的に伸びる土師器坏である。（85）は口径13.4cm、器高3.5cmを測る。内面および口縁部外面はナデ、その他は指頭圧痕が遺存している。（85・86）ともに胎土は長石粒がわずかに散見される程度の良好なもので、色調は灰黄褐色を呈する。（87）は水平な底部から口縁部が斜上方に伸びる土師器中皿である。底部外面に墨書が認められるが上部が欠損しており判読できない。長石が散見されるが概ね良好な胎土で、色調は灰褐色を呈する。（88・89）はともに口縁部が強いヨコナデにより外反する甕で、復元口径18.8～21.0cmを測る。ともに外面全体には釉の付着が認められる。胎土・色調は（87）と同様である。（90）は高台を有する須恵器壺の小片である。（91）は平瓦で凹面に布目、凸面に単位の細いタタキが施されている。なお、側面にも一部布目が遺存しており、



第19図　ＳＥ－３平断面図

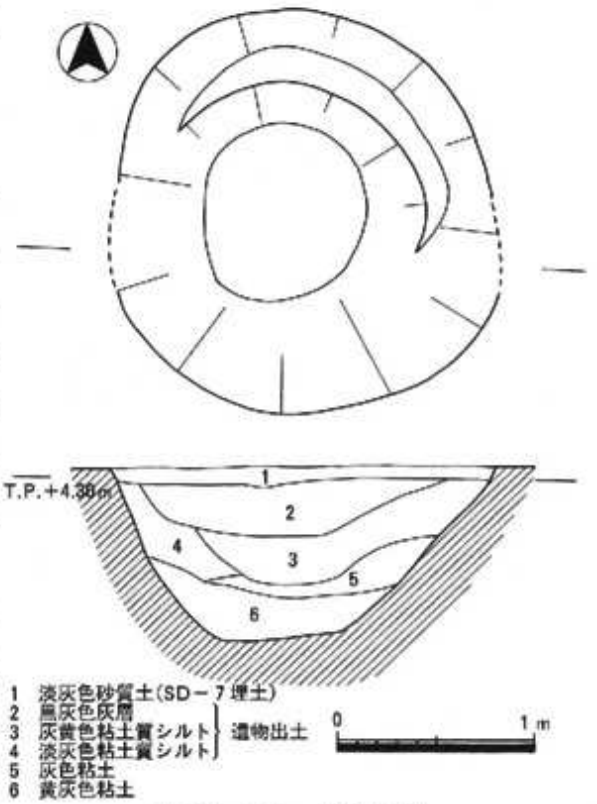


第20図　ＳＥ－３出土遺物実測図

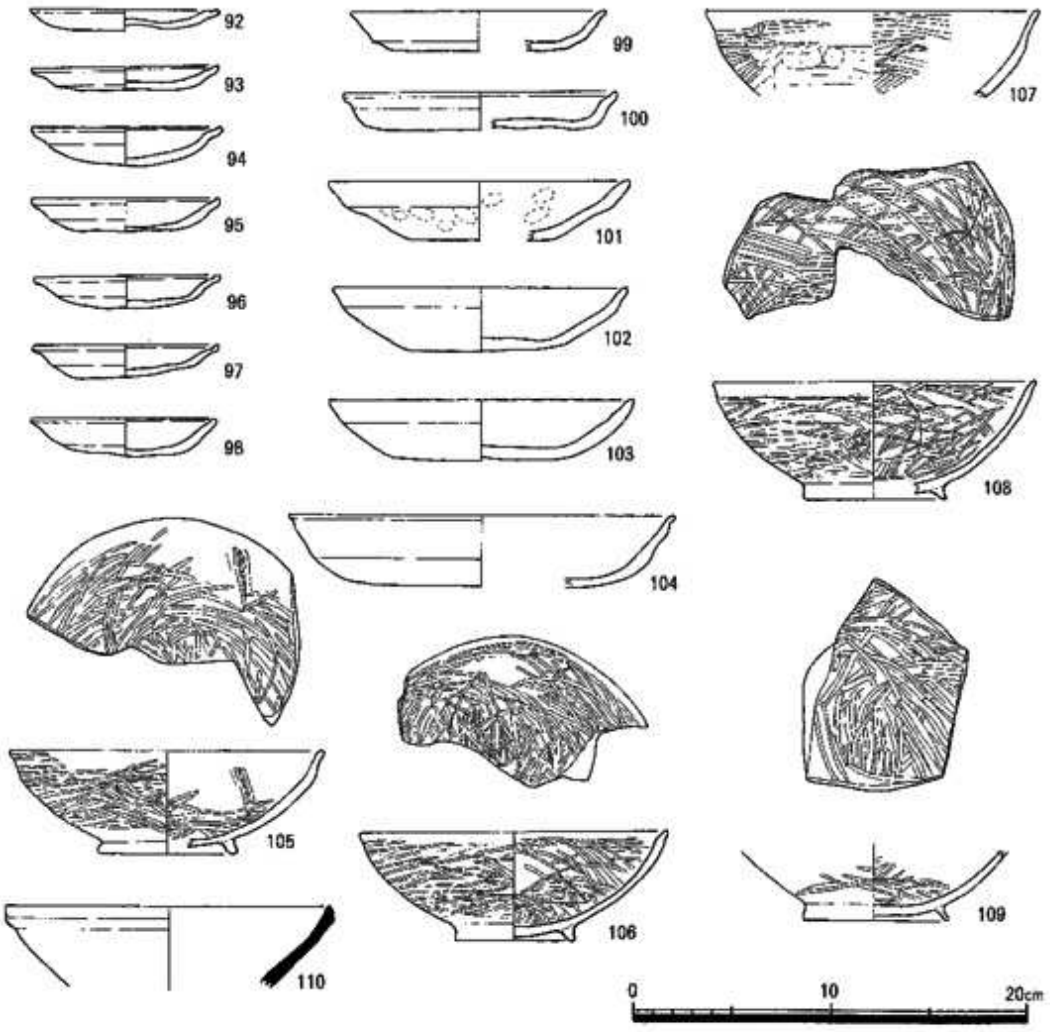
１枚作りで制作されたものと考えられる。これらの瓦は、調査地の西部に存在していた西郡廃寺に関連したものである。

ＳＥ－４

１・２Ｅ地区で検出した。円形を呈する素掘り井戸で、上部はＳＤ－７に切られている。径1.95～2.05m、深さ0.9mを測る。掘形の断面形状は逆台形で、北側の中位に三日月状のテラスを有する。埋土は最上層がＳＤ－７の埋土である以外は、断面形状に沿った普遍的な堆積状況が認められ、全体で６層に分層できた。遺物は第２層～４層から出土したが、量的には黒灰色の色調で灰を多量に含む第２層を中心に出土している。遺物は、土師器小皿・中皿、瓦器椀、白磁碗等が出土した。遺物の特徴から井戸の廃絶時期

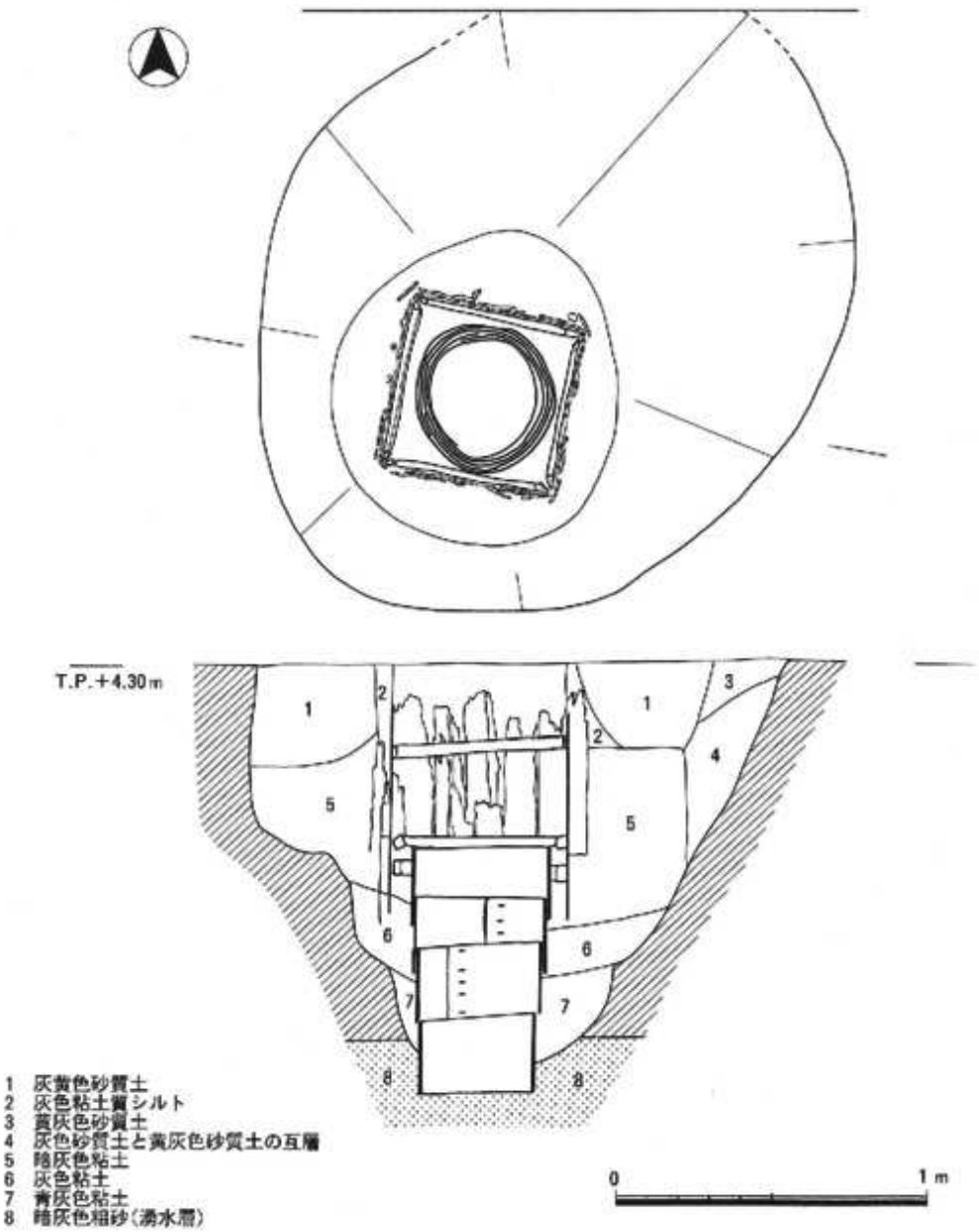


第21図　ＳＥ－４平断面図



第22図　ＳＥ－４出土遺物実測図

は11世紀末に比定できる。そのうち、図化し得たものは土師器小皿７点（92～98）・中皿６点（99～104）、瓦器椀５点（105～109）、白磁碗１点（110）の18点である。土師器小皿は（93・97）を除いて完形品である。いわゆる「て」の字状口縁を呈する（92～97）と口縁部が小さく外反する（98）がある。口径9.3～9.5cm、器高1.1～2.0cmを測る。胎土は精良で、色調は灰白色～淡橙色を呈する。中皿は水平な底部から体部が小さく伸びる（99・100）とやや深い体部を有し坏状の形態をもつ（101～104）がある。前者が口径13.0～13.6cm、器高1.8～2.0cm、後者が口径14.8～15.5cm、器高3.0～3.3cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は（100）が灰白色の他はにぶい黄橙色である。瓦器椀は５点図化したが、その他の資料も全て和泉型であった。瓦器椀は深めの体部に「ハ」の字形に開く重厚感のある高台が付くもので口径15.6～17.0cm、器高5.3～6.0cm、高台径6.0～7.3cmを測る。内面のヘラミガキは分化せず見込みから体部に向かっ

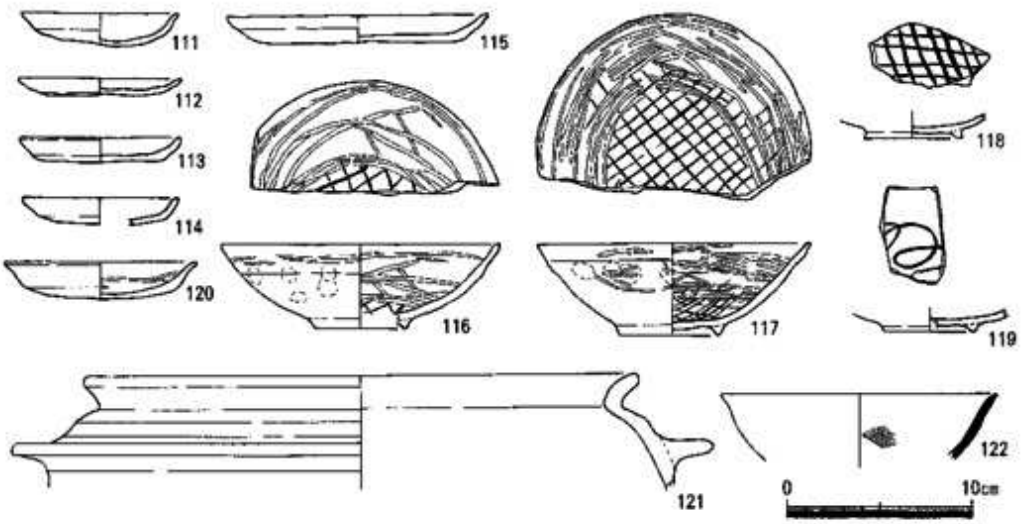


第23図　ＳＥ－５平断面図

て乱方向に施されている。外面は１次調整のヘラケズリの後分割性を意識したヘラミガキが施されている。概ね炭素付着は良好で黒灰色を呈するが（109）は炭素付着が認められず淡赤灰色を呈する。八尾市域編年のⅠ－２期（11世紀末）にあたる。（110）は玉縁口縁を有する白磁碗である。胎土中に黒い細粒が含まれており、釉色は灰白色である。横田・森田氏分類の白磁碗Ⅳ類－１にあたり、帰属時期は11世紀中～12世紀初頭とされている。

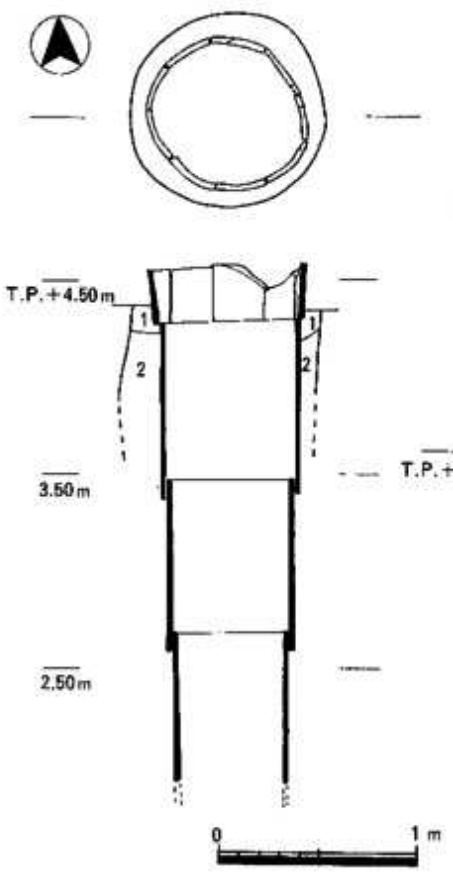
SE－5

1D・E地区で検出した。北側の一部が調査区外にでるが、ほぼ全容を知ることができた。南北方向に長い楕円形を呈するもので、検出部で東西幅1.8m、南北幅2.05m、深さ1.38mを測る。井戸側は曲物4段とその上部に一辺0.6mを測る縦板組隅柱横桟どめの方形木枠で構成されている。曲物井戸側は最下段が径36cm、高さ25cm・2段目が39cm、高さ24cm・3段目が径42cm、高さ25cm・最上段が径44cm、高さ24cmを測る。縦板組隅柱横桟どめの木枠は板材を縦方向に組み隅柱と横桟で保持する構造を有する。板材は、幅10cm前後、厚さ5～10cm、長さ60cmを測る薄い板材で、隅柱と横桟で固定された木枠に沿って、2～3枚を重ねて縦位に立てている。方形に組まれた横桟は三段遺存していた。最下段を構成する横桟の板材は、長さ56cm、幅2cm、厚さ3cmを測るもので、横桟組は目違い枘で組んでいる。二段目三段目の横桟については、二段目の横桟付近で竹が遺存していたことから、木枠の四隅に立てられた隅柱には竹が使用されており、これに相欠き仕口を施した横桟を組み込む構造であったことが推定できる。横桟の板材の数値は、二段目が幅3cm、厚さ3cm、長さ56cm・三段目が幅3cm、厚さ2cm、長さ56cmを測る。なお、木枠の外側に沿って径3cm程度を測る竹が数本打ち込まれており、木枠の補強を果たしたものと考えられる。掘形内の埋土は、7層から成るもので最下部は湧水層である第8層暗灰色粗砂に達している。井戸側内の埋土は、上部の方形木枠部分が黒灰色の灰層で、以下曲物井戸側部分が黒灰色粘土層である。遺物は第1層～第5層および井戸側内から土師器小皿・中皿・土釜、瓦器椀、青磁碗、屋瓦等が出土している。出土した遺物の特徴から井戸の廃絶時期は12世紀末に比定される。そのうち、図化し得たものは土師器小皿4点（111～114）・中皿1点（115）、瓦器椀4点（116～119）・小皿1点（120）、土師器土釜1点（121）、白磁碗1点

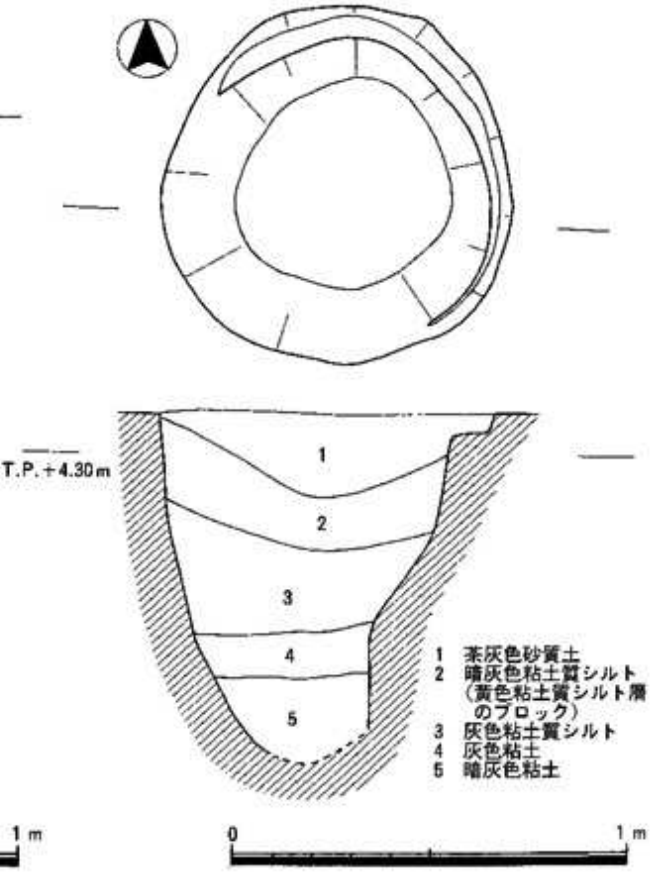


第24図　SE－5出土遺物実測図

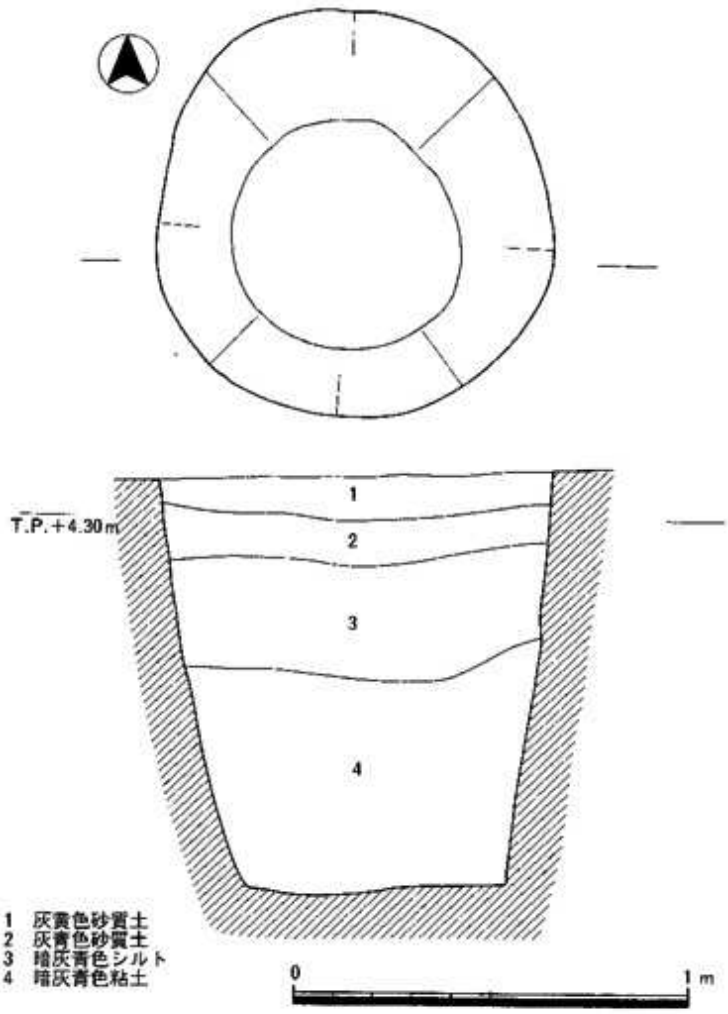
(122)、の12点である。土師器小皿は丸味を持つ底部から口縁部が外反して伸びる（111）と偏平な底部から口縁部が斜上方に短く立ち上がる（112～114）がある。（115）は土師器中皿で口径14.2cm、器高1.4cmを測る。胎土は精良で色調は小皿（111～114）が灰黄褐色で中皿は（115）が浅黄橙色である。瓦器椀は4点図化した。そのうちほぼ全容が復元できる（116・117）ついては（116）が口径15.0cm、器高4.6cm、高台高0.5cmを測る。（117）が口径15.0cm、器高4.6cm、高台高0.6cmを測る。（117）が古い様相を示すもので、八尾市域編年のⅡ－3期（12世紀後半）、（116）はⅡ－4期（12世紀末）にあたる。（118・119）は瓦器椀底部が遺存しており、見込みのヘラミガキは（118）が格子状、（119）が連続輪状文である。（120）は瓦器小皿で、体部内面にヘラミガキ暗文が施されている。（121）は土師器土釜で森嶋氏分類のA型式に分類されてもので13世紀初頭に位置づけられている。胎土中に小粒の長石・チャートが多量に含まれており、色調は灰白色を呈する。（122）は白磁椀で体部内面に櫛目による有文がある。横田・森田氏分類の白磁椀Ⅵ類－1にあたり帰属時期は11世紀中葉から12世紀初頭とされている。



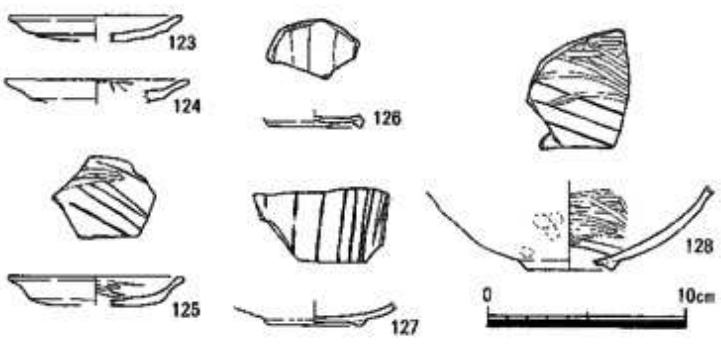
第25図　ＳＥ－７平断面図



第26図　ＳＥ－８平断面図



第27図　ＳＥ－９平断面図



第28図　ＳＥ－８（123～126）、ＳＥ－９（127・128）出土遺物実測図

ＳＥ－６

１Ｄ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅0.85m、南北幅0.95m、深さ0.8mを測る。遺物は出土していない。

ＳＥ－７

２Ｄ地区で検出した。ＳＩ－１の一部を切っている。円形を呈し、検出面で径0.95m、深さ2.6mを測る。井戸側は樽状の木枠三段とその上部に設置された瓦質の井戸側で構成されている。木枠の三段は最下部が径0.57m、長さ0.8m・二段目が径0.63m、長さ0.9m・最上段が径0.7m、長さ0.9mで上部に行くにつれて径の大きいものを積み重ねている。井戸側用瓦は（幅25cm、高さ30cm、厚さ３cm）を測るもので、これを一段に９枚使用して円形に積むもので、径0.8mを測る。なお、井戸側内からも井戸側用瓦が出土していることから、さらに上部に井戸側が存在していたことは確実で

ある。出土遺物は、近世末期に比定される唐津焼碗・伊万里焼碗・平瓦等が少量出土している。

SE－8

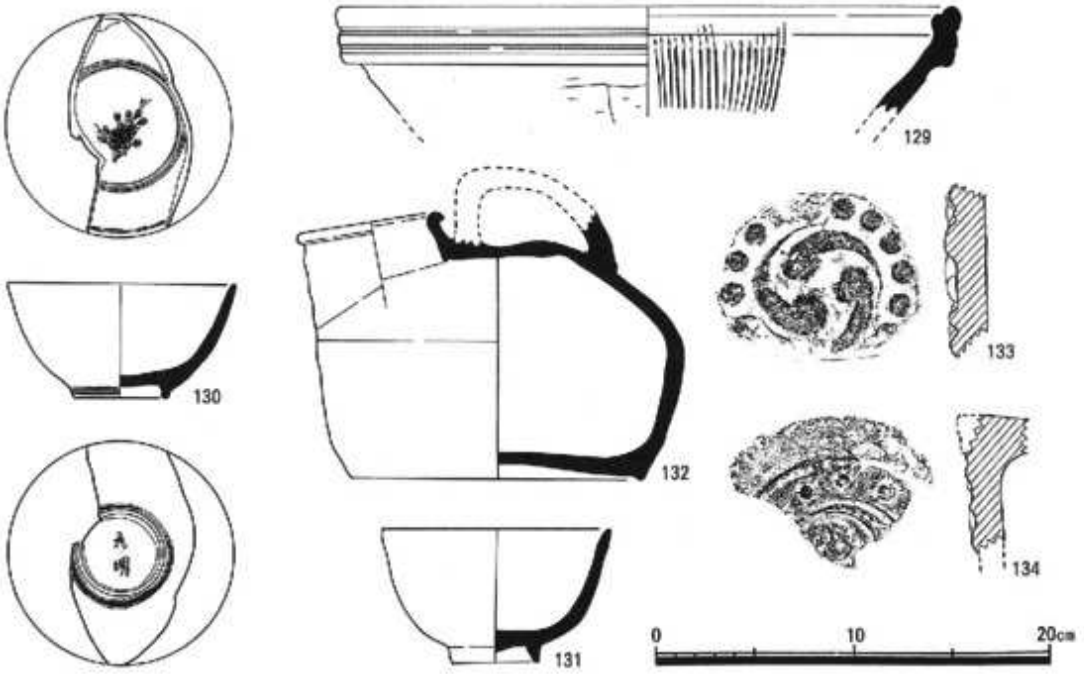
2C・D地区で検出した。SI－1の一部を切っている。円形を呈する素掘り井戸で径0.85m、深さ0.9mを測る。埋土は掘形の形状に沿って堆積しており、5層の分層が可能である。遺物は各層から土師器小皿、瓦器椀・小皿の小片が極少量出土しており、概ね13世紀中葉に比定されよう。そのうち、図化し得たものは土師器小皿1点（123）、瓦器小皿2点（124・125）・瓦器椀1点（126）の4点である。土師器小皿（123）は口縁部外面が強いヨコナデにより2段に屈曲している。胎土は精良で色調はにぶい黄橙色を呈する。瓦器小皿は（124・125）は口縁部が強いヨコナデにより外反している。（125）の見込みには平行線文が施文されている。（126）は高台径5.0cm、高台高0.4cmを測るもので、高台の簡略化と低平化が進んでいる。見込みのヘラミガキは施文の間隔が広い平行線状文である。

SE－9

2B地区で検出した。SD－1・SD－9の一部を切っている。円形を呈する素掘りの井戸で、径0.95～1.05m、深さ1.15mを測る。埋土は掘形の形状に沿って4層がほぼ水平に堆積している。遺物は、13世紀前葉に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀の小片が極少量出土している。そのうち、図化し得たものは瓦器椀2点（127・128）である。高台は偏平で断面形状が台形を呈する（127）と高台高が低く断面三角形を呈する（128）がある。見込みのヘラミガキは（126）と同様施文間隔が広い平行線状文である。

SE－10

1・2B地区で検出した。北端は近代の攪乱で切られ南端はSD－11の一部を切っている。円形を呈する素掘り井戸で、検出部で幅1.6m、深さ1.0mを測る。埋土は土層観察用畔が湧水により崩壊したため確認できなかった。遺物は、近世末期に比定される肥前磁器染付碗・備前焼摺鉢・尿瓶、屋瓦、石臼等で、出土量はコンテナ1箱程度である。そのうち、図化し得たものは備前焼摺鉢1点（129）、肥前系磁器碗2点（130・131）、尿瓶1点（132）、軒丸瓦2点（133・134）の6点である。（129）は備前焼摺鉢で復元口径31.6cmを測る。（130）は肥前系磁器染付碗である。内面には口縁部に1本の圏線と見込みに2本の圏線内に花文が呉須により描かれている。外面には体部と高台部の境に2本の圏線と底部裏面に「大明」銘が呉須で描かれている。（132）は尿瓶で把手を欠く以外は完存している。底は上げ底で、底部裏面に重ね焼きの際の離れ砂が円形に巡っている。釉色は黒褐色で光沢があり、裏面は釉がかき取られた痕跡がハケ状に残っている。瀬戸美濃焼系と推定される。18世紀後半以降に比定される。（133・134）は巴文の軒丸瓦で、前者が左巴、後者が右巴である。



第29図　ＳＥ－10出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ－２

１Ｆ・Ｇ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、ＳＤ－５・ＳＰ－19・ＳＰ－16を切っている。検出長6.75m、幅0.2～0.65m、深さ0.08～0.22mを測る。埋土は淡灰色砂質土の単一層である。遺物は弥生時代後期の鉢および古墳時代の須恵器の小破片等が混在して出土している。

ＳＤ－３

２Ｆ地区で検出した。ＳＤ－２の南側に平行して伸びるもので、西端はＳＤ－５に切られ東でＳＰ－20を切っている。検出長1.7m、幅0.35m、深さ0.1mを測る。埋土は茶灰色砂質土の単一層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ－４

２Ｆ・Ｇ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、西部でＳＥ－２・ＳＤ－５に切られている。検出長6.9m、幅0.3m、深さ0.05～0.12mを測る。埋土は茶灰色砂質土の単一層である。遺物は弥生土器および須恵器の小片が少量出土している。

ＳＤ－５

１～３Ｆ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、ＳＥ－２・ＳＤ－２に切られ、ＳＤ－４・ＳＰ－27を切っている。検出長10.2m、幅0.3～0.6m、深さ0.07～0.1mを測る。遺物は弥

生時代後期から鎌倉時代に比定される土器の小片が極少量出土している。

SD－6

2E地区で検出した。上面の形状がL字状を呈するもので、幅0.4～0.6m、深さ0.04～0.08mを測る。埋土は茶灰色砂質土の単一層である。遺物は弥生時代後期から鎌倉時代に比定される土器の小片が極少量出土している。

SD－7

1D・E地区で検出した。東西方向に伸びるもので、SE－4を切っている。検出長6.25m、幅0.5m、深さ0.07mを測る。埋土は淡灰色砂質土の単一層である。遺物は土師器・須恵器の小片が少量出土した。

SD－8

2B・C地区で検出した。東西方向に伸びるもので東端はSP－75に切られ、逆にSD－9～11を切っている。検出長5.3m、幅0.3～0.85m、深さ0.01～0.06mを測る。埋土は茶灰色砂質土の単一層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器椀の小片の他、投弾1個が出土している。

SD－9

1・3B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、近代の撹乱・SE－9・SD－8に一部切られている。検出長6.8m、幅0.5～0.6m、深さ0.03～0.08mを測る。埋土は茶灰砂質土の単一層である。遺物は土師器甕・須恵器杯蓋の小片が少量出土した。

SD－10

2B地区で検出した。SD－9の西側に平行して伸びるもので、SD－8に一部切られている。検出長3.45m、幅0.3～0.45m、深さ0.1mを測る。埋土は茶灰砂質土の単一層である。遺物は土師器甕・須恵器の小片が極少量出土した。

SD－11

1～3B地区で検出した。SD－10の西側に平行して伸びるもので、SE－10・SD－8に一部切られている。検出長5.85m、幅0.3～0.5m、深さ0.03～0.1mを測る。埋土は茶灰砂質土の単一層である。遺物は土師器・須恵器の小片が少量出土した。

小穴（SP）

小穴は第2調査面で82個（SP－2～SP－83）を検出した。調査区の東部と西部で密度が高く掘立柱建物を検出した位置と符合している。そのうち、掘立柱建物を構成する柱穴はSP－3～SP－7（SB－1）、SP－45～SP－52（SB－2）である。その他にも、SP－55のように柱根が遺存するものも認められたが建物を復元するに至らなかった。上面の形状では、円形・楕円・方形・不定形を呈するものに区別されるが、そのうち、円形と楕円形のものが大半を占めた。数値的には幅0.2～1.0m、深さ0.05～0.55mを測る。このうち、掘立柱建物を構

成する柱穴を除いて内部から遺物が出土した小穴は46個であるがいずれも小片で図化し得たものはない。

参考文献

- 橋田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』
- 森島康雄　1990　「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
- 原田昌則　1987　「Ⅱ 党振A遺跡（第１次調査）八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度」『(財)八尾市文化財調査研究会報告13』(財)八尾市文化財調査研究会報告13
- 森　隆　1990、1991「西日本の黒色土器生産（上）（中）（下）」『考古学研究』第37巻第２号・第３号・第４号

第２表　小穴一覧表

番号	地区	形状	規模（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備考
SP－1	3B	円形	45×45	10	弥生土器	
SP－2	1G	不明	－	37.9	須恵器	
SP－3	1G	楕円形	90×80	58.6	土師器　須恵器	SB－1
SP－4	1F・G	方形	100×100	53.3	弥生土器　土師器　須恵器	〃
SP－5	1F	楕円形	100×100	35.3	弥生土器　土師器　須恵器	〃
SP－6	1F	円形	50×50	37.5		〃
SP－7	1F	方形	35×35	24.8	弥生土器	〃
SP－8	1F・G	楕円形	35×20	16.7	－	
SP－9	1F	方形	35×30	37.1	土師器　須恵器	
SP－10	1F	不明		15.8	土師器　須恵器	
SP－11	1G	楕円形	30×60	13.5		
SP－12	1F・G	円形	39×38	10.5		
SP－13	1F	楕円形	47×50	31.6	土師器　須恵器	
SP－14	1F	楕円形	31×37	29.4	弥生土器　土師器	
SP－15	1F	円形	32×37	12.7	－	
SP－16	2G	不明	－	7.4	土師器　須恵器	
SP－17	2G	楕円形	25×29	11.5		
SP－18	2F・G	円形	35×30	5.7	－	
SP－19	1・2F	楕円形	28×25	28.1	土師器　須恵器	
SP－20	2F	楕円形	48×54	17.6	土師器　須恵器	
SP－21	2G	不明	－	21.1	土師器　須恵器　瓦器	
SP－22	2F	円形	25×30	11.2	土師器	
SP－23	2F	円形	27×30	9.7	－	
SP－24	2F	楕円形	45×65	37	弥生土器　土師器　須恵器	
SP－25	2F	楕円形	45×36	22.2	土師器	
SP－26	3F	不明	－	45.2	土師器　須恵器	
SP－27	1F	円形	53×55	26.2	土師器	
SP－28	1F	円形	32×34	16.7	土師器	
SP－29	2F	楕円形	32×48	11.8	土師器　須恵器	
SP－30	1E	円形	52×51	15.1		
SP－31	2E	楕円形	95×82	65.6	土師器　須恵器　瓦器	
SP－32	1E	円形	41×40	9.2	弥生土器	
SP－33	1E	不明		9.2	－	
SP－34	1D・E	円形	70×70	29.8	弥生土器　土師器　須恵器	
SP－35	2E	円形	20×20	11.2	土師器小皿	
SP－36	2E	方形	30×22	23.2	土師器小皿	

番号	地区	形状	規模（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備考
SP－37	2D・E	楕円形	25×25	13.9	土師器　土師器小皿	
SP－38	2E	円形	20×20	14.5	－	
SP－39	1D	不明		13	土師器　須恵器　土師器小皿	
SP－40	1D	不定形	23×20	8	－	
SP－41	1D	不明	－	28	－	
SP－42	1D	楕円形	35×45	46.8	土師器小皿	
SP－43	1D	楕円形	17×24	9.3		
SP－44	1C・D	不定形	90×95	18.3	土師器　須恵器　鳥歯	
SP－45	1C	楕円形	90×100	19.6	土師器　須恵器	SB－2
SP－46	1C	方形	85×64	32	土師器　須恵器　砥石	〃
SP－47	2C	楕円形	50×68	32.7		〃
SP－48	2C	円形	52×52	19.4		〃
SP－49	2C	方形	90×83	22.6	土師器	〃
SP－50	1C	楕円形	30×40	27.6	－	〃
SP－51	1C	楕円形	35×50	9.1	－	〃
SP－52	1C	楕円形	36×36	19.2	－	〃
SP－53	1C	楕円形	78×65	63	弥生土器　土師器　須恵器	
SP－54	1・2C	方形	36×50	40.4	土師器	
SP－55	2C	楕円形	45×50	38.9	土師器　須恵器	
SP－56	1・2C	円形	47×45	49.6	弥生土器　土師器	
SP－57	1C	不定形	70×62	58.2	－	
SP－58	1C	楕円形	55×40	10.1		
SP－59	1C	円形	55×55	48.5		
SP－60	2C	楕円形	80×65	30.6		
SP－61	1C	楕円形	52×67	27.7	－	
SP－62	2C	円形	51×51	7.8	－	
SP－63	2C	楕円形	30×43	13.1	－	
SP－64	1C	楕円形	50×60	7.9		
SP－65	1B・C	不定形	80×60	25.6	土師器　須恵器	
SP－66	3D	円形	24×23	3.9	－	
SP－67	3D	円形	16×16	2	－	
SP－68	3D	不明	－	2.5		
SP－69	2D	円形	30×35	3.5	土師器	
SP－70	2D	不定形	45×35	14.3	－	
SP－71	2C・D	楕円形	72×81	60.3	－	
SP－72	3C	円形	25×29	3.5	－	
SP－73	2C	不定形	40×57	41.1		
SP－74	2C	円形	26×28	39.1	－	
SP－75	2C	楕円形	135×97	7.3	須恵器　瓦器　土師器小皿	
SP－76	2・3C	楕円形	35×87	41.7	土師器　須恵器	
SP－77	3C	方形	80×50	30	土師器　須恵器　土師器小皿	
SP－78	3C	円形	37×37	11.6	土師器	
SP－79	3B	方形	40×45	18.1	土師器　須恵器	
SP－80	1B・C	方形	80×65	18.9	土師器　須恵器	
SP－81	2B	円形	23×22	8.5		
SP－82	2B	不定形	45×56	17.1	須恵器　土師器小皿	
SP－83	2・3A	不明	－	26.8	－	

3）包含層出土遺物

第5層～第7層を中心にコンテナ25箱程度が出土しており全体に遺物の密集度は高い。遺物の時期別の比率では、弥生時代後期後半(第Ⅴ様式)が4割、古墳時代前期（布留式古相）が2割、平安時代末期が3割、その他が1割を占めている。なかでも、古墳時代前期（布留式古相）の遺物については、遺構が検出されていないものの、完形品を含む比較的良好な遺物が出土している。これらの資料は第5層および平安時代後期の遺構を検出した第2調査面のベース面である第6層中から明瞭な掘形が認められないものの一部集中して出土しており、近隣に当該期の遺構が存在していた可能性が高い。なお、古式土師器の形式分類および土器編年については、当調査研究会報告37「Ⅱ久宝寺遺跡（第1次調査）」に準ずる。

第7層出土遺物（135～148）

・弥生土器

図化したものは12点（135～147）である。壺は5点図化した。（135）は複合口縁壺で復元口径16.0cmを測る。色調は灰白色を呈するもので非生駒西麓産である。（136）は複合口縁壺で、一部を欠損するが全容を知ることができる。口縁部側面に2個一対からなる円形竹管押圧文が1箇所に認められる。胎土中に石英・長石・黒雲母・角閃石を多量に含むもので、色調は赤褐色を呈する。（137）は大型の複合口縁壺である。口縁部と頸部の境および口縁端部に凹線文を施文した後、円形浮文が等間隔に施されている。胎土はやや粗く5㎜程度の大粒の砂粒が含まれている。（138）は体部と頸部の境に突帯が巡る大型の複合口縁壺である。口径22.4cm、頸部径13.6cmを測る。口縁端部は刻目文と円形浮文、突帯上および突帯上下にも刻目文が施文されている。（139）は口頸部が直線的に伸びる細頸壺で、口頸部は完存している。全体に丁寧な作りで、胎土は精良である。生駒西麓産である。甕は体部上位に最大幅を持つもので、中型の（140・142）と大型の（141）がある。口縁端部が上方につまみ上げられ幅広の面を持つ（140）とやや内傾し小さな面を持つ（141・142）がある。底部は突出しない平底の（140）とやや突出したくぼみ底を呈する（141）がある。いずれも生駒西麓産で、色調は褐灰色を呈する。高杯は2点（143・144）図化した。ともに中型の高杯である。柱状部は中空でスカシ孔は（143）が4孔、（144）が3孔である。ともに非生駒西麓産で色調は（143）が淡褐色、（144）が灰白色を呈する。（145）は指頭圧痕が遺存する鉢である。外面に釉の付着が認められる。胎土は粗く大粒の長石・チャート粒が散見される。色調は淡褐色である。（146・147）はともに大型の鉢である。口縁部が上方につまみ上げられ幅広の面をもつ（146）と口縁部が屈曲し、端部が丸く終る（147）がある。ともに、生駒西麓産で（146）が赤褐色、（147）が褐灰色である。（148）は逆円錐状の体部を有する有孔鉢である。孔は内面側から外側に向かって径0.8cmを測る孔が焼成前に穿たれている。

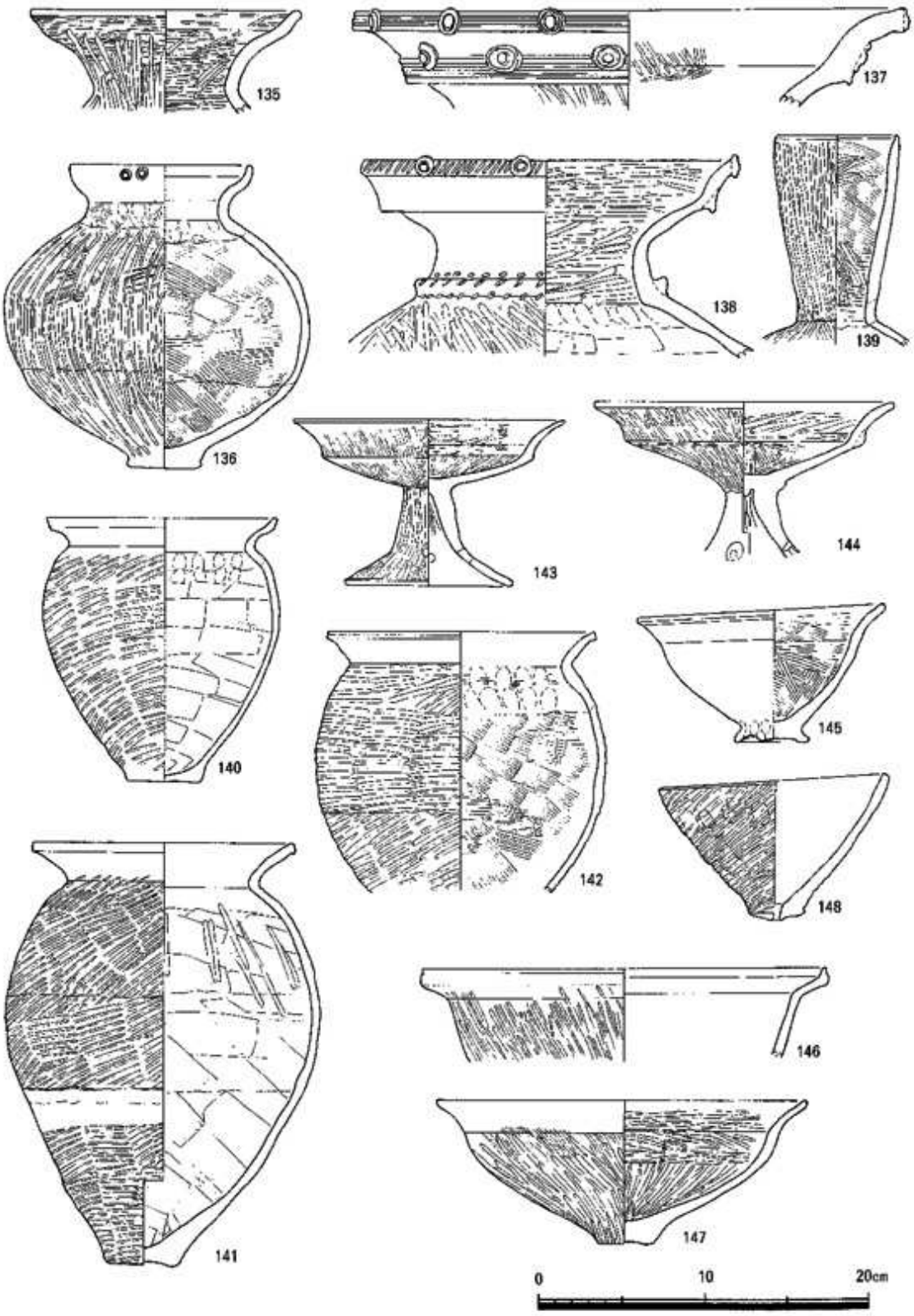
第6層出土遺物（149～177）

・弥生土器

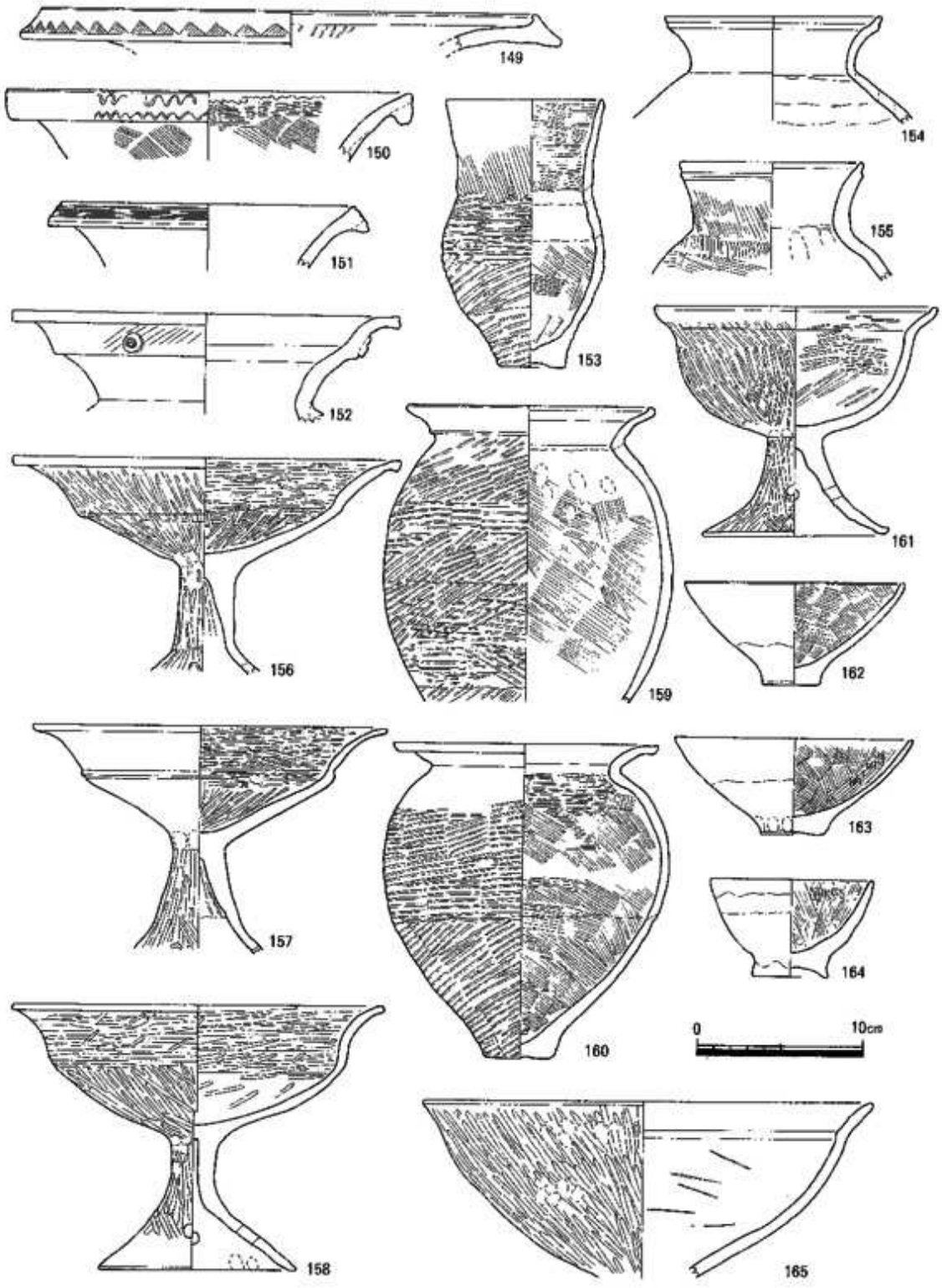
17点（149～165）図化した。（149）は大きく屈曲外反する口縁部が上部に肥厚し、内傾する面を有する壺ないしは器台と考えられるもので、端面に鋸歯文が施文されている。色調は淡褐色を呈する。吉備地方からの搬入品と推定される。（150）は口縁端部が下方に垂下し、幅広の面を有する広口長頸壺である。口縁部内面および端面に雑な波状文が施文されている。生駒西麓産で、色調は赤褐色を呈する。（151）は断面端部が肥厚し、内傾する面をもつ広口長頸壺で端面に凹線文が施文されている。生駒西麓産で、色調は褐灰色である。（152）は複合口縁壺である。体部と頸部の境に突帯を貼付けている。生駒西麓産で、色調は赤褐色である。（153）は小型の長頸壺で口縁部の一部を欠くがほぼ全容を知ることができた。底部はやや突出したくぼみ底である。生駒西麓産である。色調は褐灰色である。（154）は口縁端部に幅広の面を持つ広口壺である。胎土中に長石・チャートが多量に含まれている。色調は灰白色である。（155）は短頸壺で、口縁端部は下半は強いヨコナデのため器壁幅を減じている。高杯（156～158）はともに中空の柱状部にやや深めの杯部が付くものである。3点ともに精良な粘土が使用されており、色調は（156・157）が淡橙色、（158）は白灰色を呈する。（158）は杯部内面に赤色顔料が付着している。（158）は搬入品である。甕は2点（159・160）図化した。（160）はほぼ完形品で口径16.0cm、器高19.2cm、底径3.8cmを測る。長胴形で体部中位に最大径をもつ（159）と体部上位に最大径をもつ（160）がある。（159）が4分割（160）が3分割である。ともに生駒西麓産である。（161）は深めで椀形を呈する鉢部に中空でやや高い脚部が付く台付き鉢である。生駒西麓産で、色調は褐灰色を呈する。（162・163）は小さく突出した平底から体部が斜上方向に伸びる鉢で、遺存率は1/2程度である。（162）は口径13.2cm、器高6.4cm、底径3.4cmを測る。（163）は口径14.4cm、器高5.9cm、底径3.8cmを測る。（163）の底部は突出したくぼみ底である。2点ともに生駒西麓産である。（164）はあげ底を有する小型の鉢で、口径9.8cm、器高6.0cm、底径4.6cmを測る。生駒西麓産である。（165）は深い椀形を呈する大型の鉢である。底部を欠損している。

・土師器

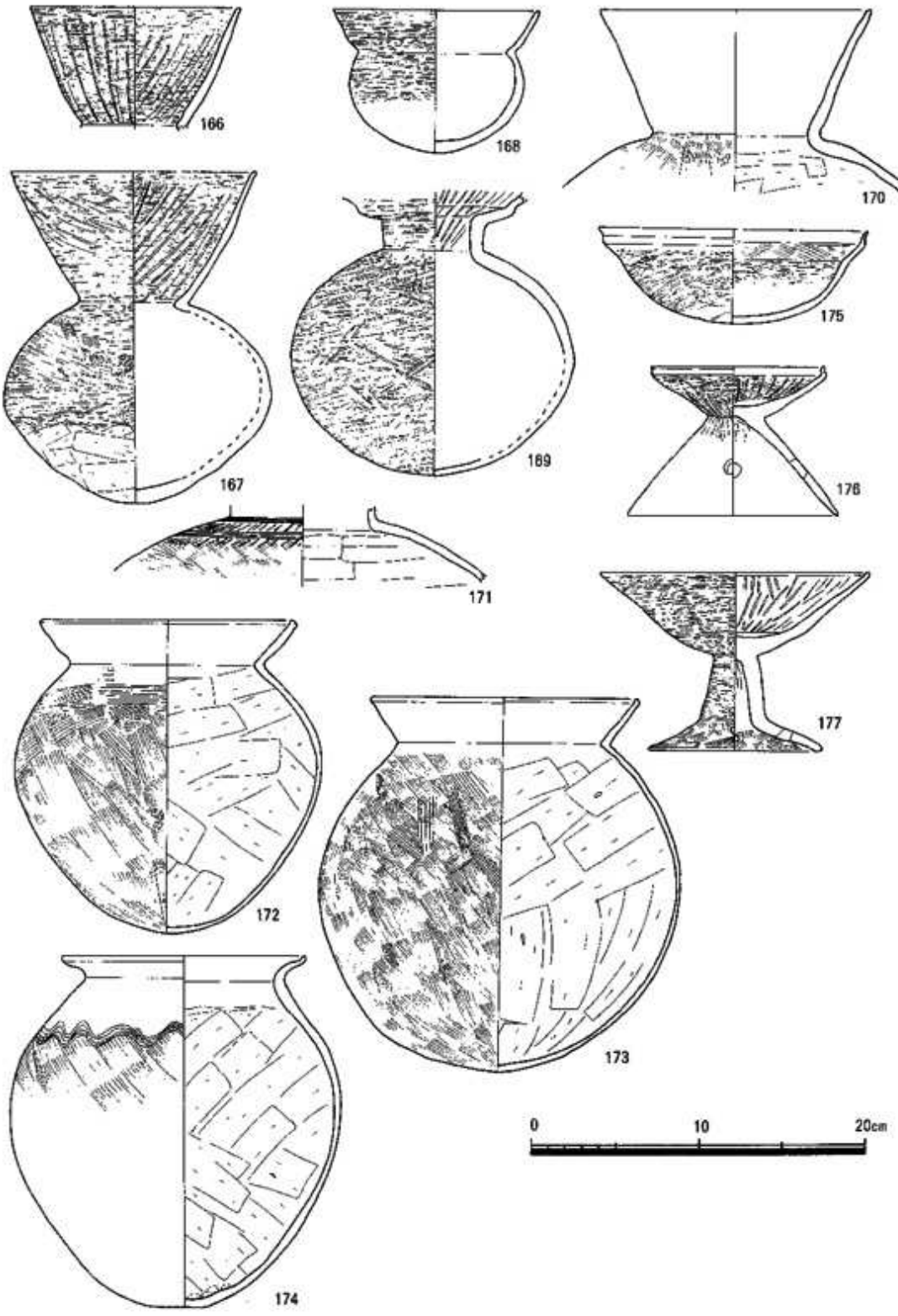
12点（166～177）図化した。古墳時代前期（布留Ⅰ期）に比定される土器群である。（166・167）は直口壺A_1である。（167）はほぼ完形に復元できるもので、口径14.6cm、器高20.5cm、頸部高7.9cm、体部最大幅16.1cmを測る。体部は偏球形で底部は尖り底気味である。2点ともに胎土は精良で、色調は淡赤橙色を呈する。（168）は口径が体部最大径を凌ぐ小型壺B_2である。口径12.4cm、器高8.8cmを測る。胎土および色調は（166・167）と同様である。（169）は複合口縁壺B_1にあたるもので、口縁部を欠く以外は完存している。球形の体部にほぼ直上に



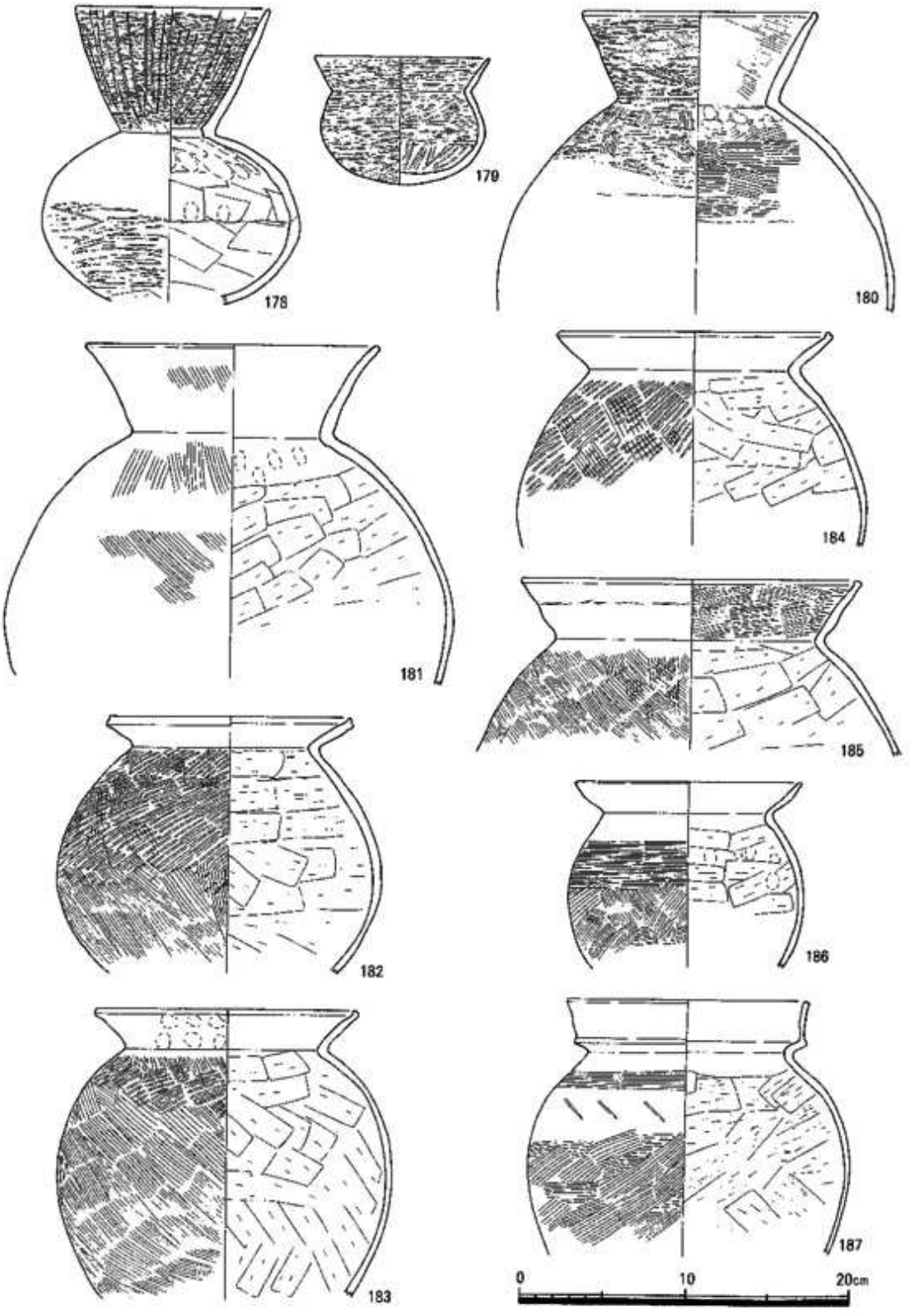
第30図　第７層出土遺物実測図



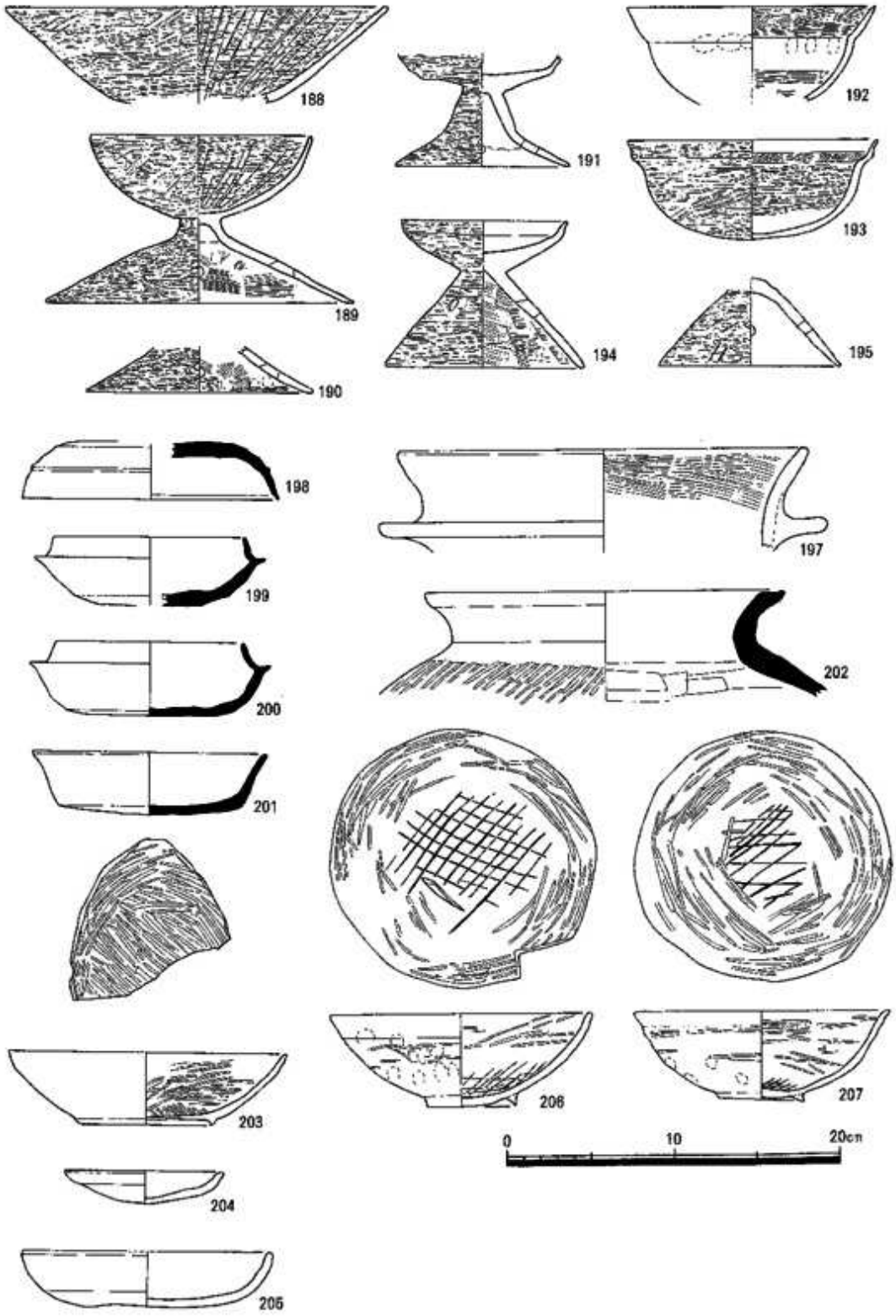
第31図　第6層出土遺物実測図－1



第32図　第６層出土遺物実測図－２



第33図　第5層出土遺物実測図－1



第34図　第５層出土遺物実測図－２

短く伸びる頸部が付く。精製品で調整等も全体に丁寧である。(170) は大型直口壺Aの体部上半から口縁部に至るもので、遺存率は1/6程度である。復元口径16.3cmを測る。胎土は粗く2mm程度の長石粒が多く含まれている。色調は淡橙色である。(171) はおそらく複合口縁壺と推定されるもので、体部上半に直線文と列点文が施文されている。(172・173) は庄内式甕の形態属性を持ち、体部外面にハケナデによる調整が施されるもので、布留式影響の庄内式甕D類に分類される。(172) は口径15.0cm、器高19.1cm。(173) が口径15.8cm、器高22.7cmを測る。(172) が搬入品、(173) が生駒西麓産である。(174) は1/2以上が遺存する甕で口径14.6cm、器高21.6cm、体部最大径19.9cmを測る。平底の底部から体部が内湾して伸びるもので、体部最大径は体部上半にある。口頸部は屈曲外反した後、口縁端部付近で斜上方につまみ上げられ面を有する。内底面に指頭圧痕が認められるほか、体部外面上位に波状文が施文されている。胎土中に1～2mm大の砂粒が散見されるもので、色調は灰白色である。山陰地方からの搬入品と推定されるもので、甕Kに分類される。(175) は小型鉢H_2で完形であるが、土圧のため一部歪んだ部分がある。(176) は小型器台B_3で完形品である。杯部径10.4cm、器高9.1cm、裾部径12.8cmを測る。スカシ孔は径1.2cmを測るもので、3個穿たれている。(175) 同様、精製品で色調は淡赤橙色を呈する。(177) は小型高杯で高杯A_4に分類される。杯部径16.2cm、器高10.9cm、裾部径10.5cmを測る。スカシ孔は4孔穿たれている。精製品で色調は淡赤橙色を呈する。

第5層出土遺物 (178～207)

・土師器

土師器は19点 (178～195・197) 図化した。そのうち、(178～195) が古墳時代前期、(197) が古墳時代後期に比定される。(178) は球形の体部から直口の口縁部が伸びる直口壺A_1である。口径11.6cm、現存高18.2cm、体部最大径11.6cmを測る。胎土は1mm大の砂粒が散見される程度の精良なもので、色調は赤橙色を呈する。(179) は小型壺B_2で完形品である。口径10.7cm、器高8.0cm、体部最大径10.0cmを測る。精製品で色調は赤橙色を呈する。(180) は体部に比して短めの口頸部が付く短頸直口壺Aである。胎土中に0.5mm大の長石・チャート粒が多量に含まれているもので、色調は灰白色を呈する。(181) は口頸部が外反気味に伸びる大型直口壺Aである。胎土中にチャート粒が多く含まれているもので、色調は灰白色を呈する。甕は6点 (182～187) を図化した。(182～184) が河内型庄内式甕B_3にあたる。(185) はやや大型の甕で、体部外面全体ににハケナデ調整を行うもので、布留式影響の庄内式甕である甕Dに分類される。生駒西麓産である。(186) は布留式傾向甕とされる甕Eに分類される。肩部に横方向のハケが認められる。灰白色の色調である。搬入品である。(187) は山陰系甕Kに分類される。(186) と同様、肩部に横方向のハケが認められる。灰白色の色調である。山陰地方からの搬入品である。(188) は高杯A_4の杯部である。胎土は精良で、色調は淡赤橙である。(189) は椀

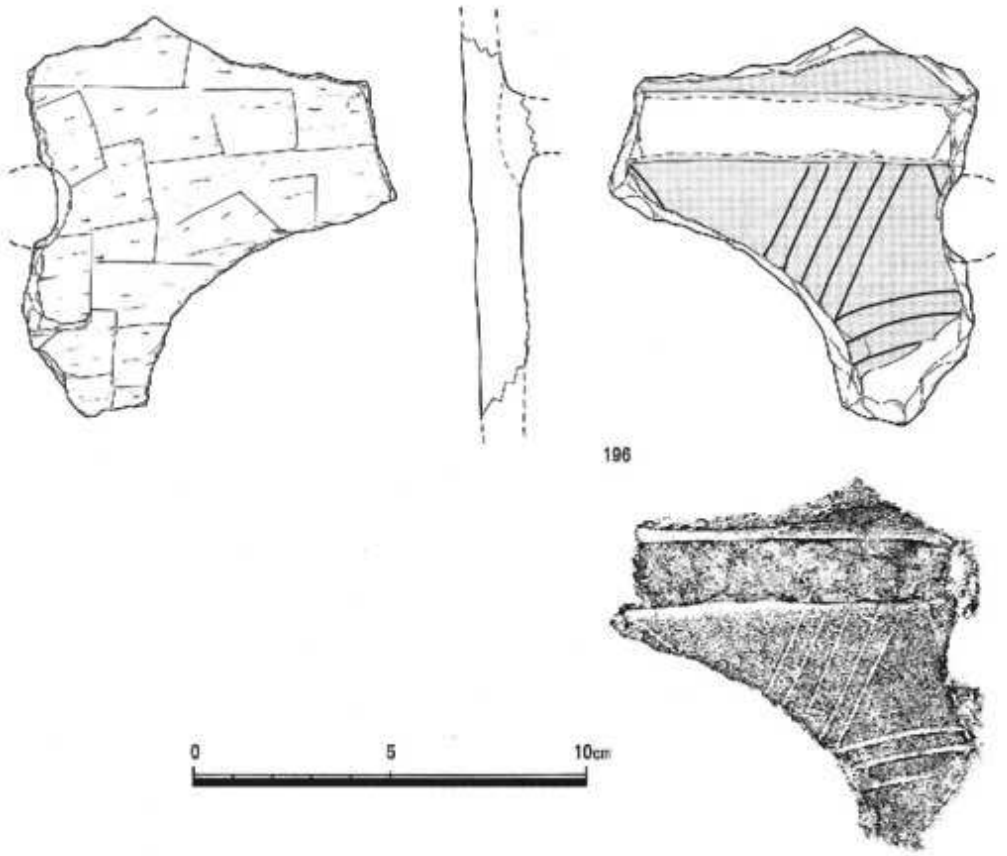
形の杯部を有する高杯C_2である。スカシ孔は4個である。精製品で色調は淡赤橙色である。（190）は裾部の資料で、胎土・色調は（189）と同様である。（191）は小型高杯である。裾部径10.4cm、脚部高5.0cmを測る。精製品で、色調は淡赤橙色である。（192）は小型鉢H_1に分類される。全体にやや雑な作りで、体部上半から口縁部外面にかけて指頭圧痕が遺存している。胎土は精良で、色調は褐灰色である。（193）は小型の鉢で鉢H_2に分類される。胎土中に微細な砂粒を多量に含むものである。色調は赤橙色を呈する。（194・195）は小型器台B_3に分類される。（195）は脚部のみの資料である。（194）は口径9.9cm、器高9.0cm、裾部径11.8cm。（195）が脚部高4.6cm、裾部径11.0cmを測る。スカシ孔は（194）が3個、（195）が4個である。ともに精製品で淡赤橙色を呈する。（197）は羽釜で、復元口径24.3cmを測る。

・器台形土器

（196）は特殊器台ないしは特殊器台形埴輪の一部と考えられる小片で、残存部分で上下10cm・左右9cmを測る。タガは基底部から0.5cmを残して欠損しており、幅は基部で1.9cm、欠損部先端で1.5cmを測る。タガを境として上部が内傾気味に伸びるもので、器壁幅も下部に比してやや減じる傾向がみられる。筒部の復原径は42cm程度が推定される。残存部分の文様構成は、タガを上にした場合、横方向にわずかに弧線を描く3本を1単位とする条線文の左側に、5本を1単位とする右上りの条線文が配されている。さらに、右端には円形ないしは巴形であったと推定される透し孔があり、この透し孔の左上部分に左上りの1条の直線文があるほか、左端上部付近にも左上りの条線の一部が遺存している。これらの複数斜線文の配置で構成される文様帯が想定される。外面に赤色顔料が塗布されており、特にタガより上部の間帯部分の残りがよい。内面は横方向のヘラケズリが行われている。褐色系の色調で、胎土中には小粒の角閃石が多く含まれている。なお、奥田尚氏による胎土分析の結果では、吉備地方の足守川流域産とする結果が得られている。文様構成において複数斜線文を多用する点で、吉備地方の特殊器台の中でも最も新しい時期に比定される都月型と施文傾向の一部に類似性が認められるものの、巴形透し孔の設置場所や、巴形透し孔を取り巻く厳手文が欠損している点において、これまでに分類されてきた文様構成と合致するものはない。以上のように、文様構図においては特殊器台のなかでも新しい要素を呈しているものの、同様の文様構成を持つ例が無く不確定要素が多く、現時点では特殊器台か特殊器台形埴輪かを限定するに至っていない。

・須恵器

須恵器は5点（198～202）図化した。（198）が杯蓋、（199～201）が杯身で3点ともに¼程度が遺存している。田辺氏編年のTK10型式に対比されるもので古墳時代後期前半に比定される。（201）はほぼ水平な底部から体部が外反して伸びる杯身である。奈良時代に比定される。（202）は甕で体部内面にタタキ調整が認められないもので、中世時期の所産と考えられる。



第35図　第5層出土器台形土器実測図

・黒色土器

（203）は黒色土器A類の椀である。口径に比して体部がやや偏平な器形である。高台は断面三角形で高台高は低い。口径16.8cm、器高4.4cm、底径7.9cmを測る。胎土は精良で、色調は内面および口縁部外面以外は淡赤橙色である。10世紀前半の所産と考えられる。

・土師器皿

（204）は土師器小皿で、口径9.4cm、器高2.0cmを測る。胎土は精良で色調は淡橙色である。（205）は土師器中皿で復元口径14.8cm、器高3.4cmを測る。胎土は精良で、色調は赤橙色を呈する。

・瓦器椀

（206・207）は瓦器椀でともに完形である。高台は断面三角形の貼付け高台である。ともに見込みには斜格子文が施文されている。12世紀後半の所産と考えられる。

第4節　出土遺物観察表

・礫径　粒径　L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量…◎多量 ○多い △少ない ▲極少　赤赤…赤色酸化土　片…結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径 / 器高 / 底径 / 残存率	製作・手法 外面 / 内面	色調 外面 / 内面	胎土 質	長石	石英	雲母	赤赤	その他	焼成	残存率	出土位置 / 備考
1	一二	弥生土器 広口 長頸壺	(23.4) / – / –	外面：体部上半ヘラミガキ。口縁部横面3本の凹線。 内面：体部～口縁部ナデ。	淡茶褐色 / 〃	良好	○M～L	▲S	○S	○S		良好	口縁部 1/10	S1－1 横面中線
2		弥生土器 広口 長頸壺	(20.4) / – / –	外面：次第上半ナデ。口縁部横面3本の凹線。 内面：体部～口縁部ヘラミガキ。	淡茶褐色 / 〃	良好	▲S	▲S	○S	○S		〃	口縁部 1/10	〃 横面凹線
3	一二	弥生土器 長頸壺	10.6 / – / – / 頸部径 7.9	外面：口縁部～体部ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部指頭圧痕。	赤褐色 / 〃	良好	▲S	▲S～M～L		▲M～L		〃	1/2	〃 ヘラ記号
4	一二	弥生土器 広口壺	(13.6) / – / –	外面：次第～頸部ハケナデ。口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ナデ。体部指頭圧痕。	淡褐色 / 〃	やや粗	△S～L	▲M	▲S	◎M～L		〃	1/2	〃 ヘラ記号
5		弥生土器 壺	– / – / 5.1	外面：体部および底部削正ナデ。 内面：体底部ハケナデ。	淡黄橙色 / 〃	良好	▲M～L		○S	▲S～M		〃	1/2	〃
6		弥生土器 壺	– / – / 4.5	外面：体部から底部側面ハケナデ後ヘラミガキ。 内面：体部中位以下ハケナデ。	暗茶褐色 / 暗茶褐色	やや粗	○S～M	▲M～L	○S～M			〃	1/2	〃
7		弥生土器 壺	– / 4.2 / –	外面：体部中位以下ヘラミガキ。 内面：体部中位以下ハケナデ、ヘラナデ。	淡灰黄色～淡黄褐色 / 暗赤褐色	粗	◎S～L	○S～L	△S			〃 風化	1/2	〃
8		弥生土器 壺	– / – / 5.6 / 体部最大径24.4	外面：体部上半ヨコ、下半タテ方向のヘラミガキ。体部下半に穿孔。 内面：体部ハケナデ。	赤褐色 / 〃	やや粗	○M～L	○M～L	◎S～M	▲M～L		良好	1/2	〃
9		弥生土器 甕	– / – / – / 体部最大径19.0	外面：体部タタキ後ハケナデ。 内面：体部上半ハケナデ、以下ナデ。	淡黄褐色 / 〃	良好	○S～M	○S～M	△S	△S		〃	1/2	〃 スス付着
10		弥生土器 甕	– / 4.4	外面：体部タタキ。 内面：体底部ナデ。	淡黄褐色 / 〃	良好	△M～L		○S	○S		〃	1/3	〃 スス付着
11		弥生土器 高杯	(24.7) / –	外面：杯部ヘラミガキ。 内面：杯部ナデ。	淡褐色 / 〃	良好	○M～L	○M～L	○S	△S	▲M	〃	1/10	〃
12		弥生土器 高杯	(27.6) / – / –	外面：杯部ヘラミガキ。 内面：杯部ヨコナデ後ヘラミガキ。	淡褐色 / 〃	良好	△S～M	△S～M	○S	△S	△S	〃	1/10	〃
13	一二	弥生土器 鉢山鉢	15.0 / 8.2 / 4.8	外面：体底部ハケナデ。 内面：体底部ハケナデ。	暗褐色 / 〃	良好	○S～M	▲S	○S	○S		〃	ほぼ完形	〃
14	一二	弥生土器 鉢	16.2 / 11.6 / 4.5	外面：体部ナデ、一部指頭圧痕。 内面：体部上半ハケナデ、以下ナデ。	赤褐色 / 〃	良好	○S～L	○S～M	○S			〃	ほぼ完形	〃 斜次文
15	一二	弥生土器 鉢	18.4 / 9.0 / 5.1	外面：体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部～底部ハケナデ。	赤褐色 / 〃	良好	○M～L	○M～L	○S～L			〃	完形	〃

・凡例　粒径－L 1cm以上　M 0.5～1cm未満　S 0.5cm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　色調－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径（ ）復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成	残存率	出土位置 備考
16	二	弥生土器 台付鉢	－ － 4.9	外面：台部から体部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。	黒灰色 〃	精良			◎S				良好	3/4	S1 1
17	二	弥生土器 広口長頸壷	(13.0) － －	外面：口縁部3条の凹線文と円形浮文。 内面：口縁部および体部上端ナデ。	にぶい橙色 〃	良好	▲M～L	▲M				赤△M	〃	口縁部1/10	S1－2 凹線文 円形浮文
18	二	弥生土器 壷	 4.2	外面：底部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。	暗茶褐色 〃	やや粗	○S～L	○S～L	○S～M	△S			〃	体部1/3	〃
19	二	弥生土器 壷	－ － 5.3	外面：体底部ハケナデ。 内面：体底部ナデ。	淡灰褐色 〃	粗	○S～L	▲S～M	△S	△S			〃 風化	〃 底部完存	〃
20	二	弥生土器 鉢	5.7 5.0 3.8	外面：体底部ナデ。 内面：体壁部指ナデ。	淡茶褐色 〃	やや粗	○S～L	△M	△S	△S～M			良好	完形	〃
21	二	弥生土器 鉢形	18.4	外面：体部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ。	暗茶褐色 淡灰褐色	やや粗	○S～L	○S～L	○S	○S～L			〃	1/2	〃 スカシ孔 不明
22	二	弥生土器 高坏	19.0 － －	外面：杯部口縁部ヨコナデ。以下ナデ。脚部ハケナデ。 内面：杯部ハケナデ。脚部ナデ。	淡茶褐色～淡黒灰色 淡茶褐色	やや粗	○S～L	△S～M	△S	△S～M			〃	1/2	〃 スカシ孔3個 スス付着
23	二	弥生土製品	－ － 金属 16.0	外面：ナデ	淡茶褐色 〃	やや粗	◎S～L	△S～M	○S	△S			良		〃
24		弥生土器 広口壷	(12.4) －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部タテヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部ヨコヘラミガキ。	褐灰色 〃	精良	△S～L	▲S	○S～M	△S			良好	1/4	SE 1
25	二	弥生土器 広口長頸壷	(12.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部タテヘラミガキ。 内面：口縁部ナデ。	白灰色 〃	やや粗	△S～L	○S～L				赤△M～L 赤△	〃	1/3	〃
26		弥生土器 壷	 － 3.1	外面：体底部ヘラミガキ。 内面：体底部ナデ。	乳褐灰色 〃	精良	▲S		○S	▲L			〃	底部完存	〃
27		弥生土器 壷	－ － 4.1	外面：体底部ナデ。 内面：体底部ヘラナデ。	暗灰褐色 〃	やや粗	△M～L		○S～M	○S～M			〃	底部完存	スス付着
28		弥生土器 壷	－ － 5.0	外面：体底部ハケナデ。 内面：体底部ハケナデ。	乳灰白色 〃	やや粗	▲S～L	▲S～M	△S	△S			〃	底部完存	〃
29		弥生土器 壷	－ 5.0	外面：体底部ヘラミガキ。 内面：体底部ナデ。	淡灰黄色 淡灰褐色	精良	▲M		○S			赤△M～L	〃	1/2	〃
30	三	弥生土器 甕	(12.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰白色 〃	やや粗	○S～L	○S～M	△S	△S			〃	1/4	〃 スス付着
31	三	弥生土器 甕	16.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ、一部ハケナデ。体部ハケナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良	▲M	▲M～L	△S	▲M		赤▲S～M	〃	1/2	〃 スス付着

・凡例　粒径－L　1mm以上　M　0.5～1mm未満　S　0.5mm未満　量：◎多量 ○多い △少ない ▲極少　　赤－赤色酸化土　片－砂岩片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土							焼成	遺存率	出土位置 備考
						大粒	長石	石英	雲母	白色粒子	チャート	その他			
32		弥生土器 甕	－ － 5.0	外面：体底部タタキ。 内面：体底部ヘラナデ。	淡黄褐色 〃	やや粗	△M～L		○S	○S			良好	体部 1/4	SE－1 ススケ付着
33		弥生土器 鉢	(11.5) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡黄橙色 〃	やや粗	○S～L		○S	▲S～M			良	1/8	〃 ススケ付着
34		弥生土器 台付鉢	－ 4.6	外面：台部および体部ナデ。 内面：底部ナデ。	淡褐色 〃	やや粗	△S～L	▲S	○S	○S～M			良好	底部 完存	〃
35	一三	弥生土器 有孔鉢	14.9 8.4 4.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ハケナデ。	黄褐色 〃	良好	○S～L	＜S～M	○S～M	○S			〃	完形	〃
36	一三	弥生土器 壺形	24.4 16.5 － 頸部径 15.6	外面：体部および頸部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。粘成部シボリ目。底部ハケナデ。	淡灰褐色	良好	△M～L		○S～M	○S			〃	1/2 程度 完形	〃 スカシ孔4個
37	一三	弥生土器 鉢形	23.4 16.8 － 頸部径 11.8	外面：体部および頸部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。頸部ハケナデ。	灰白色 〃	やや粗	○S～L	○M～L	▲S		△M～L		〃	ほぼ 完形	〃 スカシ孔4個
38		弥生土器 甕	(14.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	茶褐色 〃	やや粗	○S～L	▲M～L	○S	▲M			〃	口縁部 1/6	SK－1
39		弥生土器 長頸壺	(13.6) － －	外面：口頸部2条の凹線。頸部タテヘラミガキ。 内面：口頸部ナデ。	淡茶褐色 〃	良好	△S～L	▲M～L	○S	△S			〃	1/6	〃
40		弥生土器 広口壺	(14.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部下半体部ヘラナデ。	茶褐色 暗赤褐色	良好	＜S～M	▲M～L	○S	＜S			〃	1/6	〃
41		弥生土器 長頸壺	(10.4) － －	外面：口縁部2条の凹線。頸部ナデ。 内面：．．頸部ナデ。	茶褐色 〃	良好	△M～L	▲M	＜S～M	＜S			〃	1/6	〃
42		弥生土器 広口壺	14.0 － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部ハケナデ。	褐灰色 〃	やや粗	△S～M	▲M	◎S～L	△S			〃	口縁部 1/4	SD 1
43		弥生土器 広口壺	17.2	外面：口縁部ヨコナデ。頸部タテヘラミガキ。 内面：口頸部ヨコヘラミガキ。	赤褐色 〃	やや粗	△S～M	▲S～M	○S	○S			〃	口縁部 1/2	〃
44	一四	弥生土器 長頸壺	11.6 － － 頸部径 7.5	外面：口縁部ヨコナデ。頸部以下ヘラミガキ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ヨコハケナデ。	淡茶褐色 〃	粗	◎S～L	○S～L	◎S～L	○S～M			〃	1/2	〃
45		弥生土器 小型壺	－ － 4.6	外面：体底部ナデ。 内面：体底部ヘラナデ。	淡茶褐色 〃	良好	△M～L		○S	△S～M			〃	1/2	〃
46		弥生土器 壺	－ － 4.4	外面：体底部ナデ。 内面：体底部ヘラミガキ。	淡黄褐色 〃	やや粗	○S～M	△S～M	◎S～L	△S			〃	底部 完存	〃
47		弥生土器 壺	－ － 4.6	外面：体部ヘラミガキ。底部側面指頭圧痕。 内面：体底部ナデ。	淡黄褐色 黒灰色	良好	△M～L	▲M～L	○S～M	△S			〃		〃 内面ススケ著

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径(底径)( ) 復元値	観察・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	遺存率	出土位置 備考
48		弥生土器 壺	－ － 4.2	外面：体底部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。	暗灰褐色 〃	良好	△M～L		○S～M	○S		赤▲M	良好	底部完存	SD－1
49	一四	弥生土器 甕	17.0 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	明黄褐色 〃	やや粗	○S～L	▲S	○S～L	△S			〃	1/2	〃 スス付着
50	一四	弥生土器 甕	16.0 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキの後一部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	淡褐灰色 淡灰褐色	やや粗	○M～L	○S～L	○S～L	△S			〃	1/2	〃 スス付着
51		弥生土器 甕	－ － 3.8	外面：体底部タタキ。底部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。	淡茶褐色 〃	やや粗	○M～L	△S～M	○S～L	△S			〃	1/2	〃 スス付着
52	一四	弥生土器 高杯	14.0 13.1 脚部径 10.8	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。脚部ハケナデ。 内面：杯部および脚部ハケナデ。	赤褐色 〃	やや粗	○M～L	○M～L		△M～L		赤▲M～L	〃	ほぼ完形	〃 スカシ孔4個
53		弥生土器 高杯	－ － －	外面：杯部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部および脚部ナデ。	暗茶褐色 〃	やや粗	○M～L		○S	○S			〃	1/3	〃
54		弥生土器 台付鉢	－ 高台径 5.3 高台高 2.0	外面：台部および底体部ナデ。 内面：台部および底体部ハケナデ。	茶褐色 〃	やや粗	△M～L	^S～M	○S	▲S		赤▲L	〃	底部完存	〃
55	一四	弥生土器 鉢	(20.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラミガキ。	赤褐色 〃	良好	△S～L	▲S～L	○S～L	▲S			〃	1/4	〃
56	一四	土師器 小皿	9.6 1.3 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄色 〃	精良	▲S		○S				〃	完形	SE－2
57	一四	土師器 小皿	4.6 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	赤褐色 〃	精良	▲S	▲S～M	○S				〃	1/2	〃
58	一四	土師器 小皿	8.5 1.8 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白色 〃	精良			▲S		▲M		〃	完形	〃
59		土師器 小皿	8.8 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡橙色 〃	精良		▲L	○S			赤△M～L	〃	1/2	〃
60		土師器 小皿	(8.2) －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄色 〃	精良			○S				〃	1/2	〃
61		土師器 小皿	(8.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄色 〃	精良	▲S			▲S			〃	1/2	〃
62		土師器 中皿	13.8 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白色 〃	精良	▲S	▲M～L	▲S				〃	1/4	〃
63		土師器 中皿	13.6 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄色 〃	精良			▲S				〃	1/4	〃

・凡例　粒径　L 1cm以上　M 0.5～1cm未満　S 0.5cm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲僅少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径（底径）器高 / 復元値	製作・手法 外面 / 内面	色調 外面 / 内面	胎土						焼成	遺存	出土位置 / 備考
						粗密	長石	石英	雲母	角閃石	その他			
64		土師器 中皿	13.9 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良			△S			良好	1/3	SE－2
65	一四	土師器 中皿	14.6 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良			△S			〃	1/4	〃
66	一四	瓦器椀	14.5 5.1 4.8 高台高 0.5	外面：体部指頭圧成形後ヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み格子状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良	△S	△S				〃	1/2	〃
67		瓦器椀	15.2 4.8 4.5 高台高 0.5	外面：体部指頭圧成形後粗いヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み格子状ヘラミガキ。	灰黒色 ～淡灰色 〃	密良	△S～L	▲S				〃	1/2	〃
68		瓦器椀	15.4 5.0 5.1 高台高 0.5	外面：体部指頭圧成形後粗いヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良	△S	△S				〃	1/2	〃
69	一四	瓦器椀	15.0 5.2 4.3 高台高 0.4	外面：体部指頭圧成形後ナデ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み平行状ヘラミガキ。	淡灰色 ～黒灰色 〃	精良	△S	△S				〃	完形	〃 体部外面煤状物付着 〃 内面煤状
70		瓦器椀	－ 5.0 高台高 0.7	外面：高台部ヨコナデ。 内面：見込み格子状ヘラミガキ。	淡灰白色 淡灰色	精良		▲S				〃	底部完存	〃
71		瓦器椀	－ － 5.0 高台高 0.5	外面：高台部ヨコナデ。 内面：見込み格子状ヘラミガキ。	淡灰色 黒灰色	精良		▲S				〃	底部完存	〃
72		瓦器椀	－ － 5.9 高台高 0.4	外面：高台部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良						〃	底部完存	〃
73		瓦器椀	－ 5.2 高台高 0.3	外面：高台部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	淡灰色 〃	精良	▲S					〃	底部1/2	〃
74		瓦器椀	－ 5.4 高台高 0.7	外面：高台部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 黒灰色	精良	▲S					〃	底部完存	〃
75	一五	瓦器小皿	9.2 1.9 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：見込みから体部にヘラミガキ。	淡灰色 〃	精良						〃	1/2 完形	〃
76	一五	瓦器小皿	9.6 2.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	密良	▲S	▲S				〃	1/2 完形	〃 内外面油煙
77	一五	瓦器小皿	9.6 2.3 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み平行状ヘラミガキ。	淡白灰色 ～淡灰色 〃	精良	△S	△S				〃		〃
78	一五	須恵器 口縁皿	(14.0) －	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	灰白色 〃	緻密						〃	1/8	〃
79	一五	須恵器 甕	(30.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	黒灰色 〃	精良	△SM	△S				〃	1/2	〃

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量 ◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤 赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	区域番号	器種	法量（cm）口径・底径・器高（ ）復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素地	胎土 長石	胎土 石英	胎土 雲母	胎土 角閃石	胎土 チャート	胎土 その他	焼成保守	遺存率	出土位置 備考
85	一六	土師器坏	13.4 3.5 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	灰黄褐色 〃	良好	▲S|L						良好	1/3	SE－3
86		土師器坏	(14.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰黄褐色 〃	良好	△S|M		▲S				〃	1/4	〃
87	一六	土師器中皿	(16.2) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰褐色 〃	良好	△S	^S|L	○S				〃	1/4	〃 スス付着 墨書アリ
88	一六	土師器壺	(21.0) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	明茶褐色 〃	良好	○S|M	△S	○S				〃	1/6	〃 スス付着
89	一六	土師器甕	(18.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。一部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	暗茶褐色 〃	良好	○S|L	^S	△S				〃	1/6	〃 スス付着
90		須恵器壺	－ (9.5)	外面：底台部および体部回転ナデ。 内面：体底部回転ナデ。	黒灰色 〃	精良	▲M|L						〃	1/4	〃
91	一六	羽口 平瓦	－ －	凹面：布目。 凸面：格目タタキ。	黒灰色 〃	精良	△S	△S|L					〃		〃
92	一六	土師器小皿	9.6 1.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡橙色 〃	精良							〃	1/2 完形	SE－4
93	一六	土師器小皿	9.4 1.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	乳黄白色 〃	精良	△S	△S|L					〃	3/4	〃
94	一六	土師器小皿	9.7 2.0	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	乳灰白色 〃	精良							〃	完形	〃
95	一六	土師器小皿	9.6 1.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡橙色 〃	精良	▲S|M						〃	完形	〃
96	一六	土師器小皿	9.4 1.7	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	乳灰褐色 〃	精良							〃	完形	〃
97		土師器小皿	9.4 1.7	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	淡橙色 〃	精良	▲S						〃	2/3	〃
98	一六	土師器小皿	9.6 1.9 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	淡橙色 〃	精良							〃	1/2 完形	〃
99		土師器中皿	(13.0) － －	体面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	乳白灰色 〃	精良							〃	1/6	〃
100		土師器中皿	(13.6) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白色 〃	精良							〃	1/4	〃

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量 ◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径 底径 器高 ( ) 復元値	成形・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素性	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成	遺存率	出土位置 備考
101		土師器 中皿	(15.3) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部指頭圧痕形後ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲S		△S				良好	1/6	SK 4
102		土師器 中皿	14.8 3.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	にぶい橙色 〃	精良	▲L		＜S				〃	1/8	〃
103		土師器 中皿	15.4 3.0 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良			▲S				〃	1/4	〃
104		土師器 中皿	19.6 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。	灰白色 〃	精良	▲M						〃	1/8	〃
105	一六	瓦器 椀	15.8 3.4 7.0 高台高 0.6	外面：体部四分割のヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込みおよび体部乱方向のヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	1/2	〃
106		瓦器 椀	15.6 3.7 6.0 高台高 0.9	外面：体部ヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込みおよび体部乱方向のヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良	▲S		▲S				〃	1/2	〃
107		瓦器 椀	(17.0) － －	外面：体部ヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。	黒灰色 灰白色	精良							〃	1/6	〃
108	一六	瓦器 椀	(16.4) 6.2 7.1 高台高 0.9	外面：体部ヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込みおよび体部乱方向のヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	1/2	〃
109	一七	瓦器 椀	－ － 7.3 高台高 0.9	外面：体部ヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込みおよび体部乱方向のヘラミガキ。	淡赤灰色 〃	精良							〃	底部完存	〃 底部ヘラ記号
110	一六	緑釉 凸帯椀	(16.4) － －	外面：口縁部および体部ロクロナデ。 内面：口縁部および体部ロクロナデ。	灰白色 〃	緻密							〃	1/12	〃
111	一七	土師器 小皿	8.5 1.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄褐色 〃	精良		○S～M		△S			〃	完形	SE－5
112	一七	土師器 小皿	8.8 0.8	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄褐色 〃	精良		▲S					〃	1/2	〃
113	一七	土師器 小皿	8.6 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄褐色 〃	精良	＜S～L	▲S	＜S				〃	1/2	〃
114	一七	土師器 小皿	8.4 － －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良	▲S	△M～L	○S				〃	1/2	〃
115		土師器 中皿	14.2 1.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙色 〃	精良		○M～L					〃	1/4	〃
116		瓦器 椀	(15.0) 4.6 5.0 高台高 0.5	外面：体部上半粗いヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込み格子状体部粗いヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	1/2	〃

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量－◎多量 ○多い 八少ない ▲稀少　岩石－赤色珪化土 片 粘板片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)口径・器高・底径 ( )復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	胎土 長石	胎土 石英	胎土 雲母	胎土 赤色粒子	胎土 チャート	胎土 その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
117	一七	瓦器椀	15.0 5.0 4.6 高台高 0.6	外面：体部上半粗いヘラミガキ。高台部ヨコナデ。 内面：見込み格子状、体部斜なヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							良好	1/2	SE－5 内外面炭化
118		瓦器椀	－ － 3.4 高台高 0.5	外面：体部ナデ。高台部ヨコナデ。 内面：見込み格子状ヘラミガキ。	灰白色 暗灰色	精良							〃	底部1/2	〃
119		瓦器椀	－ － (5.0) 高台高 0.4	外面：体部ナデ。高台部ヨコナデ。 内面：見込み連続暗文ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	底部1/2	〃 内外面油煙
120		瓦器小皿	10.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：体部ヘラミガキ。底部ナデ。	淡灰色 暗灰色	精良		○S					〃	1/4	〃
121	一七	三脚鍋土釜	30.4 － －	外面：口縁部および胴部ヨコナデ。他はナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰白色 〃	やや粗	○S～L	○S		○S～L			〃	1/6	〃
122		陶器仏飯器	15.0 － －	外面：口縁部および体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。体底に指頭。	オリーブ灰色 〃	緻密							〃	1/12	〃 菊目
123		土師器小皿	(8.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙色 〃	精良		△S			赤○S		〃	1/6	SE－8
124		瓦器小皿	(9.2) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰黒灰色 〃	精良							〃	1/6	〃
125		瓦器小皿	(8.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体底部ナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	淡黒灰色 〃	精良	△M						〃	1/4	〃
126		瓦器椀	－ － 4.8 高台高 0.4	外面：高台部ヨコナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	底部1/2	〃
127		瓦器椀	－ － 4.6 高台高 0.5	外面：高台部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	精良							〃	底部1/2	SE－9
128		瓦器椀	－ (4.4) 高台高 0.5	外面：体部ナデ。高台部ヨコナデ。 内面：見込み平行状ヘラミガキ。	淡黒灰色 〃	精良	△S	△M～L					〃	1/3	〃
129		陶器鉢	(31.6) －	外面：口縁部ロクロナデ。体部一部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコロナデ。体部指目。	赤褐色 〃	密	△M～L	△M～L		△S～M			〃	1/6	SE－10 備前焼
130		磁器碗	11.9 5.9 4.8 高台高 0.6	外面：ロクロナデ。高台部畳高。 内面：ロクロナデ。見込み梅花文。	灰白色 〃	緻密							〃	1/5	〃 底面に「大明」銘
131	一七	磁器碗	11.6 6.9 4.6 高台高 0.9	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	淡灰色 〃	緻密							〃	1/2	〃 肥前系
132	一七	陶器灰釉	6.8 13.2 14.8 体部最大径 18.8	外面：粘色は黒褐色で光沢あり。裏面に濃れ砂。 内面：ロクロナデ。	黒褐色 〃	緻密							〃	底部完形	〃 瀬戸美濃焼

・孔列　口径　L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量　◎多量 ○多い △少ない ▲僅少　色調　赤色粒子上：六＝結晶片岩

挿図番号	図版番号	器種	法量（cm）口径 器高 底径 ( ) 復元値	成形・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 黄雲母	長石	石英	雲母	角閃石	ヤマト	その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
133	一七	甕底部大足	－	表面：巴文。 裏面：ナデ。	黒灰色 〃	やや粗	◎S～L	○S～M	＜S				良好		SE－10
134	一七	甕底部丸底	－ －	表面：巴文。 裏面：ナデ。	淡黒灰色 〃	やや粗	○S～L	○S～L	△S				〃		〃
135	一八	弥生土器 複合口縁壺	(16.0) － －	外面：口縁部ヨコ、頸部タテ方向ヘラミガキ。 内面：口頸部ヨコヘラミガキ。	灰白色 〃	良好	○S～L	○S～L	▲S～M		△M～L	※△S～L	〃	口縁部 1/2	第7層 2F・G区
136	一八	弥生土器 複合口縁壺	10.7 18.9 4.2 体部最大径 18.4	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ後ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	赤褐色 〃	良好	◎S～L	◎S～L	◎S～M	◎S～L			〃	ほぼ完形	〃 2F・G区 与形化登脚正文
137	一八	弥生土器 複合口縁壺	(33.5) － －	外面：口縁部上下端刺突文と円形浮文。頸部ヘラミガキ。 内面：口頸部ヘラミガキ。	赤褐色 〃	やや粗	◎M～L	△M～L	○S～L	○S～M			〃	口縁部 1/4	〃 2F・G区 円形浮文
138	一八	弥生土器 複合口縁壺	22.4 － 頸部径 13.6	外面：口縁端部刺目文と円形浮文。頸部凸帯刺目文。 内面：口縁部ヘラミガキ。体部ヘラナデ。	赤褐色 淡黒褐色	やや粗	◎M～L	△S～M	◎S～L	○S～M			〃	1/2	〃 2F・G区 円形浮文 刺目文
139	一八	弥生土器 複頸壺	7.3 － 口頸部高 11.4	外面：口頸部ヘラミガキ。 内面：口頸部ハケナデの後一部ヘラミガキ。	にぶい黄褐色 〃	精良	○S～M	○S～M	○S	○S～L		赤△M～L	〃	口縁部完存	〃 2F・G区
140		弥生土器 壺	13.6 16.2 4.4 体部最大径 14.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	褐灰色 〃	粗	◎M～L	◎M～L	○S	○S		赤△M～L	〃 風化	1/2	〃 2B区 スス付着
141	一八	弥生土器 甕	15.6 26.3 4.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部三分割タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	褐灰色 〃	良好	○M～L	○S～L	○S～M	◎S～L			良好	1/2	〃 1E区
142		弥生土器 壺	16.2 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部上半指頭圧痕以下ハケナデ。	淡黄褐色 〃	やや粗	◎M～L	＜S～M	○S	◎M～L			〃	1/2	〃 2F区 スス付着
143	一八	弥生土器 高杯	(16.4) 10.4 － 裾部径 10.2	外面：杯部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部ナデ	淡褐色 〃	良好	○S～L	○S～L				※△S～L	〃	1/2	〃 2F区 外面スス付着 スカシ孔4箇
144	一八	弥生土器 高杯	16.2 －	外面：杯部ヘラミガキ。脚部ナデ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部ナデ。	灰白色 〃	精良	○S～L	△S			△M		〃	1/2	〃 2F区 口縁部内面スス付着 スカシ孔3箇
145	一八	弥生土器 台付鉢	14.9 5.1 4.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部側面指頭圧痕。 内面：口縁部および体部ハケナデ。	淡褐色 〃	粗	◎L	○L	▲S		△L		〃	1/2	〃 2F・D区 スス付着
146		弥生土器 鉢	(24.6) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色 〃	やや粗	○S～L	△S～L	○S～M	○S～L			〃	口縁部 1/4	〃 1B区 内面スス付着
147		弥生土器 鉢	22.4 8.9 3.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ後ヘラミガキ。 内面：口縁部および体部ヘラミガキ。	褐灰色 〃	良好	△S～L	△S～L	▲S	△S	▲M～L		〃	1/2	〃 2F・G区
148	一八	弥生土器 有孔鉢	13.5 8.6 3.2	外面：体部タタキ。 内面：口縁部および体部ナデ。	灰白色 〃	精良	○S	○S			＜S～M		〃 内面剥離	ほぼ完形	〃 2F・G区 底部に孔

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量 ◎多い ○多い △少ない ▲僅少　赤茶－赤色酸化土　片 結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復元値	調整・手法 外面	調整・手法 内面	色調 外面	色調 内面	胎土 素地	胎土 長石	胎土 石英	胎土 赤褐粒	胎土 黒色粒子	胎土 その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
149	一九	弥生土器 高台	(30.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。口縁部下半横位文。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ後ヘラミガキ。		淡褐色 〃		良好	○S～L	△S	○S	○S		良好	口縁部 1/8	第6号 1D区 スス付着
150		弥生土器 広口 長頸壺	(24.6) －	外面：口縁部横位文。頸部ハケナデ。 内面：口縁部上端波状文。以下ハケナデ。		赤褐色 〃		やや悪	△S～L		○S	△S		〃	口縁部 1/4	〃 1C区
151	一九	弥生土器 広口 長頸壺	(17.6)	外面：口縁端面。刺突文。ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。		褐灰色 〃		やや粗	◎S～L	○S～L	○S	^M～L		〃	口縁部 1/4	〃 1D区
152		弥生土器 広口長頸壺	(23.5) － －	外面：口縁部上半円形浮文。頸部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。		赤褐色 〃		やや粗	◎S～L	○S～L	○S～M	△S		〃	口縁部 1/4	〃 2E区 頸部下半に煤付着
153	一九	弥生土器 長頸壺	9.2 16.5 4.0 体部最大径 9.8	外面：口縁部下半ハケナデ。体部タタキ。 内面：口頸部および体部ハケナデ。		褐灰色 〃		やや粗	◎S～L	△S～L	○S～M	◎S～L		〃	ほぼ完形	〃 1F区
154	一九	弥生土器 広口壺	(13.2) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ		灰白色 〃		やや粗	◎S～M	◎M～L	○S	◎S～L	赤▲S	〃	口縁部 3/4	〃 1C区 内面接合痕
155	一九	弥生土器 短頸壺	(11.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部および体部ハケナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ。		にぶい黄褐色 〃		やや粗	○M～L	^M～L	○S～L	▲L		〃	1/2	〃 1C区
156	一九	弥生土器 高杯	23.9 － 杯部高 6.4	外面：杯部および裾部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部シボリ目。		淡橙色 〃		精良	△M～L	△M～L	▲S		赤▲S	〃	杯部 3/4	〃 2D区 スカシ孔不明
157		弥生土器 高杯	21.7 － － 杯部高 7.3	外面：口縁部ヨコナデ。杯部ナデ。脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部シボリ目。		淡橙色 〃		精良	○S	^M～L	○S		赤▲M～L	〃 脚部欠損	1/2	〃 2D区 スカシ孔不明
158	一九	弥生土器 壺	22.7 16.2 － 最大径 12.0	外面：杯部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部ナデ。		白灰色 〃		精良	○S～M	○S		▲S		良好	1/2	〃 東側溝 赤色顔料付着 スカシ孔4個
159	一九	弥生土器 壺	(14.5) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部二分割タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。		赤褐色 暗赤褐色		良好	◎M～L	○M～L	○S	○S～L	赤^M～L	〃	1/2	〃 1C区 スス付着
160	一九	弥生土器 甕	16.0 19.2 3.8 体部最大径 17.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部二分割タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。		茶褐色 〃		良好	◎M～L	◎M～L	○S～M	○S～M		〃	ほぼ完形	〃 2E区
161	一九	弥生土器 台付鉢	17.2 14.2 － 脚部径 11.2	外面：鉢部および脚部ヘラミガキ。 内面：鉢部ヘラミガキ。脚部ナデ。		褐灰色 〃		やや粗	△L	△M～L	○M～L	○M～L		〃 脚部欠損	ほぼ完形	〃 東側溝 スス付着
162		弥生土器 鉢	13.2 6.4 3.4	外面：体部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。		茶褐色 〃		良好	○M～L	○M～L	○S	○S～M		良好	1/2	〃 1F区
163	一九	弥生土器 鉢	14.4 5.9 3.8	外面：体部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。		茶褐色 〃		良好	○L	△M～L	○S	^S		〃	1/2	〃 2E区
164		弥生土器 鉢	9.8 6.0 4.6	外面：体部ナデ。 内面：体底部ハケナデ。		灰黄褐色 〃		良好	^L	△M～L	○S～M	○S		〃	1/2	〃 1C区

・礫　粒径－L　1mm以上　M　0.5～1mm未満　S　0.5mm未満　量　◎多量　○多い　△少ない　▲僅少　赤鉄　赤色酸化土　片－結晶片岩

遺構番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径（）復元値	観察・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素地	胎土 礫 長石	胎土 礫 石英	胎土 礫 雲母	胎土 礫 角閃石	胎土 礫 チャート	胎土 礫 その他	焼成保存	遺存率	出土位置備考
165		弥生土器鉢	(27.4) －	外面：体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰黄褐色 淡赤褐色	やや粗	○M～L	○M～L	△S	○M～L			良好	ほぼ完形	第6溝 東斜面
166		土師器皿A	12.6 －	外面：口頭部ヨコヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。 内面：口頭部ヨコヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。	淡赤橙色 〃	精良	▲S	▲S					〃	口縁部1/2	〃 2E区
167	二	土師器皿A	14.6 20.5 － 体部最大径 16.1	外面：口縁部および体部中位ヘラミガキ。体部下半ヘラケズリ。 内面：口頭部ヨコヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。体部ナデ。	淡赤橙色 〃	精良	○S～M	○S～M					〃	ほぼ完形	〃 2・3F・G区
168		土師器小皿B	12.4 8.8 体部最大径 13.6	外面：口縁部から体部中位ヘラミガキ。体部下半ナデ。 内面：口縁部および体部ナデ。	淡赤褐色 〃	精良	△S	△S～M				赤▲S	〃 外面一部風化	ほぼ完形	〃 2・3F・G区
169	二	土師器鉢A	－ － － 体部最大径 17.0	外面：口頭部および体部ヘラミガキ。 内面：口頭部放射状ヘラミガキ。体部ナデ。	赤褐色 〃	精良	△S～M	△S	△S			赤△S～L 赤▲S	良好	ほぼ完形	〃 2B区
170		土師器大型鉢A	(16.3) － 頸部高 7.6	外面：口頸部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡橙色 淡灰白色～黒灰色	やや粗	◎M～L	○M～L	○S			赤▲S	〃	1/6	〃 2E区
171	二	土師器鉢A	－ 頸部径 (8.6)	外面：体部上半沈線文と点文以下ハケナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	淡赤橙色 淡灰褐色	精良	△S～M	△M～L	○S～M				〃	1/4	〃 2E区
172	二	土師器鉢D	15.0 19.1 － 体部最大径 18.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡灰白色 〃	精良	○S～L		○S～L				〃	後様完形	〃 1B区 スス付着
173	二	土師器鉢D	15.8 22.7 － 体部最大径 21.6	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰茶褐色 〃	精良	◎M～L	△M～L			◎M～L		〃	1/2	〃 2・3F・G区 スス付着
174	二	土師器鉢K	14.6 21.6 体部最大径 19.9	外面：口縁部ヨコナデ。体部中位波状文とハケナデ。 内面：口縁部から体部上半ナデ以下ヘラケズリ。	灰白色 〃	やや粗	○M～L	△M～L					〃	1/2	〃 2E区 スス付着
175	二	土師器小型鉢H	16.2 5.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラミガキ。	淡赤橙色 〃	精良	△M～L	▲S	△S				〃	ほぼ完形	〃 2F・G区
176	二	土師器小型鉢B	10.4 9.1 12.8	外面：体部ヨコヘラミガキ。下半タテヘラミガキ。 内面：体部ヨコヘラミガキの後タテヘラミガキ。脚部ナデ。	淡赤橙色 〃	精良	△M～L				▲S		〃	完形	〃 2F・G区 スカシ3個
177	二	土師器高杯A	16.3 10.9 脚部径 10.0	外面：体部から屈折部ヘラミガキ。脚部ハケナデ。 内面：体部タテヘラミガキ。脚部ハケナデ。	淡赤橙色 〃	精良	▲S	▲S	▲S				〃	3/4	〃 1F・G区 スカシ4個
178	二	二重口縁壺A	11.6 － 頸部高 7.7	外面：口頸部ヨコヘラミガキの後タテヘラミガキ。体部下半ヘラミガキ。 内面：口頸部は外面と同じ。体部ヘラナデ。	赤褐色 〃	精良	○S～L	○S～L				赤▲M	〃	1/2	第3層 2F・G区
179	二	二重口縁小型壺B	10.7 8.0 体部最大径 10.0	外面：口縁部から底部ヘラミガキ。 内面：口縁部から底部ヘラミガキ。	赤褐色 〃	精良	△M～L	△S					〃	完形	〃 2F・G区
180		土師器頸部に突帯A	(14.1) － － 頸部高 5.4	外面：口頸部から体部上半ハケナデ後ヘラミガキ。 内面：口縁部から体部中位ハケナデ。	灰白色 〃	精良	◎M～L	○M～L			◎S～M		〃	1/2	〃 3E区

・凡例　粒径　L 1mm以上　M 0.5mm～1mm未満　S 0.5mm未満　◎多量 ○多い △少ない ▲僅少　※赤－赤色酸化土　片　結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量 口径 器高 底径 ( ) 復元値 (cm)	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土						焼成 保存	遺存率	出土位置 備考
						系統	長石	石英	雲母	白色粒子	その他			
181	二	土師器 大型 有孔台 A	(17.8) － － 頸部高 5.4	外面：口縁部から体部の一部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 ″	やや粗	○S～M	△M～L			◎S～L	良好	1/2	第3層 2E区 スス付着
182	二	土師器 甕B1	14.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ、下半ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡茶褐色 ″	良好	○M～L	○M～L	○S～M	○M～L		″	1/2	″ 2F・G区 スス付着
183	二	土師器 甕B1	15.7 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。	灰黄褐色 ″	やや粗	◎M～L	△M～L	○S～M	○S～L		″	1/2	″ 2E区 スス付着
184		土師器 甕B1	(16.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰茶褐色 黒灰色	やや粗	○M～L	○S～M	○S	◎S		″	1/2	″ 2E区 内外面スス付着
185	二	土師器 甕D	(20.5) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 ″	やや粗	○M～L	△M～L	○S	◎S～M		″	口縁部 1/2	″ 2F・G区
186		土師器 甕E	(15.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコ、以下斜方向ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 ″	やや粗	◎S～M	◎S～M	○S			″	1/2	″ 2E区
187	二	土師器 甕K	(14.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコハケナデと横位ミガキ。以下ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 ″	やや粗	◎S	◎S			赤◎S	″	1/2	″ 2F・G区 山陰系 スス付着
188		土師器 高杯 A	(23.1) － －	外面：杯部ヨコヘラミガキ。 内面：杯部ヨコヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。	淡赤橙色 ″	緻密	△S～M	△M～L	○S			″		″ 2F・G区 スス付着
189	二	土師器 高杯 C1	13.3 10.2 － 脚部径 8.4	外面：杯部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。脚部ハケナデ。	淡赤橙色 ″	緻密	△S	△S				″	ほぼ完形	″ 2F・G区 スカシ孔4個
190		土師器 高杯	－	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ハケナデ。	淡赤橙色 ″	精良	△S～L	△M				″	脚部完存	″ 2F・G区 スカシ孔4個
191		土師器 高杯	脚部径 3.8 － － － 脚部径 10.4	外面：杯部および脚部ヘラミガキ。 内面：杯部ナデ。脚部ナデ。	淡赤橙色 ″	精良	▲S					″	1/2	″ 2F・G区 スカシ孔4個
192		土師器 小型鉢 H1	(14.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部と体部下半ハケナデ。	褐灰色 ″	精良	▲S	▲S	▲S			″	1/2	″ 2E区
193	二	土師器 小型鉢 H1	15.2 6.1	外面：口縁部から体底部ヘラミガキ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラミガキ。	赤橙色 ″	精良	△M～L	△M～L		▲L		″	ほぼ完形	″ 2F・G区
194		土師器 器台 B2	9.9 9.0 － 脚部径 11.8	外面：口縁部および脚部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。脚部ハケナデ。	淡赤橙色 ″	精良	△M～L		△S～M		赤▲M	″	杯部 1/2 脚部完存	″ 2E区 スカシ孔3個
195		土師器 器台 B2	－ － － 脚部径 11.0	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。	淡赤橙色 ″	精良	△M～L	△M～L			赤▲M	″	脚部完存	″ 2F・G区 スカシ孔4個
196	三	器台形土器	－ －	外面：筒部ナデ。条線文。赤色顔料塗布。 内面：筒部ヘラケズリ。	淡茶灰色 ″	精良	○S～L	○S～L	△S	○S～M	△L	″		″ 1C区

・礫　粒径－1.1cm以上　M 0.5～1cm未満　S 0.5mm未満　量　◎多量 ○多い △少ない ▲極少　　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 基調	礫	石英	長石	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	遺存率	出土位置 備考
197	三	土師器 土釜	(24.3) －	外面：口縁部および胴部ヨコナデ。 内面：口縁部ハケナデ、以下ナデ。	淡茶褐色 〃	普通	○M～L	○M～L	◎S～L		△M～L			良好	口縁部 1/2	第5層 2・3B・A区
198		須恵器 杯蓋	(15.4) －	外面：口縁部および天井部与回転ナデ。天井部中位から上部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ	黒灰色 〃	精良	△M～L							堅緻	1/2	〃 2・3C区 灰かぶり
199		須恵器 杯身	(11.4) － － 受部径 13.8	外面：たちあがりから体部中位まで回転ナデ。体部下位以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ	淡青灰色 〃	精良	△S	△S						〃	1/4	〃 1C区 内面同心円文
200	三	須恵器 杯身	11.1 4.6 － 受部径 14.4	外面：たちあがりから体部下半回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ	灰白色 〃	精良	▲M～L	▲S		△S～M				〃	1/4	〃 2E区
201		須恵器 杯身	14.1 5.9 －	外面：体部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ	灰色 〃	精良	△M～L							〃	1/4	〃 2・3A・B区 外面ヘラ記号
202		須恵器 甕	(21.6) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	灰白色 〃	精良	△M～L	▲S			△M～L			〃	1/6	〃 2・3C区
203		黒色土器 椀	16.8 4.1 7.9 高台高 0.4	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：底部および見込みヘラミガキ。	緑灰～灰色 〃	精良								良好	1/2	〃 2・3D区
204		土師器 小皿	9.4 2.0 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤橙色 〃	普通		▲S			○S		赤○S	軟質 完形	〃	〃 2・3D区
205	三	土師器 甕	14.8 3.4	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	赤褐色 〃	普通			○S～L				赤▲S	〃	1/2	〃 2・3A・B区
206		瓦器 椀	15.7 5.6 5.4 高台高 0.6	外面：体部指頭圧成形の後粗いヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み格子状ヘラミガキ。	黒灰色 〃	緻密	△S		△S					〃	完形	〃 1C区
207	三	瓦器 椀	15.4 5.6 5.2 高台高 0.6	外面：体部指頭圧成形の後粗いヘラミガキ。 内面：体部ヘラミガキ。見込み格子状ヘラミガキ。	淡灰色 〃	緻密	△M～L	▲M～L	△S	△M～L				〃	完形	〃 1E区

第4章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半、平安時代中期、平安時代後期～鎌倉時代中期、江戸時代に比定される遺構・遺物を検出した。さらに、明確な遺構を伴わないものの古墳時代初頭～前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される土器類が出土しており、これらの成果を含めて調査地周辺での各時期の集落推移を考えてみたい。

・弥生時代後期後半～後期末

弥生時代後期後半の遺構としては、竪穴住居2棟（ＳＩ－2・ＳＩ－2）、井戸1基（ＳＥ－1）、土坑2基（ＳＫ－1・ＳＫ－2）、溝1条（ＳＤ－1）、小穴1個（ＳＰ－1）を検出した。2棟検出した竪穴住居はＳＩ－1が隅丸方形、ＳＩ－2が円形を呈するもので、形式からみれば、前者が後出のものと考えられるが、2棟ともに同一面で検出されており、しかも焼失住居である点が共通していることから同時期に存在していた可能性が高い。2棟ともに、住居内から遺物が出土しているが、一部を除いて完形のものが少ないことや、甕形土器においては使用に耐えるものが1点も残されていない状況は、焼失直前に置ける土器使用状況がそのまま反映されているものとは言い難い。なお、弥生時代後期の焼失住居を検出した大阪市の城山遺跡（その2）の竪穴住居（ＳＢ0901・ＳＢ1001）では、焼失時点における住居内の土器配置が明確に捉えられており[注1]、焼失住居の土器廃棄の一例を示す良好な資料を提供している。しかし、この資料が普遍的であったとするにも多くの問題が残されており、焼失住居内の土器廃棄パターンは住居焼失時点の集落を取り巻く情勢が反映されているとみて大概ないものと考えられる。住居焼失の原因として考えられるものは、集落存続時期では、偶発的な失火や、病人・死者等による穢れを祓うための故意の失火のほか、戦争等による外的要因により生じた焼失や集落移動の際の住居廃棄を目的とした失火等が考えられる。本例については、柱根が残されている点や床面に完形の土器が少なく小片を除いて甕形土器が残されていない事実からみて、偶発的な失火により2棟の竪穴住居が焼失した後、居住域を破棄した状況が推定される。

弥生時代後期後半の集落は本調査地の周辺では、西約50m地点の第1次調査（ＫＦ84－1）、さらに南東約50m地点で昭和61年9月に市教委が公共下水道工事に伴って実施[注2]した調査地（市教委昭和61年調査）を含めて、東西約150m、南北約100mの範囲で居住域がの広がりが確認されている。

・古墳時代前期初頭～前期（庄内式新相～布留式古相）

この時期の遺構としては、明確なものはないが第5層・第6層を中心として比較的良好な資料が多数出土している。周辺では南部に近接地点で行われた市教委昭和61年調査地および第16

次調査（ＫＦ96－16）でこの時期の居住域が確認されているほか、当調査地の北西260ｍ地点で行われた第７次調査[註3]（ＫＦ88　7）でもこの時期の居住域が検出されている。

一方、第５層包含層からは、吉備地方において弥生時代後期後半以降に葬送儀礼祭祀に用いられた特殊器台または特殊器台形埴輪と推定される（196）が出土している。八尾市域においては、東郷遺跡で畿内の出土例の中で[註4]最も古い形態である向木見型の特殊器台（弥生時代後期末）が出土している。今回検出した資料は小片のため不確定な要素が多く不明な点が多いが、特殊器台とすれば[註5]東郷遺跡出土例とともに、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭において吉備と政治的・祭祀的結合を推進した集団が萱振遺跡に存在したことを示唆している。また、共伴遺物の帰属時期である古墳時代前期（布留式期古相段階）の特殊器台形埴輪とすれば、これらを用いた古墳の存在が付近に想定される他、吉備地方から瀬戸内海→河内湖→旧大和川の水運ルートを通じて大和への経路を考えた場合では、中継地の「津」としての役割を果たした遺跡であった可能性が指摘できよう。いずれにしても、今回の調査で確認された特殊器台または特殊器台形埴輪の存在は、畿内の弥生時代後期末から古墳時代前期の葬送儀礼祭祀において、吉備が果たした役割の一端を知るうえで重要な資料であると言えよう。

・平安時代中期、平安時代後期～鎌倉時代中期

平安時代中期の遺構としては、ＳＥ－３があるのみで周辺の調査でも明確な遺構は確認されていない。平安時代後期～鎌倉時代中期にかけては、本調査および第１次調査（ＫＦ84－１）、第16次調査（ＫＦ94－16）の広範囲にわたって、ほぼ当該期の比定される遺構が検出されている。この付近でこの時期の集落が連綿と営まれていた理由としては、調査地の西方に位置する天神社の南東側が河内街道と十三願道の分岐点にあたることが指摘できる。したがって、この付近の集落は、街道に沿った部分を中心に展開した集落形態であったことが推定される。

・江戸時代

本調査地および第16次調査（ＫＦ94－16）で検出されている。時期的には17世紀後半を中心とするものであるが、散発的に検出されたものが大半であり不明な点が多い。

註記

註１　上林史郎他　1986　『城山（その２）』㈱大阪文化財センター

註２　原田昌則　1987「１萱振遺跡（第１次調査）八尾市埋蔵文化財調査概要　昭和61年度」『㈱八尾市文化財調査研究会報告13』㈱八尾市文化財調査研究会

註３　原田昌則　1995「萱振遺跡第16次調査（ＫＦ94－16）」『平成６年度㈱八尾市文化財調査研究会事業報告』㈱八尾市文化財調査研究会

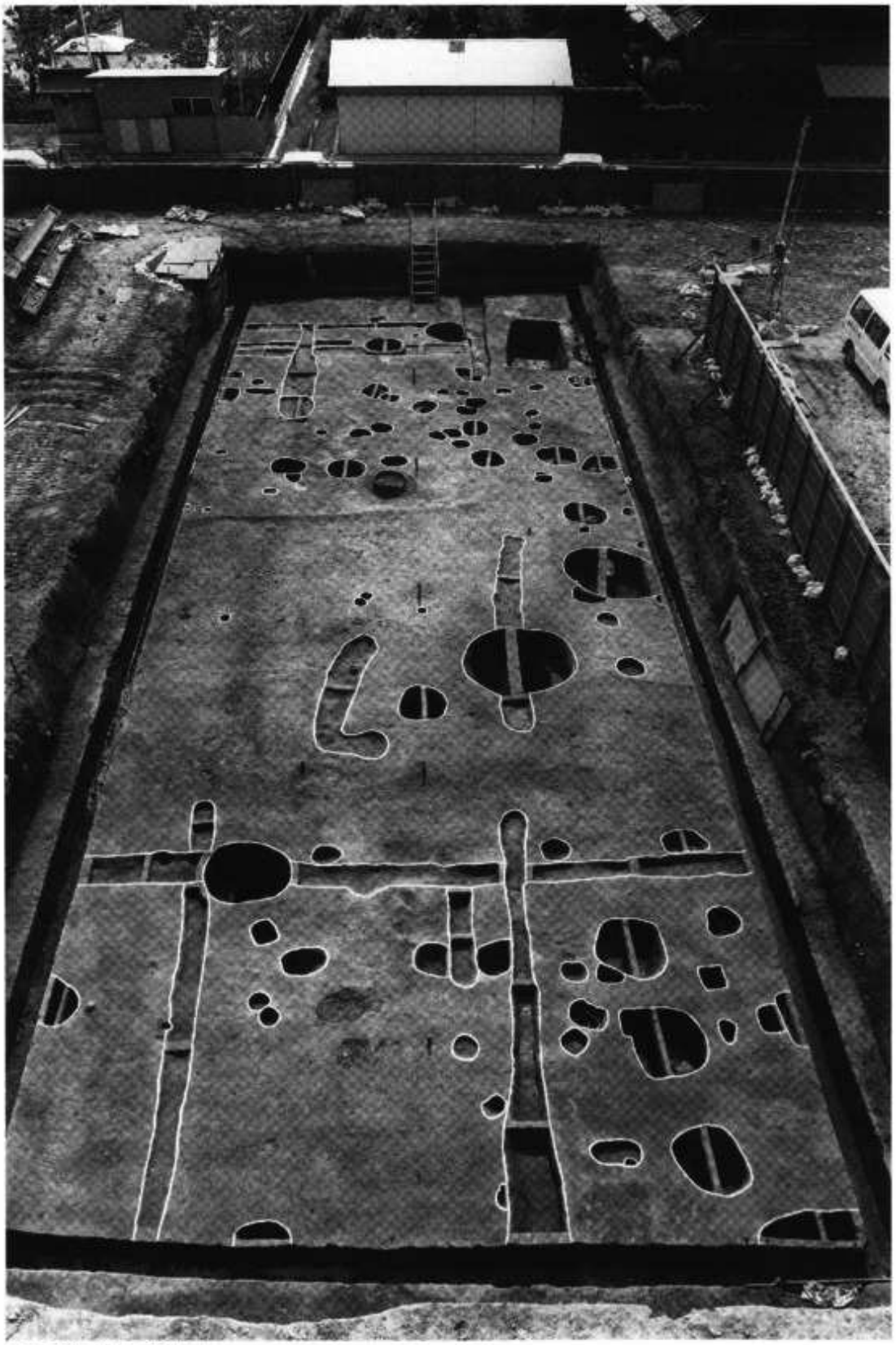
註４　近藤義郎・春成秀爾　1967　「埴輪の起源」『考古学研究』13－３

註５　奥　和之他　1989『東郷遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会

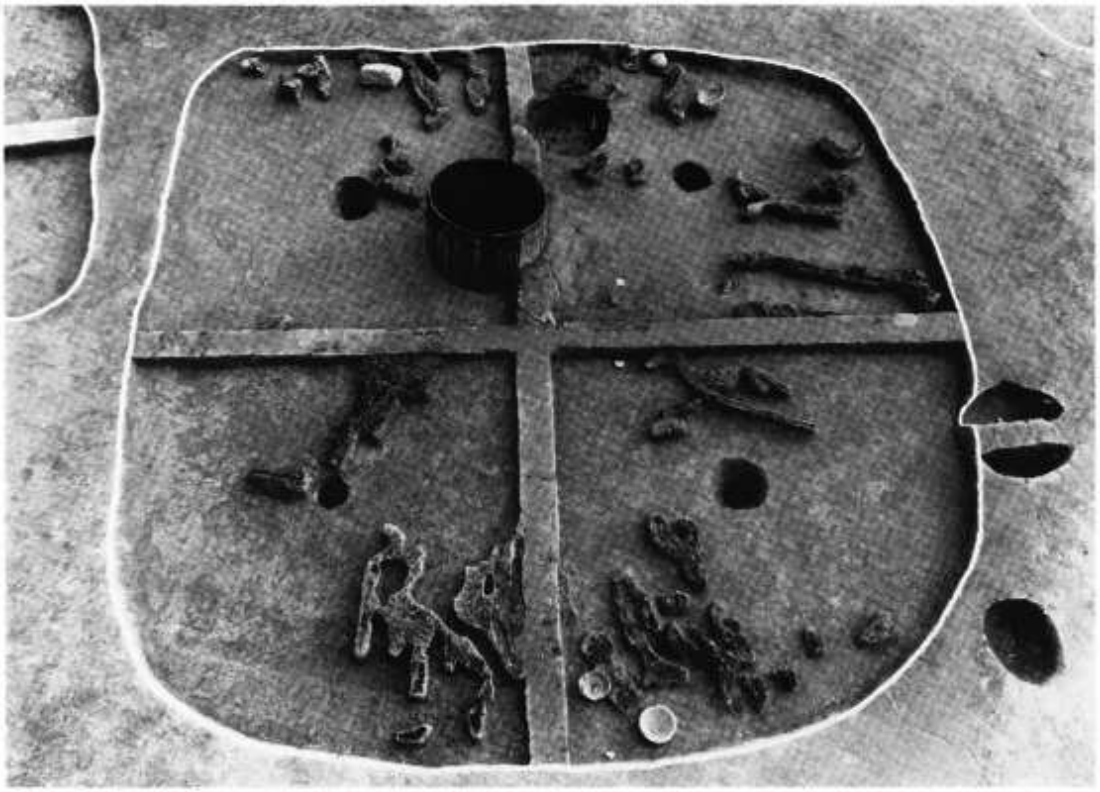
図　　版

第1調査面全景（東から）

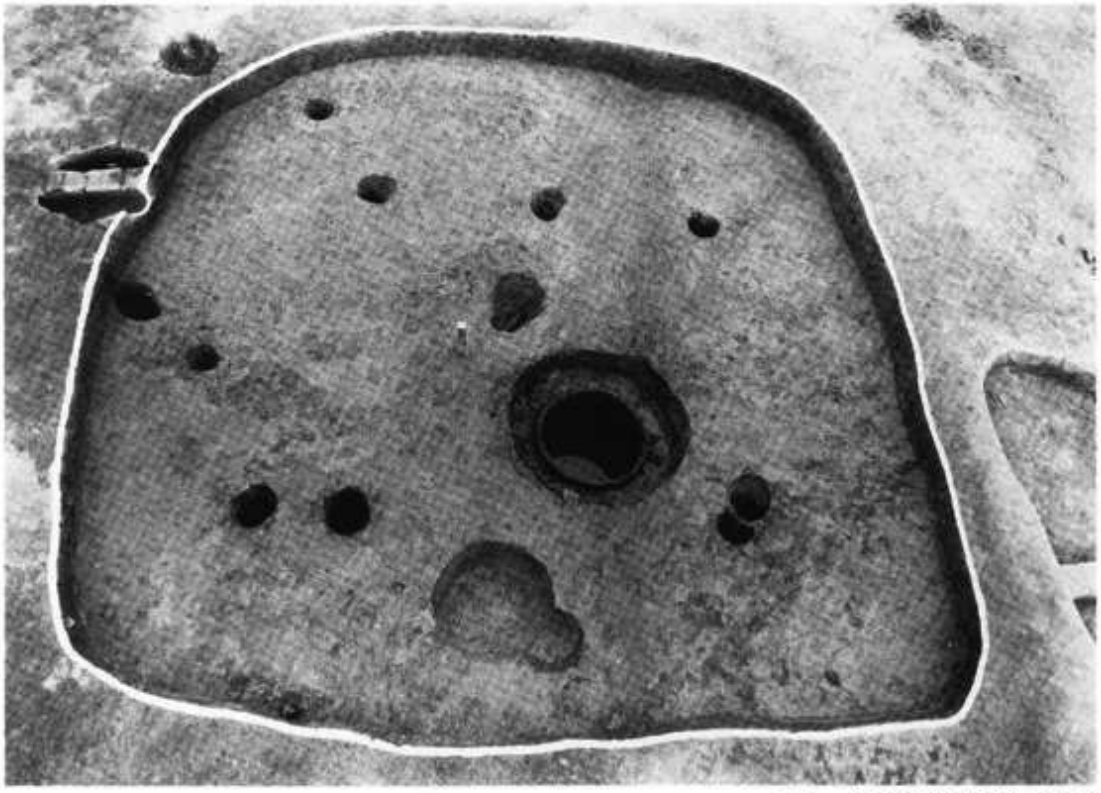
図版二



第2調査面全景（東から）



ＳＩ－１検出状況（北から）



ＳＩ－１柱穴検出状況（南から）

図版四

ＳＩ－１北西部（北から）

ＳＩ－１南東部（南から）

ＳＩ－１南西部（南から）

P－1（南から）

P－2（南から）

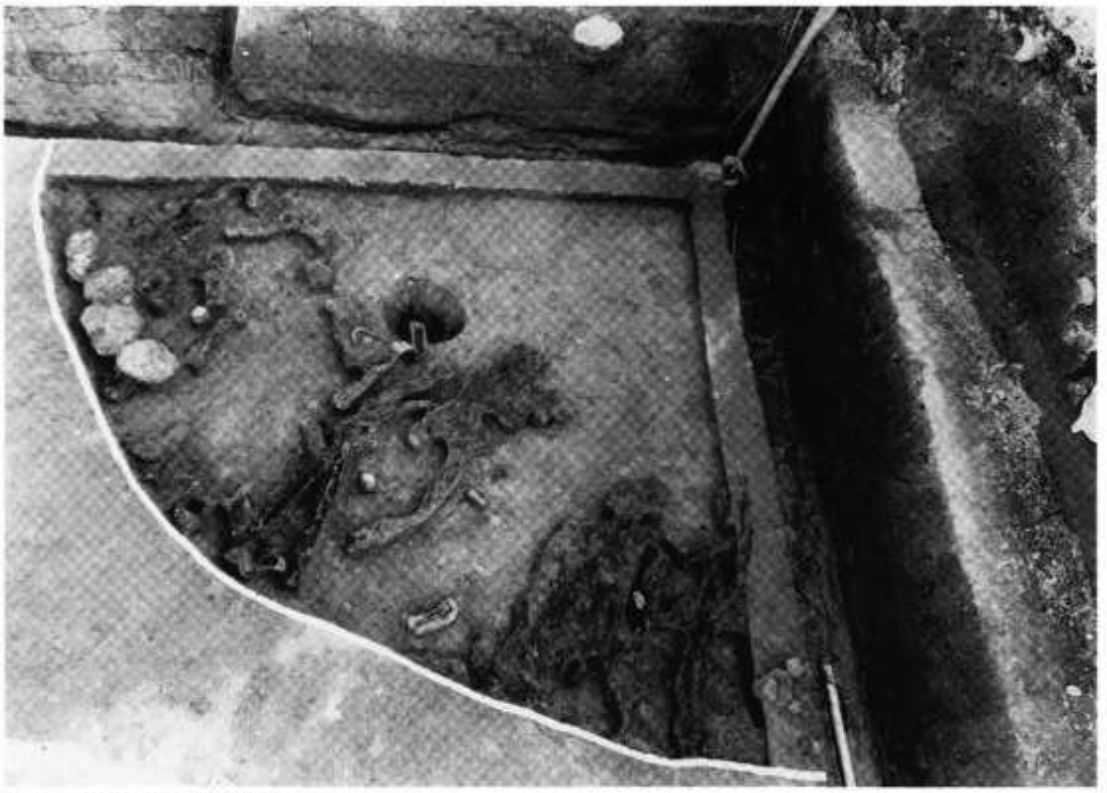
P－5（東から）

P－5（南から）

P－6（南から）

SI－1各柱根検出状況

図版六



ＳＩ－２検出状況（北から）

ＳＩ－２柱穴検出状況（南から）

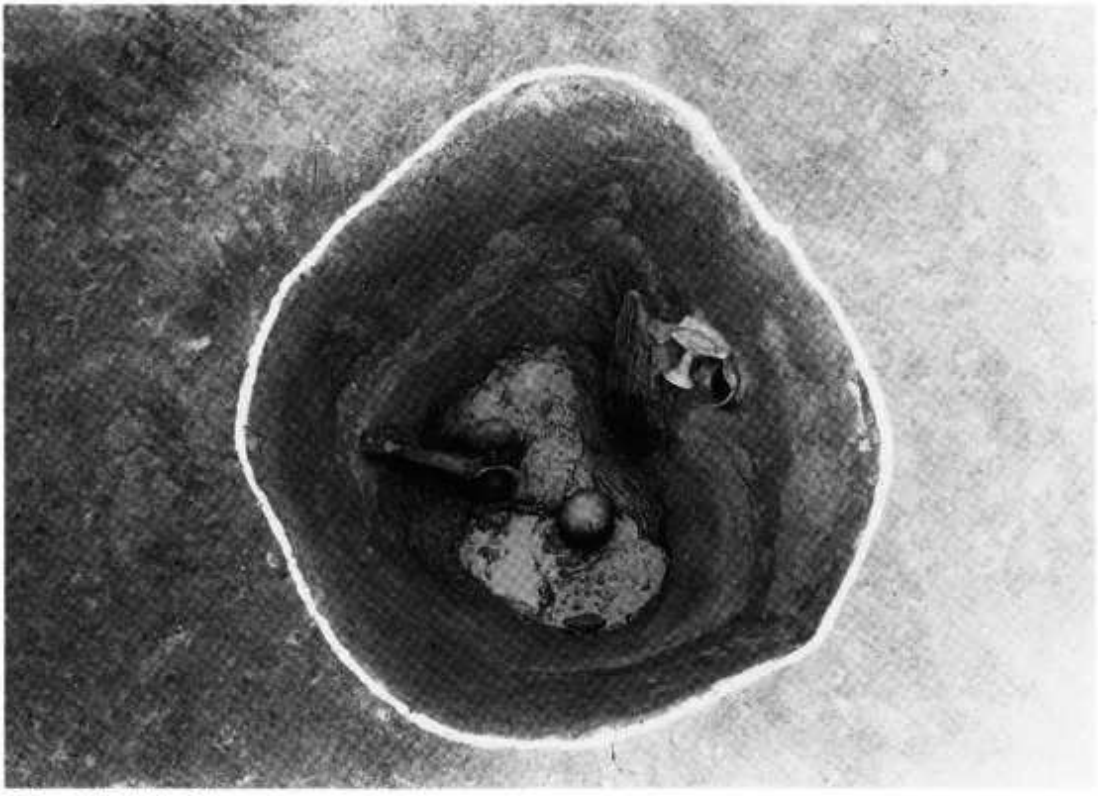
ＳＩ－２焼粘土塊検出状況（東から）

ＳＩ－２遺物出土状況（南から）

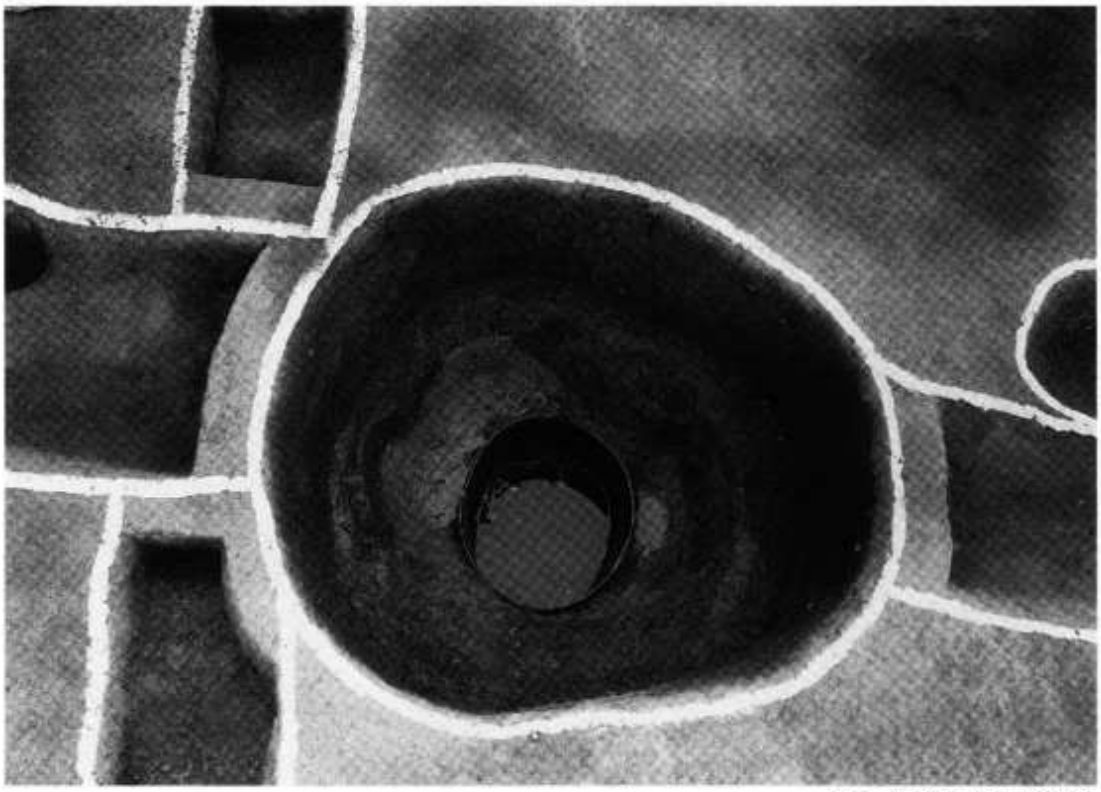
ＳＩ－２柱根（Ｐ－１）検出状況（南から）

図版八

ＳＥ－１断面および遺物出土状況（南から）



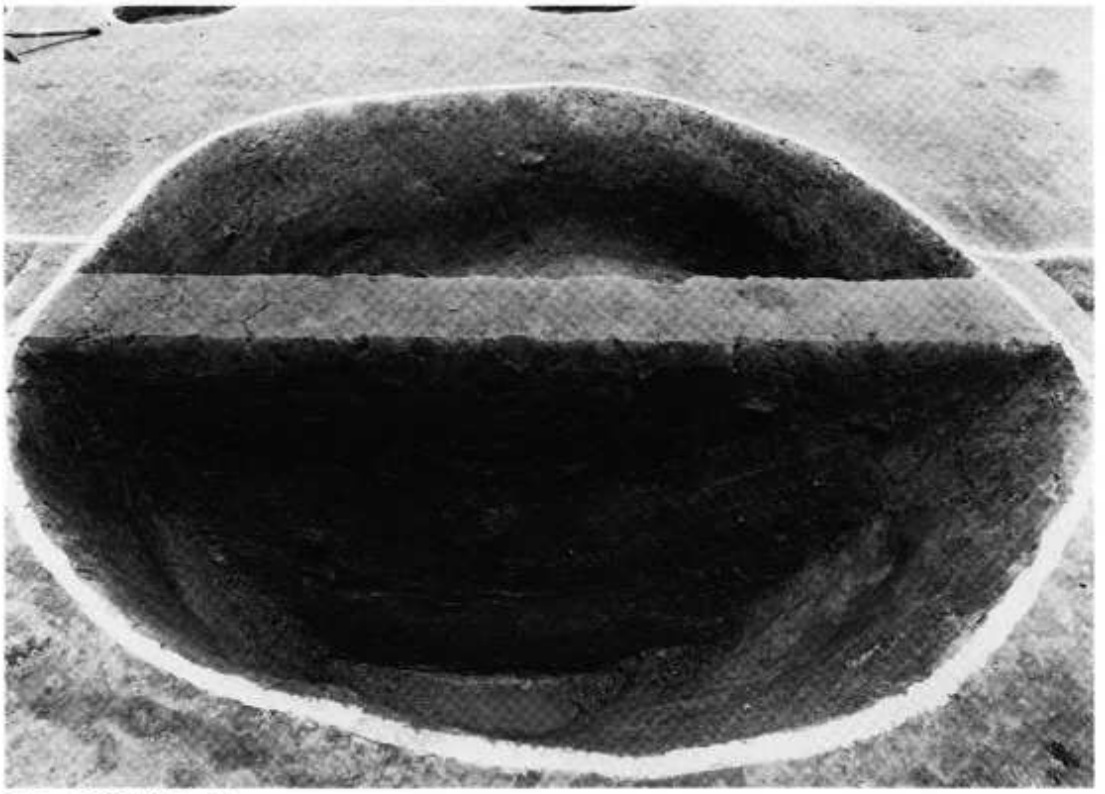
同上　完掘（南から）



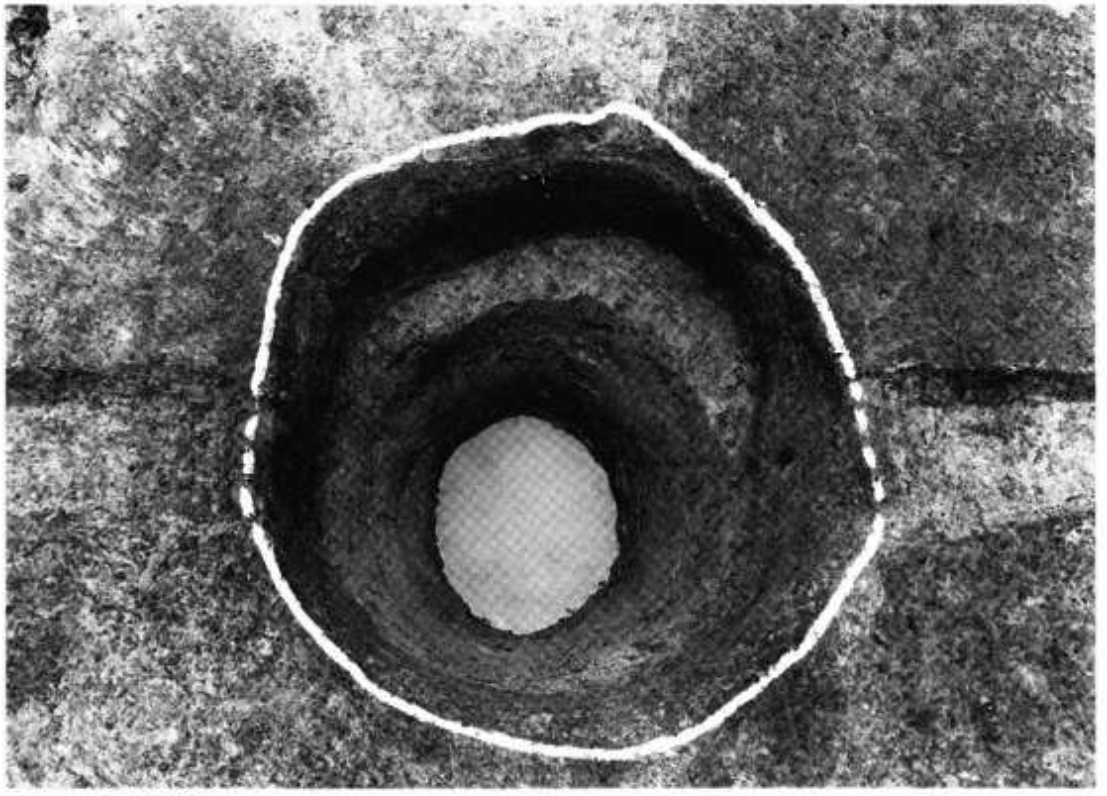
ＳＥ－２検出状況（東から）

ＳＥ－３検出状況（南から）

図版一〇



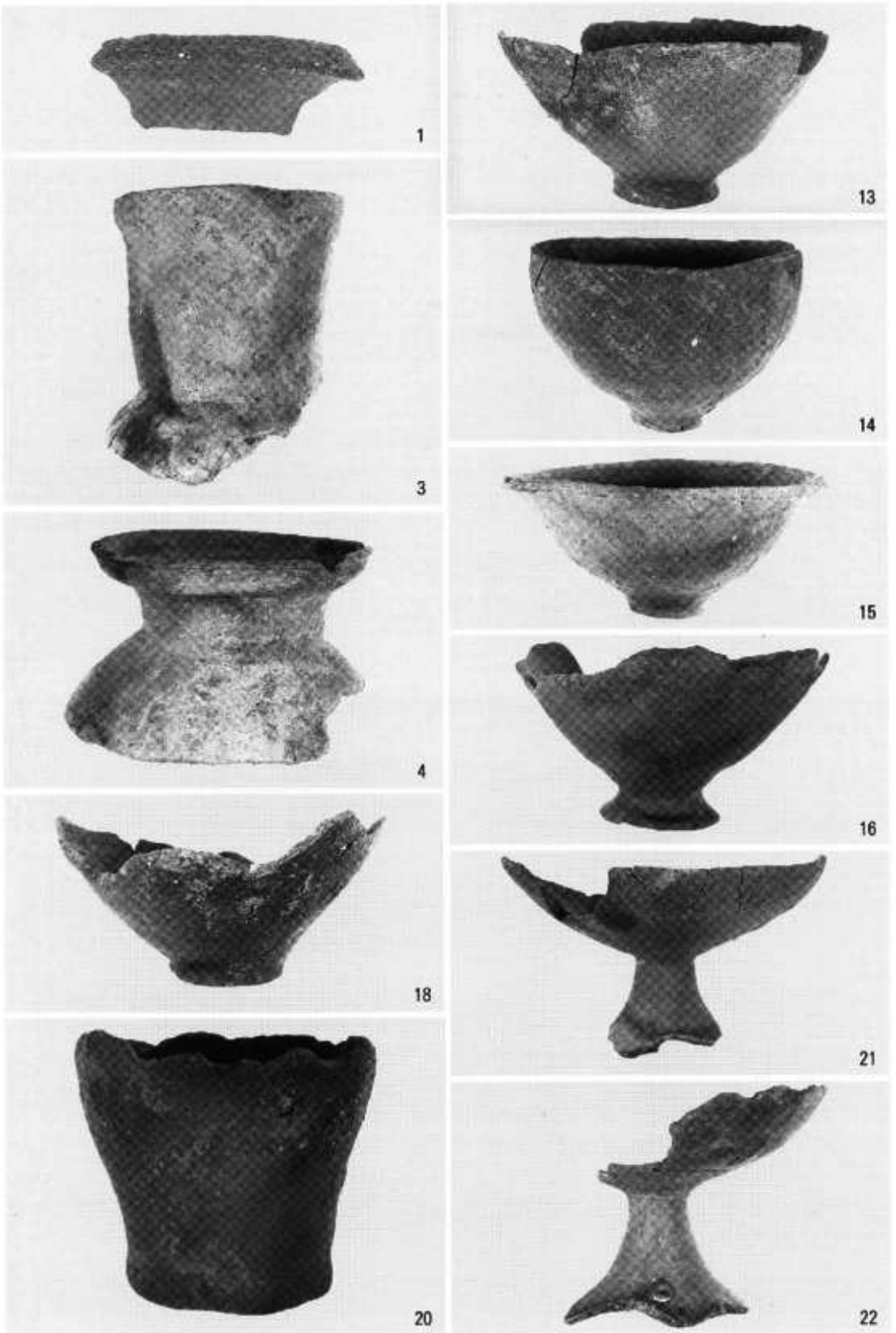
ＳＥ－４断面（南から）



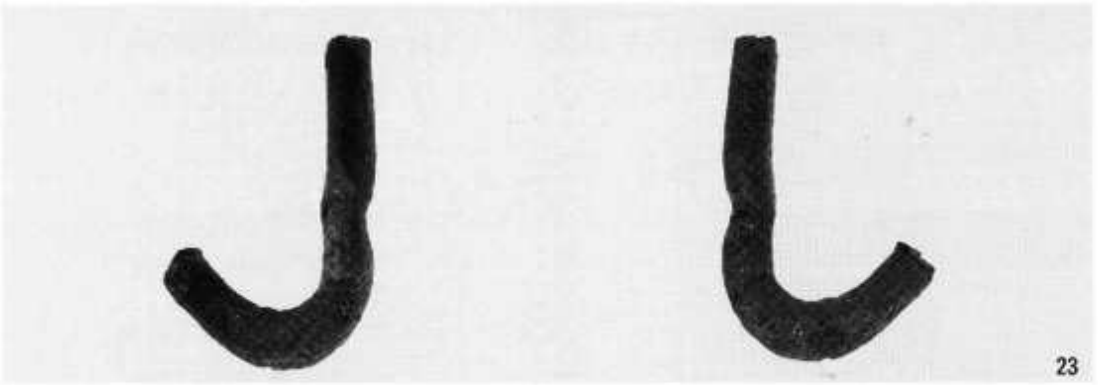
同上　完掘（南から）

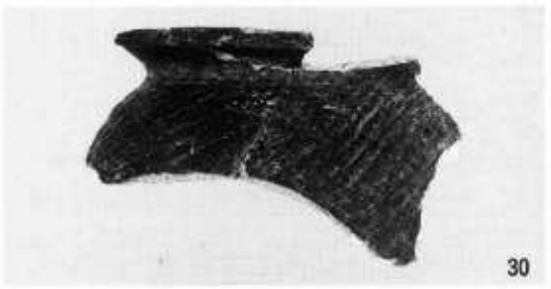
ＳＥ－５検出状況（南から）

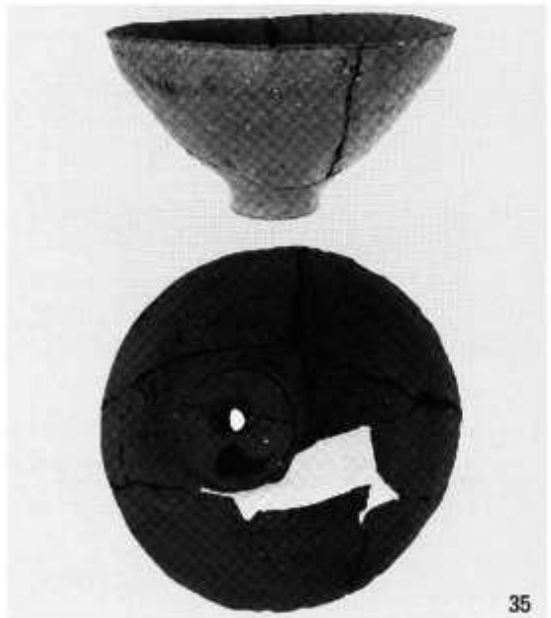
同上　井戸側検出状況（南から）



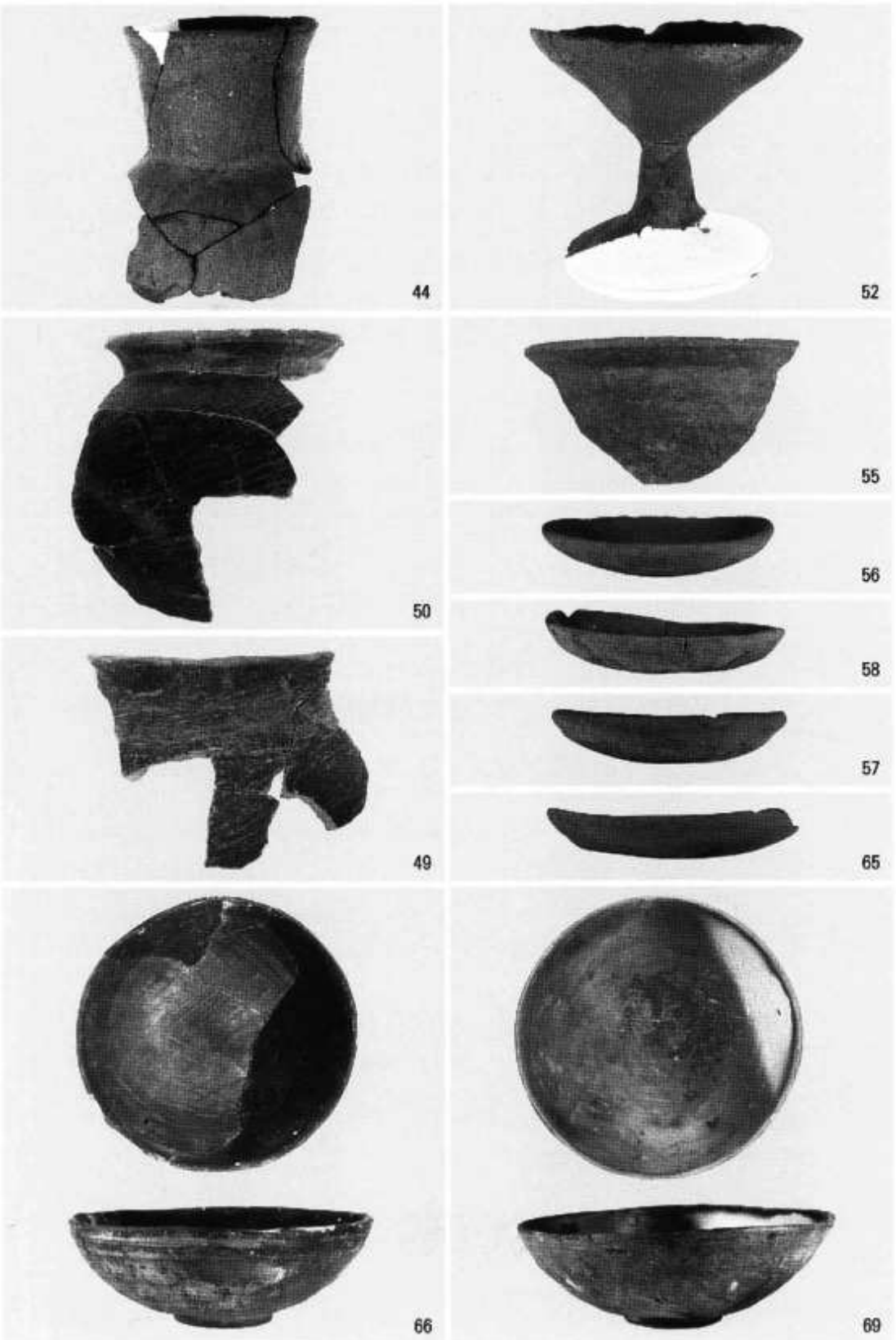
SI－1（1・3・4・13・14・15・16・18）、SI－2（20・21・22）出土遺物







ＳＩ－２（23）、ＳＥ－１（25・30・31・35・36・37）出土遺物



SD－1（44・49・50・52・55）、SE－2（56・57・58・65・66・69）出土遺物

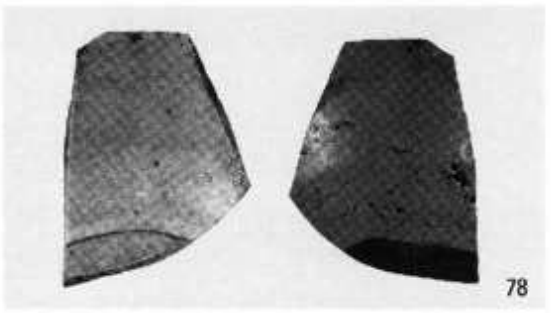
75

79

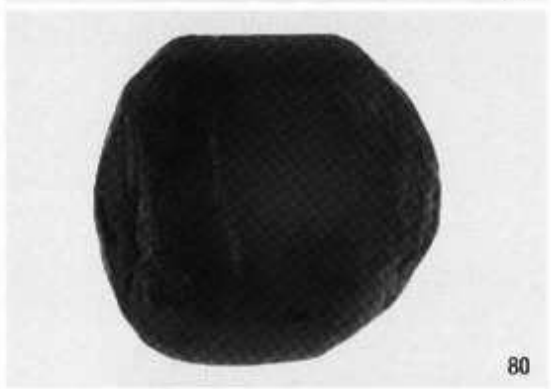
76

81

84

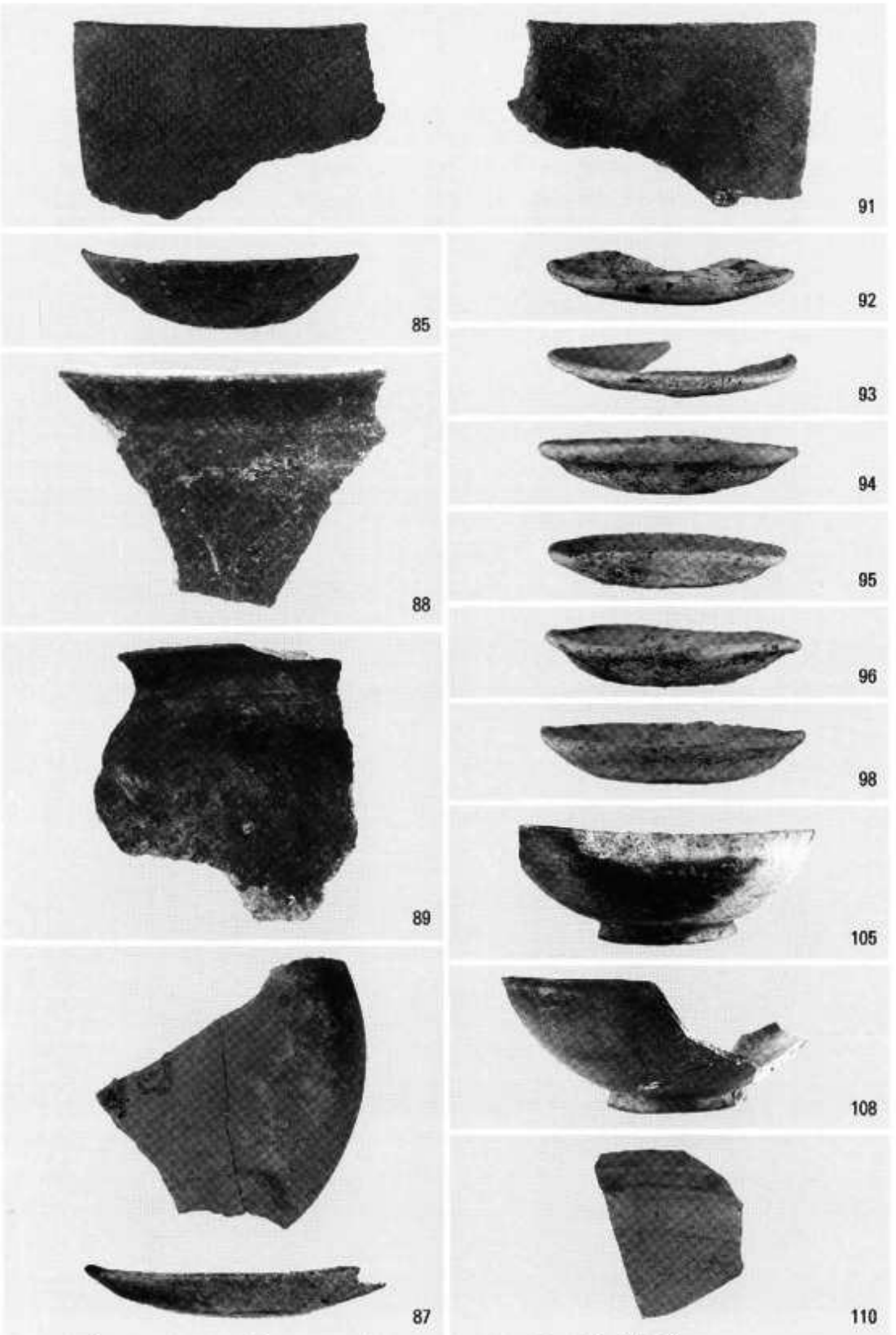

78

77


80

82

SE－2出土遺物



ＳＥ－３（85・87・88・89・91）、ＳＥ－４（92～96・98・105・108・110）出土遺物

109

111

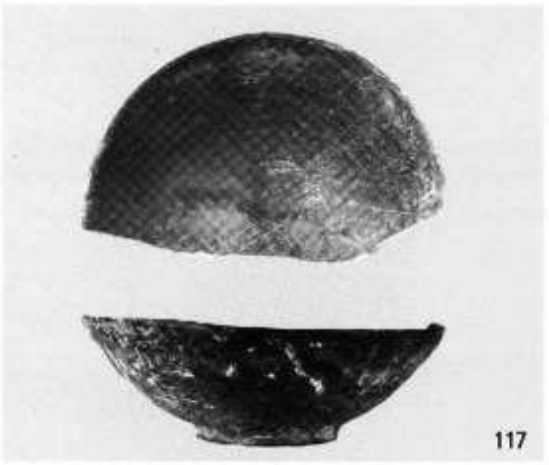
112

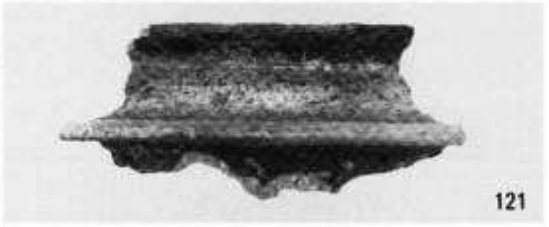
113

114

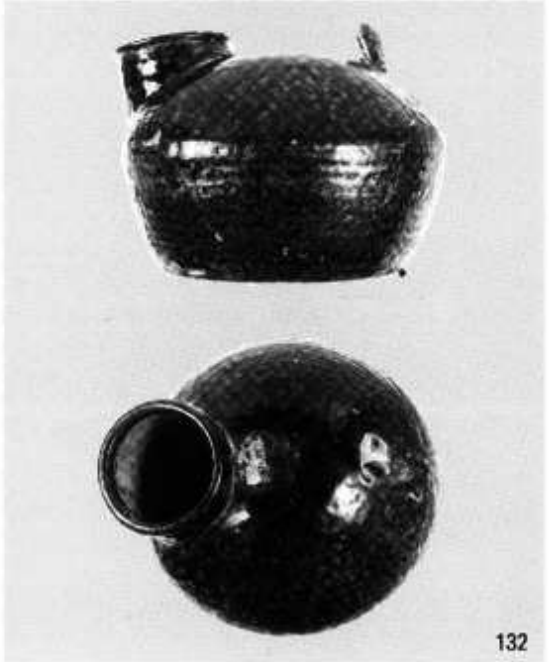
133

134

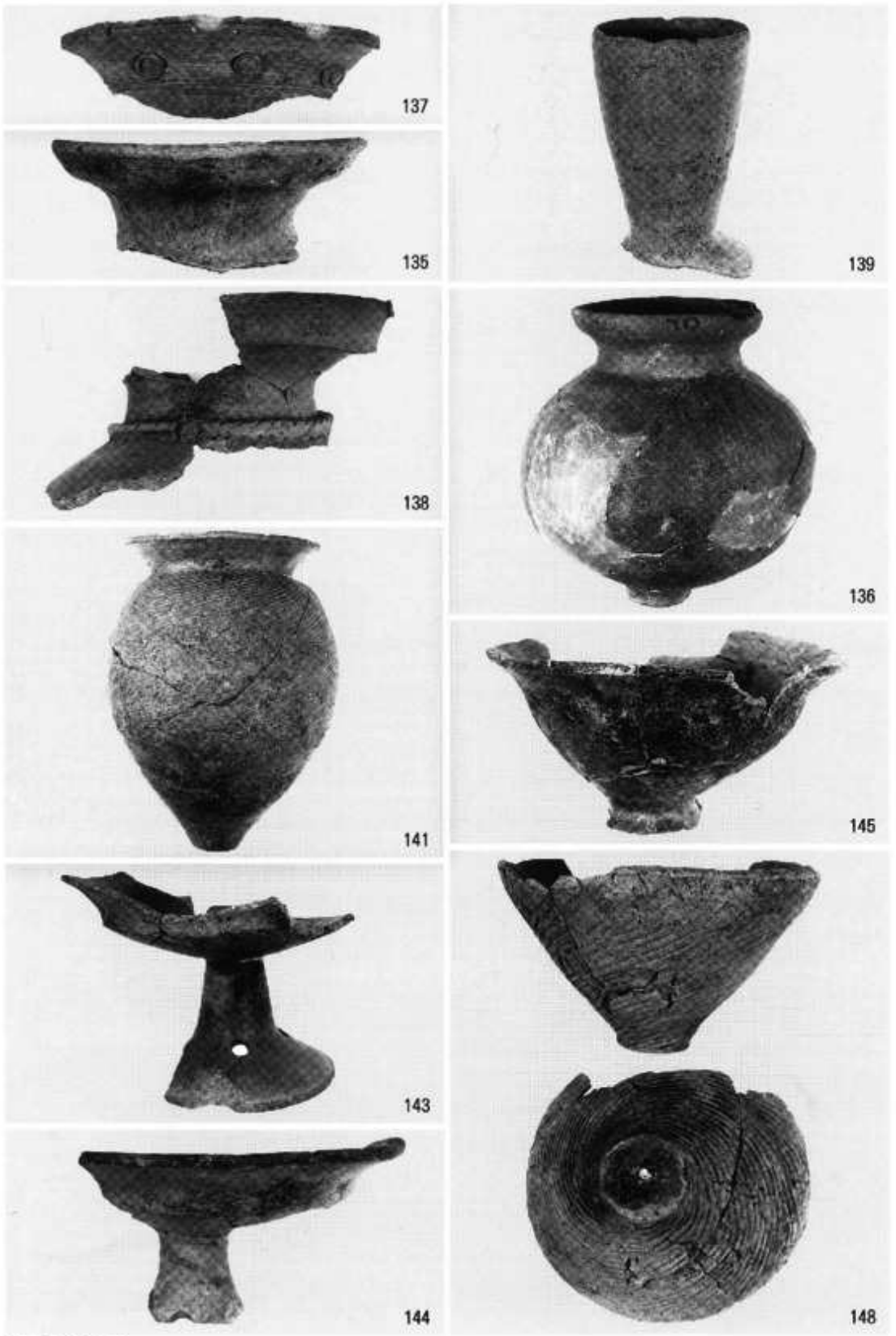

117


121

131


132

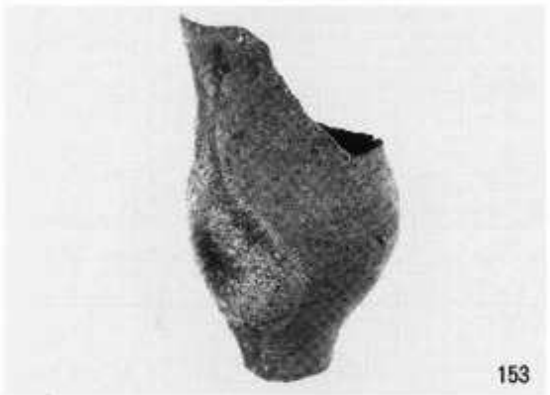
SE－4（109）、SE－5（111～114・117・121）、SE－10（131～134）出土遺物



第7層出土遺物

149

151


153

154

155

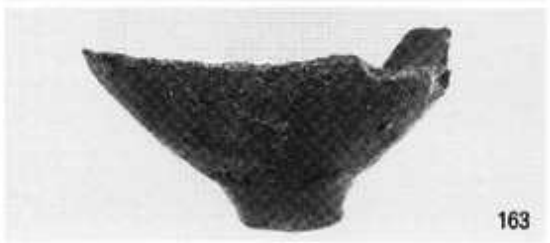
159

156

158

161

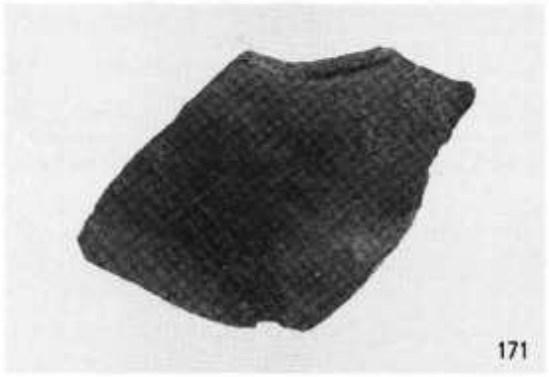
160


163

第6層出土遺物

167

169


171

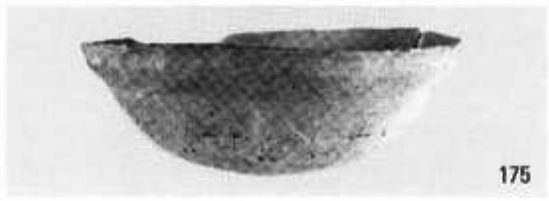
172

173

174

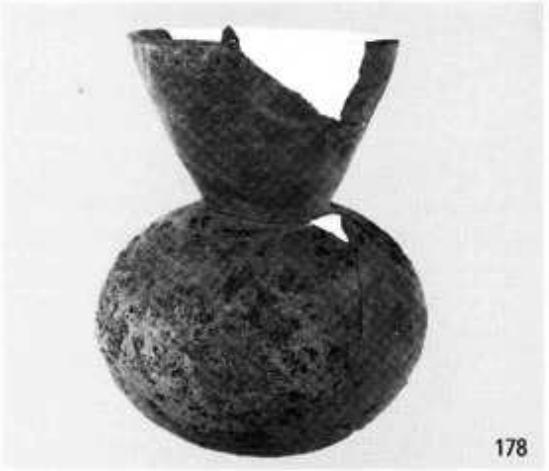
176

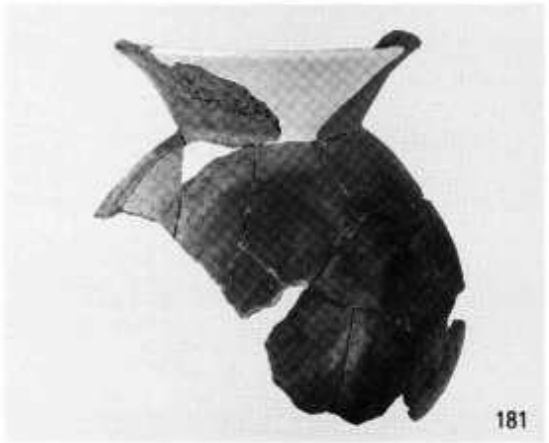
177


175

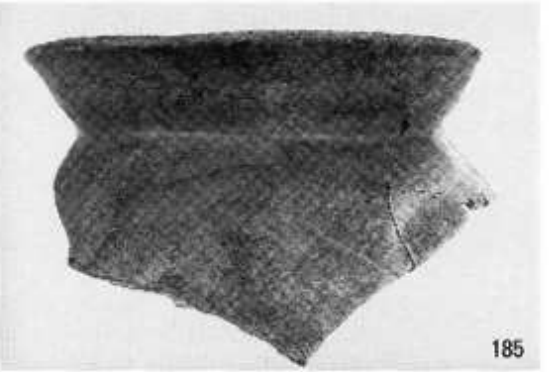
第6層出土遺物

179

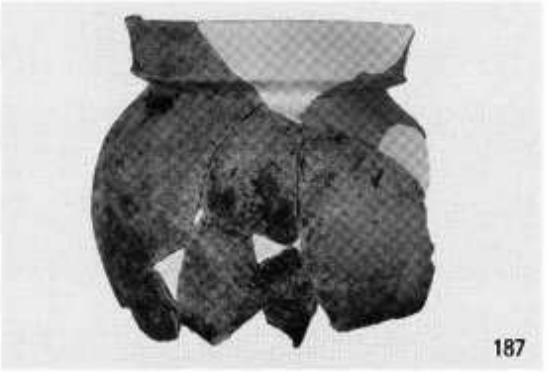

178


181

182


185

183

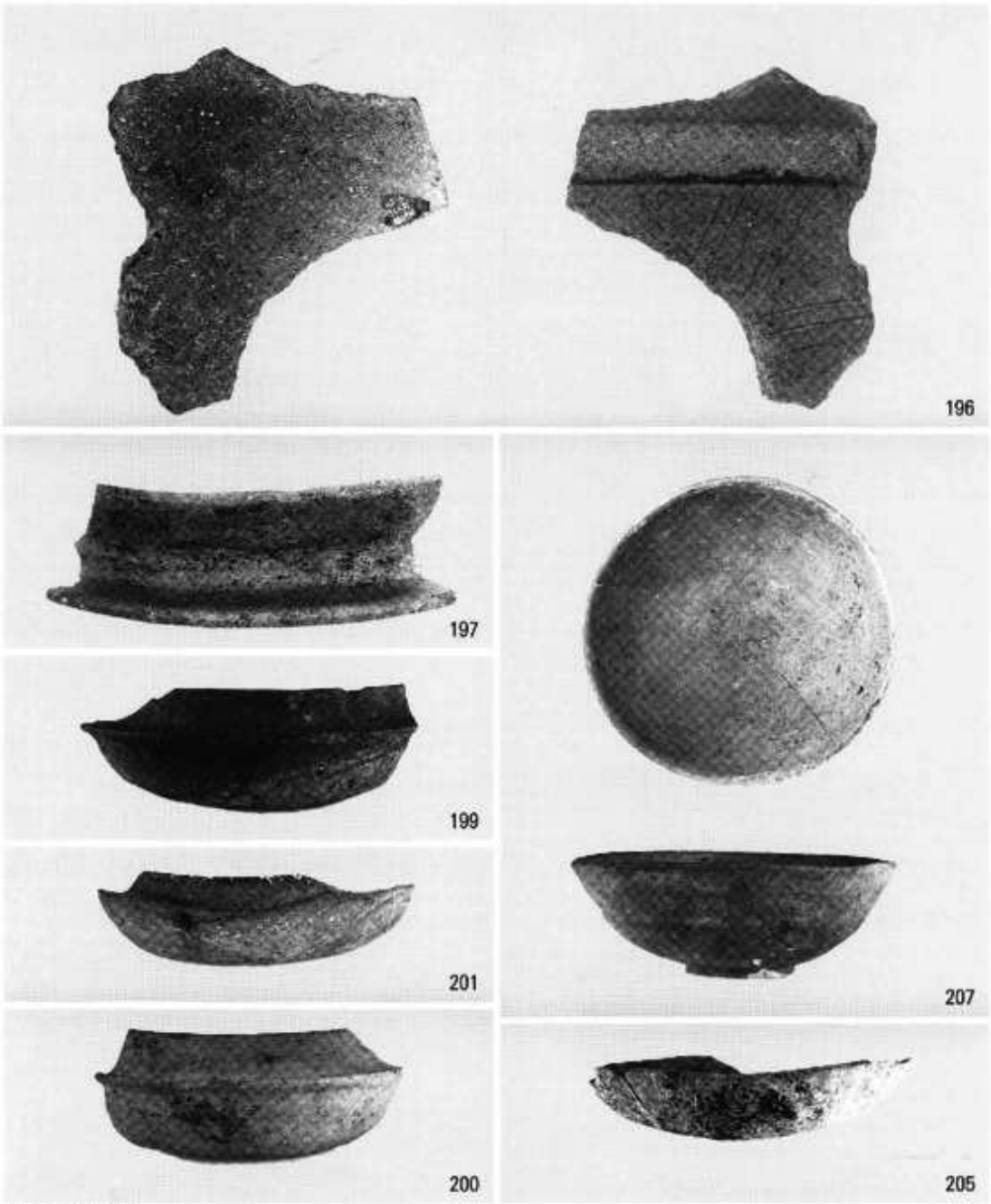

187

189

193

第5層出土遺物

図版二二



第5層出土遺物

Ⅱ　萱振遺跡第７次調査（ＫＦ88－７）

例　　言

1．本書は、八尾市泉町２丁目56他11筆・57他６筆で実施した事務所付き倉庫建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する資振遺跡第７次調査（ＫＦ88－７）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第141号　昭和63年12月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がセンコー株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成元年２月１日から３月29日（実働41日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積888㎡を測る。調査においては上野宣則・大澤美也子・崔竜太・沢村妙子・柴本恵津子・北原清子・小林博司・中切孝彦・八元聡志が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成８年３月31日に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－垣内洋平・北原清子・沢村妙子・真柄　竜、図面トレース　北原、遺物観察表－北原・原田、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．一部の胎土分析および岩石鑑定については奥田尚氏（八尾市立曙川小学校）、屋瓦については福永信雄氏（東大阪市教育委員会）から御教示をいただいた。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……63

第２章　調査概要……64

　第１節　調査の方法と経過……64

　第２節　基本層序……66

　第３節　各調査区の概要……66

　第４節　検出遺構・出土遺物……72

　　１）検出遺構……72

　　２）遺構に伴わない出土遺物……93

　第５節　出土遺物観察表……98

第３章　まとめ……107

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……63
第２図　調査区設定図……65
第３図　第１トレンチ～第４トレンチ西断面図……67
第４図　第５トレンチ～第７トレンチ断面図……68
第５図　検出遺構平面図……69・70
第６図　第１トレンチ南区　ＳＥ－１平断面図……73
第７図　第１トレンチ南区　ＳＥ－１出土遺物実測図……75
第８図　第４トレンチ北区　ＳＤ－６出土遺物実測図……78
第９図　第４トレンチ北区　ＳＤ－９、ＳＤ－10出土遺物実測図……79
第10図　第４トレンチ南区、第６トレンチ　ＳＤ－11半断面図……81
第11図　第４トレンチ南区、第６トレンチ　ＳＤ－11遺物出土状況……82
第12図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－１……86
第13図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図　２……87
第14図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－３……88
第15図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－４……89
第16図　第６トレンチ　ＳＤ－11出土遺物実測図……89
第17図　第４トレンチ北区　ＳＰ－38出土遺物実測図……92
第18図　第１・３・４・６トレンチ　第５層出土遺物実測図……95
第19図　第７トレンチ　第５層出土遺物実測図……96
第20図　既往調査出土屋瓦……109

表　目　次

第１表　小穴一覧表……97

写　真　目　次

写真１　西都廃寺の塔心礎……110

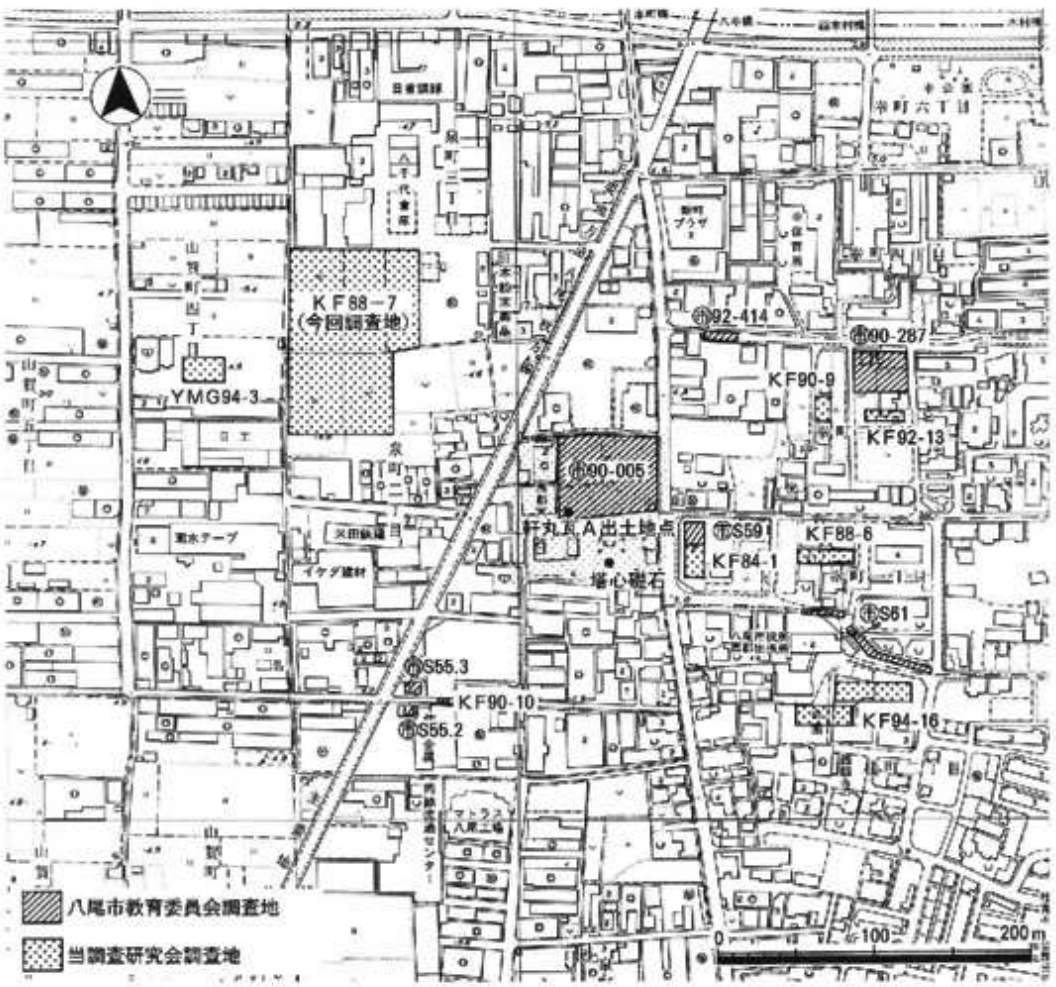
図 版 目 次

図版 一　第1トレンチ北区（南から）　第1トレンチ南区（北から）
第1トレンチ南区　SE－1検出状況（東から）
図版 二　第2トレンチ北区（南から）　第3トレンチ北区（南から）
第2トレンチ南区（北から）　第3トレンチ南区（北から）
図版 三　第4トレンチ北区（南から）　第4トレンチ南区　第1調査面（北から）
第4トレンチ南区　第2調査面（北から）
図版 四　第4トレンチ南区　SD－11北部遺物出土状況（東から）
同　上　SD－11南部遺物出土状況（東から）
図版 五　第5トレンチ北区（南から）　第6トレンチ（東から）
第5トレンチ南区（北から）　第7トレンチ（東から）
図版 六　第1トレンチ南区　SE－1、第4トレンチ　SD－6出土遺物
図版 七　第4トレンチ　SD－11出土遺物
図版 八　第4トレンチ　SD－11出土遺物
図版 九　第4トレンチ　SD－11出土遺物
図版 一〇　第4トレンチ　SD－11、第6トレンチ　SD－11、第4トレンチ　SP－38、
第3トレンチ・第7トレンチ　包含層出土遺物

第１章　調査に至る経過

萱振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積池に位置する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市の中央部から北部に位置する緑ヶ丘1～３丁目、旭ヶ丘５丁目、萱振町１～７丁目、北本町３・４丁目、楠根町１・４丁目、泉町１～３丁目、桂町１・２丁目、寺町１・３・４・６丁目一帯の東西0.5～0.9km、南北２kmがその範囲とされている。

今回調査を実施した萱振遺跡北部では、泉町２丁目に鎮座する天神社を中心として、古代寺院である西郡廃寺跡が想定されている。昭和55年以降、この周辺では、市教育委員会による小規模な発掘調査が行われており、西郡廃寺に関連した遺物が断片的に確認されるようになって



第１図　調査地周辺図

きた。さらに、昭和58年以降になると萱振町７丁目で大阪府教育委員会により府立八尾北高校の建設に伴う発掘調査が実施されたのを始めとして、昭和59年には当調査研究会が天神社の東側の寺町１丁目76で第１次調査（ＫＦ84－１）、昭和63年度には寺町１丁目60－１で第６次調査（ＫＦ88－６）を実施している。調査の結果、弥生時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。また、これら一連の調査では西郡廃寺に関連した遺物が検出されており、寺域の推定や存続時期を考えるうえで貴重な資料を提供する結果となった。

このような情勢下、第１次調査地（ＫＦ84－１）の北西約200ｍ地点においてセンコー株式会社から事務所付き倉庫建設をする旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。その後、対象地において八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）により昭和63年12月22日に遺構確認のための試掘調査が実施された。その結果、対象地において奈良時代から鎌倉時代に至る包含層の存在が確認された。これらの経緯を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査は事業主体者・八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会の三者協定に基づいて当調査研究会が事業主体者から委託を受けて実施することが決定された。現地での発掘調査は平成元年２月１日～３月29日で実働は41日間である。調査面積は888㎡を測る。報告書作成にかかわる業務は、現地発掘調査の終了後、平成８年３月29日まで随時実施した。

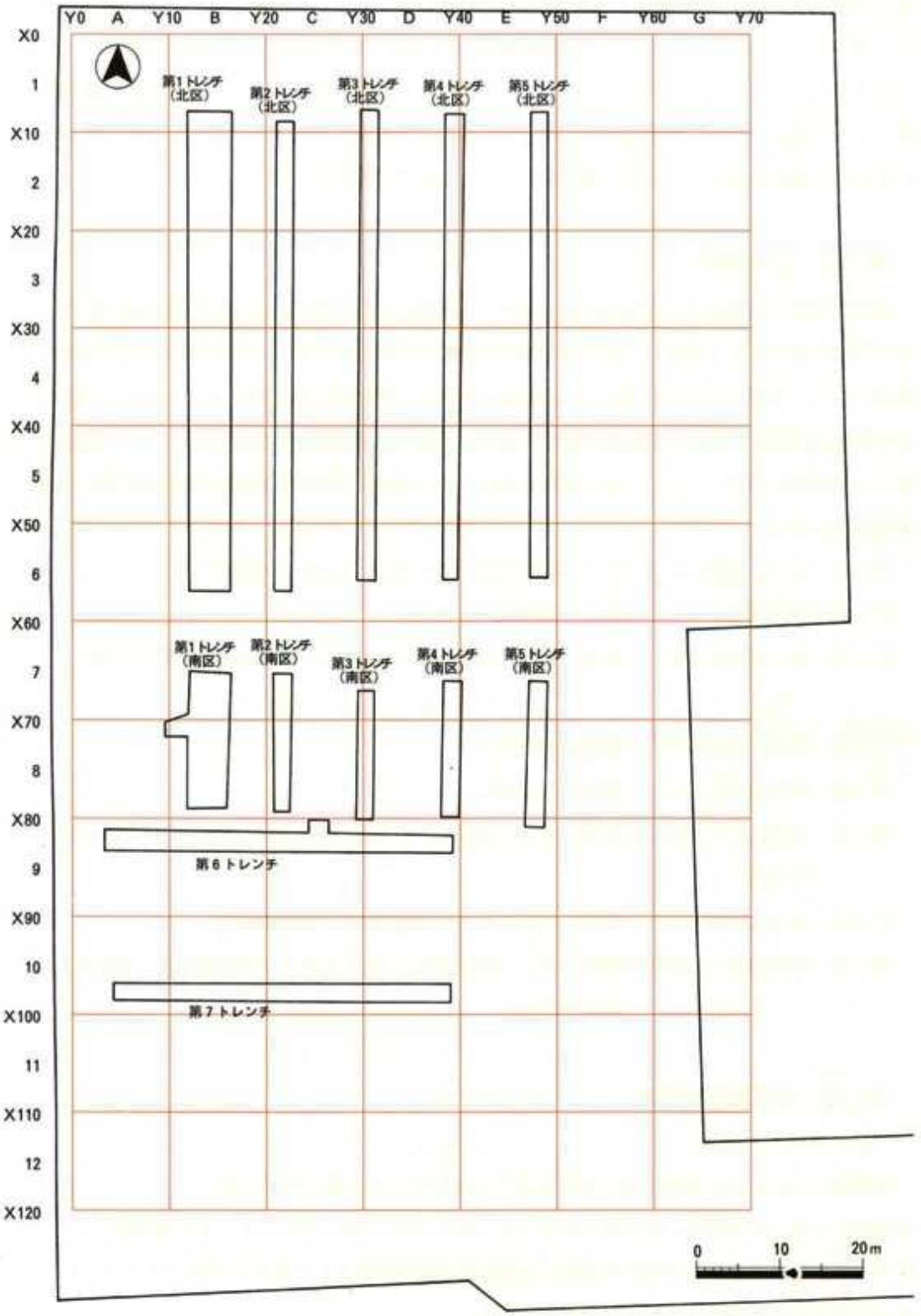
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

調査では、建物の基礎杭位置に沿って南北方向５本（第１トレンチ～第５トレンチ）、東西方向２本（第６トレンチ・第７トレンチ）の計７本のトレンチを設定した。ただ、南北方向のトレンチについては、調査区内の中央部を東西方向に伸びる里道が存在しており、この部分を調査対象外としたため調査区が二分される結果となった。したがって、南北方向のトレンチについては、北区と南区に区別した。

各調査区の規模は、第１トレンチ～第５トレンチの北区（長さ48ｍ）、第１トレンチ～第５トレンチの南区（長さ14ｍ）、第６トレンチ（長さ36ｍ）、第７トレンチ（長さ35ｍ）で、幅は第１トレンチの北区・南区が４ｍであるほかは、すべて２ｍである。

調査区の地区割りに付いては、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西70ｍ、南北120ｍにわたって設定した。一区画の単位は10ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｇ）、南北方向は算用数字（北から１～12）で示し、地区名の表示は１Ａ地区～12Ｇ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ120）、南北線（Ｙ０～Ｙ70）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、第１トレンチ～第５トレンチの北区および第１トレンチ南区で


Y0
A
Y10
B
Y20
C
Y30
D
Y40
E
Y50
F
Y60
G
Y70
X0
1
X10
2
X20
3
X30
4
X40
5
X50
6
X60
7
X70
8
X80
9
X90
10
X100
11
X110
12
X120
第1トレンチ（北区）
第2トレンチ（北区）
第3トレンチ（北区）
第4トレンチ（北区）
第5トレンチ（北区）
第1トレンチ（南区）
第2トレンチ（南区）
第3トレンチ（南区）
第4トレンチ（南区）
第5トレンチ（南区）
第6トレンチ
第7トレンチ
0
10
20m

第２図　調査区設定図

は、機械掘削0.8～1.2m前後、人力掘削0.2m前後で、第2トレンチ～第5トレンチの南地区および第6トレンチ・第7トレンチでは機械掘削0.7m前後、人力掘削0.2m前後である。

各調査区ともに1面を調査対象にしたが、第4トレンチの南地区については、2面を調査対象とした。調査の結果、各調査区から古墳時代前期・古墳時代後期・奈良時代・近世に比定される遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナにして15箱程度である。

第2節　基本層序

調査対象地の面積は約10,000㎡を測るもので、旧状は全域が水田であったが調査時点においては既に整地が完了しており、調査地全域の旧地形は不明であった。調査の結果から微地形を推定すれば、古墳時代後期を中心とした遺構を検出した第6層上面は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、両者の比高差は最大で0.6mを測る他、東西方向では第2トレンチ南区を境として西側に傾斜していたことが確認された。ここでは、普遍的に存在した7層を摘出して基本層序とした。

第0層　客土。層厚1.0～1.1m。上面の標高はT.P.+4.6～5.0mである。

第1層　灰色砂質シルト。旧耕土。層厚0.1～0.2m。

第2層　青灰色砂質シルト。床土。層厚0.1～0.3m。マンガン・酸化鉄が斑点状に付着している。

第3層　褐灰色砂質シルト。層厚0.1～0.4m。

第4層　灰茶色砂質シルト。層厚0.1～0.3m。

第5層　淡茶灰色～淡灰褐色砂質シルト。層厚0.1～0.2m。古墳時代前期～鎌倉時代の遺物を少量含む。

第6層　灰褐色粘質シルト。層厚0.1～0.3m。古墳時代後期の遺構検出面。

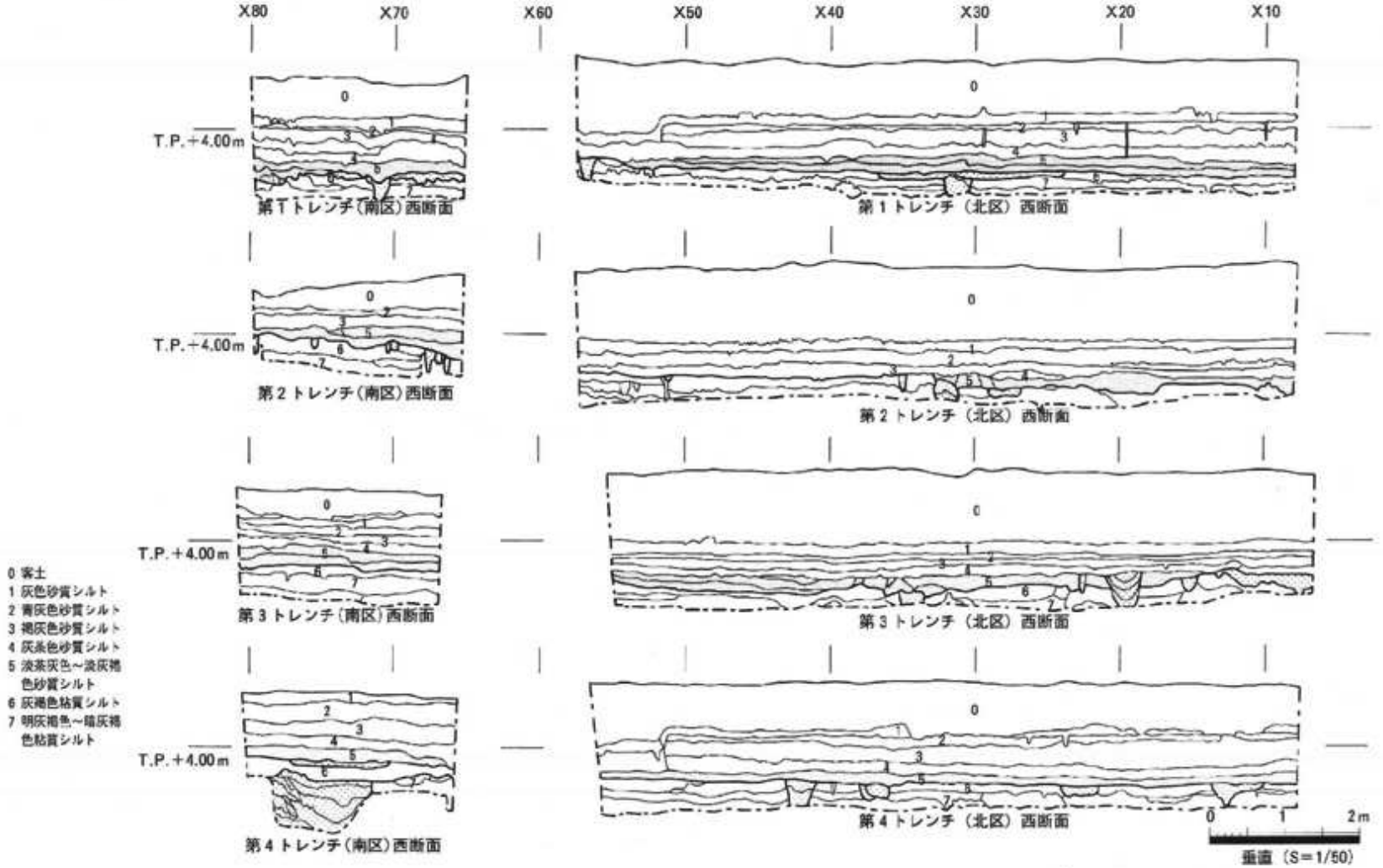
第7層　明灰褐色～暗灰褐色粘質シルト。層厚0.2～0.3m。第4トレンチ南区第2調査面（古墳時代前期）の遺構検出面。

第3節　各調査区の概要

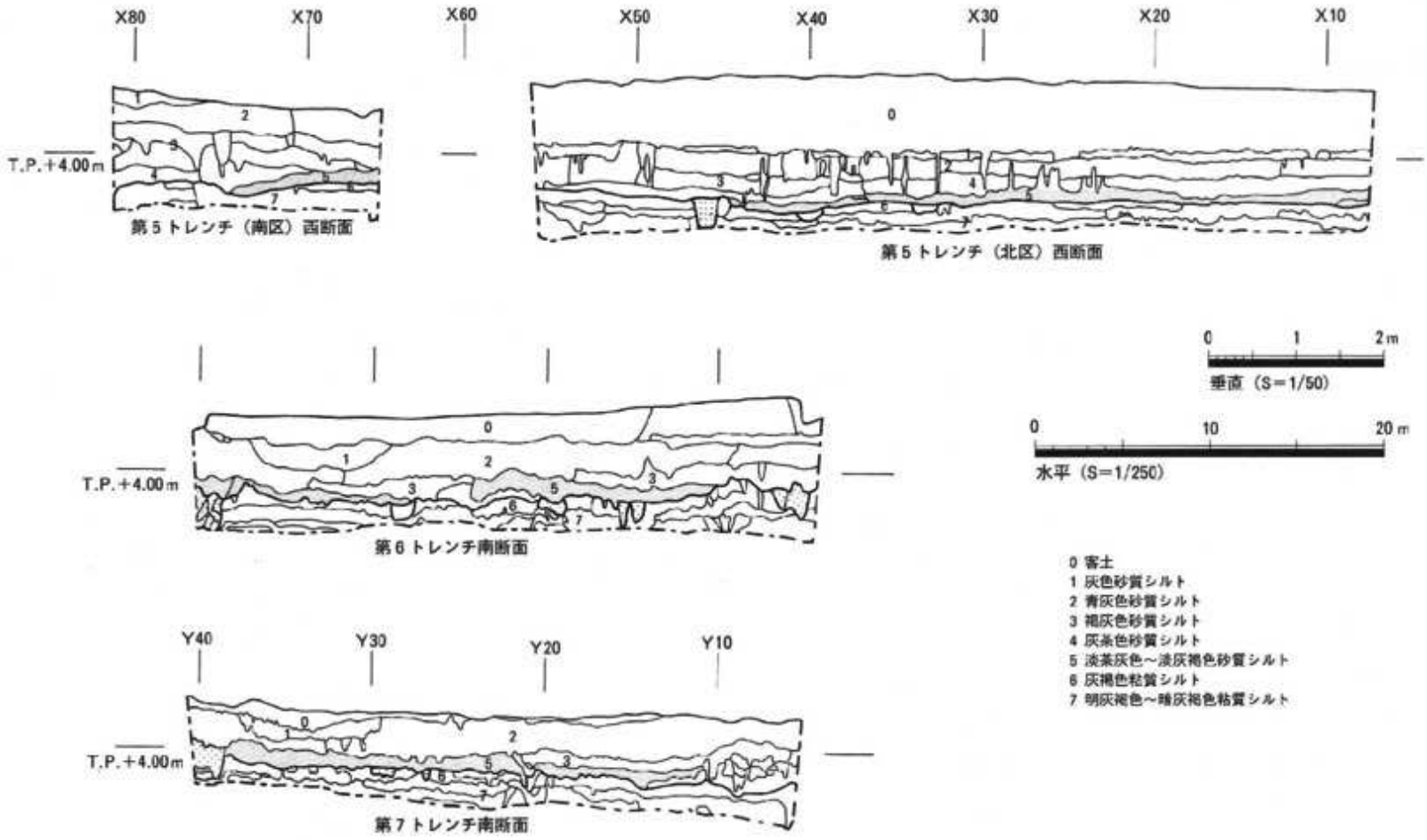
・第1トレンチ北区

現地表下1.4～1.6m（標高3.6～3.3m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝4条（SD－1～4）・小穴2個（SP－1・2）を検出した。そのうち、SD－2から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、SD－3・4から古墳時代後期に比定される遺物が出土している。

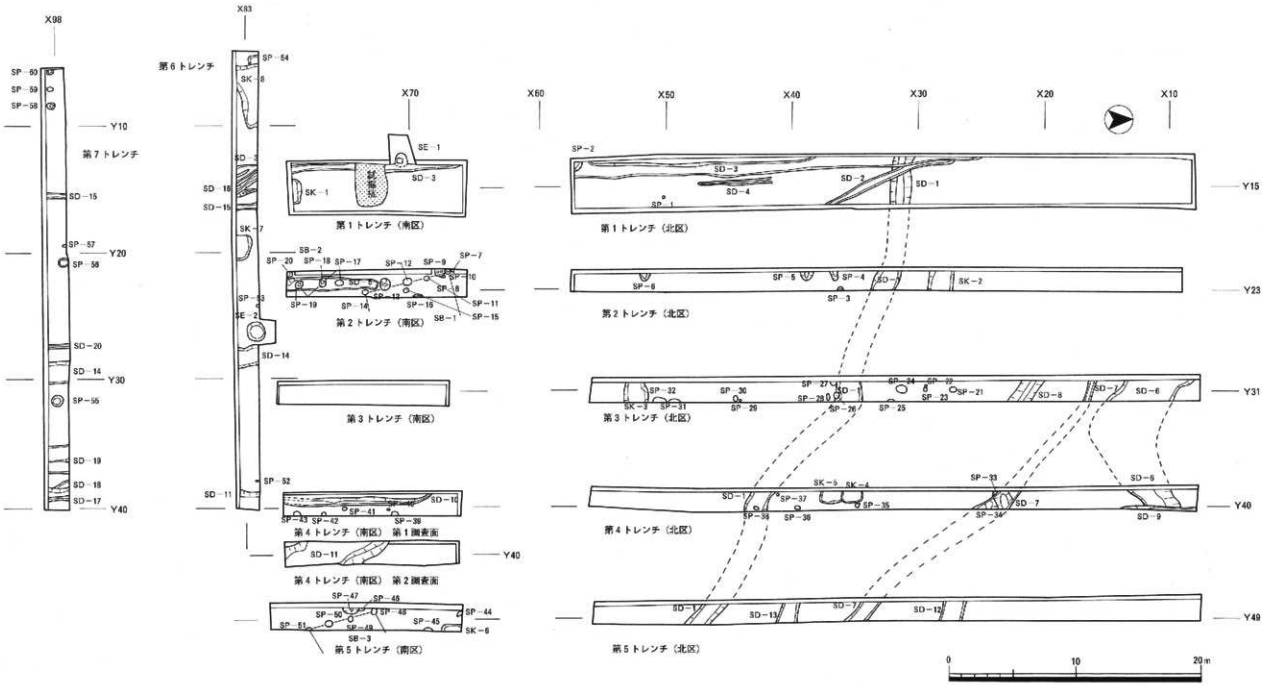
・第1トレンチ南区



第3図　第1トレンチ～第4トレンチ西断面図



第4図　第5トレンチ～第7トレンチ断面図


X98
X83
X70
X60
X50
X40
X30
X20
X10
第7トレンチ
第6トレンチ
第1トレンチ（南区）
第2トレンチ（南区）
第3トレンチ（南区）
第4トレンチ（南区）　第1調査面
第4トレンチ（南区）　第2調査面
第5トレンチ（南区）
第1トレンチ（北区）
第2トレンチ（北区）
第3トレンチ（北区）
第4トレンチ（北区）
第5トレンチ（北区）
Y10
Y15
Y20
Y23
Y30
Y31
Y40
Y49
0
10
20m

第5図　検出遺構平面図

現地表下1.3m（標高3.4m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、井戸1基（ＳＥ－1）・土坑1基（ＳＫ－1）・溝1条（ＳＤ－3）を検出した。なお、ＳＥ－1については西壁面で確認されたため、平面的な広がりを確認する目的で一部西側に拡張した。遺物はＳＥ－1・ＳＫ－1・ＳＤ－3から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第2トレンチ北区

現地表下1.4～1.7m（標高3.5～3.3m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑1基（ＳＫ－2）・溝1条（ＳＤ－1）・小穴4個（ＳＰ－3～6）を検出した。遺物はＳＰ－6から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、ＳＰ－4・5からは古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第2トレンチ南区

現地表下1.2m（標高3.6m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、掘立柱建物2棟（ＳＢ－1・ＳＢ－2）・溝1条（ＳＤ－5）・小穴14個（ＳＰ－7～20）を検出した。遺物はＳＤ－5・ＳＰ－8・9・11・12・13・15・18から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第3トレンチ北区

現地表下1.6m（標高3.5m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑1基（ＳＫ－3）・溝4条（ＳＤ－1・ＳＤ－6～8）・小穴12個（ＳＰ－21～32）を検出した。遺物はＳＰ－24・27から古墳時代前期に比定される遺物が出土したほか、ＳＫ－3・ＳＤ－6・ＳＰ－21から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第3トレンチ南区

現地表下1.1m（標高3.6m）に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面としたが、遺構は検出されなかった。さらに下部0.5mまで掘り下げ調査を実施したが、遺構の存在は認められなかった。

・第4トレンチ北区

現地表下1.3m（標高3.5m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、土坑2基（ＳＫ－4・5）・溝4条（ＳＤ－1・ＳＤ－6・7・9）・小穴6個（ＳＰ－33～38）を検出した。遺物はＳＫ－4・5、ＳＤ－6・7・9、ＳＰ－36から古墳時代後期、ＳＰ－38から奈良時代に比定される遺物が出土した。

・第4トレンチ南区

調査では、2面（第1調査面・第2調査面）にわたる調査を実施した。

第1調査面

現地表下0.9m（標高3.8m）前後に存在する第6層灰褐色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝1条（SD－10）・小穴5個（SP－39～43）を検出した。遺物はSD－10から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第2調査面

第1調査面より0.3m前後（標高3.6m）に存在する第7層上面明灰褐色～暗灰褐色粘質シルトを調査対象面とした。その結果、溝1条（SD－11）を検出した。遺物は古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器類がコンテナ4箱程度出土した。

・第5トレンチ北区

現地表下1.3m（標高3.5m）前後に存在する第6層褐灰色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝4条（SD－1・7・12・13）を検出した。遺物はSD－7から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第5トレンチ南区

現地表下1m（標高3.6m）前後に存在する第6層褐灰色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、掘立柱建物1棟（SB－3）・土坑1基（SK－6）・小穴8個（SP－44～51）を検出した。遺物はSP－44から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

・第6トレンチ

現地表下0.9m（標高3.8m）前後に存在する第6層褐灰色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、井戸1基（SE－2）・土坑2基（SK－7・8）・溝5条（SD－3・11・14～16）・小穴3個（SP－52～54）を検出した。遺物はSD－11から古墳時代前期、SK－7・8から古墳時代後期、SE－2から近世に比定される遺物が出土した。

・第7トレンチ

現地表下0.7m（標高3.9～3.7m）前後に存在する第6層褐灰色粘質シルト上面を調査対象面とした。その結果、溝6条（SD－14・15・17～20）・小穴6個（SP－55～60）を検出した。遺物はSD－14・17・18・19・20、SP－55・56から古墳時代後期に比定される遺物が出土した。

第4節　検出遺構・出土遺物

1）検出遺構

掘立柱建物（SB）

SB－1

第2トレンチ南区の北部で検出した。直線的に並ぶSP－10～SP－14が南北棟建物を構成する柱列と推定される。桁行4間分（7m）を検出した。柱間は1.7m前後である。おそらく、

東部方向に展開したものと推定される。

SB－2

第2トレンチ南部の南端で検出した。大半が調査区外のため不明であるが、SP－18～SP－20が掘立柱建物を構成した柱穴と推定されるもので、平面および断面で検出した部分を含めて、梁行2間分（2.9m）、桁行2間分（2.5m）を検出した。

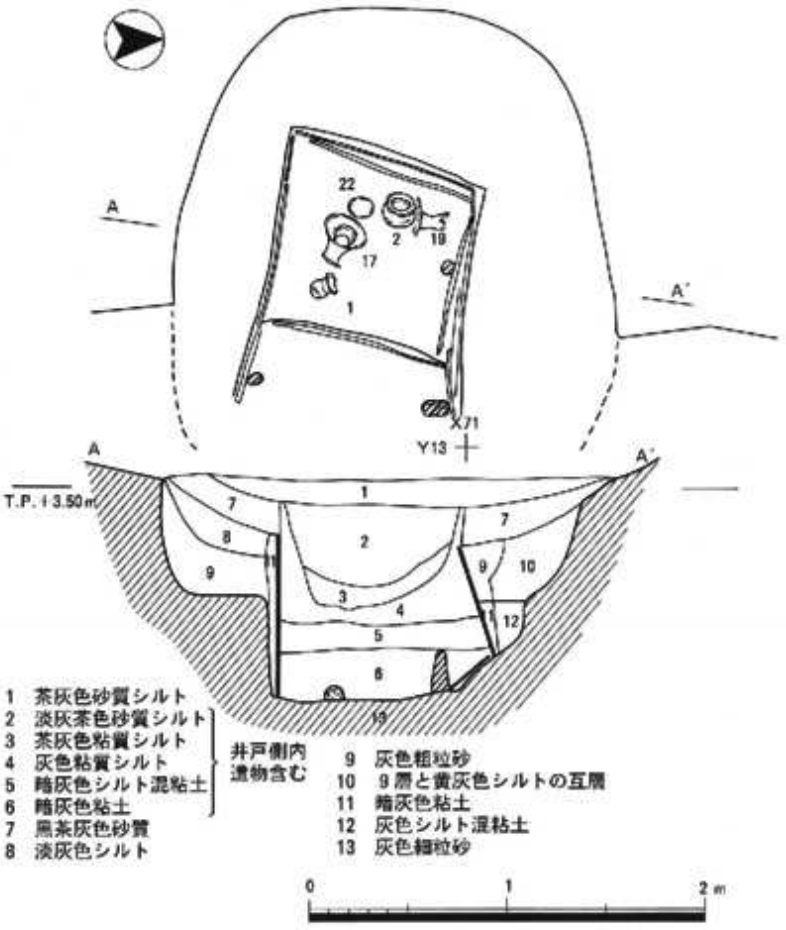
SB－3

第5トレンチ南区で検出した。直線的に並ぶSP－48～SP－51が南北棟建物を構成する柱列と推定される。桁行3間分（5.5m）を検出した。柱間1.7～2.0mと不揃いである。おそらく、東部方向に展開したものと推定される。

井戸（SE）

SE－1

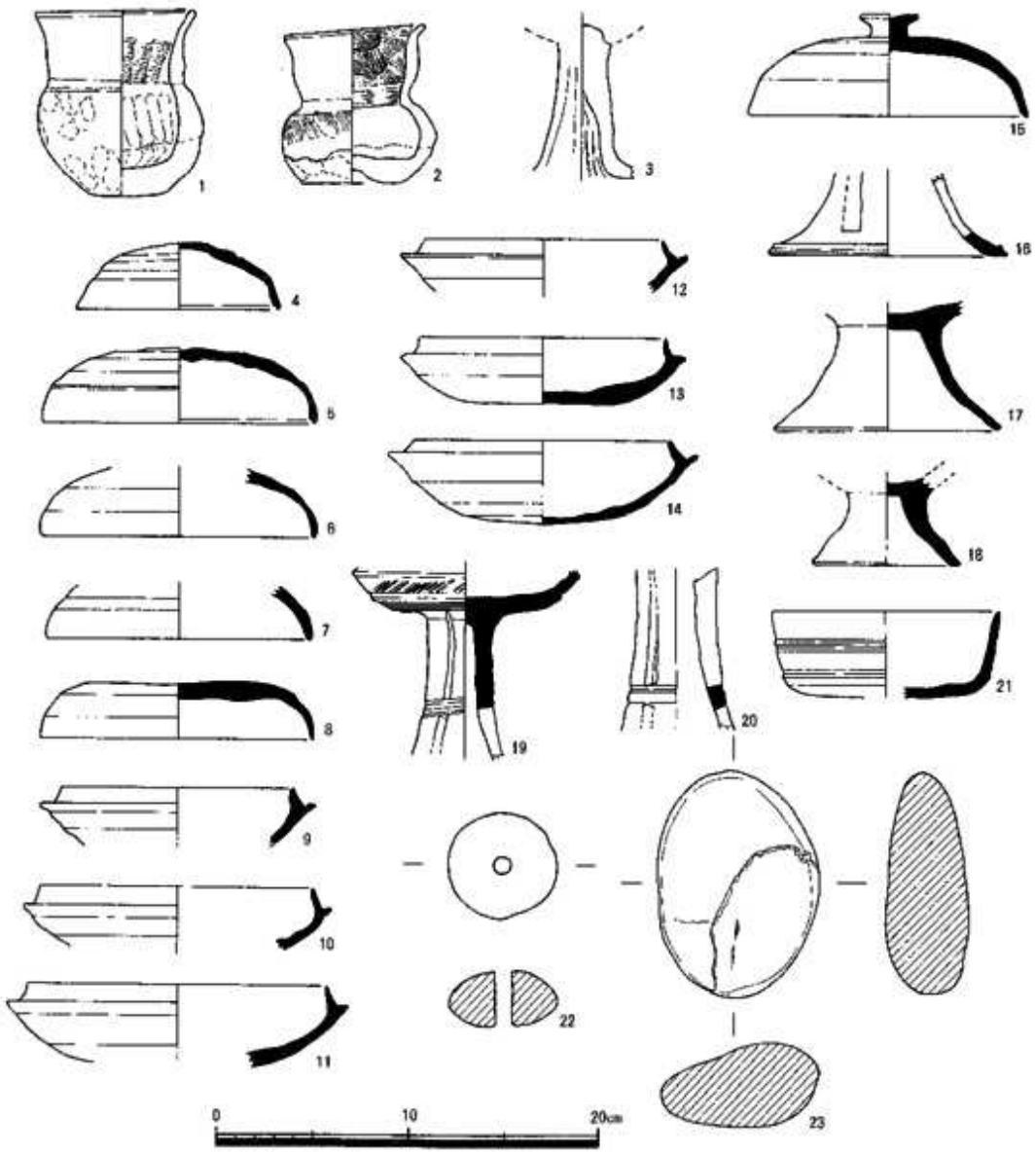
当初、第1トレンチ南区の西壁面で確認されたが、全容の把握のため西部に調査区を拡張している。楕円形を呈する掘形のほぼ中央部に横板井篭組の井戸側が設置されている。掘形の規模は、幅1.15m、深さ0.65mを測る。井戸側は横板1枚ないしは2枚を使用して井篭組にしており、上面の幅は一辺50cm前後を測る。井戸側遺存部分の深さは42cmを測るが、堆積土層からみてさらに上部に1段井戸側が存在していたようである。井戸側を構成する板材は南北側が（長さ59～72cm、高さ42cm、厚さ2cm前後）、東西側が（長さ48cm前後、



第6図　第1トレンチ南区　SE－1平断面図

高さ42cm、厚さ2cm前後）で、南北側の板材は長いものが使用されている。井戸側の保持については、四隅に仕口を設けて組まれたものではなく、打設された木杭に沿って井戸側が固定されている。埋土は掘形内が7層、井戸側内が5層から成る。井戸底部は湧水層である第13層の灰色細粒砂に達している。遺物は井戸側内に堆積する第2層～第6層から出土しており、特に井戸側内の下部にあたる第6層に集中して出土している。出土した遺物には、土師器壺・高杯、須恵器杯蓋・杯身・高杯のほか、石製紡錘車および石材がある。

そのうち、図化したものは土師器壺2点（1・2）・高杯1点（3）、須恵器有蓋短頸壺蓋1点（4）、杯蓋4点（5～8）・杯身6点（9～14）・有蓋高杯蓋1点（15）・無蓋高杯3点（16～18）・長脚高杯3点（19～21）、石製紡錘車1点（22）、石材1点（23）の計23点である。土師器壺（1・2）はともに井戸側内の最下層である第6層から出土している。（1）は平底の底部を有する小型壺で、口縁部の一部を欠く以外は完存している。口頸部は比較的丁寧な調整が行われているが、体部はややいびつで底部の器肉も厚い。（2）は（1）と同様口縁部の一部を欠く以外は完存している。手づくね成形によるもので、全体に成形は雑で、平底の底部中央が上げ底になっている。2点ともに口頸部内外面および体部外面に赤色顔料が塗布されている。ともに褐色系の色調で、胎土には長石・石英・黒雲母の小砂粒が散見される。（3）は土師器高杯の柱状部である。柱状部外面に不規則な面を持つやや雑な作りの高杯である。柱状部内面にシボリ目が認められる。色調は淡褐色で、胎土は精良である。第2・3層出土。（4）は有蓋短頸壺の蓋で1/2が遺存している。口径10.6cm、器高3.5cmを測る。天井部全体に灰かぶりが認められる。第2・3層出土。（5～8）は杯蓋で（5・6）が1/4程度遺存する他は1/8程度の小片である。（5）は天井部と口縁部の境に稜を有するもので、図化したなかではやや古相に位置づけられる。（5）の天井部に灰かぶりが認められる。色調は（5）が灰色の他は淡灰色である。（5）が第4・5層出土、他は第2・3層出土。杯身は6点（9～14）図化した。（13・14）が1/2程度遺存している。他は1/3～1/6程度の小片である。全て第2・3層出土。（14）がやや深みのある底体部を有する以外は浅い底体部を持つものである。たちあがりは、内傾して伸びた後直立する（13）以外は内傾して小さく伸びる。色調は（11・12）が淡青灰色の他は灰白色を呈する。（15）は有蓋高杯蓋で1/2程度が遺存している。復元口径14.5cm、器高5.4cm、つまみ径3.0cm、つまみ高1.2cmを測る。色調は灰色で天井部外面の一部に灰かぶりが認められる。第2・3層出土。（16）は高杯裾部の小片である。裾部内面に灰かぶりが認められる。第4・5層出土。（17）は無蓋高杯の脚部と推定される。裾部は完存している。第6層出土。（18）は小型の無蓋高杯で裾部は一部を欠くが概ね完存している。第2・3層出土。（19～21）は長脚高杯である。（19）が第6層、（20）が第4・5層、（21）が第2・3層出土である。（19）の杯部外面下半にカキメ、中位の稜を境に上部には列点文が施文されている。（22）



第7図　第1トレンチ南区　ＳＥ－1出土遺物実測図

は算盤玉状を呈する石製紡錘車である。最大幅5.6cm、厚さ2.9cm、重さ110ｇを測るもので、中央部に径0.9cmを測る小孔が穿たれている。第6層出土。灰白色～黒色の色調を呈するもので、石材は安山岩である。(23) は上面形が楕円形で、断面はやや偏平な石材で、表面の色調は、白色で部分的にやや赤味を帯びている。第2・3層から出土しており、廃絶段階に土器類と共に廃棄されたものである。石材は石英である。

出土遺物のなかで、井戸側最下層の第6層から出土した赤色顔料が塗布された土師器壺（1・2）、紡錘車（22）、須恵器類（17・19）については、井戸廃絶時における祭祀的要素が強いも

のと推定される。遺物の時期については、一部古相のものが含まれているが、井戸側内の最下層である第6層から出土したものについては、概ね田辺氏編年のTK43型式に比定されることから、井戸の廃絶時期は6世紀後半の一時期が推定される。

SE－2

第6トレンチの9C地区で検出した。二段掘形を有する素掘井戸である。幅2.9mを測る隅丸方形の掘形のほぼ中央部に径2.0m測る円形の井戸側部分が設置されている。深さは1m程度迄は確認できたが以下は湧水のため調査不可能であった。埋土は上層が灰褐色粘質シルトで井戸側部分が青灰色粘質シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦器、肥前系磁器、平瓦等の小片が少量出土しており、構築時期は近世と考えられる。

土坑（SK）

SK－1

第1トレンチ南区の南端で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西長1.95m、南北長0.8m、深さ0.16mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

SK－2

第2トレンチ北区の3C地区で検出した。東部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅2m、深さ0.13mを測る。埋土は2層から成り、上層からは炭が含まれていた。遺物は出土していない。

SK－3

第3トレンチ北区の6D地区で検出した。東西方向に伸びるもので、東端および西端は調査外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.6m、南北幅1.95m、深さ0.45mを測る。断面形状は、逆台形である。埋土は6層から成るもので、下層部分にはシルト層と粘土層が混在した不均質な層相が見られたが上部はシルト層を中心とする上層がほぼ水平に堆積していた。遺物は古墳時代後期の土師器、須恵器が極少量と平瓦片が出土したが図化し得たものはない。

SK－4

第4トレンチ北区の4D地区で検出した。南端でSK－5を切っている。西部が調査区外に至り全容は不明であるが、検出部分から推定すれば南北方向に長い長方形を呈するものと考えられる。検出部分で、東西幅0.8m、南北幅1.6m、深さ0.08mを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土はシルト～細粒砂を主とする3層から成る。遺物は須恵器の小片が1点出土したのみで図化し得たものはない。

SK－5

SK－4の南側に隣接しており、北端はSK－4に切られ、西端は調査区外に至るため不明

である。ＳＫ－４と同様、南北方向に長い長方形を呈するもので、東西長0.95ｍ、南北長1.68ｍ、深さ0.08ｍを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土はシルト～細粒砂を主とする３層から成る。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土したが、図化し得たものはない。

ＳＫ－６

第５トレンチ南区の北東隅で検出した。北部および東部が調査に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅0.55ｍ、南北幅1.5ｍ、深さ0.43ｍを測る。埋土は３層から成る。土師器、丸瓦、平瓦の小片が少量出土したが図化し得たものはない。

ＳＫ－７

第６トレンチの９Ｂ・Ｃ地区で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅1.9ｍ、南北幅1.15ｍ、深さ0.26ｍを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は11層から成る。遺物は古墳時代後期に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土している。

ＳＫ－８

第６トレンチの西部で検出した。ＳＰ－54の東部を切っている。南部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では不定形を呈している。幅1.2～5.0ｍ、深さ0.48ｍを測る。埋土は断面形状に沿って６層が堆積している。遺物は古墳時代後期に比定される土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

第１トレンチ北区の４Ｂ地区から第５トレンチ北区の５Ｆ地区にかけて検出した。東西方向に弧状に伸びるもので、検出長43ｍ、幅2.0ｍ前後、深さ0.8ｍ前後を測る。断面形状は逆台形である。埋土は中層から下層にかけて粗粒砂～細粒砂で充填されていることから、比較的流勢が強い時期があったことが想定される。遺物は出土していないが、第１トレンチ北区では古墳時代前期の遺物が出土したＳＤ－２に切られている関係にあることから、時期的には古墳時代前期以前のものである。

ＳＤ－２

第１トレンチ北区の３・４Ｂ地区で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、検出長10.2ｍ、幅0.4～0.7ｍ、深さ0.04ｍを測る。埋土は灰褐色粘質シルトの単一層である。遺物は古墳時代前期初頭（庄内式期新相）に比定される壺、甕の小片が極少量出土したが図化し得たものはない。

ＳＤ－３

第１トレンチ北区の３Ｂ地区から第６トレンチ９Ｂ地区にかけてほぼ南北方向に伸びている。検出長48ｍ、幅0.4～0.5ｍ、深さ0.03～0.07ｍを測る。溝底の高低差は約0.2ｍで北端側が低い

ことから、北流したものと推定される。断面の形状は浅い逆台形である。埋土は灰茶色シルトの単一層である。土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

SD－4

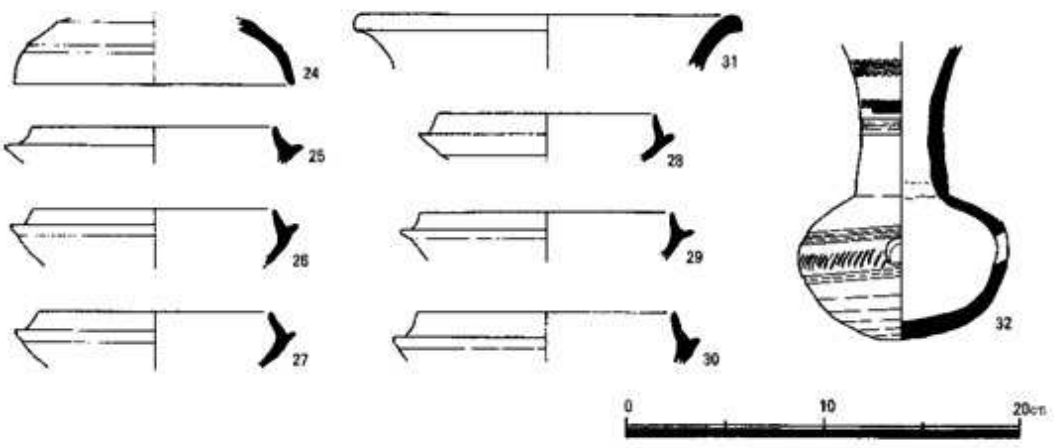
第1トレンチ北区の5B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長5.8m、幅0.2～0.4m、深さ0.04mを測る。断面の形状は浅いU字形を呈している。埋土は灰茶色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

SD－5

第2トレンチ南区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長7.2m、幅0.68～1.05m、深さ0.05mを測る。断面の形状は浅いU字形を呈している。埋土は灰褐色砂質シルトの単一層である。土師器、須恵器の小片の他、混入品と推定される瓦器碗の小片が2点出土している。

SD－6

第3トレンチ北区北端部から第4トレンチ北区北端部で検出した。検出部分では流路方向を異にすることから、両調査区間において「く」の字状に屈曲するものと推定される。なお、第4トレンチの東部はSD－9に切られている。幅2.8～5.5m、深さ0.2m前後を測る。幅に比して深さが浅いもので、流れの中心部分が浅い「U」の字状である以外はほぼ水平な面を呈している。埋土は第4トレンチ西壁付近では、細粒砂～粗粒砂を主体とする3層が断面形状に沿って堆積している。遺物は第4トレンチを中心として古墳時代後期（6世紀後半）に比定される土師器、須恵器の小片が出土している。そのうち、図化したものは須恵器9点（24～32）である。内訳は須恵器杯蓋1点（24）、杯身6点（25～30）、壺1点（31）、甕1点（32）である。（32）の頸を除けば全て1/8程度の小片である。（24）は天井部と口縁部の境に形骸化した稜を有する。杯身6点（25～30）はたちあがりが内傾して小さく伸びている。（31）は広口壺であ



第8図　第4トレンチ北区　SD－6出土遺物実測図

る。復元口径19.2cmを測る。(32) の甕は球形の体部から頸部が上方にラッパ状に伸びるものである。現存高15.2cm、体部高7.3cm、体部最大径10.6cmを測る。体部は完存しており、体部中位に上部で２本、下部で１本の凹線があり、その間に刻み目文が施文されている。頸部中位から上位にかけては、２本の凹線と単位の細かい波状文２条が施文されている。円孔スカシは径1.6cmを測る。

SD－7

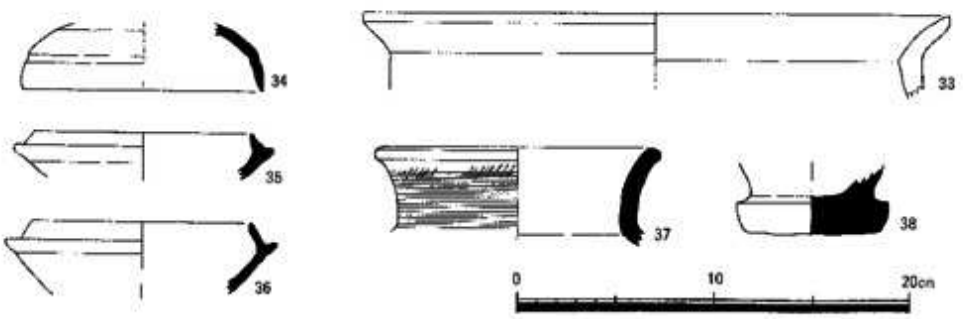
第３トレンチ北区（２C地区)、第４トレンチ北区（３D地区)、第５トレンチ北区（４E地区）で検出した。北西－南西方向に伸びるもので、検出長29m、幅0.6～3.0m、深さ0.1～0.29mを測る。３地点において構築面の標高差は見られないが、深さは第４トレンチ部分が深く、この部分の断面形状は南肩がやや傾斜が強いもので、溝底も南側に行くにしたがって深さを増している。埋土は第４トレンチ部分では断面形状に沿って粘質シルト～粘土を主体とする４層が堆積している。遺物は第５トレンチ北区から土師器、須恵器の小片が極少量出土したが、図化し得たものはない。

SD－8

第３トレンチ北区の３C・D地区で検出した。第５層上面を構築面としている。北西－南東方向に伸びるものでるが、第２トレンチ北区および第４トレンチ北区には継続が認められない。幅3.0m、深さ0.3mを測る。断面形状は浅い半円形で、埋土は断面形状に沿って４層がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SD－9

第４トレンチ北区北端部分で検出した。南北方向に伸びるもので、SD－6の東端を切っているが、東肩は調査区外に至るため不明である。検出長6.0mを測る以外は埋土等も不明である。遺物は古墳時代後期（６世紀後半）に比定される土師器、須恵器の小片が少量出土している。そのうち、図化したものは土師器甕１点 (33)、須恵器杯蓋１点 (34)、杯身１点 (36)、



第９図　第４トレンチ北区　SD－9 (33・34・36・37)、SD－10 (35・38) 出土遺物実測図

壺1点（37）である。（33）は口縁部が「く」の字状を呈する土師器甕である。復元口径30cmを測る。（34）は1/8程度が遺存するものである。（37）は広口壺で口縁端部は外側に肥厚している。頸部上半に右上がりのハケメが遺存している。

SD－10

第4トレンチ南区で検出した。南北方向に直線的に伸びるもので、北端付近では西に屈曲している。西肩は調査区外に至るため幅等は不明である。検出部分で検出長23.5m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土はシルトを主体とする2層から成る。遺物は土師器、須恵器、瓦器、平瓦等の小片が少量出土している。図化したものは古墳時代後期（6世紀末～7世紀初頭）の須恵器杯身（35）、鉢（38）の2点である。（35）は内傾して小さく伸びるたちあがりを持つ。（38）は鉢の底部で復元底径6.7cmを測る。

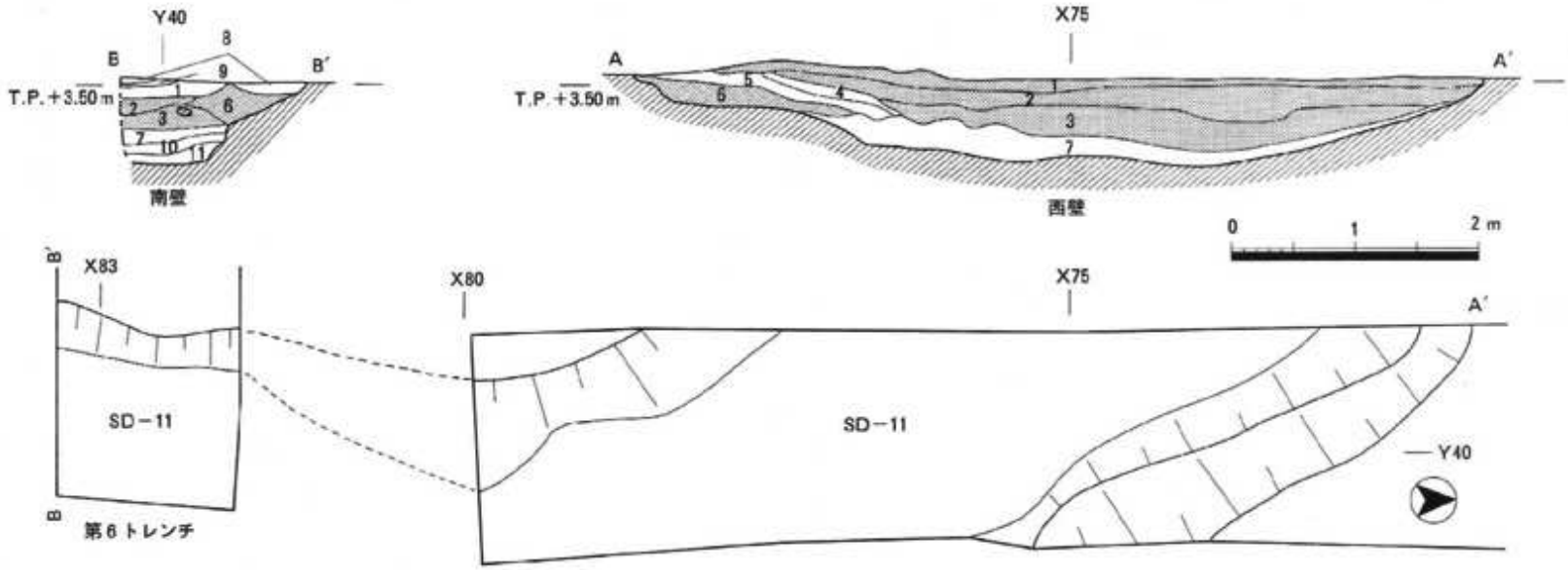
SD－11

第4トレンチ南区第2調査面および第6トレンチ東端で検出した。第7層を構築面としている。検出部分では、第6トレンチ東端から第4トレンチ南端部にかけて南北方向に伸びた後、第4トレンチ南部付近で流路を北西方向に変えている。掘形断面の形状は北肩の一部が二段掘形であるが、西肩は緩やかに傾斜しており、底部はほぼ水平である。検出長11.5m、幅4.5m、深さ0.7mを測る。埋土は掘形の形状に沿って11層が堆積しており、漸移的な堆積状況が窺える。遺物は第1層～3層・第6層を中心に土器類、木器類がコンテナ4箱程度出土している。時期的には古墳時代前期初頭（庄内Ⅲ期）～古墳時代前期（布留Ⅰ期）に対比されるが、量的には古墳時代前期初頭（庄内Ⅲ期）に比定されるものが大半を占めている。

そのうち図化したものは64点（39～102）である。その内訳は、広口壺$D_2$1点（39）、短頸壺A3点（40～42）、大型直口壺A_1点（43）、直口壺$A_1$4点（44～46・102）、複合口縁壺B_1点（47）、複合口縁壺B1点（48）、小型壺B類3点（49～51）、甕B類18点（52～67・97・98）、甕D2点（75・100）、甕E類8点（68～74・99）、甕$F_2$1点（76）、甕$J_4$1点（77）、甕K_1点（78）、甕$M_1$2点（79・80）、器台$B_2$2点（81・82）、高杯$C_2$4点（83～86）、高杯A_1点（87）、高杯$A_1$2点（89・90）、高杯$B_2$1点（88）、鉢$G_2$5点（91～94・101）、鉢J1点（95）、鉢D1点（96）である。なお、古式土師器の形式分類および土器編年については、当調査研究会報告37「Ⅱ久宝寺遺跡（第1次調査）」に準ずる。

・広口壺D_2（39）

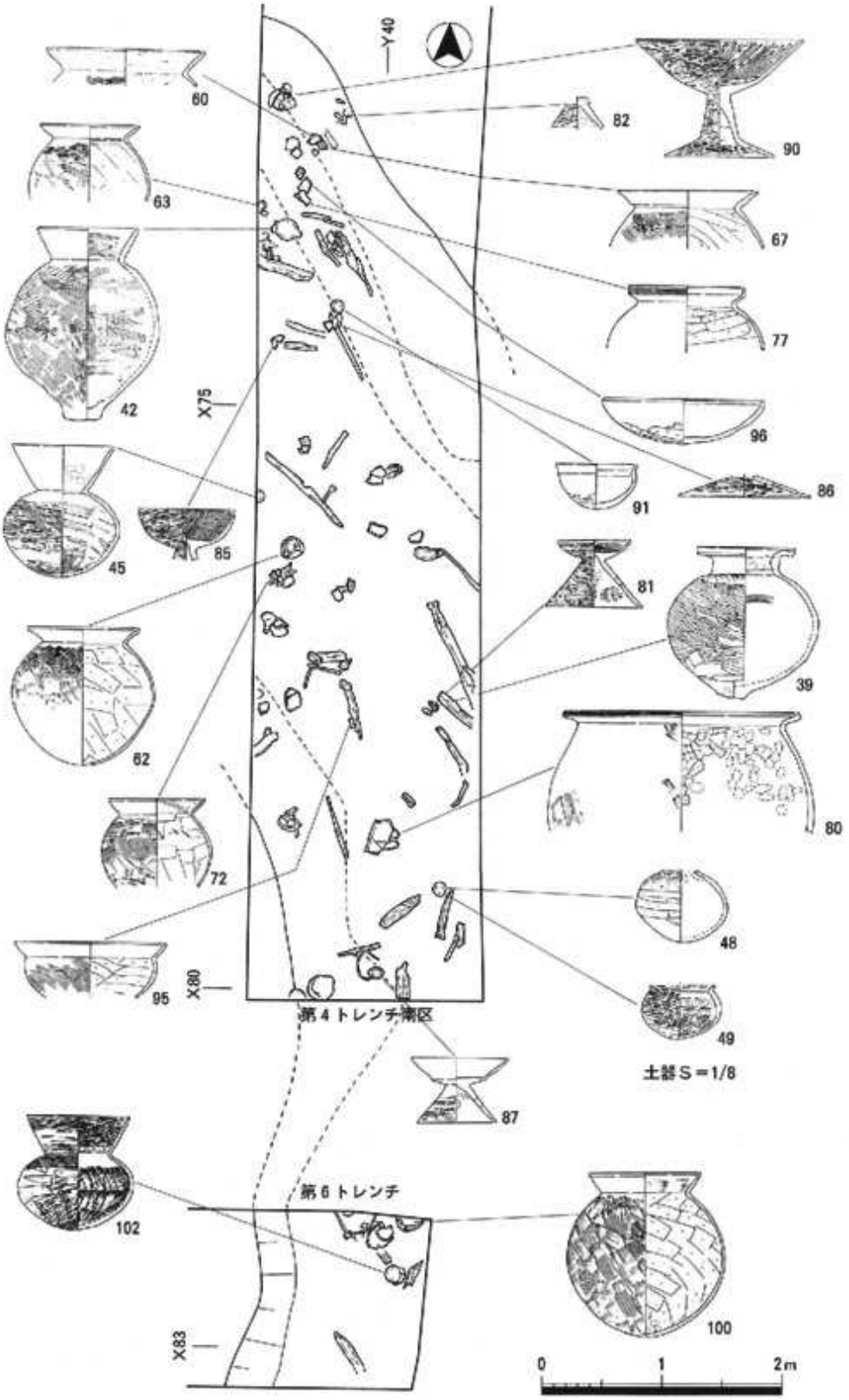
完形品で口径13.0cm、器高20.4cm、体部最大径20.2cmを測る。球形の体部から頸部が直上方へ直線的に伸びた後、水平方向に屈折するもので、口縁端部は上方につまみ上げられ外面に面をもつ。底部は突出平底であるが、側面の3ケ所にヘラ状工具によりケズリ取られた部分があり不安定である。色調は淡褐色で、胎土にはチャート粒が散見される。



第4トレンチ南区（第2調査区）

1 灰黄色シルト
2 淡灰色シルト粘土 } 遺物を含む
3 暗灰色シルト
4 淡灰色シルト質粘土
5 淡灰色シルト（炭・灰を多量に含む）
6 灰色シルト（遺物を含む）
7 灰色シルト質粘土
8 灰褐色砂質
9 黄灰色粘土
10 灰色シルト質粘土
11 灰色粘土

第10図　第4トレンチ南区、第6トレンチ　SD－11平断面図



第11図　第4トレンチ南区、第6トレンチ　SD−11遺物出土状況

・短頸壺A（40～42）

（40）は1/4程度が遺存している。復元口径13.0cm、頸部高4.5cmを測る。頸部屈曲部内面に面を持つもので、ケズリ調整はこの部分を境として下部に施されている。胎土は粗く、長石・石英の小砂粒を多量に含んでいる。色調は淡褐色である。（41）は口頸部が完存している。口径13.4cm、頸部高4.4cmを測る。体部内面は指頭圧痕が顕著である。色調は褐色で、胎土には石英・長石・角閃石が多量に含まれている。（42）は口縁部を欠く以外は完存している。口径12.8cm、器高25.9cm、体部最大径20.5cm、底部径3.2cmを測る。体部最大径が中位下半にあるもので、口頸部は斜上方に直線的に伸びる。底部は大きく突出した平底である。体部内外面は同じ原体によるハケナデである。色調は内灰色で胎土は粗く、0.5～2㎜大の長石・石英・赤色酸化土粒が多量に含まれている。他地域からの搬入品と推定される。

・大型直口壺A（43）

全体に丁寧な作りのもので、一部を欠損するが口頸部がほぼ完存している。口径16.2cm、頸部高5.0cmを測る。口縁端部はやや肥厚気味であることや、体部上位に横方向のハケナデが施されていること、さらには屈曲部にヘラヘズリが及ばない点において布留式甕の製作技法との共通点が認められる。胎土は明橙色で、胎土には石英・長石粒が多量に含まれている。

・直口壺A，（44～46・102）

4点図化した。（44）以外はほぼ全容を知り得るものである。扁球形の体部に斜上方に伸びる直口の口頸部が付くもので、全て精製品である。（45）は口径13.5cm、器高18.0cm、体部最大径15.5cm。（46）は口径13.8cm、器高17.9cm、体部最大径15.6cm。（102）は口径13.8cm、器高15.3cm、体部最大径15.5cmを測る。口頸部内外面は横方向のヘラミガキを施す（44・46）と縦方向のヘラミガキを施す（102）がある。体部外面の調整は、ハケナデ後横方向のヘラミガキを施す（45）と下半がケズリ、上半が横方向のヘラミガキを施す（46・102）がある。体部内面は一様にハケナデを施す。色調は（44～46）が淡灰色、（102）が淡橙色である。胎土は精良である。

・複合口縁壺B，（47）・B（48）

（47）は複合口縁壺の頸部で、頸部径5.4cm、頸部高1.4cmを測る。頸部が上外方に伸びるもので複合口縁壺B，にあたる。色調は淡灰色で、胎土は精良である。（48）は頸部より上部を欠損しているが、形状からみて複合口縁壺と推定される。体部は完存しており体部高9.6cm、体部最大径12.2cmを測る。体部外面は上位がハケナデの後ヘラミガキ、中位が横方向のヘラケズリ、下半がナデである。色調は淡灰色で胎土は精良である。

・小型壺B（49）・B，（51）・B，（50）

（49）は口縁部が欠損しているが、体部最大径と口径がほぼ等しい小型壺B，ないしは口径

が体部径を凌駕する小型壺B$_2$に対比される。(50) は半球形の体部に大きく開く口縁部が付く小型壺B$_3$にあたる。口径12.4cm、器高7.3 cm、体部最大径8.6cmを測る。出土土器の中では新しい様相を示しており、時期的には布留式の古相段階に比定されるものである。(51) は口径と体部最大径がほぼ等しい小型壺B$_1$にあたるもので、復元口径13.3cmを測る。体部外面は上位が縦方向、中位以下に乱方向のハケナデが行われている。色調は (49) が橙色、(50) が浅黄橙色、(51) が褐灰色である。(51) は生駒西麓産である。

・甕B類 (52～67・97・98)

18点図化した。(61・67) がやや古相に位置付けられる他は、河内型庄内式甕の最終段階の甕B$_4$に対比される。全容を知り得た (62) は甕B$_4$の中型品で口径15.0cm、器高18.7cm、体部最大径19.0cmを測る。他の資料についても、形態的には丸底で中位に体部最大径がある球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口縁端部は上方に小さくつまみ上げられている。体部外面のタタキ調整は極細で右上がりのタタキを体部上半のみに施した後、中位から上位にかけて縦方向のハケナデが施されている。体部内面のヘラケズリは屈曲部まで行われている。(61) 以外は褐灰色系の色調で、胎土中に石英・長石・角閃石・黒雲母が含まれている。(61) は灰白色の色調で、胎土に長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。

・甕D (75・100)

(75・100) は布留式影響の庄内式甕とされる甕Dにあたり、形態的には甕B$_4$と類似するが、体部外面の調整がハケナデのみになる点が甕B$_4$と異なる。2点ともほぼ完形に復元できるもので、(75) が口径15.8cm、器高21.2cm、体部最大径20.8cm。(100) が口径14.9cm、器高22.1cm、体部最大径21.3cmを測る。体部外面の調整では、(75) が上位から中位は横方向のハケナデ、中位から底部にかけては縦方向のハケナデ、(100) が全体に縦方向のハケナデが施されている。(100) の底部には指頭圧成形の痕跡が認められる。(75) は灰白色の色調で胎土中に長石・赤色酸化土粒が多量に含まれている。

・甕E (68～74・99)

8点を図化した。甕Eは布留式甕の属性の一部を具備した甕で、いわゆる布留式傾向甕に分類されるものである。口縁端部が湾曲して「く」の字状に屈折した後、口縁部が内湾気味に伸びるもので端部が上方ないしは内側につまみ上げられるもの (69・70・72・73・99) と外傾気味に丸味を持って終る (68・71) がある。体部外面の調整は上位ないしは中位付近が横方向、その他が縦方向および斜め方向のハケナデが行われている。体部内面のケズリは屈曲部に及ばないことが甕Eに共通した技法である。色調は黄橙色系のもの (69・70・73)、淡黄橙色系のもの (68・71)、淡褐灰色系のもの (72・74・99) がある。

・甕F$_2$ (76)

1点のみ図化した。口縁部の1/8程度の小片である。口縁屈曲部の湾曲化と口縁端部の肥厚化の属性を備えた布留式甕である。

・甕J₄（77）

口縁部が直上に伸びる古備系の甕。口縁端部外面に櫛描き直線文が施されている。復元口径15.4cmを測る。色調は淡褐灰色で胎土はやや粗く長石・角閃石・赤色酸化土粒が含まれている。

・甕K（78）

体部上端から頸部が「く」の字状に屈折した後、稜を境として斜上方に直線的に伸びる口縁部が付く山陰系の甕。復元口径16.1cmを測る。肩部に櫛描きの波状文が施文されている。

・甕M₁（79・80）

口縁部が屈曲外反して斜上方に短く伸びた後、端部が上方に三角形状につまみ上げられるもので、四国東部地方産の甕である。中型の（79）と大型の（80）がある。（80）の口縁端部には2本の凹線が巡る。2点ともに体部外面には左上がりのハケナデ調整が施されているが、（80）は大半が器面剥離のため欠落している。色調は（79）が淡黄橙色、（80）が淡褐灰色である。胎土は（80）にやや大粒の長石粒が散見されるが（79）は精良である。

・器台B₃（81・82）

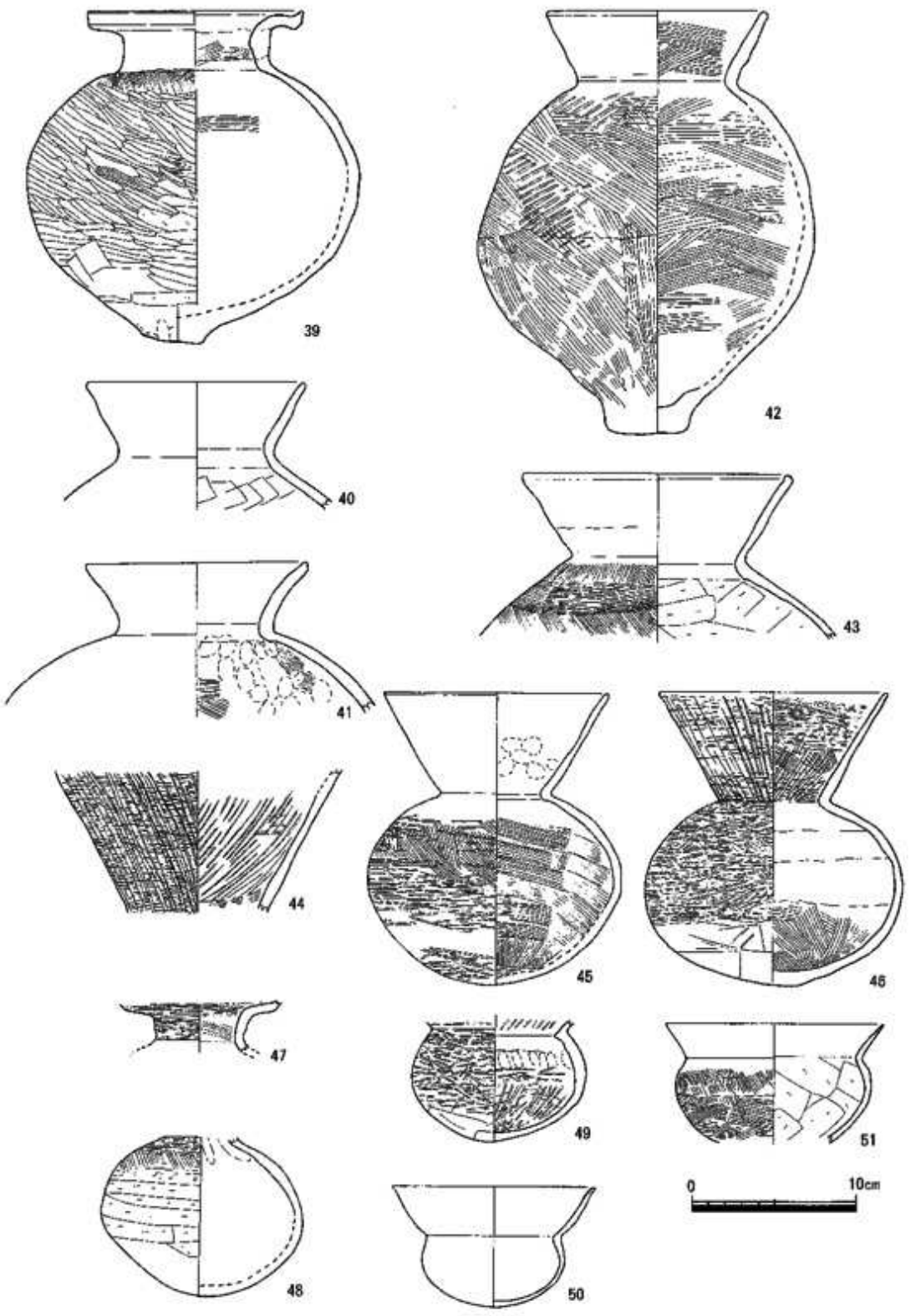
小型器台は2点図化した。（81）は口縁部の一部が欠損する以外は完存している。口径9.6cm、器高9.3cm、裾部径12.7cmを測る。（82）は脚部上半の資料である。スカシ孔はともに4孔が穿たれている。2点ともに精製品で色調は淡黄橙色を呈する。

・高杯C₂（83～86）

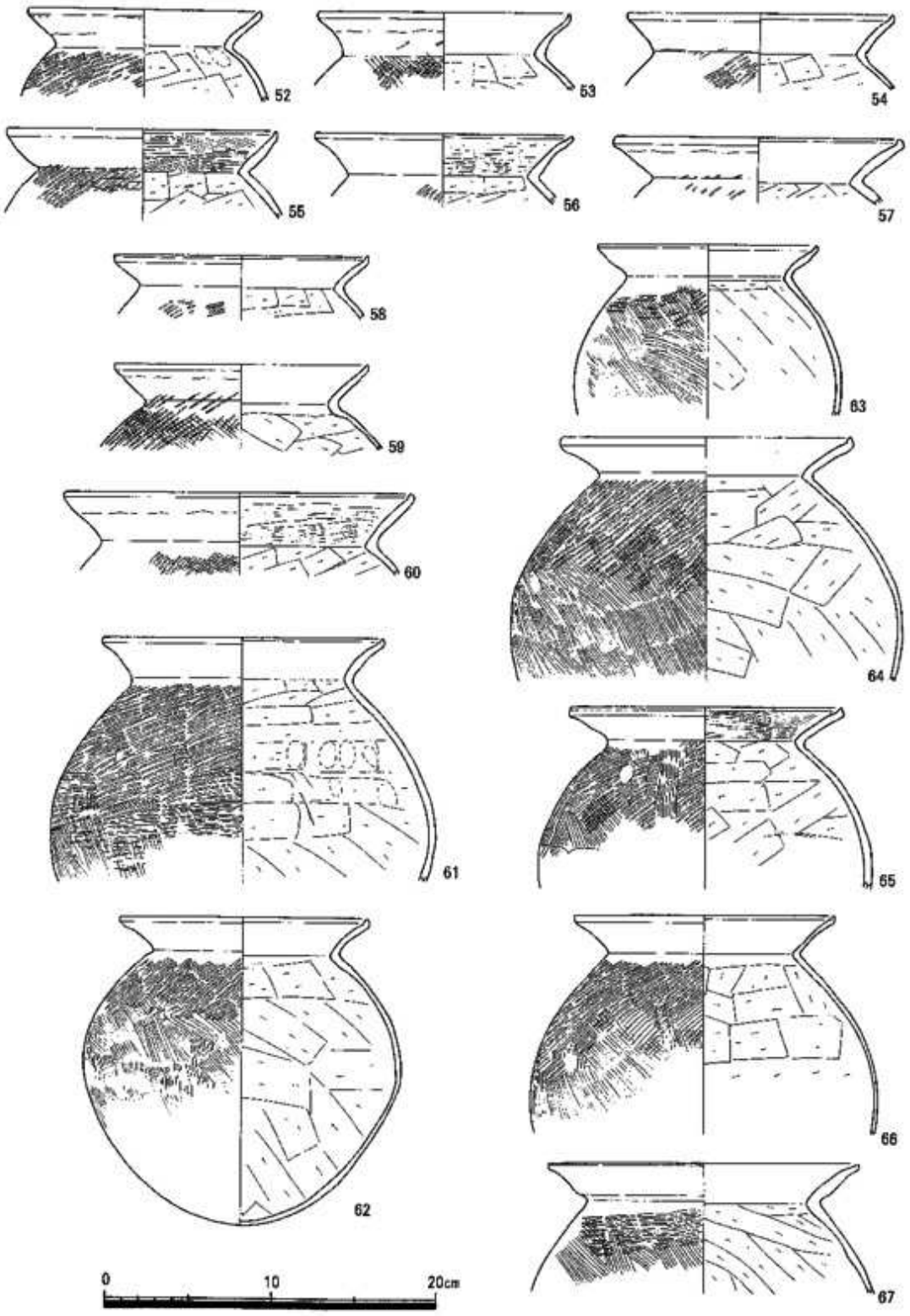
4点図化した。大きく開く脚部に椀形の杯部が付く高杯である。各部の数値は杯部が完存している（84）が口径12.6cm、（85）が口径12.8cmを測るほか、裾部では（86）が17.6cmを測る。全体に作りが丁寧な精製品でヘラミガキ調整も密である。色調は明るい黄橙色系である。

・高杯A（87）・A₄（89・90）

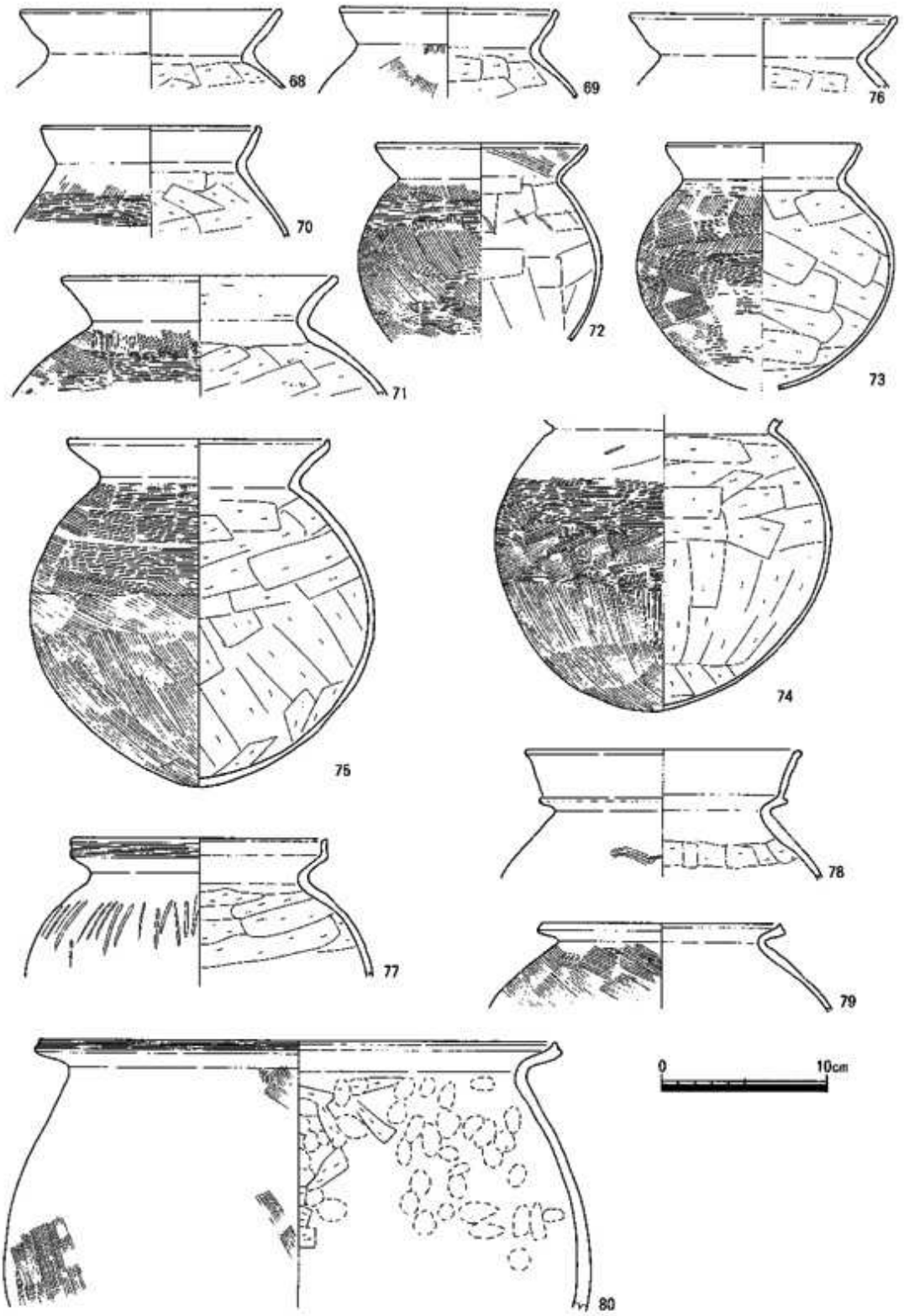
（87）は小型器台と同様の脚部に、体部に段を有した後内湾気味に口縁部が斜上方に伸びる杯部が付く小型の高杯である。ほぼ完形品で、口径13.0cm、器高8.8cm、裾部径10.4cmを測る。類例が少ないもので、既往の土器分類には無いものである。（89・90）は杯部が斜上方に大きく開いて立ち上がる深めの杯部を有する高杯である。（89）が1/8程度が遺存している。（90）は裾部が1/2程度欠損しているが杯部は完存しており、口径22.3cm、器高16.0cm、裾部径14.8cmを測る。（90）は杯部外面に横方向のヘラミガキ、脚部外面には細い単位のハケナデ調整が柱状部で縦方向、裾部で横方向に施されている。杯部内面は2点ともに装飾性を意識した放射状にヘラミガキが施されている。色調は淡黄橙色で胎土は精良である。



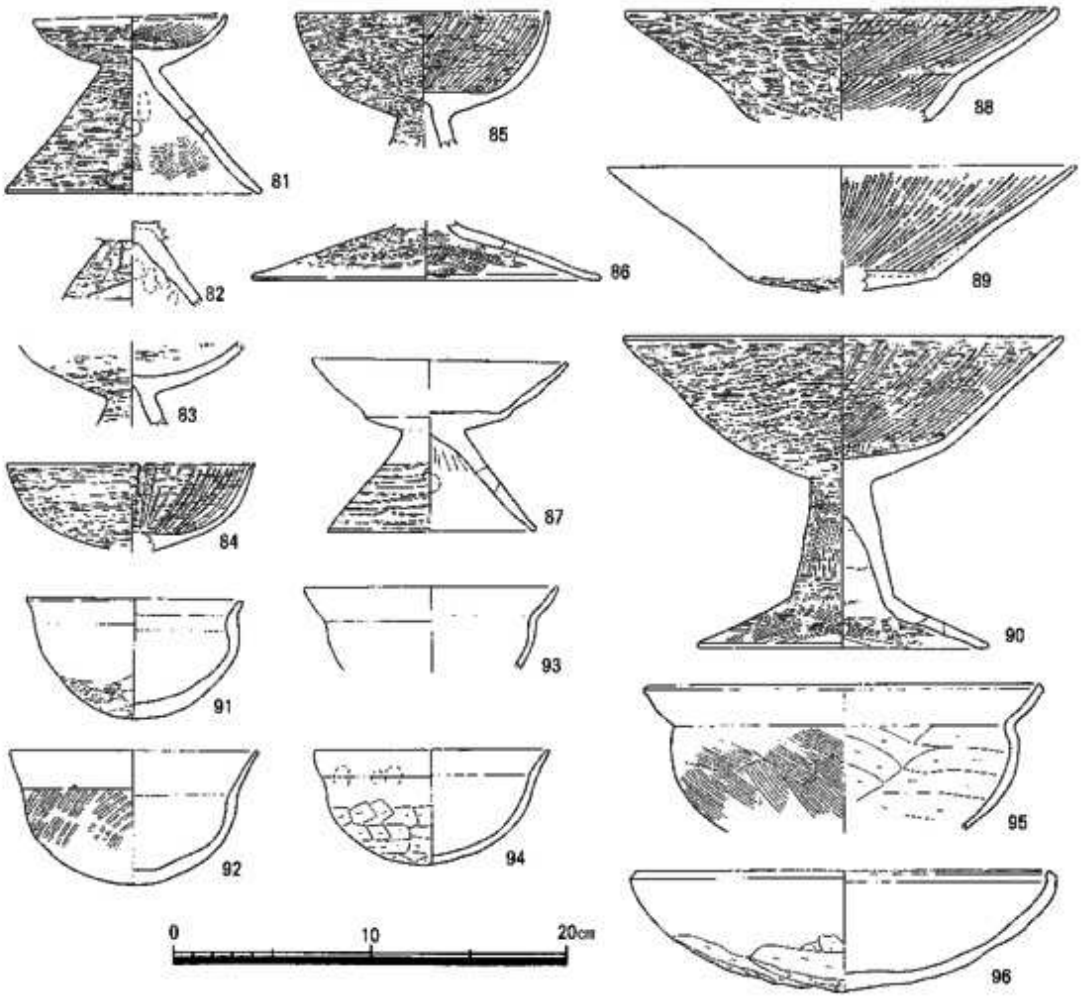
第12図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－１



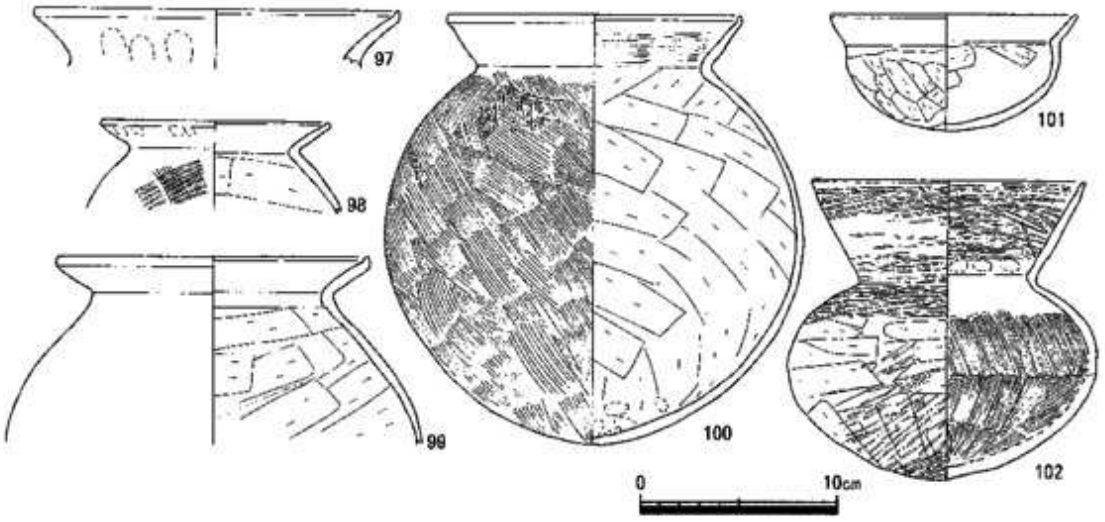
第13図　第4トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－2



第14図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－３



第15図　第４トレンチ南区　ＳＤ－11出土遺物実測図－４



第16図　第６トレンチ　ＳＤ－11出土遺物実測図

・高杯B₂（88）

二段に屈曲する杯部を持つもので、復元口径21.9cmを測る。杯部外面は横方向のヘラミガキ、内面は装飾を意識した放射状ヘラミガキが施されている。色調は灰褐色で、胎土は精良である。

・鉢G₂（91～94・101）

半球形の体部に、小さく直線的ないしは内湾気味に伸びる口縁部が付く小型の鉢である。5点図化したが（93）を除けばほぼ全容を知り得ることが可能である。規模は（91）が口径10.8cm、器高6.1cm。（93）が口径12.6cm、器高6.8cm。（94）が口径11.8cm、器高5.9cm。（101）が口径12.5cm、器高6.0cmを測る。体部の調整は、中位以下を鱗状にヘラケズリを行うものが多いが、（92）はタタキ調整が行われている。（93・94・101）が精製品であるほか、（91）が生駒西麓産、（92）は白灰色の色調で、胎土中に長石・石英粒が多量に含まれている。

・鉢J₁（95）

1/4程度が遺存している。復元口径20.0cmを測る中型の鉢。体部外面はハケナデ、内面はヘラケズリが行われている。色調は淡黄橙色で胎土には長石・石英・赤色酸化土粒が多量に含まれている。

・鉢D（96）

やや浅めの椀状を呈するもので、口縁端部は内傾する面を有する。口径21.0cm、器高6.1cmを測る。底部および体部下半は板状工具による粗いケズリが行われている。色調は淡黄橙色である。胎土は粗く長石のほか1cm大の結晶片岩が散見される。河内地域では庄内式新相から布留式古相にかけて量的には僅少であるもののその存在が認められる。土器の形態においては、瀬戸内地域から九州北部の広範囲にかけて分布している。奥田尚氏による胎土分析では、九州北部の肥後地域の砂礫種構成に近いとの結果が得られている。

SD－12

第5トレンチ北区の3E地区で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.76m、深さ0.11mを測る。断面形状は逆台形で、底部はほぼ水平である。埋土はシルトを主体とする2層から成る。遺物は出土していない。

SD－13

第5トレンチ北区の4・5E地区で検出した。東西方向に伸びるもので、幅1.33m、深さ0.14mを測る。断面形状は逆台形で、底部はほぼ水平である。埋土は断面形状に沿ってシルトを主体とする2層が堆積している。遺物は出土していない。

SD－14

第6トレンチから第7トレンチにかけて検出した。南北方向に伸びるもので、検出長18m、幅1.65m、深さ0.13mを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土は3層から成る。溝底の比

高差からみて流路方向は北流するものと推定される。遺物は土師器・須恵器の小片が極少量出土したが、図化し得たものはない。

SD－15

第6トレンチから第7トレンチにかけて検出した。南北方向に伸びるもので、検出長18m、幅0.3～0.4m、深さ0.07mを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土はシルトを主体とする2層から成る。遺物は出土していない。

SD－16

第6トレンチの9B地区で検出した。北西－南東方向に伸びるもので、幅2.4m、深さ0.06～0.21mを測る。断面形状は浅い逆台形であるが、西部は西肩に沿ってやや深い部分が認められる。埋土は4層から成る。遺物は出土していない。

SD－17

第7トレンチの東端で検出した。当初、位置関係からSD－11と推定していたが断面観察の結果、構築面が第5層上面であることから別遺構と確認した。西肩がSD－18を切っている他、東肩が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で幅1.9m、0.2mを測る。埋土は4層から成る。遺物は土師器、須恵器の小片の他、平瓦・丸瓦片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

SD－18

第7トレンチの東端で検出した。東肩がSD－17に切られており全容は不明である。検出部分で1.1m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰色シルトの単一層である。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土したが図化し得たものはない。

SD－19

第7トレンチの東部10D地区で検出した。南北方向に伸びるもので、幅4.2mを測る。溝底は西に向かって傾斜しており、深さは東部で0.07m、西部で0.2mを測る。埋土は5層から成る。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土したが図化し得たものはない。

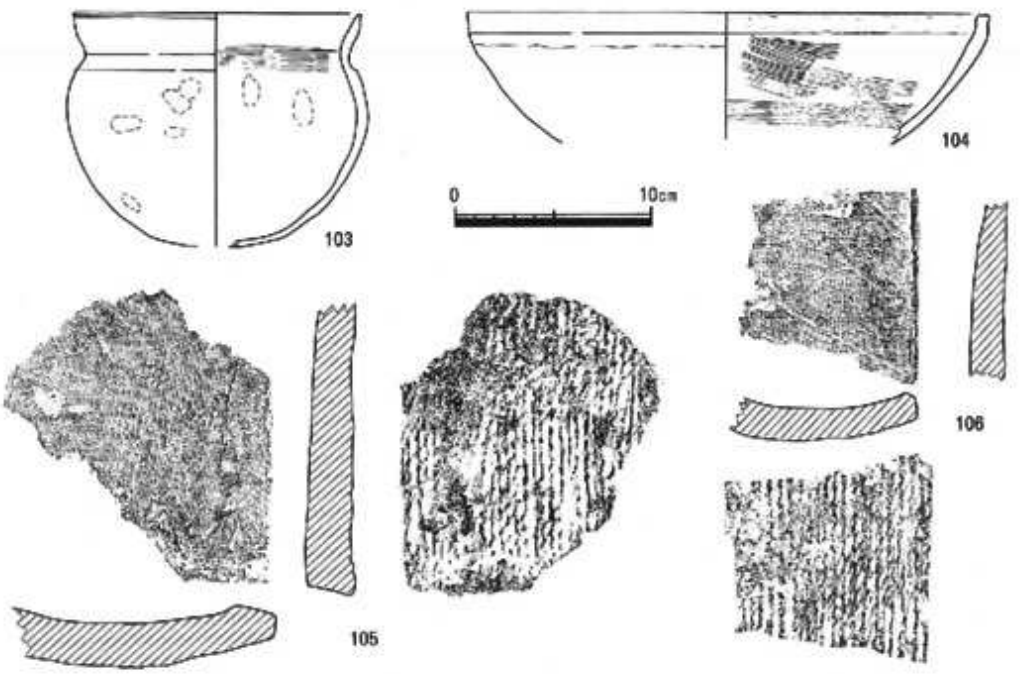
SD－20

第7トレンチの10C地区で検出した。南北方向に伸びるもので、幅0.4m、深さ0.03mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

小穴（SP）

小穴は60個（SP－1～SP－60）を検出した。上面の形状では、円形・楕円形・不定形があるが円形のものが大半を占めている。規模は幅15～92cm、深さ6～40cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトの単一層のものが大半を占めている。調査区が限定されたトレンチ調査であるため検出した小穴群のみで分布状況を推察するには限界があるが、敢えてその分布位置を推察す

れば、第２トレンチ南区、第４トレンチ南区から第５トレンチ南区の一帯で密度が高いことが推定される。第２トレンチ南区で検出した小穴群に付いては、第１トレンチで検出したＳＥ－１と時期的にも符合しており、有機的な関わりが示唆されるとともに、建物を構成した柱穴であった可能性が強い。第４トレンチ南区および第５トレンチ南区一帯で検出した小穴群についても、同様の性格を帯びたものと推定される。出土遺物については第１表で示したが、概ね古墳時代後期のものが多く一部、古墳時代前期（庄内式新相から布留式古相）に比定される遺物が出土したものがある。なお、ＳＰ－38からは唯一奈良時代に比定される土師器、須恵器、屋瓦が出土している。図化したものは土師器甕（103）・鉢（104）、平瓦（105・106）の４点である。（103）は復元口径14.6cm、器高12.1cmを測る小型の甕である。球形の体部に口縁部が外反気味に直上方に伸びる口縁部が付く。口縁屈曲部付近に強いヨコナデ調整を行うため、体部外面上半に明瞭な段が残る。段より以下の体部については、ナデ調整で一部に指頭圧痕を残す。外面全体にススが付着している。色調は淡褐灰色で胎土は良好である。（104）は土師器鉢で遺存率は1/10程度の小片である。復元口径26.5cmを測る。いわゆる鉄鉢形を呈するものと推定される。色調は褐灰色で、胎土は良好である。（105・106）は平瓦片である。共に凹面に細かい布目、凸面にやや粗い縄目タタキが縦位に通る。胎土は（105）がやや粗く石英・長石粒を多くふくむが、（106）は散見される程度である。ともに、火中したものと考えられ（105）が橙色を呈するほか、（106）の凸面にはススの付着や熱を受けたため部分的に剥離した箇所が認め



第17図　第４トレンチ北区　ＳＰ－38出土遺物実測図

られた。これらの平瓦については、調査地点の東約100ｍ地点に鎮座する天神社を中心とした寺域が推定されている西郡廃寺に関連した屋瓦と推定され、周辺で実施された調査で出土した瓦類とも共通する特長を示している。なお、共伴した土器類については、平城京を中心とした土器編年に対応すれば８世紀前半を中心とする時期が推定され、飛鳥時代後半の創建とされる西郡廃寺がこの時期、火災等による要因で一時的に衰退した時期があった可能性が推定されよう。

２）遺構に伴わない出土遺物

第１トレンチ

北区および南区の第５層を中心としている。６点（107～112）を図化した。（107）は須恵器杯蓋で遺存率は1/4程度である。稜は鈍い。北区５・６Ｂ地区出土。（108・109）は須恵器杯身である。遺存率は（108）が1/6、（109）が1/2程度である。（109）は口径13.0cm、受部径15.8cm、器高5.1cmを測る。型式的には（109）が古く田辺氏編年のＴＫ10型式、（108）がＴＫ43型式以降に位置付けられる。２点ともに４・５Ｂ地区出土。（110）は広口壺である。２Ｂ地区出土。（111）は短脚の無蓋高杯の脚部である。４・５Ｂ地区出土。（112）は短頸壺と推定されるもので、体部は完存している。体部最大径は10.6cmを測る。５・６Ｂ地区出土。

第３トレンチ

北区および南区の第５層から出土した。８点（113～120）を図化した。（113・114）は庄内式甕である。ともに遺存率が1/8程度の小片である。形態からみて庄内式甕のなかでも新相に比定されるものである。２点ともに生駒西麓産で、北区４Ｄ地区出土である。（115）は小型器台Ｂ$_2$に分類されるものである。口径10.6cm、器高9.3cm、裾部径13.0cmを測る。色調は橙色で胎土は良好である。北区４Ｄ地区出土。（116）は小型高杯で杯部は完存している。口径12.4cm、杯部高3.7cmを測る。色調は（115）と同様である。古墳時代前期に比定される。北区４Ｄ地区出土。（117）は須恵器提瓶の小片である。外面に器形に沿って円形に回るカキメが認められる。６世紀末に比定される。南区７Ｄ地区出土。（118）は玉縁状口縁を有する白磁碗である。11世紀中～12世紀初頭に位置付けられる。南区７Ｄ地区出土。（119）は青磁碗の小片である。龍泉窯系青磁と推定されるが詳細は不明である。南区８Ｄ地区出土。（120）は軒丸瓦である。南区７Ｄ地区出土。瓦当面の一部を残す小片であるが、その特長からみて、東大阪市河内町に所在した河内寺跡出土瓦と同意匠の細弁十三葉蓮華文軒丸瓦と考えられる。西郡廃寺周辺では、寺域の中心と考えられている天神社（泉町２丁目）の東側で当調査研究会が昭和59年度に実施した第１次調査（ＫＦ84－１）や南方約500ｍ地点で昭和58～59年度に大阪府教育委員会が府立八尾北高校建設に伴って実施された調査等で西郡廃寺に関連した屋瓦類が出土している。これらの調査で出土している軒丸瓦については、河内寺跡出土瓦と意匠が似ているものの、花弁の

数が１枚少ない12葉であることや、間弁が短く外区内縁の珠文が細かい等の相違点があることから、一部改変されたものが西郡廃寺の創建瓦として使用されたものと考えられてきた。今回の出土例はこれまでの推定を覆すもので、創建時点から河内寺と同意匠の軒丸瓦が使われていた事実が明らかになった。ただ、河内寺出土瓦が角閃石を含む在地の胎土が使用されているのに対して本例は長石が散見される程度の精良なものであり、胎土面からみれば明らかな違いが認められた。

第４トレンチ

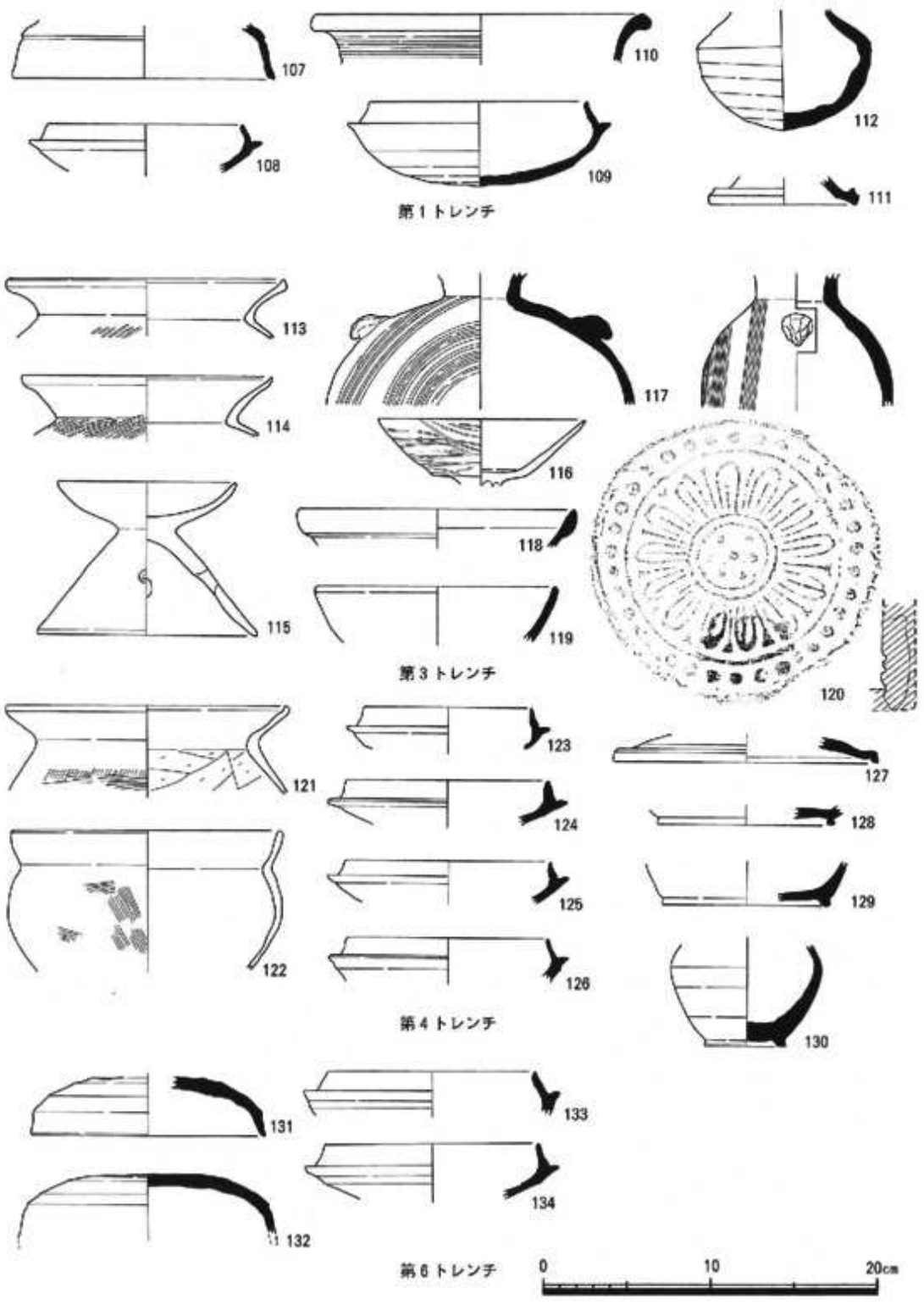
北区ならびに南区の第５層から出土している。10点（121～130）を図化した。（121）は布留式傾向甕とされる甕Ｅに分類される土師器甕で口縁部の1/6程度が遺存している。色調は橙色である。南区８Ｄ・Ｅ地区出土。（122）は鉢Ｊ１に分類される中型の土師器鉢である。色調は淡灰褐色である。出土位置は（121）と同じである。須恵器杯身は４点（123～126）図化した。出土位置は（123・126）が北区１・２Ｄ・Ｅ地点。（124）が北区３Ｄ・Ｅ地点。（125）が北区２Ｄ・Ｅ地点である。いずれも遺存率が1/8程度の小片である。田辺氏編年のＴＫ43型式以降のもので、帰属時期は６世紀末～７世紀初頭が考えられる。（127）は小片であるが、宝珠つまみを有する須恵器杯蓋である。北区５Ｄ・Ｅ地区出土。高台を有する須恵器杯身は２点（128・129）図化した。２点ともに小片であるため詳細は不明である。（128）が北区５Ｄ・Ｅ地区出土。（129）が南区７Ｄ・Ｅ地区出土。（130）は須恵器の小型壺である。高台が付くもので、底径4.9cmを測る。北区５Ｄ・Ｅ地区出土。（127～130）の帰属時期は８世紀後半と考えられる。

第６トレンチ

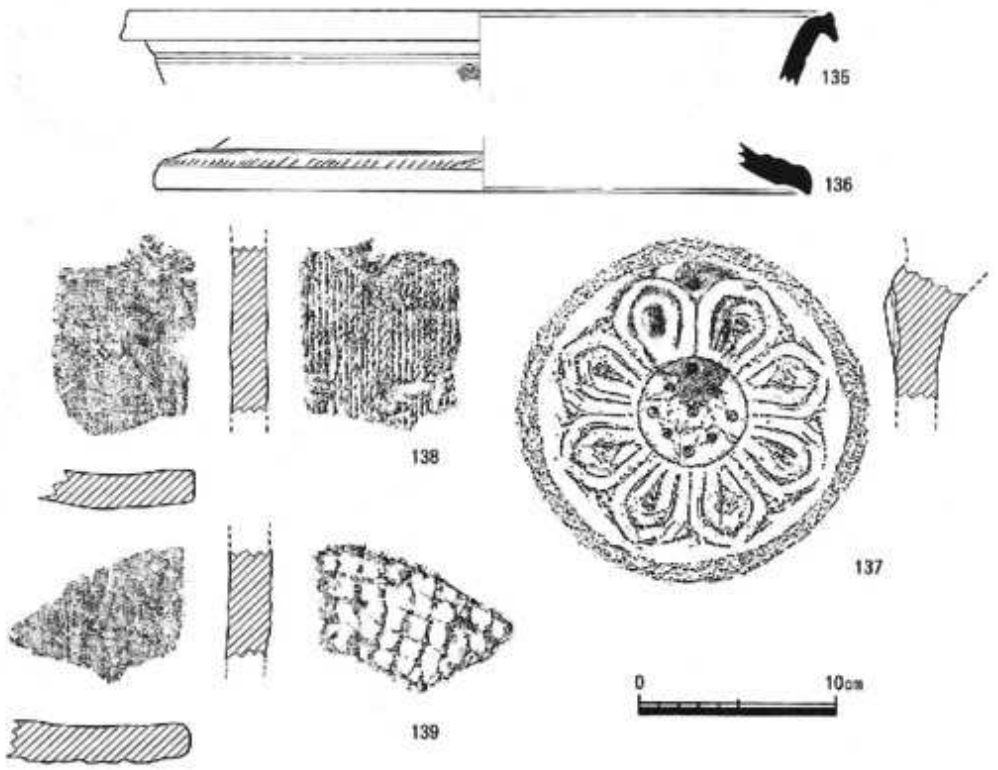
第５層を中心に出土している。４点（131～134）を図化した。（131・132）は須恵器杯蓋である。（131）が復元口径14.0cmを測る。（131）が９Ｄ地区、（132）が９Ａ・Ｂ地区出土である。（133・134）はいずれも遺存率が1/6程度の須恵器杯身の小片である。２点ともに出土位置は９Ａ・Ｂ地区である。４点ともに古墳時代後期に比定されよう。

第７トレンチ

第５層を中心に出土している。５点（135～139）図化した。（135）は須恵器の大型器台の口縁部である。杯部外面に波状文が施文されている。９Ｃ地区出土。（136）は須恵器の大型器台の裾部である。裾部端面にヘラ先による刻目文が施文されている。（137）は瓦当面の1/6程度が遺存する軒丸瓦である。瓦当面の文様構成は重弁形式の８葉蓮華文で、中房に１＋８の蓮子を配し、間弁先端に突起を有するものと推定される。類例としては、八尾市教興寺跡（寺池）、柏原市原山廃寺があり７世紀中葉に対比されている。（138・139）は平瓦片である。２点ともに凹面は細い布目、凸面には（138）が縦位に通る縄目タタキ、（139）が格子状タタキが行われている。（139）の類例は第１次調査（ＫＦ88－１）ならびに大阪府教育委員会が58～59年度



第18図　第1・3・4・6トレンチ　第5層出土遺物実測図



第19図　第７トレンチ　第５層出土遺物実測図

に八尾北高校の建設に伴って実施した調査で出土している。屋瓦類はいずれも、西郡廃寺に関連したものと考えられる。９Ｃ地区出土である。

参考文献

- 田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 原田昌則　1993　「Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告37』（財）八尾市文化財調査研究会
- 野田晃世　1985　「萱振遺跡出土の中世井戸調査の概要」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会
- 東大阪市教育委員会　1975　『河内寺跡』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11
- 東大阪市教育委員会　1974　『河内寺跡Ⅱ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報13
- 原田昌則　1987「Ｉ萱振Ａ遺跡（第１次調査）八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度」『(財）八尾市文化財調査研究会報告13』（財）八尾市文化財調査研究会
- 坪田真一　1992「28. 教興寺跡第１次調査（ＫＯ91－１）」『平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- 山本　昭　1973　「河内六大寺と河内行宮」『柏原市史　第２巻』

第1表　小穴一覧表

番号	トレンチ名	地区	形状	規模（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期・備考
SP－1	1北区	5・6B	円形	20×25	6		
SP－2	〃	6B			9	－	
SP－3	2北区	4C	－	－	15		
SP－4	〃	4C			24	土師器　須恵器	古墳後期
SP－5	〃	4C	－	－	19	土師器　須恵器	古墳後期
SP－6	〃	6C	－	－	26	土師器	古墳前期
SP－7	2南区	7C	－		16		
SP－8	〃	7C	－	－	8	－	
SP－9	〃	7C	－	－	26	土師器　須恵器	古墳前期・後期
SP－10	〃	7C	－	－	13	土師器　瓦器	古墳後期　SB－1
SP－11	〃	7C	円形	45×50	21	土師器　須恵器	古墳後期　SB－1
SP－12	〃	7・8C	円形	56×65	27	土師器　須恵器	古墳後期　SB－1
SP－13	〃	8C	円形	88×87	22	土師器　須恵器	古墳後期　SB　1
SP－14	〃	8C	円形	42×46	25	－	SB－1
SP－15	〃	8C	円形	39×40	25	－	
SP－16	〃	7C	－	－	7	須恵器	古墳後期
SP－17	〃	8C	円形	53×61	19	－	
SP－18	〃	8C	不定形	63×50	29	土師器	古墳後期　SB－2
SP－19	〃	8C	円形	57×67	21	－	SB－2
SP－20	〃	8C	－	－	25		SB－2
SP－21	3北区	3D	円形	45×55	17	土師器　須恵器	古墳後期
SP－22	〃	3D	－		15		
SP－23	〃	3D	円形	35×38	16	－	
SP－24	〃	4D	楕円形	69×84	16	土師器	古墳前期
SP－25	〃	4D	－	－	17	－	
SP－26	〃	4D	円形	43×48	15		
SP－27	〃	4C	－	－	27	土師器	古墳前期
SP－28	〃	4D	楕円形	48×28	18		
SP－29	〃	5D	－	－	13	－	
SP－30	〃	5D	円形	40×35	18		
SP－31	〃	5D	－	－	7	－	
SP－32	〃	5・6D			13		
SP－33	4北区	3D	－	－	9	－	
SP－34	〃	3D・E		－	33	－	
SP－35	〃	4D・E	不定形	40×40	30	－	
SP－36	〃	4E	不定形	38×47	20	須恵器	古墳時代
SP－37	4北区	5D	－	－	7	－	
SP－38	〃	5E	円形	37×40	30	土師器　須恵器　瓦	奈良時代
SP－39	4南区	8E	－	－	24	－	
SP－40	〃	8E	円形	15×15	9	－	
SP－41	〃	8E	円形	34×38	10		
SP－42	〃	8E	－	－	14	－	
SP－43	〃	8E			6	－	
SP－44	5南区	7E	不定形	35×44	17	土師器	古墳後期
SP－45	〃	7F			13		
SP－46	〃	8E	－	－	7	－	
SP－47	〃	8E	－	－	34	土師器	時期不明
SP－48	〃	8E	円形	45×46	8		SB－3
SP－49	〃	8E・F	円形	40×42	10		SB－3
SP－50	〃	8F	円形	50×52	10	－	SB－3
SP－51	〃	8F	－	－	22	－	SB　3
SP－52	6	9D	円形	20×25	9		
SP－53	〃	9C	－	－	13	－	
SP－54	〃	9A			22		
SP－55	7	10D	円形	92×90	40	土師器　須恵器　瓦	古墳後期　奈良
SP－56	〃	10C			27	土師器　須恵器	古墳後期
SP－57	〃	10B	円形	25×22	7	－	
SP－58	〃	10A	不定形	57×63	18		
SP－59	〃	10A	円形	38×45	12	－	
SP－60	〃	10A	楕円形	37×58	22	土師器	古墳前期

第5節　出土遺物観察表

・大粒　砂礫－L　1mm以上　M　0.5～1mm未満　S　0.1mm未満　　量　◎多量　○多い　△少ない　▲微少　　赤水　赤色酸化土　片　結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm） 土師器高台径 （ ）復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内部	胎土 素地	長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
1	六	二耳器 小型壺	8.4 9.7 3.5 体部最大径 8.7	外面：口頸部ナデ。体部指頭圧痕。 内面：上頸部ハケナデ。体部ナデ。	淡褐灰色 〃	良好	○M～L	○M～L	○S				良好	完形	SE－1 6層 赤色顔料
2	六	土師器 小型壺	7.2 8.2 4.9 体部最大径 8.2	外面：口頸部ナデ。体部ハケナデ。 内面：口頸部ハケナデ。体部ナデ。	淡褐灰色 〃	良好	○M～L	○M～L	○S				良好	完形	〃 6層 赤色顔料
3		土師器 壺底	－	外面：柱状部ナデ。 内面：柱状部シボリ目。	淡橙色 〃	精良	△M～L	△S～M	△S			赤▲S～M	良	柱状部	〃 2・3層
4	六	須恵器 有蓋短頸壺蓋	10.6 3.3 －	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	○M～L	○M～L					陸鍛	1/2	〃 2・3層 天井部 灰かぶり
5		須恵器 杯蓋	14.0 4.0 －	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	○M～L	△M～L					〃	1/4	〃 4・5層 灰かぶり 外面ヘラ記号
6		須恵器 杯蓋	(14.1) －	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	△M～L					赤△M～L	〃	1/4	〃 2・3層
7		須恵器 杯蓋	(13.6) －	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	○S～L	△M～L					〃	1/8	〃 2・3層
8		須恵器 杯蓋	14.2 3.9 －	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	○S～L				△S～M		〃	1/8	〃 2・3層
9		須恵器 杯身	(12.4) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部上半以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	精良	△M～L						〃	1/4	〃 2・3層
10		須恵器 杯身	(14.3) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部上半以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	亡灰色 〃	精良	△S～L	○S～L					〃	1/3	〃 2・3層
11	六	須恵器 杯身	(15.6) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部上半以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	○S～M						〃	1/3	〃 2・3層
12		須恵器 杯身	(12.5) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部上半以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	△M～L	▲L					〃	1/6	〃 2・3層
13	六	須恵器 杯身	12.8 －	外面：たちあがりおよび底部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	精良	△M～L				△M～L		〃	1/2	〃 2・3層
14	六	須恵器 杯身	13.2 － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部上半以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	精良	○S～M	△M～L					〃	1/2	〃 2・3層
15		須恵器 杯蓋	14.5 5.4 つまみ径 3.0 つまみ高 1.2	外面：口縁部回転ナデ。天井部ヘラケズリ。つまみ部ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	精良	○S～L	△S～M					〃	1/2	〃 2・3層 灰かぶり

・凡例　粒径　L 1㎜以上　M 0.6～1㎜未満　S 0.5㎜未満　　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　　赤－赤色酸化し　片－粒晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量 口径 底径 (cm) ( )復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	雲母	角閃石	ヤマト	その他	焼成 保存	遺存率	出土位置 図版 備考
16		須恵器 高杯	－ － － 脚部径 12.2	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。	青灰色 〃	精良	○M～L	○M～L					堅緻	1/8	〃 4・5層 内面灰かぶり スカシ孔不明
17	六	須恵器 高杯	－ － － 底部径 11.6	外面：杯部および脚部回転ナデ。 内面：杯部および脚部回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	○S～L			○S～L			〃	脚部 完存	〃 6層
18	六	須恵器 高杯	－ － － 脚部径 7.6	外面：杯部および脚部回転ナデ。 内面：杯部および脚部回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	○S～M	△M～L					〃	脚部 完存	〃 2・3層
19	六	須恵器 高杯	－ － －	外面：杯部列点文と下半にカキ目。脚部回転ナデ。 内面：杯部および脚部ナデ。	青灰色 〃	精良	△S						〃	杯部～柱状部 1/2	〃 6層
20		須恵器 高杯	－ － －	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部ナデ。	淡灰色 〃	精良	△S～M	△S～M					〃	柱状部 1/2	〃 4・5層 灰かぶり スカシ孔
21		須恵器 高杯	(11.9) － －	外面：杯部回転ナデ。 内面：杯部回転ナデ。	暗青灰色 〃	精良	○M～L	△M～L					〃	杯部 1/2	〃 2・3層
24		須恵器 杯蓋	(14.2) －	外面：口縁部回転ナデ。天井部1/4回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡黒灰色 〃	精良	△M～L						〃	1/8	SD－6 4TR (N) 灰かぶり
25		須恵器 杯身	(12.4) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。	淡灰色 〃	精良	△M～L						〃	1/6	〃
26		須恵器 杯身	(12.2) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。	灰白色 〃	精良	▲S						〃	1/8	〃
27		須恵器 杯身	(11.8) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。底部1/2以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	○S～M						〃	1/8	〃
28		須恵器 杯身	(11.0) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S						〃	1/8	〃
29		須恵器 杯身	(12.8) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S～M						〃	1/8	〃
30		須恵器 杯身	(13.0) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	▲S						〃	1/8	〃
31		須恵器 広口壺	(19.2) － －	外面：口縁部回転ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。	淡黒灰色 〃	精良	○M～L						〃	1/8	〃
32	六	須恵器 壺	－ 現存高 15.2 体部高 7.3 体部最大径10.6	外面：頸部から体部中位回転ナデ。底部中位以下回転ヘラケズリ。 内面：ナデ。	淡灰青色 〃	精良	○M～L				△M～L		〃	1/2	〃 波状文 刻み目文 スカシ孔1個
33		土師器 壺	(30.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡橙色 〃	やや粗	○M～L	○L					良好	1/8	SD－9 4TR (N)

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片　結晶片岩

番号	図版番号	器種	法量 口径 器高 底径 ( ) 復元値 (cm)	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	系統	胎土 長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成	遺存率	出土位置 備考
34		須恵器 杯蓋	(12.2) － －	外面：口縁部から天井部付近まで回転ナデ。他に回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	灰青灰色 〃	須恵	△M|L						堅緻	1/8	SD 9 4TR (K)
35		須恵器 杯身	(11.0) －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰灰白色 〃	須恵	△S △S|M						〃	1/8	SD－10 4TR (S)
36		須恵器 杯身	(11.0) － －	外面：たちあがりおよび底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	須恵	▲S|M						〃	1/4	SD－9 4TR (N)
37		須恵器 広口壺	(13.4)	外面：口頸部カキ目の後ナデ。 内面：口頸部回転ナデ。	青灰灰色 〃	須恵	○S|L	▲S|M					〃	1/4	〃
38		須恵器 甕	－ － 6.7	外面：体部および底部回転ナデ。 内面：底部ナデ。	淡灰白色 〃	須恵	▲S|M						〃	底部 1/2	SD－10 4TR (S)
39	七	土師器 広口壺 D2	13.0 20.4 3.6 体部最大径20.2	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ハケナデ。以下はヘラミガキ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ。一部ハケナデ。	淡褐色 〃	精良	△L	△M|L	○S		△L		〃	完形	SD 11 4TR (S)
40		土師器 短頸壺 A	(13.0) 頸部高 4.0	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	淡橙色 灰灰色	粗	◎S|L	◎S|L				赤△M	良	口縁部 1/4	〃
41	七	土師器 短頸壺 A	13.4 － － 頸部高 4.4	外面：口頸部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部指頭圧成形後ハケナデ。	褐色 〃	粗	◎S|L	◎S|L	◎S				良好	1/2	〃
42	七	土師器 短頸壺 A	12.8 25.9 3.2 体部最大径20.5	外面：口頸部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：底部を除く全面にハケナデ。	白灰色 〃	粗	◎S|L	◎S|L				赤◎S|L	〃	頸部完形	〃 スス付着
43	七	土師器 大型直口壺 A	16.2 － 頸部高 5.0	外面：口頸部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	明橙色 〃	精良	◎S|L	◎S|L				赤○S|L	〃	口縁部完存	〃
44		土師器 直口壺 A2	－ － －	外面：口頸部ヨコ方向のヘラミガキの後、タテ方向のヘラミガキ。 内面：口頸部ナデの後、タテ方向のヘラミガキ。	淡灰色 〃	精良	▲M|L						〃	1/4	〃
45	七	土師器 直口壺 A2	13.5 18.0 頸部高 6.2 体部最大径15.5	外面：口頸部ヨコナデ。体部上半ハケナデ、下半ヘラミガキ。 内面：口頸部ヨコナデ。体部ハケナデ。	淡灰色 〃	精良	◎S|L	△M|L			▲L		〃	頸部完形	〃 スス付着
46	七	土師器 直口壺 A2	13.8 17.9 － 体部最大径15.6	外面：口頸部ヨコ方向のヘラミガキ後タテ方向のヘラミガキ。体部ヘラミガキ。 内面：口頸部は外面と同じ。体部下半ハケナデ。	淡灰色 〃	精良	○S|M		○S				〃	ほぼ完形	〃
47		土師器 複合口縁壺 B	－ 体部高 9.6 頸部径 5.4	外面：口頸部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヘラミガキ。頸部ハケナデ。	淡灰色 〃	精良	△M|L					赤△S|M	〃	頸部のみ	〃
48	七	土師器 複合口縁壺 B	体部高 9.6 体部最大径12.2	外面：体部上半ハケナデ後ヘラミガキ、中程以下ヘラケズリ。 内面：体部ナデ。	淡橙色 〃	精良	△S|L	△M|L					〃	体部完存	〃
49		土師器 小型壺 B	－ 体部最大径10.5	外面：体部ヘラミガキ、下半ヘラケズリ。 内面：口頸部ヘラミガキ。体部下半ヘラミガキ。	橙色 〃	精良	○S|L						〃	体部 1/2	〃 スス付着

・凡例　礫径－L　1cm以上　M 0.5～1cm未満　S 0.5cm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺構番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径 ( )復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素質	長石	石英	角閃石	チャート	その他	焼成 保存	遺存率	出土位置 遺構番号
50	七	土師器小型壺B₁	12.4 7.3 － 体部最大径 8.6	外面：風化のため調整不明瞭。 内面：風化のため調整不明瞭。	淡黄橙色 〃		△M～L				赤△S～M	良好 風化	1/2	SD－11 4TR（S）
51	七	土師器小型壺B₂	13.3 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	精良	△S～L		○S			良好	1/4	〃 スス付着
52		土師器甕B₁	13.8	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	○S～L	△S～M	○S～M	△S～M		〃	口縁部1/2	〃
53		土師器甕B₂	(15.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	○S～M		○S～M	△S～M		〃	口縁部3/4	〃 スス付着
54		土師器甕B₃	(15.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	○M～L	△M～L	○S～M	△M		〃	口縁部1/3	〃 スス付着
55		土師器甕B₄	16.1 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ。	暗褐灰色 〃	良好	△M～L		○S～M	△S～M		〃	口縁部完存	〃
56		土師器甕B₅	(15.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△M～L	△M～L	○S～M	○S		〃	口縁部1/4	〃 スス付着
57		土師器甕B₆	(17.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△S～M		○S～M	△S		〃	1/4	〃 スス付着
58		土師器甕B₇	(15.2) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△L		○S～L	○S		〃	1/4	〃 スス付着
59		土師器甕B₈	15.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△S～L	△S～L	○S～M			〃	口縁部2/3	〃 スス付着
60		土師器甕B₉	(20.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	良好	▲L		△S～M	○S～L		〃	口縁部1/4	〃
61	八	土師器甕B	16.8 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ、下半ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 〃	良好	◎S～L	◎M～L			赤◎M～L	〃	1/2	〃 スス付着
62	八	土師器甕B₁	15.0 18.7 － 体部最大径19.0	外面：口縁部ヨコナデ。体部上下タタキ、中位以下ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	やや軟	△M～L		○S	○S		〃	略球形	〃 スス付着
63	八	土師器甕B₂	12.9 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキの後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	良好	○M～L	○M～L	○S	○S		〃	1/2	〃 スス付着
64	八	土師器甕B₃	17.4 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ中位以下ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△M～L	○M～L	○S～M	○S		〃	1/2	〃 スス付着
65	八	土師器甕B₄	16.2 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキの後ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	良好	△M～L	△S～M	○S		赤△M～L	〃	口縁部完存	〃 スス付着

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径（ ）復元値	成形・手法 外面 内面	色調 外面 内面	素質	含有物 長石	石英	雲母	角閃石	チャート	その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
66	八	土師器 壺B,	15.6 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ以下ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	暗褐灰色 〃	やや粗	○M～L	○M～L	○S～L	△M～L	▲L		良好	1/2	SD－1 4TR（S） スス付着
67	八	土師器 壺B,	18.6 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	暗褐灰色 〃	良好	○S～L	○S～L	△S～L	▲S			〃	1/3	〃 スス付着
68		土師器 壺E	(13.4) －	外面：風化のため調整不明瞭。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡黄橙色 〃	良好	△S～M					赤◎S～L 赤○S～L	〃 風化	口縁部 1/2	〃 スス付着
69		土師器 壺E	(12.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	黄橙色 〃	良好	△S～L		△S～M				良好	口縁部 1/4	〃
70	八	土師器 壺E	(12.8) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タテ方向の後ヨコ方向のハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	黄橙色 淡褐灰色	良好	◎S～L	◎S～L				赤○S～L	〃	口縁部 1/3	〃
71		土師器 壺E	(16.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半タテ方向の後ヨコ方向のハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡黄褐色 〃	良好	△S～L	△S～L					〃	口縁部 1/4	〃 スス付着
72	八	土師器 壺E	12.6 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部乱方向のハケナデ。 内面：口縁部一部ハケナデ。体部ヘラナデ。	淡褐灰色 〃	精良	▲S		△S				〃	1/2	〃 スス付着
73	八	土師器 壺E	11.5 － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部乱方向のハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	黄橙色 〃	良好	○S～M	○S～M				赤○M～L	〃	1/2	〃 スス付着
74		土師器 壺E	－ － 体部最大径20.3	外面：体部中位ヨコ、下位タテ方向のハケナデ。 内面：体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	良好	◎S～M	○S～M	◎S～M				〃	体部 完存	〃 スス付着
75	九	土師器 甕D	15.8 21.2 － 体部最大径20.8	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコ、下半タテ方向ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	灰白色 〃	粗	◎S～L	○S～M				赤◎M～L	〃	ほぼ 完形	〃 スス付着
76		土師器 壺F,	(16.0) － －	外面：風化の為調整不明瞭。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡黄褐色 〃	良好	△S～M	△S～M	○S				〃 風化	口縁部 1/8	〃 スス付着
77	九	土師器 壺J,	(15.4) － －	外面：口縁部外面櫛描き沈線文。体部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	やや粗	○S～L		○S			赤△M～L	良好	1/2	〃 吉備系
78	九	土師器 壺K	(16.1) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上位波状文。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	良好	△S～M		△M～L				〃	口縁部 1/2	〃 スス付着 山陰系
79	九	土師器 壺M,	(14.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡黄褐色 〃	精良	▲L						〃	口縁部 1/2	〃 スス付着 四国東部系
80	九	土師器 壺M,	(31.2) － －	外面：口縁部端に2条の小隆帯。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリと指頭圧痕。	淡褐灰色 〃	良好	○S～L	○S～L	○S				〃 外面剥離	1/2	〃 四国東部系
81	九	土師器 小型 器台B,	9.6 9.3 － 受部径 12.7	外面：坏部および脚部ヨコ方向のヘラミガキ。 内面：坏部放射状ヘラミガキ。脚部下半ハケナデ。	淡黄褐色 〃	精良	▲S	▲S					良好	完形	〃 スカシ孔4箇

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片　結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径/器高/底径 ( )復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土						焼成 保存	遺存率	出土位置 備考
						系質	長石	石英	雲母	白色粒	その他			
82		土師器 小型鉢 B₂	－ －	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ナデ。	淡黄橙色 〃	精良	▲L					良好	脚部 1/2	SD－11 4TR（S）
83		土師器 高杯C₁	－ － －	外面：杯部および脚部ヨコヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ。脚部ナデ。	明黄橙色 〃	精良	△M～L	○S			赤△M～L	〃	杯部 1/2	〃
84		土師器 高杯C₁	12.6 － －	外面：杯部ヨコ方向のヘラミガキ。 内面：杯部ヨコ方向のヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。	淡黄橙色 〃	精良	▲S					〃	杯部 2/3	〃
85	九	土師器 高杯C₁	12.8 － －	外面：杯部および脚部ヨコ方向の密なヘラミガキ。 内面：杯部ヨコ方向のヘラミガキの後放射状ヘラミガキ。	淡黄橙色 〃	精良	▲S					〃	杯部 完存	〃
86		土師器 高杯C₂	－ － － 裾部径 17.6	外面：脚部ヘラミガキ。 内面：脚部ハケナデ。	淡黄橙色 〃	精良	△S～L	△S				〃	裾部 完存	〃 スカシ孔4箇
87	九	土師器 高杯A	15.0 8.8 － 裾部径 10.4	外面：杯底風化の為、調整不明瞭。脚部一部ヘラミガキ。 内面：杯部および脚部ナデ。	淡黄橙色 〃	精良	○S～L	○S～L			赤○M～L	〃 風化	ほぼ完形	〃 スカシ孔4箇 スス付着
88		土師器 高杯B	(21.9) －	外面：杯部ヨコおよび斜方向のヘラミガキ。 内面：杯部放射状ヘラミガキ。	灰橙色 〃	精良	△M～L					良好	杯部 1/3	〃
89		土師器 高杯A	(23.2) － －	外面：杯部風化の為調整不明瞭、下半の一部ヘラミガキ。 内面：杯部放射状ヘラミガキ。	灰白色 〃	精良	△S～L					〃	1/8	〃
90	九	土師器 高杯A	32.3 16.0 － 裾部径 14.8	外面：杯部ヨコ方向のヘラミガキ。脚部ハケナデ。 内面：杯部放射状ヘラミガキ。脚部ハケナデ。	淡黄橙色 〃	精良	△S～L	△M～L	○S			〃	杯部 完存 脚部 1/2	〃 スカシ孔4箇
91	九	土師器 鉢G₁	10.8 6.1	外面：口縁部ナデ。体部下半指頭圧痕。 内面：口縁部および体部ナデ。	淡黄灰白色 〃	良好	○S～L	○S～L	○S～M	△S		〃	完形	〃 スス付着
92	一〇	土師器 鉢G₁	12.5 6.9 －	外面：口縁部ナデ。体部タタキ。 内面：口縁部および体部ナデ。	灰白色 〃	やや粗	◎M～L	◎M～L		△M～L		〃 風化	ほぼ完形	〃
93		土師器 鉢G₁	(13.6) 6.8 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	暗褐灰色 〃	精良	▲L	○S				良好	1/8	〃
94	一〇	土師器 鉢G₁	11.8 5.9	外面：口縁部ヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	褐灰色 〃	精良	△M～L	○S～M				〃	ほぼ完形	〃
95		土師器 鉢J₁	(20.0) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡黄橙色 〃	やや粗	◎S～L	◎S～L			赤◎S～L	〃	1/4	〃
96	九	土師器 鉢D	21.0 6.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半粗いケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡黄橙色 〃	粗	△L				片◎M～L	〃	1/2	〃 九州北部
97		土師器 壺B₁	(18.5) － －	外面：口縁部ヨコナデ。頸部指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。	褐灰色 〃	やや粗	○M～L	△M～L	△S～M	○S～M		〃	1/8	SD－11 6TR

・凡例　粒径　L：2㎜以上　M 0.5～1㎜未満　S 0.5㎜未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲極少　赤赤－赤色酸化土　片　結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径・器高・底径 ( ) 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 素性	胎土 長石	胎土 石英	胎土 雲母	胎土 角閃石	胎土 チャート	胎土 その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
98		土師器 甕B	(11.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ後ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	褐灰色 〃	やや粗	○M～L	○S～M	○S～M	○S～L			良好	口縁部 1/4	SD－11 6TR
99		土師器 壺E	(15.7) －	外面：風化のため調整不明。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	良好	◎M～L	◎S～L			＜L		〃	1/4	〃 スス付着
100	○	土師器 壺D	14.9 32.1 － 体部最大径31.3	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ハケナデ。体部ヘラケズリ。底部指頭圧痕。	淡黄灰色 〃	精良	△S～L				▲L		〃	ほぼ完形	〃 スス付着
101		土師器 鉢C	12.5 6.0	外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。一部ヘラケズリ。	灰白色 〃	精良	▲S						〃	1/2	〃
102	○	土師器 壺H壺A	13.8 15.3 － 体部最大径15.5	外面：口縁部から体部上位ヘラミガキ。体部中位以下ヘラケズリ。 内面：口縁部ヘラミガキ。体部上位以下ハケナデ。	淡橙色 〃	精良	○M～L	△M～L	○M～L				〃	完形	〃
103		土師器 甕	(14.6) 12.1 －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ 指指頭圧痕。 内面：口縁部ヨコナデ。屈曲部ハケナデ。	淡褐灰色 〃	良好	△M～L		○S				〃	1/4	SP－38 4TR（X） スス付着
104		土師器 鉢	(26.5) －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。	褐灰色 〃	良好	○S～M	△M	○S			▲L	〃	1/10	〃 スス付着
105	○	須恵 平瓦	－ － －	凹面：布目。 凸面：縄目タタキ。	淡褐灰色 〃	やや粗	◎S～L	◎S～L					〃	小片	〃
106	○	須恵 平瓦	－ －	凹面：布目。 凸面：縄目タタキ。	淡青灰色 〃	やや粗	○S～L						〃	小片	〃
107		須恵器 杯蓋	(15.6) －	外面：口縁部および天井部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	緻良	△S～M			△S～M			堅緻	1/4	1TR（N） 5・6B 5層
108		須恵器 杯身	(11.6) － －	外面：たちあがりおよび底部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗灰白色 〃	精良	○S～L						〃	1/6	〃 4・5B 4・5層
109		須恵器 杯身	13.0 5.1 － 受部径 15.8	外面：たちあがりおよび底部一部回転ナデ。底部中位以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	青灰白色 〃	精良	○S～L						〃	1/2	〃 4・5B 5層 灰かぶり
110		須恵器 広口壺	(19.7) －	外面：口縁部回転ナデ。頸部カキ目。 内面：口縁部回転ナデ。	淡灰白色 〃	精良	△S～M						〃	1/8	〃 2B 5層
111		須恵器 高杯	－ － 脚部径 8.8	外面：体部上半回転ナデ。中位以下回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	青灰白色 〃	精良	○S～L			△S～L			〃	脚部 1/4	〃 4・5B 5層
112		須恵器 短頸壺	－ － － 体部最大径10.6	外面：脚部回転ナデ。 内面：脚部回転ナデ。	暗灰白色 〃	精良	○S～L	○S～L		○M～L			〃	体部 完存	〃 5・6B 5層
113		土師器 住吉式甕	(16.4) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	暗褐灰色 〃	良好	○S～L	△S～L	○S～L	△M～L			良好	1/3	3TR（N） 4D、5層 スス付着

・凡例　粒径－L 1mm以上　M 0.5～1mm未満　S 0.5mm未満　量 ◎多量 ○多い △少ない ▲僅少　赤赤－赤色酸化土　片 結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径 底径 器高 残存率 復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 石英	長石	右	角閃石	チャート	その他	焼成 良否	遺存率	出土位置 備考
114		土師器 甕内式系	(24.8) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部タタキ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	淡褐灰色 〃	○	○M～L	○S～L	○S～L	○S	○	赤△M	良好	1/8	3TR（N） 4D、5層 スス付着
115		土師器 小型高台 B'	10.6 9.3 底径 13.0	外面：体部および脚部ナデ。 内面：体部および脚部ナデ。	橙色 〃	良好	△M～L					赤△S～L	〃	1/2	〃 4D、5層 スカシ孔4箇
116		土師器 高杯	12.4 － － 杯部高 3.7	外面：杯部ヨコ方向のヘラミガキ。 内面：杯部ナデ。	橙色 〃	良好	○S～L	○S～L				赤△S～L	〃	杯部完存	〃 4D 5層
117		須恵器 甑	－ －	外面：体部回転ナデとカキ目。 内面：頸部および体部同転ナデ。	灰青灰色 〃	精良	○S～L						不良	体部1/2	3TR(S) 7D 5層
118		磁器 白磁碗	(16.4) － －	外面：口縁部および体部ロクロナデ。 内面：口縁部および体部ロクロナデ。	灰白色 〃	緻密							〃	1/8	〃 7D・E 5層
119		磁器 青磁碗	(24.4) － －	外面：口縁部および体部ロクロナデ。 内面：口縁部および体部ロクロナデ。	明緑灰色 〃	緻密	▲M						〃	1/12	〃 8D 5層
120	一〇	瓦 軒丸瓦	－ －	表面：細弁十二頂蓮華文。 裏面：剥離しており不明。	灰白色 〃	良好	○M～L	△M～L		▲L			良好	瓦当面の一部	〃 7D 5層
121		土師器 皿H	(17.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	橙色 〃	良好	○M～L	△S～L	▲S～M			赤○M～L	〃	1/6	4TR(S) 8D・E 5層
122		土師器 鉢J	(16.0) － －	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	淡橙褐色 〃	良好	○S～L	△M～L				赤○L	〃	1/4	〃 8D・E 5層
123		須恵器 杯身	(10.0) － －	外面：たちあがりおよび体部上位回転ナデ。 内面：回転ナデ。	黒灰色 〃	精良	▲M						不良	1/4	4TR(N) 1・2DK、5層 灰かぶり
124		須恵器 杯身	(12.0) － －	外面：たちあがりおよび体部上位回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗青灰色 〃	精良	○M～L						〃	1/8	〃 3DE 5層
125		須恵器 杯身	(13.4) － －	外面：たちあがりおよび体部上位回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡青灰色 〃	精良	○S～L						〃	1/8	〃 2DE 5層
126		須恵器 杯身	(12.0) － －	外面：たちあがりおよび体部上位回転ナデ。 内面：回転ナデ。	青灰色 〃	精良	△S～M						〃	1/8	〃 1・2DK 5層
127		須恵器 杯蓋	(14.7) － －	外面：天井部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡灰白色 〃	精良	▲M						〃	1/8	〃 5DE、6層 灰かぶり
128		須恵器 杯身	－ － (10.6)	外面：底部から高台部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	精良	▲M						〃	1/4	〃 5DE 5層
129		須恵器 杯身	－ (10.0)	外面：底部から高台部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	淡灰白色 〃	精良	△S～M						〃	1/6	4TR（S） 7DE 5層

・凡例　粒径－L 1㎜以上　M 0.5～1㎜未満　S 0.5㎜未満　量－◎多量 ○多い △少ない ▲稀少　赤赤－赤色酸化土　片－結晶片岩

遺物番号	図版番号	器種	法量（cm）口径 器高 底径 （）復元値	調整・手法 外面 内面	色調 外面 内面	胎土 大粒	長石	石英	雲母	赤色粒	チャート	その他	焼成保存	遺存率	出土位置 備考
130		須恵器小型壺	－ 4.9 体部最大径9.0	外面：体部上半回転ナデ、以下同転ヘラケズリ。 内面：体部同転ナデ。	淡青灰色 〃	精以	▲L						軟	体部1/2	4TR（N）3DE 5層
131		須恵器杯蓋	（14.0） －	外面：口縁部から天井部回転ナデ。天井部上位回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	淡灰白色 〃	精良	△S～L						〃	1/4	6TR 9D 5層
132		須恵器杯蓋	－ － －	外面：口縁部から天井部回転ナデ。天井部中位回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	灰色 〃	精良	○S～M						〃	1/3	〃 9AB 5層
133		須恵器杯身	（12.4） －	外面：たちあがりから底部1/2回転ナデ。 内面：回転ナデ。	暗灰白色 〃	精良	○S～L						〃	1/6	〃 9AB 5層
134		須恵器杯身	（12.7） － －	外面：たちあがりから底部上半回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	良好	○S～L			▲S～L			〃	1/6	〃 9AB、5層 灰かぶり
135		須恵器脚台	（56.0） － －	外面：口縁部および体部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	精良	△S～L						〃	1/12	7TR 9C、5層 灰かぶり
136		須恵器器台	－ － 脚部径 33.4	外面：脚部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	灰白色 〃	精以	○S～L						〃	1/12	〃 9C、b層 刻目文様帯
137	○1	瓦 軒丸瓦	－ － －	表面：8弁蓮華文。 裏面：ナデ。	赤褐色 〃	良好	◎S～L	◎S～L					良好	瓦当面の一部	〃 9C 5層
138		瓦 平瓦	－ －	凹面：布目。 凸面：縄目タタキ。	灰白色 〃	良好	○S～L						〃	小片	〃 9C 5層
139	○1	瓦 平瓦	－ －	凹面：布目。 凸面：格子状タタキ。	暗灰白色 〃	良好	○S～L	○S～L	○S～M				〃	小片	〃 9C 5層

第3章　まとめ

今回の発掘調査では、調査幅が狭小なトレンチ調査であったにも拘わらず、調査地全域から古墳時代前期初頭（庄内式新相）～前期（布留式古相）・古墳時代後期末～飛鳥時代初頭に比定される遺構・遺物が検出された。

ここでは、これらの調査成果を各時期ごとに概観するとともに、既往調査および今回の調査で検出した屋瓦を中心に西都院寺の創建から廃絶に至る推移を考えてみたい。

1）各時期毎の概要

古墳時代前期（庄内式新相）～前期（布留式古相）

この時期に比定される遺構は、第1トレンチ（北区）のＳＤ－2、第2トレンチ（北区）のＳＰ－6、第3トレンチ（北区）のＳＰ－24・27と第4トレンチ（南区－第2調査面）および第6トレンチのＳＤ－11である。調査区の南東部で検出したＳＤ－11については、溝幅が4.5m、深さ1.5mを測る比較的規模の大きな溝で、第4トレンチ南区から西部では検出されていないことから、第4トレンチ（南区）から北西方向に伸びた後、流路が北区と南区の境に沿って東西方向に流下したためと推定される。当該期の遺構はＳＤ－11の北側に展開したものと推定されるが、溝内から出土した大量の土器類に比してこれらの遺構分布が散発的であることから、居住域の中心は調査地の南東部一帯にあった可能性が高いものと考えられる。なお、当該期と同時期に存在した集落が、調査地の南東約350地点の桂町2丁目付近で昭和61年度に実施された下水道工事に伴う発掘調査と、平成6年度に実施された保育所建設に伴う第16次調査[注1]（ＫＦ94－16）で検出されている。また、北西約350m地点の山賀5丁目19では、昭和63年度に[注2]実施された工場建設に伴う山賀遺跡（89－213）の発掘調査で、当該期の遺構・遺物が検出されている[注3]。これらの調査結果から、当調査地付近では当該時期においては、近接する位置に小規模な居住域が点在する集落形態であったことが推定される。

古墳時代後期から飛鳥時代初頭（6世紀後半～7世紀前半）

この時期に比定される遺構・遺物は調査区の全域で確認でき、この時期に大規模な集落が存在していたことが明らかになった。検出した遺構群の分布は、第1・第2トレンチ（南区）、第2・第3トレンチ（北区）の中央部、第4・第5トレンチ（南区）付近の密集度が高い。主な遺構としては、第1トレンチ（南区）で検出した井戸（ＳＥ－1）の他、第2トレンチ南区で掘立柱建物2棟（ＳＢ－1・ＳＢ－2）、第5トレンチ南部で掘立柱建物1棟（ＳＢ－3）を想定しており、建物配置やその方向性の一端が推定される。なお、調査地の東方約150m地点には、後述するように飛鳥時代後期創建の西都廃寺が存在しており、これらの集落が西都廃

寺の造営を推進した檜越氏族の集落であった可能性が高いものと推定される。既往調査では、調査地の南東約350m地点の桂町2丁目33で、平成6年度に実施された保育所建設に伴う第16次調査（KF94－16）で同時期の居住域が検出されている。

2）屋瓦からみた西郡廃寺

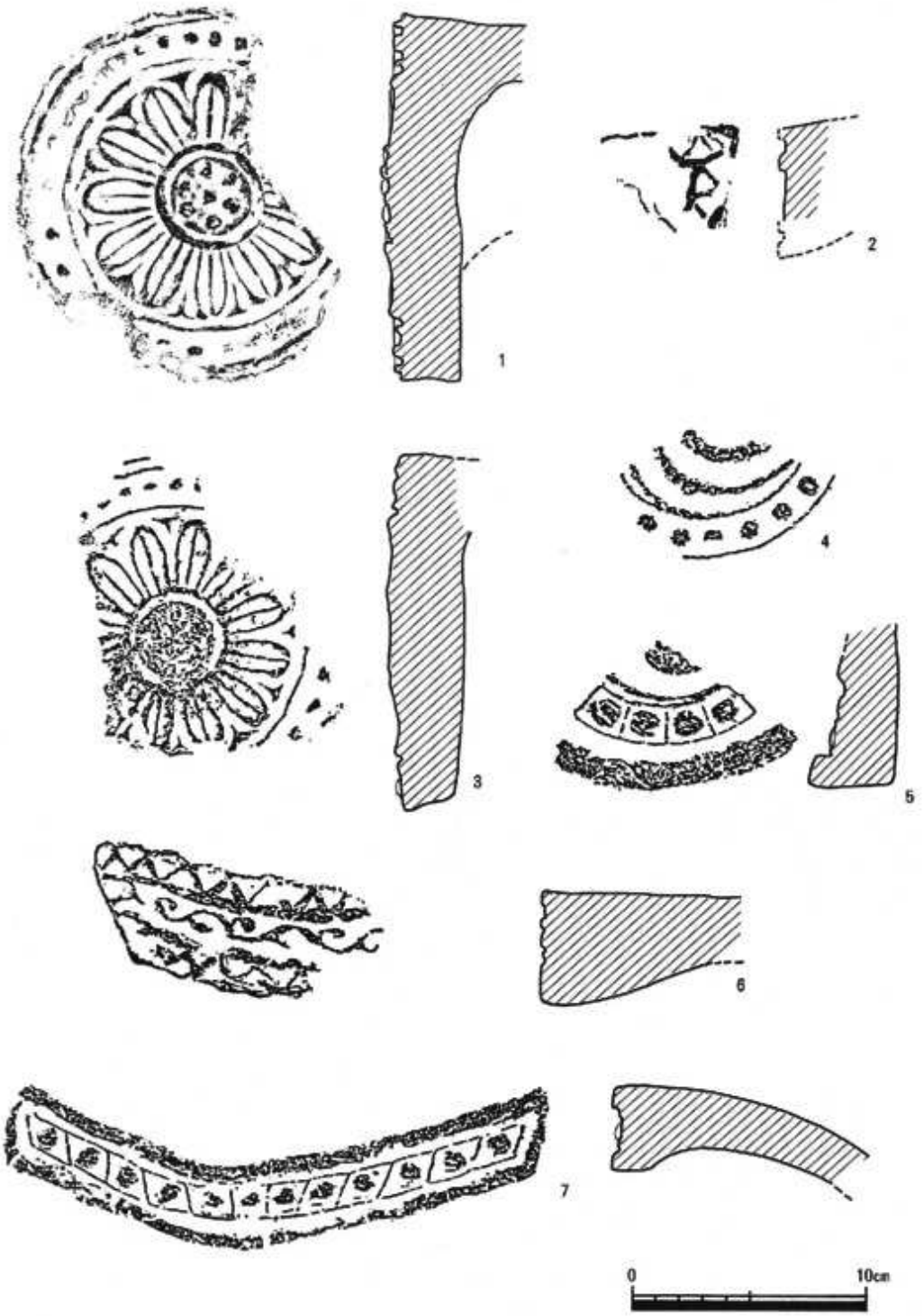
今回の調査では、西郡廃寺に関連した遺構は検出されなかったが、第3トレンチ・第4トレンチ・第7トレンチの包含層から屋瓦類が散発的に出土しており、新たに細弁十三葉蓮華文軒丸瓦（第18図120）と重弁八葉蓮華軒丸瓦（第19図137）の軒丸瓦2種を追加する結果となった。

西郡廃寺に関連した遺物については、従来より知られていた塔心礎石のほか、昭和55年以降の発掘調査で屋瓦類を中心とした数多くの遺物が検出されており、創建時期や廃絶時期を推定するうえで示唆に富む資料を提供している。ここでは、これまでに記載されてきた西郡廃寺に関連した内容や発掘調査で得られた屋瓦類を今一度整理して、存続時期や寺域等の問題を考えてみたい。

昭和33年に発行された『八尾市史』の西郡廃寺（錦織寺）の項を要約すれば、西郡廃寺は八尾市の北西部に本居をおいた錦織氏族の氏寺で、氏神天神社（八尾市泉町2丁目所在）の北方の小字八間堂と呼ばれている地域が寺域であったと推定されている。西郡廃寺（錦織寺）に関連する遺物としては、氏神天神社境内にある白鳳時代の塔心礎石が、現地点より100mあまり北方の畑の中から掘り起こされたものであることや、室町時代の石燈篭の台座の存在から寺の創建時期や廃絶時期が推定されていた。

一方、昭和55年以降、天神社の周辺で実施された発掘調査においては、西郡廃寺に関連した屋瓦類の出土例が相次ぎ西郡廃寺をめぐる諸問題を解明する上で貴重な資料を提供する結果となった。昭和55年2月に八尾市教育委員会が天神社の南西に隣接する八尾市泉町2丁目43で発掘調査（市教委昭和55年2月調査）を実施したのを皮切りとして、同年3月には前記調査地に北接する泉町2丁目16－1で発掘調査（市教委昭和55年3月調査）が実施されている。

これらの調査では、寺院に関連した遺構は検出されなかったものの、中世時期の整地層から西郡廃寺に関連する屋瓦片が出土した。なかでも、市教委昭和55年3月の調査では、瓦当面の一部が遺存する軒丸瓦の細片が出土したが、全体の瓦当文様が明確でないため具体的な検討を加えるに至らなかった。昭和58年6月から昭和59年11月にかけて大阪府教育委員会が八尾市萱振町7丁目において実施された府立八尾北高校建設に伴う発掘調査では、室町時代初頭の瓦積井戸が検出されており、この井戸側に使用された大量の丸瓦・平瓦の片の中に飛鳥時代後期から鎌倉時代に比定される軒丸瓦5点、軒平瓦2点、鬼瓦1点、棰先瓦1点が含まれていた。そのなかに、河内寺跡（東大阪市河内町所在）出土の軒丸瓦第Ⅱ形式（飛鳥時代後期）に類似した細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第20図3）や同軒平瓦第Ⅲ形式（奈良時代）と同意匠の扁行唐草文



第20図　既往調査出土屋瓦（1）A出土地点・(2) KF84－1（地点はP63参照）
（3～7）府教委昭和58～59年度出土（地点はP4参照）

軒平瓦（第20図６）の存在や鎌倉時代に下る屋瓦類の出土をみたが、この時点では天神社から南に約200ｍ離れている関係から、西郡廃寺に関連した屋瓦である蓋然性が高いものの確証を得るまでには至らなかった。さらに、昭和59年11月から12月にかけて天神社の東側で当調査研究会が実施した第１次調査（ＫＦ84－１）においても、河内寺跡軒平瓦第Ⅲ形式と同意匠の扁行唐草文軒平瓦（第20図２）[注3]が確認されたほか、鎌倉時代に比定される巴文軒丸瓦の細片とともに、多数の平瓦・丸瓦片が出土した。また、この調査中に天神社に北接する地点から、河内寺跡出土の軒丸瓦第Ⅱ形式（飛鳥時代後期）に類似した細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第20図１）の存在が確認された。これにより、はじめて細弁十二葉蓮華文軒丸瓦が西郡廃寺の瓦であることが確認され、既往調査出土の屋瓦類が西郡廃寺に関連したものである確証が得られたことにより、創建時期や寺域の推定が可能となった。また、詳細が不明であった市教委昭和55年３月調査出土の軒丸瓦片が同軒丸瓦（第20図１・３）と同意匠であることが確認された。このような状況下において、昭和62年９月に刊行された第１次調査（ＫＦ84－１）の調査報告書『（財）八尾市文化財調査研究会報告13』では、細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第20図１）と扁行唐草文軒平瓦（第20図２）の組み合わせを創建時期のものと推定したうえで、類例の屋瓦類が出土している河内寺跡の比較から、細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第20図１）は河内寺で飛鳥時代後期とされる軒丸瓦第Ⅱ形式（十三葉有稜線弁蓮華文）の一部が改変されたもので、扁行唐草文軒平瓦

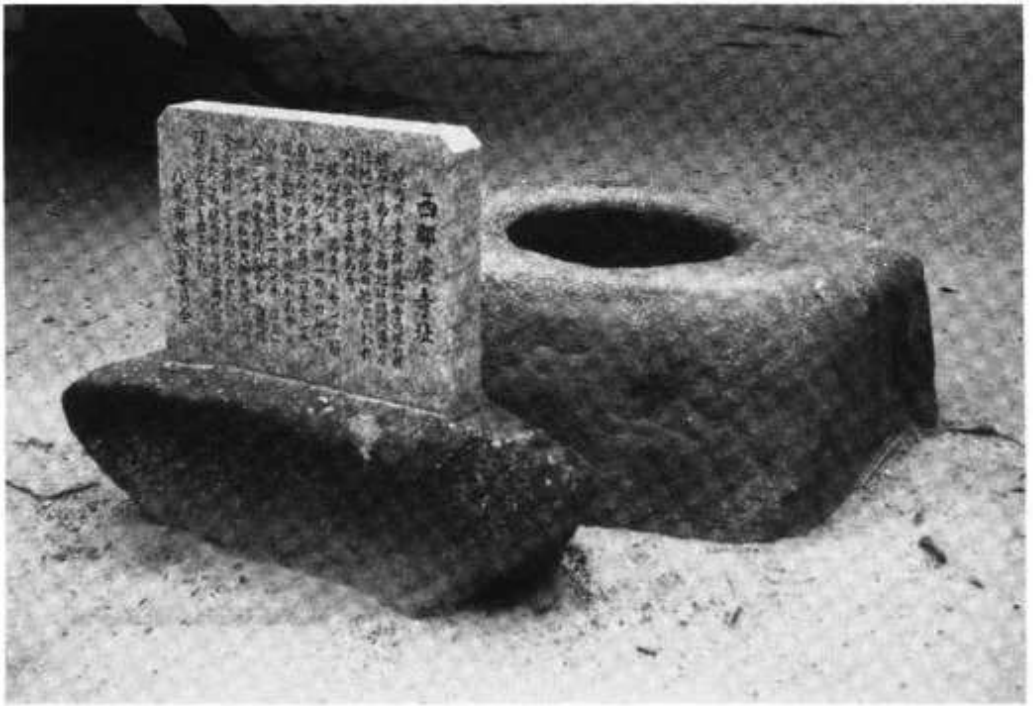


写真１　西郡廃寺の塔心礎

については奈良時代とされる軒平瓦第Ⅲ形式と同笵のものであることから、創建時期は奈良時代の可能性があるとされている。さらに、河内寺跡と同笵の屋瓦類を使用した背景としては、西郡廃寺の檀越氏族である錦織氏と河内寺の檀越氏族である河内連が、いずれも百済国出自の渡来系氏族である点で共通していることや、両寺院の建立に際して同系統の造瓦集団が関与した可能性等が示唆されている。以上のように、第1次の報告書作成段階では、このような認識が持たれていたが、今回の調査の結果、新たに細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第18図120）と重弁八葉蓮華軒丸瓦（第19図137）が出土したことから、再考を促す結果となった。前者については、河内寺で飛鳥時代後期とされる軒丸瓦第Ⅱ形式と同笵のものであるため、創建時期が飛鳥時代後期であった可能性が高くなった。後者は原山廃寺式系軒丸瓦に分類されるもので、河内六寺の一つである家原寺（安堂廃寺）出土のものと同笵のである可能性が高い。八尾市域では、本例以外に教興寺跡からも出土[注8]している。上田睦氏によれば、原山廃寺式軒丸瓦を採用する寺院は、南河内の旧郡制でいう大県郡・安宿郡を中心に分布[注9]する在地的要素が強い屋瓦とされており、本例および教興寺跡出土例は、新たに分布範囲を広げる結果となったほか、7世紀中葉における中南河内の寺院造営氏族と造瓦集団との関係を知るうえで重要な資料といえよう。これまでに出土している屋瓦類から、西郡廃寺の創建から廃絶時期までの屋瓦類の変遷を示せば下記のようになる。

創建瓦としては、軒丸瓦では細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第18図120）および細弁十二葉蓮華文軒丸瓦（第20図1・3）が想定される。これに続くものとしては、原山廃寺系軒丸瓦に分類される重弁八葉蓮華文軒丸瓦（第19図137）がある。これらの軒丸瓦に伴う軒平瓦については、現時点では検出されていない。時期的には、3点ともに7世紀の第2四半期に対比されるもので、創建時期をこの期間に想定することが可能である。奈良時代中期では、軒平瓦においては、扁行唐草文軒平瓦（第20図2・6）があるが、これとセットを成す軒丸瓦は検出されていない。平安時代後半においては、軒丸瓦では巴文軒丸瓦（第20図4）が使用されている。鎌倉時代においては、連珠文軒丸瓦（第20図5）と連珠文軒平瓦（第20図7）の組み合わせが考えられる。これらの屋瓦の変遷から、西郡廃寺は7世紀の第2四半期に創建され、奈良時代中期には伽藍の整備が実施されたことが窺われる。その後は、律令体制崩壊という社会的要因によって寺院維持が困難となり衰退の一途を辿ったようであるが、平安時代後期には再興され、その後鎌倉時代までは法灯を灯したようである。それ以降については、不明な点が多いが、府教委昭和58年～59年調査地で検出された西郡廃寺の屋瓦を井戸側に使用した瓦積井戸の帰属時期が室町時代初頭（14世紀中葉）であることを勘案すれば、この時期までに廃絶していたことは確実である。

註記

註1　米田敏幸　1987「萱振遺跡発掘調査概要」『八尾市内昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告15　八尾市教育委員会

註2　原田昌則　1995「5．萱振遺跡第16次調査（KH94－16）」『平成6年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

註3　米田敏幸　1990　「16．山賀遺跡（89　213）」『（財）八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　八尾市教育委員会

註4　前掲註2

註5　野田晃世　1985「萱振遺跡出土の中世井戸調査の概要」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会

註6　東大阪市教育委員会　1973　『河内寺跡』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11
東大阪市教育委員会　1974　『河内寺跡Ⅱ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報13

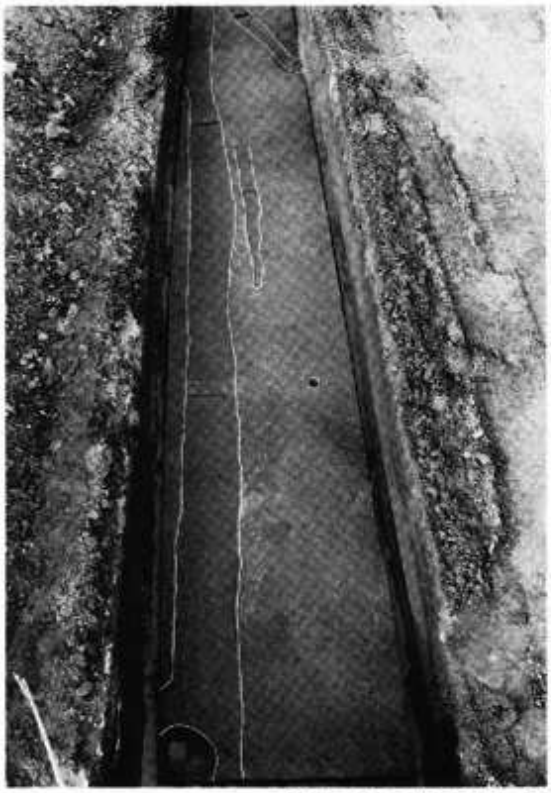
註7　原田昌則　1987「Ⅰ萱振A遺跡（第1次調査）八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度」『（財）八尾市文化財調査研究会13』（財）八尾市文化財調査研究会

註8　山本　昭　1973　「河内六大寺と河内行宮」『柏原市史　第2巻』

註9　坪田真一　1992「28．教興寺跡第1次調査（KO91－1）」『平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

註10　上田　睦　1988「いわゆる王仁後裔氏族とその寺院」『網干善教先生華甲記念考古学論集』

図　　版



第１トレンチ北区（南から）

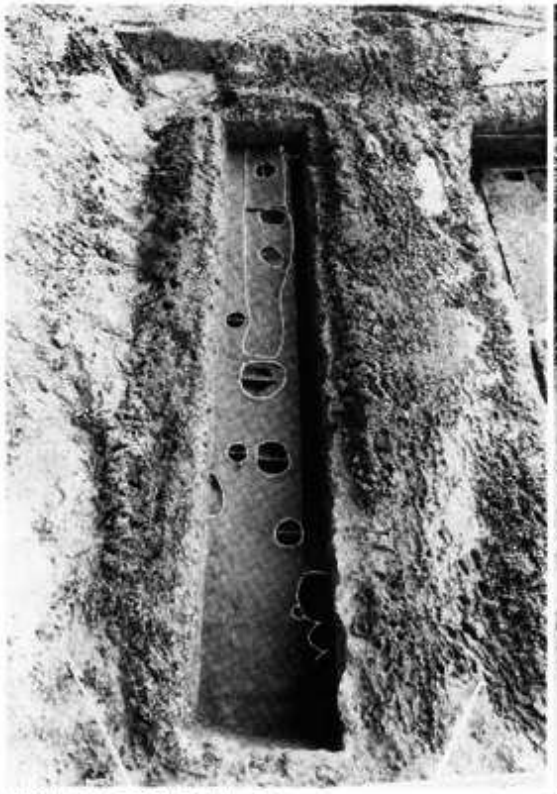
第１トレンチ南区（北から）

第１トレンチ南区　ＳＥ－１検出状況（東から）

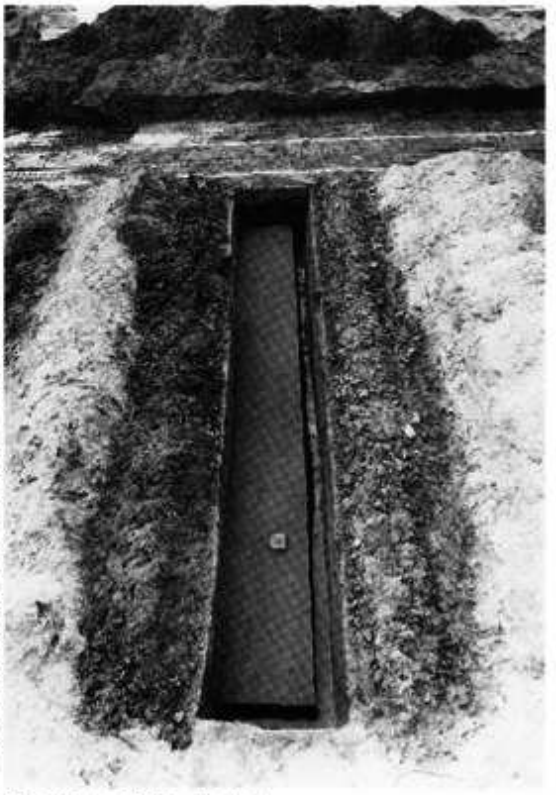
図版二

第2トレンチ北区（南から）

第3トレンチ北区（南から）



第2トレンチ南区（北から）



第3トレンチ南区（北から）